
金の満月が昇る時

灯里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の満月が昇る時

【Zコード】

N8121X

【作者名】

灯里

【あらすじ】

満月でなくてい、三日月でもいいから、せめて貴方の傍に居させて下さい。

……誰に否定されたとしても私は生きることを望んでいいですか？

テイルズオブヴェスペリア原作沿い一次創作小説。

自サイトより加筆、修正したものを掲載しています。

オリジナルキャラが登場します。設定は濃いです。傾向としてはシリアルで友情重視、ユーリ寄り。

オリキャラ設定（前書き）

ネタバレに注意してください。
オリキャラが使う術や技も本編にないものがあります。

オリキャラ設定

エリシア

『たとえ誰に否定されても、私は……生きていきたい』

名前：エリシア・クレセント

年齢：18歳

身長：163cm

武器：クレケンスルーナ（魔銃）

サブ：スロウナイフ

クラス：魔銃士

愛称はエリイ。薄紅掛かつた金色の髪と満月色の瞳を持つ少女。遠距離、中距離から銃によるサポートは勿論、攻撃魔術や治癒術も心得ている。

一人称は私。ギルド“獅子の咆哮”的首領、レオンの娘でレイ、ヴィンとは顔見知り。魔導器を使わずに治癒術や魔術を操ることが出来る。

性格はお人よしで、基本的に厄介事には首を突っ込む。が他人の気持ちを考える事を忘れず、場合によつては一步引いた態度を取ることも。

コーリいわく彼女もほつとけない病らしい。幼くして母を亡くしてためか料理が得意。

以下、術・技設定です。

特技・奥義

アクアレーザー

地を這う水流を直線に放つ特技。水流は敵を貫通する。

グランドクエイカー

地を揺らさんばかりの純粋なエネルギーの奔流を大地に叩き付け、地割れを起こす特技。

ヴォルトアロー

凝縮した雷を放つ特技。放たれた光は紫の軌跡を描き、敵を追尾する。

ノクターナルライト

打ち出した光で敵を貫く特技。光は敵を貫通する。変化（ライトバースト）

ツインバレット

二丁の銃を連射する特技。変化（フォースバレット）

グラビティダウン

放たれた闇を結晶化し、槍に変えて対象に突き刺した後、重力の
槛を発生させる特技。

ストームワルツ

連續でスロウナイフを投擲した後、凝縮した風を解き放つ奥義。
変化（シルフィードロアード）

フレアフォース

敵を貫通する極太の炎のレーザーを放つ奥義。

クリスタルレイ

氷のエネルギーを天に放ち、絶対零度の氷の矢を雨の如く降らす
奥義。

変化（セルシウスクラウン）

プリズムバレット

鳥の形を取った光を打ち出す奥義。光は対象に触れた瞬間、爆発
する。

バーストアーツ

アストラルライン

出力を最大限まで高めて凝縮したエネルギーを放つ。光は直線を
描き、触れた敵にもダメージ判定あり。

ボルカニックライン

光が炎に変化。ヒット数が増加。エネルギーが通過した後に爆発
する。

フリー・ジングライン

青を帯びたエネルギーを放ち、触れた敵を凍結させる。

エアリアルライン

風属性がついた『アストラルライン』。衝撃波で敵を吹き飛ばす。

ジオニックライン

光に触れた敵をクリスタルに封じ込めた後追撃を放ち、破壊する。
破片にもダメージ判定あり。

術

ファーストエイド

味方一人の傷を癒す下級魔術。変化（メディテーション）

「聖なる活力、ここへ」

ヒール

味方一人の傷を癒す中級魔術。変化（ヒールウインド）

「燐然たる癒しの光を」

キュア

味方一人のあらゆる傷、怪我を治す上級魔術。変化（フェアリーサークル）

「其は命脈を繋ぐ明澄たる光華」

レイズデッド

味方一人を瀕死状態から回復させる上級魔術。

変化（リヴィアイヴ）

「彼の者を死の淵より呼び戻せ」

リカバー

味方一人を状態異常から回復させる下級魔術。変化（レストレーション）

「卑しき病みよ、退け」

ナース

御使いが齎す聖なる光によって味方全員を癒す中級魔術。変化（ナイチンゲール）

「白き天の使い達よ、その微笑を我らに」

リザレクション

強大な癒しの法陣を具現化させ、範囲内の味方を癒す上級魔術。「万物に宿りし生命の息吹をここに」

ホーリーソング

味方全員の攻撃力と防御力を上昇させ、体力も回復させる上級魔

術。「響き渡るは玲瓏たる天使の歌声」

デルタレイ

光球を三つ作り出し、敵一体を攻撃する下級魔術。「鮮やかなる光珠、敵を討て」

クリスタルアーク

光輝く水晶の柩に敵一体を封じ込め、炸裂した破片で攻撃する下級魔術。

「深淵にて佇む煌姫、彼の者を永遠の眠りに誘え」

ウインドカッター

風の刃で敵を切り裂く風属性下級魔術。変化（フランベルジュ）
「舞い踊る風靈、刹那にて軌跡を描け」

レイ

幾筋もの光柱を発生させて攻撃する中級魔術。

「澄み渡る明光よ、罪深きものに壯麗たる裁きを降らせよ」

シャイニングスピア

輝ける光の槍を顯現させ敵を貫く中級魔術。変化（ブリリアントランス）

「仇為す者には光輝なる槍を」

トراكタービーム

範囲内の全ての敵を持ち上げ、地面に落としてダメージを与える中級魔術。

「水天の境を見失いし業深き者よ。我が罰を示せん」

エアスラスト

圧縮した風の球体に敵を封じ込めて切り裂く風属性中級魔術。変化（フランベルジュ、アクエリアス）

「悠久を旅する優風、今此処に楔を打ち下ろせ」

グランドクロス

光の十字架で邪悪を滅ぼす上級魔術。変化（インブレイズエン

ド）
「聖なる十字よ、悪しき魂を滅ぼせん」

ジャッジメント

神の名の元に汚れた魂に裁きの光を降らせる火属性上級魔術。変

化（クラスター・レイド）

「煌翼を纏いし星辰の女神よ、不淨なる魔を滅せよ。降り注げ光の雨」

ゴッドブレス

天空に描いた魔法陣から強大なエネルギーの奔流を落とす風属性上級魔術。

「大いなる蒼穹そらに抗うか小わき子よ、滅びの本懐を遂げるか、天界の審判此処に呼び覚まさん」

プリズムソード

光を纏つた煌めく光剣を対象に突き立てる光属性上級魔術。変化（ディヴィアインセイバー）

「七色の光秘めし聖剣よ、彼の者が背負いし咎と共に貫け」

シャイニングクルス

敵の頭上に十字の光槍を落とす上級魔術。変化（クリムゾンノヴァ）

「愚かなる咎人よ、光の洗礼を受けよ」

秘奥義

ビッグバン

創世の光を顯現させ、大爆発を起こす秘奥義。

「創世にして原初の光。女神が紡ぎし力の一欠片。凍て付きし永劫の指針よ、今始まりの時を再び刻め！」

テトラグラマトン

連結させた銃に四大精靈の力を乗せて撃ち出す秘奥義。

「お願い、ウンディーネ、イフリート、ノーム、シルフ
力を貸して。行くよ、クレケンスルーナ、フルパワー！」

みんな

プロローグ

この世界、テルカ・リュミレースは決して人にとって暮らしづらい世界ではない。

自然溢れる大地には魔物が徘徊し、街は魔導器の恩恵なくしては存在出来ず、天災一つで容易く滅び去るであろう。

人々の殆どは魔物の恐ろしささえ知ることもなく、シルト・プラスティック魔導器に守られた小さな世界の中で一生を終えて行く。

そんな世界の東 マイオキア平原の中心に位置する帝都ザーフィアス。

下に行くほど人々は粗末になつて行き、上になるほど建物は豪華に、華美になつていく。

それは弱き者は虐げられ、一部の人間のみが恵まれた環境を手に入れるという、まるで世界そのものを表す真理だった。

そして一際目立つのが、中央に突き立つた剣を囲むようにして広がる純白の光輪。これこそ狂暴な魔物から人々を守る^{シルト・プラスティック}魔導器が放つ光である。

結界魔導器があるからこそ、人は魔物の脅威に曝されることなく平和に暮らし、安心して眠ることが出来るのだ。

雲一つない青空を見上げた少女はうん、と背伸びをした。年の頃は十七、八歳だろうか。愛らしい、整った顔立ちの少女だ。長い睫毛に縁取られた瞳は、天に輝く満月の如き黄金色。そして肩を流れる長い髪は薄紅掛かった金色だ。

服装は白を基調とした服に短いスカート（動き易いように中にスパツツを履いてある）、ロングブーツ。右の耳には赤い宝石が嵌められた金色の耳飾りが太陽の光を受けてちかりと煌めいた。しかしいつまでもんびりともしていられない。街道とは言え、魔物が襲つてこないとも限らないのである。

まあ、そうなつた時は倒せばいいのだが。少女はそつと腰にあるホルスターに触れ、自らが立つ丘の上から大きな街を見つめた。この世界唯一の国。その帝都ザーフィアスまではもう直ぐだ。少女は緩んだ気を引き締めると帝都に向かつて歩き出した。そこで待つ出会いが自らの運命、ひいては世界の命運すら左右することになると、彼女はまだ知るよしもない。

青年は物憂げな視線を外に向けていた。窓枠に持たれ掛かり、足を伸ばした格好は見れば何とも危なそうである。

年齢は推測するに二十歳前後か。背中まで届く艶やかな黒髪に紫掛かった黒い瞳。胸元が開いた黒い服に整った顔立ちの青年だったが、どこか不敵な面構えをしているとも言えるかもしねり。

帝都ザーフィアス。青年がいるのは、その中でも所謂下町と称される場所である。貴族たちが住む街の上段より綺麗な訳でも整っている訳でも当然ない。

だが彼はこの下町とここに住む人々が好きだった。それは生まれ育つたということもあるし、青年の性にも合っているからだ。

その時、青年の隣に横たわっていた白と青の毛並みの大きな犬の体が少しだけ動いた。と同時に階段を登る音がすると、凄い勢いで部屋の扉が開けられた。

「ユーリー！ 大変だよ！」

「でかい声出して、どうしたんだ。テッド？」

青年 もとユーリー・ローワルは声の主に振り向くことすらしなかつた。せずとも声と階段を上がる足音で分かるからである。ユーリはそこでやつと訪問者に目を向けると、予想通りの少年だった。

少年 テッドは息を切らしながら、ユーリが腰掛けている窓に近付くと、ある一点を指差した。

「あれ、ほら！ アクエラスティア水道魔導器がまた壊れちゃったよ… もう修理

してもらつたばかりなのに」

つられるようにして視線を向ければ、下町の中心付近、恐らく広場の辺りから勢い良く水柱が上がつていた。

あれだけの水が吹き上がつていれば水浸しどうりで済まないだろう。

「何だよ、厄介」となら騎士団に任せとけって。そのためにいんだから

「下町のために動いちゃくれないよ。騎士団なんか!」

そんな少年の様子にも田も暮れず、コーリはさも眠たげに欠伸を噛み殺した。

言った本人も騎士が下町のためになど動かないのは分かつていて。そう、ただ一人を除いては。

「世話好きのフレンがいんだろ?」

「もつフレンには頼みに行つたよ! でも会わせて貰えなかつたの!」

フレンとはコーリの親友であり、この下町で共に育つた幼なじみである。

彼は騎士団に所属する騎士であり、現在は隊長を務めているという。かく言つコーリも数年前までは騎士団に居た元騎士なのではあるが。

「はあ? オレ、フレンの代わりか?」

コーリは顎に手をついてため息をついた。わざわざ余ること行かなくとも真面目で心配性な友人は騒ぎを聞き付け、直ぐさま駆け付けてくるだろ？

それはもうトレンで会わせて貰えなかつたところの変な話だ。

「いいから早く来て！ 人手が足りないんだ！」

思案しているコーリなど意に介さず、少年はコーリの服の袖を思い切り引っ張つた。

引っ張られている本人もああ、これは伸びるなと思いつつも動こうとはしない。

そうこうしていると、コーリともテッドとも違う別の声がする。

「テッドおー！ テッドおー！ 降りてきなさい！ あんたも手伝つのみのひで！」

！

一階から聞こえた声の主は田の前の少年、テッドの母親である。いつまでも降りてこない息子に痺れを切らしたのだらう。それにしてもタイミングが悪い。

テッドはこの時ばかりは母を恨みたくなつた。

「ちよ、ちよと待つよ……もひ……コーリの馬鹿！」

半ば消え入りそうな声で言い返すが、母が聞くはずもなく。しかしコーリは未だ外を見つめたまま、一向に動こうとはしない。テッドはようやく諦めたのか、馬鹿、と一言だけ悪態を付くと勢いよく扉を開けて飛び出して行つた。

「騒ぎがあつたらすつ飛んで来るやつなのこ……あの調子じや、魚しか住めない街になつちまうな

視線の先には、広場の中央に立つ噴水に似た水道魔導器。水を汲み上げ供給する井戸の役割を果たすそれからは今や大量の水が吹き出し、勢いは未だ衰えることを知らない。

ユーリは視線を窓から外すと部屋の隅にあるベッドの上で寝ている存在に声を掛けた。

「起きてるか、ラピード？」

ぴん、と立った耳がぴくりと動き、閉じられていた水色の瞳が露になる。

齢五歳にならうかといつ犬は、準備万端だといつような顔をしていた。

「なら行きますか」

ユーリは壁に立てかけてあつた剣を手に取ると、窓枠に足を掛け、二階から飛び降りた。

水道魔導器の前には騒ぎを聞き付け、下町の人々が集まっている。皆急拵えの土のうを周辺に積み上げているが、気休めでしかなく、未だ溢れ出る水の勢いは止まりそうもない。

「なんだ？ どでかい宝物でも沈んでんのか？」

笑いながら尋ねるユーリが茶化しているのは間違いない。

まあ、彼らしいといえばそうなのだが。

隣で作業していた男がどこか面白可笑しく答えた。この辺りは下町の特有の“ノリの良さ”だろう。

「ああ。でもユーリには分けてやんねえよ。来んの遅かつたから」

「はつはつはつ。世知辛いねえ」

その間も手を休めることなく土のうを積み上げてるが、それでもユーリの足元も足首まで水に浸かっている。

勿論下町にも用水路が引かれているが、濁った水がとめどなく流れおり、いつあふれてもおかしくない。

「そう。世知辛い世の中なんだよ。魔導器修理を頼んだ貴族の魔導士様もいい加減な修理しかしてくんないしな」

「……ハンクスじいさん頑張つてるな」

貴族街に住むモルティオ、と名乗る魔導士に修理してもらったのはつい数十分前の出来事である。

しかし修理から数分と経たぬ内に水道魔導器から大量の水が噴き出してきたのだ。

ユーリの視線の先には率先して土のうを運ぶ老人の姿。いい年して水遊びという柄ではないだろうに。あれで腰でも痛めた日にはどうするのか。

「責任感じてんのさ。修理代、先頭立つて集めてたのじいさんだから。じいさんもばあさんの形見まで手放して金を工面したってのに
いさんの責任じゃねえよ」

男はまあな、と相槌をつつと、土のうを運んでは積み上げるという作業を繰り返す。

手伝うわけでもなくその様子を眺めていたユーリに老人ハンクスの鋭い声が飛んだ。

「これ、ユーリ！手伝わないなら近付くな。危ないぞ！」

「じいさん、魔核見なかつたか？ 魔導器の真ん中で光るやつ」

この水道魔導器にはあるはずの物がなかつた。

魔核^{コア}と呼ばれるそれは魔導器^{コントローラー}の力の源ともいえるものである。その魔核と魔核を収める筐体^{コンテナ}の一いつが揃つて初めて、魔導器は魔導器として機能するのだ。

「ん？ さあのう？ ……ないのか？」

「ああ。魔核がなけりやあ、魔導器は動かないつてのにな。最後に魔導器触つたの、修理に来た貴族様だよな？」

下町の人々が魔核がないことに気付かなかつたのも、ある意味では仕方がない。

魔導器は貴重品でありながら人々の生活に浸透しているが、工アルを制御する魔核やそれに刻まれた術式が専門的であることもあり、殆どの者は魔導器が何で動いているのかなど知らないのである。普段から武醒魔導器^{ボーディングシステム}を使つているユーリだからこそ気付いたといえるだろう。

「ああ、モルディオさんじやよ

「貴族街に住んでんのか？」

「そうじゅよ。ほれ、もういいからユーリもみんなを手伝わんか！」

しかしゴーリはうんとは言わなかつた。

魔核が戻らなければ根本的な解決にならないし、新たに水道魔導器を手に入れるなど不可能だ。

ならば自分がやるべき事は皆の手伝いではなく魔核を取り戻すこと。

居場所も分かつてゐるなり話は早い。逃げられる前に捕まえなければ。

「……悪い、じいちゃん。用事思い出したんで行くわ」

意のなりゴーリはハンクスの制止の声も聞かず「ラピードを連れて歩き出す。

ハンクスはその背中に無茶だけはするんじゃないぞと呟いた。

プロローグ（後書き）

連載開始しました！かなりの長編になる予定です。

牢屋の中からこそこそむちむち

困っている人は助ける。それが彼女の信条だった。お人よしだと言われることも多いが、それは彼女に取つてあたり前のことなのである。

ザーフィアスを訪れた理由、父のお使いともいえる頼み事を終えた少女 エリシアは街中を歩いていた。

後はダンブルレストに帰るだけなのだが、何しろ彼女にとつては初めての帝都。気にならないといつたら嘘になる。

エリシアが直ぐにダンブルレストに帰つていれば、運命はまた違つたものになつていたかもしぬれない。

そんな彼女の耳に恐らくは子供の悲鳴が届いた。

振り向いた先には、十歳くらいの少年が数人の騎士に追い掛けられていたのである。

エリシアは父がギルドの首領であることも相俟つて騎士にあまり良いイメージを抱いていない。

となればとる行動はただ一つ。

「ちょっと貴方たち！ こんな子供相手に何やつてるの！ まったく……大人げない」

少年を庇うように騎士たちの前に立ち塞がつたのである。まさか邪魔が入るとは思つていなかつた騎士たちがぽかんと間抜けな顔をしてエリシアを見つめていた。

「う、五月蠅い！ その子供は貴族街の家の窓を割つたあげく自分はやつていないと嘘をついたのだ！」

騎士の言葉に少年はふるふると頭を振つて否定した。

エリシアはこれみよがしにはあ、とため息をつく。あらかた近くにいた少年を勘違いして追い回していたのだろう。

腐った騎士と子供。どちらを信じるかと問われれば自分は躊躇いなく子供と答えるだらう。

「止めて。今にも泣きそうじゃない。大丈夫、君は何も悪くないよ。さ、私と一緒に行こう」

完全に騎士たちを無視して男の子の手を取つて歩き出す。しかし彼等はエリシアと少年を取り囲み、武器を突き付けたのである。どう考へてもやり過ぎだ。

「なに？ それが騎士のすることなの？」

少女の顔には静かな怒りの色が刻まれている。

エリシアは少年を後ろに下がらせるとゆっくりと腰の一つあるホルスターの一つから陽光を弾く銀色の銃を取り出した。

何をするかと思えば、照準を石畳に合わせて……撃つた。

「ノクターナルライト」

銃口に一瞬だけ浮かび上がった光の魔法陣。

次の瞬間、打ち出された光が騎士たちの足元で弾け、目も眩むような閃光が彼等の視界を灼いた。勿論当てるつもりのない威嚇射撃であり、目くらましである。

その隙にエリシアは再び男の子の手を取つて駆け出した。

しかし彼等は諦めることなく追つて来る。この辺りだけは感心したいものである。自

分一人なら騎士たちを撒くのは造作ないが、少年がいるためそれも難しい。大の男と少女、少年の足では遅かれ早かれ追い付かれてしまう。

最後の手段は、実力行使だがそれをするれば確実に賞金首である。エリシアは仕方なく足を止めると堂々と騎士たちの前に姿を現した。

「やつと観念したか。これはれつととした公務執行妨害だ。私たちと共に来て貰おう」

「この子の言ひことを信じてくれるなら一緒にいく。でも駄目だつて言つのなら……私には貴方たちを排除することなど簡単よ」

エリシアに気圧されたかのよう後に下がる。

するとホルスターから抜かれたバレルが銀色に煌めいた。勿論本気ではない。賞金首などまっぴら御免だ。

「わ、分かった。分かつたからその物騒な物を下ろせー。」

言葉通りに銃をホルスターに収めると、少年に逃げるよつに田配せする。

少年の姿が見えなくなつたのを確認すると抵抗する気がないことを示すために両手を上げた。

鼻を突くかびの臭いと湿つた空気、背中に当たる硬い感触にヨリは意識を取り戻した。

目に入るのは頑丈な鉄格子。その後モルディオの屋敷に乗り込んでみればロープを目深に被つたやつが今にも屋敷を引き払おうとした直前だった。

そのモルディオをラピード追い詰めたまではよかつたが、煙幕で逃げられる始末。ラピードが機転を利かせて奪つた荷物の中に魔核はなかつたのである。

しかも「寧に職務に忠実な（胸糞悪いキュモール隊のことである）警備の騎士が駆け付け、揚げ句の果てにはたこ殴りにされる始末である。

お陰で殴られたそこかしこが痛んだ。

「……で、その例の盗賊が、難攻不落の貴族の館から、すんごいお宝を盗んだわけよ」

「知ってるよ。盗賊も捕まつた。盗品も戻つてきただり」

思案に耽つっていたユーリの耳に入つて来たのは、隣の独房の人物と慰いくは看守との会話。

囚人と仲良くお喋りとは看守も暇なものである。

「いやあ、そこは貴族の面子が邪魔をしてつてやつでな。今、館にあんのは贋作よお」

「馬鹿な……。」ほんつ。大人しくしてこる。もう直ぐ食事だ

「そりそろじつとしてるのも疲れる頃でしょーよ、お隣りさん。田覚めてるんじやないの？」

「ど」か名残惜しそうに話を切ると看守は隣の牢から離れ、ユーリがいる独房の前を通つて姿を消した。

予想もしなかつた隣からの声に、ユーリは寝転がついていたベッドから起き上がつた。

自分が起きていることに気付いていたとは、ただのおつさんではない。

別に驚くほどのことではないのだが、

「わつこつ嘘、自分で考えんのか。おつさん、暇だな」

「おつさんは酷いな。おつさん、傷付くよ。それに嘘つてわけじやないの。世界中に散らばる俺の部下たちが、必死に集めてきた情報でな……」

「はつはつ。ほんとに面白こおつさんだな」

相手も軽い調子なもので、つられてユーリも笑いながら答える。
その時、かつんかつんと複数の足音が一人しかいないはずの独房に反響した。音が聞こえた方は一つしかない入口兼出口から。

靴音からして一人はグリーブ。これは看守だ。もう一つはそれよりも軽い。恐らくは少し踵の高いブーツ、女か。

「大人しくここに入つてろ」

がちやりと鉄格子が閉まる金属音。

鍵が落ちる音だけを残し、靴音と気配は遠ざかって行った。
新たなお隣りさんの登場に、牢の中は再び静寂に満たされる。それを唐突に破つたのは隣のおつさんの声だった。

「で、お隣さんのお隣りさん。だいじょーぶ？ ちなみに美女が可愛い女の子だとおつさん、嬉しいんだけどな」

そんな都合がいいわけがない。ユーリは半ば呆れて声も出ないが、この状況で何とも緊張感のないおつさんである。

しかし幾ら気を張つたところでここから出られる訳ではないのだが。

「ユの状況自体、大丈夫じゃないと思つけど」

返つて来たのは牢獄によく響く若い女の声。

声だけでは何とも言えないが十代後半から二十代前後だろう。しばらく何かを噛み締めるような沈黙が続いたかと思うと、一人仲良く同時に声を上げた。

「「ん？」」

「もしかしてレイヴン?」

「ヒリシアちゃん?」

二人の声音には僅かに驚きの色がある。

特に彼女、隣のコーリにも分かるくらい動搖が伝わって来た。 酷く驚いているのかもしれない。

「何だ。つまりあんたら、知り合ってことか?」

「まあ、そういうことになるわけよ」

「それよりも……おっさん情報通なんだり? ここから出す方法を教えてくれ」

ふと下町の様子が気になつた。

(ハンクスじいさん頑張り過ぎていないと云いのだが……。しかしじいさんの性格を考えると無茶しているだらうな)

「何だか知らないけど、十日も大人しくしてれば、出して貰えるでしょう」

十日も待つていれば、それこそ下町は水浸しでは済まない。

水道魔導器が壊れたままで少しの間なら飲み水などの生活用水は何とかなるだろ。 だがそれにも限界がある。

脱出、青年の名は

「えつ！ 十日もこんなカビ臭い所に居なきや いけないの私！？」

そんなの聞いてない。エリシアは思わず頭を抱えなくなつた。湿氣臭い独房に柔らかさのカケラもない硬いベッド。鉄格子の外に見えるのは何の愛想もない灰色一色。

十日の間、風呂どころか水さえ浴びられないなんて、年頃の少女に耐えられるはずがない。

それに十日もこんな所に入れられたらダングレストに戻るのも当然遅くなる。

「エリシアちゃんてば一体何やらかしたわけ？」

同じように捕まつたレイヴンには言われたくない。

しかし聞かれたからには正直に話そうと帝都に来た理由（隣の牢の人物の前でもあるため父の素性は伏せたまま）と捕まつた訳を話した。

「お人よしなこつた」

「私にしては当たり前のことだけど？」

隣の牢の人物が呆れたような、だが僅かに感心したかのような声を投げかけた。声から判断するに若い男か。そうは言われてもエリシアにとつては当たり前のことである。

硬いベッドに腰掛けながら首を傾げた。エリシアとて後先考えず飛び出すわけではないのだが、追われていたのが子供だったから、なのかもしねりない。

「そういう所からしてお人よし、だろ？ にしてもモルディオのやつ、どうすつかな……」

青年 コーリの眩きに首を傾げる。

モルディオというと“あの”モルディオだろうか。変人で有名な天才魔導師リタ・モルディオ。弱冠一五歳にして魔導器、エアル研究の第一人者。そんな天才と独房の彼と何の関係があるのだろうか。

「モルディオってアスピオの？ 学術都市の天才魔導士とおたく、関係あつたの？」

「知つてるのか？」

つい口を滑らしたかのようなレイヴンの答えに、隣の彼は驚いた様子で尋ねる。半分独り言のつもりだったからだろう。だがレイヴンは直ぐには答えず、エリシアも余計な口は挟まずに耳を澄ませておつさんの言葉を待つた。

「お？ 知りたいか。知りたければそれ相応の報酬を貰わないと……」

…

いつものレイヴンと何ら変わらな「おどけた口調である。

「学術都市アスピオの天才魔導士さまなんだろ？ 『じぢやつざま』

この辺りは彼の方が一枚上手だつたようだ。

レイヴンが言わなくともエリシアが答えていただろうが。エリシアはレイヴン、みつともないと思いつつ一人の会話を聞いていた。

「い、いや、違う。違うって。美食ギルドの長老の名だ。いや、待て、それはあれか……」

「レイヴン、じどりもどろになつてゐる

噴き出すのを堪えながら、だが耐え切れずに笑いが漏れる。

その時、独房に騎士が身につけるグリーブ特有の金属音が反響した。一般的の騎士のものと少し音が違う。

エリシアが気付いた時、彼女の前を一人の男が通り過ぎた。

灰色の髪をした三十代であろう男だ。

端整な面差しに足元まで届く鮮やかな橙色の外套。ちらりと見えた腰の剣は華美な装飾はないものの、作りはしつかりしているし、シンプルだが随分と装飾も凝られている。

本来ならこんな独房に来るはずのない騎士。

エリシアは知らないが、ザーフィアスに住む者なら必ずと言つていいほど彼の名を知つてゐる。騎士団長、アレクセイ・ディノイア。帝国騎士の頂点に立つ男である。

騎士は“彼”がいる独房を通り過ぎ、そして止まつた。レイヴンがいる独房だろう。

と/or>うか今牢は三つしか使われてないため、隣の隣で止まつたのならレイヴンの牢以外では有り得ない。

「出る」

「いいところだつたんですがねえ」

次にエリシアとコーリの耳に聞こえたのは、鉄格子が開く独特の音。

(む、レイヴンだけ出してもらひちゃつて。といふか私が捕まつた理由は話したのに、レイヴンが帝都の独房にいる訳を聞いて置けばよかつた)

しかも明らかに高い位だと分かる騎士がお出迎えである。次に会つたら絶対に問いただしてやううと、ヒリシアは心に決めた。

「早くしろ」

アレクセイに連れられ、歩いて来る隣のおっちゃん もとい三十九代半ばほどの男がコーリの視界に入った。

浅黒い肌に無精髭を生やし、異国を思わせる変わった服を着崩している。

黙つていればそれなりに整つた顔立ちなのだが、その飄々とした雰囲気と、服装も相まってどこか胡散臭さが拭えない。

「おつと」

男はコーリがいる独房の前で躊躇いたふりをしてしゃがみ込んだ。コーリは近くまで駆け寄ると一人にしか聞こえないであろう小さな声で問い合わせた。

「騎士団長直々なんて、おっさん何者だよ?」

「……女神像の下」

だが男はそれに答えず、懐に入れたままだった手を出すと持つていた何かを床に滑らせた。

古びた金属の鍵。もしや独房の鍵か?

アレクセイ直々に迎えに来たことといい、全くもつて得体の知れ

ないおっさんである。

「何をしている」

「はいはい。ただいま行きますつて」

アレクセイの声に男はすっと立ち上がり、緩やかな足どりでユーリの前から姿を消した。

残されたユーリは、二人の気配が去ったのを確認して自分の手中にある鍵を見て独りごちた。

「……そりや抜け出す方法、知りたいとは言つたけどな」

彼も脱獄する気はさらさらないが、下町の様子は気になる。それに朝までに戻れば問題ないだろう。

とは言え直ぐに行動に移すわけにもいかない。抜け出すにしてもここは城の中。当然巡回の騎士も多い。

ユーリは騎士団時代を思い出し、巡回ルートや交代の時間を確認することにした。

レイヴンが居なくなつたことと、独房の中は一気に静かになつた。それはユーリが考え方をしているからであるが、エリシアはそんなこと知るよしもない。

つい迫り来る睡魔に身を任そつかとうつらうつらしていた時である。隣の鉄格子が開く音がしたのは。

慌てて眠気を覚まし、鉄格子に歩み寄つた。

隣の独房から出て来た人物は足音を一切立てず、見事に気配を消している。

二十歳過ぎの青年だった。胸元が開いた黒い服に背中まで届く艶

やかな黒髪。顔立ちはかなり整つてはいるものの、どこか不敵さを含んでいる。

エリシアは数秒間、呆然と青年を見ていたが（見とれていた）、我に返ると思わず青年の服を掴んだ。

「ちよつと待つ……」

「静かにしろ」

口は塞がれているので当然喋れない。分かつたというように何度も頷くと、やつと手を離してくれて息苦しさから解放された。声を出しかけた自分も悪いが、少しは手加減して欲しい。危うく窒息するところである。

エリシアは何度も空気を吸い込むと今度は小声で聞いた。

「貴方、どこに行くつもりなの？ 戻つて来る気はあるんだろうけど……」

「下町だよ。様子が気になるんでね。しかし何で戻つて来るつもりだつて分かつたんだ？」

端から見ればかなり奇妙な光景であるのは間違いない。

幸い看守は眠こけているらしく、一人のやり取りには気付いていなかつた。何故分かつたという彼にエリシアはにこりと微笑む。

「本当に逃げるつもりだつたら夜まで待たないでしょ？ 例え見つかつたとしても、貴方の腕なら騎士だつて相手にならないもの」

この青年はかなり“使える”。

気配を完璧に絶ち、足音を完全に消すなど並の者に出来ることが

はない。本当に青年が逃げるつもりなら、彼は夜など待たずに堂々と脱獄するだろつ。

短い会話の中からエリシアは彼ならそうするだろつと確信出来た。

「……参つたな。あんた、名前は？」

コーリは困つたよつて、或は驚いたよつて頭をかいた。この少女、可愛い顔して洞察力はあるらしい、と。

エリシアは今だコーリの服から手を離さぬまま、満月色の瞳を煌めかせて答えた。

「エリシア。エリシア・クレセント。下町の様子、見に行くなら私も連れて行つて」

理由が分からず首を傾げるコーリに、エリシアは全ての経緯を話した。

父から頼まれていたことを終えた後、偶然下町を訪れた時、水道魔導器から水が大量に噴き出している事態に遭遇したのだ。

下町の人々と一緒にずぶ濡れになつて土のつを積み上げ、何とか水が収まつたのを見届けてから下町を後にしたのもつかの間、エリシアは騎士に追われている少年を助け、ここに連れてこられたのだ。

「仕方ねえな。オレはコーリ。コーリ・ローウエル。じゃ、行くか。エリシア……エリイで良いか？」

「え、いいけど……」

しかしどうやつて出ればいいのか。コーリがどんな方法を使って独房の鍵を開けたか知らないが、全ての鍵は入口で寝ている看守が持つてているのだろう。

すると彼は半信半疑で持つていた何か　　鍵をエリシアがいる
房の鍵穴に差し込んだ。

かちやり、と鍵が開いた音がした。

ユーリもまさか開くとは思つていなかつたのだろう。まじまじと
鍵を見つめ、呆れ半分に咳く。

「おいおい。どんな鍵だよこれ」

暗がりでは分からなかつたが、ユーリと向かい合つて彼が怪我を
していることに初めて気付いた。

唇の端は切れて血が滲んでいるし、腕には打撲の跡が紫色の痣に
なつてゐる。平氣そうにじていつが痛くないはずがない。

「怪我してゐるみたいだけど、大丈夫？」

「あ？　ああ。捕まつた時にやられちまつてな」

「　聖なる活力、ここへ。ファーストエイド

エリシアはユーリの痣が残る頬に触れると意味ある言葉　俗に
魔術や治癒術を行使する時に要する詠唱　　を呴いた。

触れた手を中心にして広がるほのかな光の粒子。金色の煌めきを
放つ光が集束すると傷口が瞬く間に塞がり、紫に変色していいた痣も
生来の肌の色に戻る。

だがユーリの瞳は感謝よりも驚愕に彩られた。エリシアが治癒術
を使ふことには驚いたが、それ以上に彼を驚かせたのは彼女の耳
に付けられた金の耳飾り。赤い宝石が嵌められたそれは間違いなく
武醒魔導器だろう。

それは確かに作動していなかつた。魔導器がなければ治癒術は使

えないはずなのに。

そもそも普通は魔導器が作動しているかなんて確認しない。よくよく見なれば分からぬものである。コーリは思わずエリシアの肩を掴んで引き寄せていた。

「えつ？」

エスコートは不得意？

頭が真っ白になつて何も考えられない。田の前に端整なコーリの顔があつた。睫毛は意外と長くて綺麗な紫掛かつた黒瞳は生命力溢れる強い輝きに満ちている。

呆然とするエリシアに我に返つたのかコーリは直ぐに手を離した。

「……悪かった。傷、サンキューな」

コーリはぱつが悪そうに頭をかくとそっぽを向いたまま礼を言う。その様子がおかしくて思わず笑つてしまつた。

「ううん。コーリつて照れ屋なの？」

「はつ？ ぱつ……ちげえよー。そんな事より行くぞ」

眠りこけている看守の前を通り過ぎ、隣に位置する倉庫からコーリの剣とエリシアの銃を取り戻した。この銃も勿論、魔導器であるから本体である筐体と魔核がなければ作動しない。

だが幸い魔核は取り外されていなかつた。

「それも魔導器なのか？」

「そつ。大気中のエアルを変換して光や炎とかを撃ち出せるの。武器も取り戻したことだし、行きましょ」

エリシアは銃に異常がないかもう一度調べると、腰のホルスターに収めた。二人は地下牢を抜け、巡回の騎士に見つかることなく城内を移動した。それも元騎士だというコーリのお陰だらう。

最低限の明かりのみが残された廊下は暗く、予想よりも警備は厳しかつたが、ユーリやエリシアにしてみればざる警備でしかない。とは言つても堂々と城の正門から出ることは出来ないし、裏門も二人が居る場所より少し遠い上に見つかる可能性を考えると避けた方がいい。

「そーいや、エリイ、あのおっさんと知り合いだつたんだよな？ 信用出来そうか？」

一応貰つた鍵はちゃんとした（開いたという意味で）物だつたが、看守に嘘八百を並び立てていたことを考へると微妙なところだ。ユーリはまだあのおっさんを信じていいいのか測り兼ねていた。

「んー、多少胡散臭いかもしぬないけど、嘘はつかないと思つ」

ああ見えて天アルトスカを射る矢の幹部である。理由は分からぬが、様々な情報に通じているらしく。

ユーリは騎士団にいた頃の記憶を探つてみると女神像は多分あつただろう。

だが詳しい場所を覚えていない。一人が階段を上がり、一階に出た時である。何者かが言い争う声が聞こえて来たのだった。

まさかこうも早く見つかるとは思いもしなかった。体力には多少自信があつたが息が乱れる。やはり正式な訓練を受けた彼等を振り切るまでには至らない。少し開けた場所に出た瞬間、仕方なく少女は振り返った。

自分を追い掛けて来たのは一人。帝国騎士であることの証である鎧と兜。その手には鞘に収まつたままであるが剣が握られている。一人の少女を前にするにはあまりに物騒ではないか。

一人なら自分だけでも何とかなるかもしれない。少女は向い来る騎士たちを油断なく見据えた。

「もう御戻りください」

それはまるで仕方のない子供を宥めるような口調だった。だがそう言われて素直に戻る気はない。自分がフレンに伝えなければ……。少女は頑なに首を振り続けた。

「今は戻れません!」

「これはあなたのためなのですよ」

何が自分のためだと黙つのだ。外の世界すら知らぬまま箱庭の世界で生きて来た。何一つ自由にならないことがもどかしかつた。あなたのため? そんな言葉は聞き飽きた。

「例の件につきましては、我々が責任を持つて小隊長に伝えておきますので」

「そう言つてあなた方は何もして下さらなかつたではありますか！ お願いです。行かせてください。」このことは直接フレンに伝えなくては……」

「責任を持つて伝えると口先だけ。どうして誰も動いてくれないのか。フレンの命が危険に曝されているのに。」

少女は後退しながらも懇願した。

少女からフレンという名が出た瞬間、静観していたコーリの表情が変わつた。エリシアとコーリが出くわしたのは、明らかに貴族だと分かる少女を追う騎士という構図。

真つ先に飛び出そうとしたエリシアを止めたのはコーリだった。様子を見る、ということらしい。そういうつしている内に騎士たちはじつじりと少女に近付いて行く。

「怪我をしたくなればそ、それ以上、近付かないでください」

少女は服の中に隠し持つていたサーベルを引き抜いた。出来れば使いたくなかったが、この状況ではそんな事は言つていられない。遂に騎士たちが少女を取り巻く空気が一変した。

「お止めになられた方が……お怪我をなさこますよ？」

だが少女は一歩として退かなかつた。サーベルを構え、騎士たちを睨みつける。

これでも剣の訓練は欠かしたことはない。騎士たちにも引けは取らないと自負している。

「剣の扱いは心得ています」

「致し方ありませんね。手荒な真似はしたくありませんでしたが……」

一人の騎士は遂に鞘から剣を抜き放つた。それと同時に通路の方が騒がしくなる。

少女の目に駆けて来る騎士たちの姿が見えた。

「おい！ 居たぞ！ こっちだ」

これ以上は……もう。そう思った時だつた。

衝撃波とまばゆい光が騎士たちを襲つた。思わぬ方向からの攻撃に反応が遅れ、白塗りの壁に叩きつけられる。

まともに攻撃を受けた騎士はびくとも動かない。どうやら氣絶したらようだ。

この衝撃波は武醒魔導器があつて初めてなせる技である。フレンが扱う、騎士団の技。この状況で自分を助けてくれる人物がいるならば、それは一人しかいない。

「フレン……！？ わたしを助けに……？」

だが振り向いた視線の先にいたのは、思い描いた金髪の騎士ではない。

胸元が開いた黒い服を纏つた長い黒髪の青年と、薄紅掛かつた淡い金色の髪に短いスカート姿の少女。どちらも見覚えのない人物である。

「だ、誰？」

「貴様！ 何者だ！」

それは後から来た騎士たちも同じようで、青年と少女に剣を突き付け、半ば叫ぶような形で問いただした。

しかし当の二人はまったく意に介していないようで、つまらなさそうな顔で騎士たちを見つめた。

「あえて言うなら通りすがり？」

「違ひねえ」

そんな二人の会話に構わず、騎士の一人が青年に切り掛かる。青年は「ごく自然にすう、と後ろに下がると、勢い余つて体勢を崩した騎士の鳩尾に拳を叩き込んだ。

もう一人は同僚が瞬く間に倒されたことに動搖して後退するが、これまた少女が持つ銀色の銃から放たれた光が直撃し、のびている騎士と同じ末路を辿った。

「人の話しへ」

「最後まで聞けってな」

笑いながら言う少女と青年は息一つ乱れていない。

「こうも簡単に騎士を退けた二人に少女は驚きを隠しきれなかつた。

「それにしては隣の誰かさんは、エスコートがなつてない気がしない？」

「そりや、手厳しい」とで」

ユーリは剣を鞘に収めつつ、半ばふざけてため息まじりに言った。いつの時代の騎士団でもエスコートは教えてくれないとthoughtのは内緒だ。

エリシアは傍にあつた壺を取り、物騒にもユーリの頭上に振り上げようとしている彼女に気付き、ホルスターから銃を抜いた。エリシアは壺を手に取り、物騒にもユーリの頭上に振り上げようとしている彼女に気付き、ホルスターから銃を抜いた。ばれれば脱獄と器物破損で最悪である。どうか請求が来ませんようにと思う辺り、エリシアらしいのかもしれない。

「はあ、間一髪ね」

「何すんだ！」

壺は文字通り粉々に砕けたのだから彼女にも怪我はない。……のだが仮にも助けて貰つた相手にあれば如何なものか。

「……だつて、あなた方、お城の人じやないですかね？」

少女は小首を傾げて間の抜けたことを問うた。エリシアとユーリが城の人間に見えると言つならその人物の目はきっと硝子玉かもしくは飾り物だろう。

ユーリはあの胸元が開いた身軽な服装だし、エリシアは白い服と動き易いようにかなり短いスカート、ロングブーツという格好である。

「そう見えないってんなら、それまた光榮だな」

「コーリ・ローウェルとの他一结合起来逃げたであるかー！」

その時、近くから聞こえて来た間抜けな声。

コーリを追っかけ回すのが仕事らしいアーティストとボッコスのものだらう。声はまだ近いとは言えないが、油断は出来ない。

「馬鹿もへん！ 声が小さ～い！」

「ちう、またあいつらか。もつ牢屋に戻る意味、なくなつちまつたよ

ヒリシアはさあと血の気が引くような気がした。その他一筋というの間違いなく自分のことだらう。

これが父にばれることがあれば、自分は叱り飛ばされるに違いない。いや、叱られるだけで済めば僥倖だ。想像しただけで脂汗がにじみ出る。

「ね、コーリ。もしかしなくてもその他一筋って私のこと……だよね？」

「だらうな。これでエリィも晴れてオレの仲間入りつてことだ。ま、諦めな

「諦めたくなあい！」

こいつ、と笑うコーリに不思議そうに小首を傾げている少女。先に逃げたレイヴンを恨みたい。

エリシアの魂の叫びにコーリは苦笑するだけだった。

招かれたる客

「ユーリ・ローウェル？ もしかしてフレンのお友達の？」

ユーリの名を聞いた少女は驚いたように彼を見た。

ユーリもそうだが、どうやら彼女も“フレン”とやらの知り合いらしい。見るからに貴族である彼女とユーリに共通の友人がいるのなら、それは騎士ではないのか。

先程の少女を追い掛けていた騎士たちも、責任を持つて小隊長にと言っていたので間違はないだろう。

「ああ、そうだけど。それ、フレンに聞いたの？」

「はい」

どうやら事情を知らない自分が加わる話しどもなさそうなので、エリシアはのびている騎士たちから剣を取りあげて、高そうな置物の後ろに隠しておいた。

ついでに彼等が持っていた捕縛用の縄を押借し、身動き出来ないように二人一組、背中合わせで縛つて置く。

「ふうん、あいつにも城の中にそんな話する相手いたんだな

「あの、ユーリさん！ フレンのことでお話が！」

「」で疑問が一つ。彼女は何故、騎士たちに追われていたのだろう。

彼等は本来なら少女を守る立場だ。それとも彼女の言ひ話しどう。彼等は“フレン”に伝えられては困るのか。

今までの状況だけで全てを察することは出来ないが、訳ありだと
「いつこ」とはエリシアにも分かつた。おまけに少女はかなり焦つてい
るようだ。

「話しの腰を折るようで悪いけど、どうして騎士団に追われてるの
？」

「それなんだよな。あんた一体何なんだ？」

一通りの作業を終えてエリシアは一人に歩み寄る。ユーリも不思
議そうな顔をして少女を見つめていた。

だが時は一人に時間を与えてはくれない。近付いて来る複数の気
配。こちらの、というよりも彼女の場所がばれています。

見つかれば少女はまだしもエリシアとユーリは間違いなく牢獄に
逆戻り。それだけは避けたいところだ。脱獄がばれた以上、今戻つ
た所で最悪な事態になることは変わりない。ならば彼女についてい
くだけである。

「事情も聞きたいんだけど、のんびりしてらんないな。まずはフレン
の所に案内すればいいか？」

ユーリは舌打ちすると同意を求めるように少女を見る。ここで長
々話している訳にはいかない。間もなく騎士たちがやって来るだろ
う。

幾分か自分が置かれた状況について行けていないが、彼女ははつ
きりと頷いた。

「あ、はい！」

「いぐぞ」

走り出したコーリにエリシアと少女が続く。
先程感じた気配が段々と近くなつて来る。早くこの場を離れなければならぬ。

「コーリ、フレンって人の部屋、どこか知つてるんだよね？」

「知らなきやわざわざそんなこと言わねえよ。つてエリイ、当然のよう付いて来てるけど、いいのか？」

コーリが話しながら隣のエリシアを見た。言わばこれはエリシアには全く関係のないことである。ならば彼女が付き合つ道理もないはず。

困つている人を助けるのに理由は必要ない。自分でもお人よしだと思いつつ、エリシアはにつ、と笑つたのだった。

「今戻つても最悪な事態には変わりないし。それとも私、そんなに薄情に見える？」

「……」フレンの部屋は一階にあるらしい。エリシアとコーリ、薄紅色の髪の少女を加えた一行は巡回の用を盗みながら階段を上り、二階を目指した。

エリシアにしてみれば城の部屋など全て同じに見えるが、元騎士のコーリと彼女は区別がつくらしい。

「……この辺り……だったような……」

少女は長い廊下の中央付近で立ち止まると、きょろきょろと辺りを見回した。

それを見ていたコーリが呆れ口調で一言。

「……あんたの立ってるやうがフレンの部屋だら……？」

これにはエリシアもあれ、と首を傾げそうになつた。果たして大丈夫なのだろうか。

城に住む貴族であつても把握している訳ではないらしい。周囲を確認して扉をノックする。……が反応はない。

案の定、部屋はもぬけの殻だった。

フレンがどんな人物かは知らないが、部屋の状況を見る限り、コーリとは正反対の几帳面で真面目な人物だと推測出来る。あくまで推測に過ぎないのだが。

「……やけに片付いてるな……」「いやあ、フレンのやつどうかに遠出かもな」

「その可能性が高いと思つ。ベッドも使われた形跡がないし、状況

を見ると数日は部屋を空けてる

何か手がかりはないかと部屋を見回すが、田立つものはない。明かりが付いていた形跡もないし、ベッドや棚の中までさりと整えられている。

彼が出て行ったのは少なくとも数時間単位ではない。恐らく数日単位か。

「だらうつな

「そんな……間に合わなかつた

「んで、一体どんな悪さやらかしたんだ?」

コーリが茶化すように笑うが、彼女が何かをしたとは考えづらい。勿論、彼も本気ではないだろう。身なりからして貴族の少女がわざわざ一騎士に伝えなければならぬ事とは何なのか。

「そんな、コーリじやあるまいし」

「悪かつたな」

笑いながらヒリシアがコーリを横田で見る。コーリは、あのな、お前、オレを何だと思つてるんだ。そつ言い返したい衝動に駆られた。

ヒリシアはこほんと咳ばらいを一つ。このままだと埒があかない。追つ手やら何やらがここを嗅ぎ付ける前に事実関係をはつきりさせておかなければ。

「まあ冗談は置いておいて。つまりフレンと言う人に危険が迫っている。貴女はそれを伝えに行きたいと。そういうこと？」

「は、はい！」

「どうやら詳しいことは話してくれないらしい。聞いた所で分かりはしないだろうが、彼女がそう判断したなら自分から言つべき」とはない。

余計な詮索はすべきではないし、エリシアもそうだが、誰しも言いたくない事の一つや二つはある。

「お願いします。コーリさん、エリイさん、わたしも連れて行ってください。今のわたしには、フレン以外に頼れる人がいないんです。せめて、お城の外まで……お願いします、助けください」

彼女は両手を正面で組み、祈るように一人をみつめた。そんな顔をされたら断るに断れない。もつともエリシアには最初から拒むという選択肢はないが。

助けを求める者の手を拒むな。それがエリシアのモットーであり、父の教えである。

「訳ありなのは分かつたからせめて名前くらい聞かせてくんない？」

「そう言えば聞いてなかつたか。あ、私はエリシア。エリシアでもエリイでも好きに呼んで」

コーリはどうかとフレンのベッドに腰掛け、少女に聞く。幾らなんでもリラックスし過ぎな気もするが、友人という話だから遠慮はないのだろう。

エリシアは少女の方を向き直り、自己紹介をした。名を尋ねる時

はまず自分から名乗れ。どこかのギルドの誰かの言葉だつた気がする。貴族の方は知らないが、これが普通の礼儀というものだらう。少女の方はと、妙に畏まつてぺこりとお辞儀した。

「は、はい。わたしは……ひゃあっ」

“それ”は唐突に起こつた。少女が言いかけたのと、扉が衝撃で吹き飛ばされたのはほぼ同時だつた。

ユーリが前に出る。いつでも剣を抜けるように手は鞘に沿えたままだ。

エリシアもホルスターから銃を抜き、油断なく扉の外を見据えた。

「オレの刃のエサになれ……」

一言で言い表すなら“異様”な男だつた。体にフィットする奇抜な服装に黒に黄、赤と染め分けられた髪。

明らかに招かれざる客だと分かる男は両手に抜き身の剣を下げていた。

一見しただけで分かる。男が放つ痛いほどに冷たい殺氣。隙だらけのように見えて寸分の隙のない構え。彼は間違ひなく暗殺を生業とする者だ。

「オレはザギ……お前を殺す男の名。覚えておけ、死ね、フレン・シーフォ……！」

月の光に照らされ、うつすらと浮かび上がる男の顔と携えた刃。

男は一番手前にいたユーリとの距離を一瞬で詰め、袈裟がに切り上げる。ユーリは首筋を狙つた一撃をあわやの所で剣で弾いた。

息を付く暇もなく、次々に繰り出される連撃を全て捌く。

厄介な事に一撃こそ軽いものの、スピードは早く、正確に急所を

狙つて来る。打ち合ひのヨーリと男。それはまるで美しき剣の舞いだつた。

刹那の攻防を見せつけられているヒリシアは手を出せずにいた。今ここで割つて入ればヨーリの邪魔になるからだ。加勢しようにも男とヨーリの距離が近すぎて銃は使えない。術も同様である。せめて男がヨーリから離れてくれれば……。

「いい感じだ」

「はあ？ 何がだよ。じつちはちつともよくねえよ。つーか相手、完璧に間違つてるぜ。仕事はもつと丁寧にやんな」

今まで表情すら浮かべていなかつた男はにやり、と笑つた。さながらお気に入りの玩具をみつけた子供のように。

ヨーリは不敵な、余裕めいた表情で銀色の弧を描いて迫る刃を受け止める。月明かりだけが照らす室内に激しい音を立てて火花が散つた。

どこのをどう見れば自分とフレンを見間違えるのだろうか。

「そんな些細なことはどうでもいい！ あははっ！ さあ、上がってキタ！ 上がつてキタゼエエエエー！」

「急に変わりやがつたな」

男の異変を察知したヨーリは急所を狙つて剣を弾き返し、後方に飛んだ。

それまで呆けていた少女が慌ててサーベルを構える。

「わたしもお手伝いします！」

「駄目！ 今貴女が行つても邪魔になるだけ。下がつて、私が……
行く」

エリシアは咄嗟に飛び出そうとした少女を止めた。
彼女ではあの男の相手は荷が重い。一人の様子に気付いたユーリ
の声が飛んだ。

「よせー！」

その瞬間、ユーリにほんの少しだけ、隙ともいえない隙が出来た。
そしてそれを見逃す男ではない。今までとは比べものにならない
速さでユーリに肉薄する。
防御が……間に合わない。ユーリは負傷覚悟で迎え撃とうとする。

「くつー！」

『父さんより全然弱い！』

確かに男は強い。太刀筋も傭兵などに比べて圧倒的に早い。
だが、父に比べたら足元にも及ばないではないか。

エリシアは二人の間に割つて入り、ユーリの前に立ち塞がる。
蛇のようにつねる刃を紙一重で避けるが、完全には避けきれずに
髪が数本床に落ちた。

しかしエリシアはそれに構わず男に銃口を向ける。
淡く浮かび上がる白き光の魔法陣。銃口から放たれた白い光が闇
を照らした。

「ノクターナルライトー！」

対照的な友人

エリシアが銃から放った光は、万物の根源たるエアルを物理的な力に変えて撃ち出したもので、武醒魔導器ボーディブラスターを介して操る、術や剣技と同じものだ。

純粹なエネルギーの奔流とも言えるそれは、出力を落としているとはいえ、直撃すれば怪我はまず免れない。先程の騎士たちと同様、受けければ壁に叩き付けられてしまうだろう。

しかし男は両手を交差させて踏み止まる。

だがエリシアは男の姿を見る前に精神を集中させ、術を紡ぎ出していた。この程度では倒せないと踏んでいたからだ。

エリシアの周りに描かれる立体魔法陣。暗闇の中で鮮やかな緑の光を放つそれには、難解な紋様が浮き出ている。

男が体勢を立て直す隙をとれるほど彼女も甘くない。エリシアは銃を持った手を突き出した。

「　舞い踊る風靈、刹那にて軌跡を描け！　ウインドカッター！」

生み出された風の刃は弧を描き、男を切り裂くはずだった。

だと言うのに、真空の刃は腕を浅く切つただけで留まつた。多少は出血してはいるが、それだけだ。常人なら視認してから避けられるものではない。

だが男はそれをかわした。

それでもエリシアは素早く銃を連結させると男に照準を定めた。銃口にエアルが集束し、淡い熒光を纏う。そう、全てはこの時のためのフェイク。

「雷よ、ヴォルトアロー！」

銃口から迸る雷霆。それは真っ直ぐに対象に向かう。男は避ける所か何と床を蹴り、前に出る。ちつ、と雷光が掠り、右頬を焼いた。男は勝利を確信したように勝ち誇った笑みを浮かべる。分かつていたのは男だけではない。エリシアもまた笑っていた。同時に紫の光は今度こそ、背後から男を直撃した。

「残念。それ、追尾性だから」

「……えげつねえな」

ユーリが後ろから呴いたがエリシア無視。父との稽古に比べれば何てことない。

ただ、稽古は実戦とは違う。流石に殺しを生業とする者との命のやり取りには焦つたが。

「ひやははは！ もつともつとだあ！ もあ、続きをやるがー！」

体から白煙を立ち上がらせながらも、男は立ち上がった。服は焦げ、破れている所もあるが、瞳から闘志は失われていない。それどころか楽しげに笑っていた。

油断してはならない。手負いの獣は危険だ。

その時、男の背後に気配。現れたのは、暗闇の中で禍々しく光る赤い眼に、黒装束に身を包んだ男。突然の乱入にユーリとエリシアは身構えるが、二人の警戒とは裏腹に男が口を開いた。

「ザギ、引き上げだ。」二つのミスで騎士団に気付かれた

ザギと呼ばれた男は反応すらしない。

一度も後ろを見る事もなく、無造作に剣を振るつた。

不意を突いた攻撃に黒衣の男は、身を反らす」とでそれをかわす。

「き、貴様」

「オレの邪魔をするな！ まだ上り詰めぢやいない！」

ザギは未だ剣を構えたまま、コーリとエリシアを見つめている。氣付かれたと言つことは遠からず、城内は彼等と少女を捜す騎士たちで溢れ返るだろ？

コーリは舌打ちしたいのを堪えて一人の会話を聞いた。

「騎士団が来る前に退くぞ。今日で楽しみを終わりにしたいのか？」

それまで微動だにしなかつたザギの体がぴくりと動いた。狂氣を思わせる不気味な笑みも消えていく。

楽しみを終わりにしたいか、の一言が効いたらしい。

ザギはコーリとそしてエリシアを一瞥すると身を翻し、城の中に消える。黒衣の男も彼に続き、足音を起てずに駆け出した。

ザギが放つ底冷えする殺氣が遠ざかっていく。それを確認するとコーリはゆつくりと息を吐き出した。見れば剣を握っていた左手はじつとりと汗をかいている。

終わったのだと意識した途端、体を脱力感が襲つた。

いくらコーリが騎士団にいたとは言え、暗殺者とおぼしき人間と対峙したのは初めてである。緊張するのも当然だ。

「ここもゆつくりできねえのな。おい、エリイ、切り結んでる時に割つて入るのは危ねえだろ。だけど……ありがとな」

あの時、エリシアが二人の間に割つて入つていなければ怪我をし

ていたが、最悪死んでいたかもしれない。

ゴーリは躊躇うことなく礼を言った。生憎そんな事で傷つくなつて、矜持など持ち合わせていない。

「「」めん。つい動いちゃつて。見ていろだけも何となく釈だつたし」

「あの、ゴーリさん、ヒリイさん」

恐らく、ゴーリならザギといつ男にも遅れはとらないだろう。例えヒリシアが手を出さなかつたとしても、

こいつの間にかサーベルを收めていた少女が、怖ず怖ずと口を開く。

「分かつたよ。一先ず城の外までは一緒だ」

そういうつゝてゐる内に、早くも外が騒がしくなつて來た。裏を返せばこの期を逃すつもりはない。訓練を受けた騎士たちは想定出来ない事態に弱く（フレンは別だが）、混乱時なら出し抜くのもたやすい。

頷いた少女は自らをエステリーゼと名乗り、深々とお辞儀をした。

「はい、あの、わたし、エステリーゼ、といいます」

「んじゃあ、ヒリイ、エステリーゼ、急ぐぞ」

「了解！」

「あの、申し訳ないのですが、着替えさせて頂いていいですか？
近くにわたしの部屋がありますから」

エステリーゼにつられて服装を見ると、高そつた青いドレスは邪

魔な上に目立つ。

わざわざ見つけてくださいと言つていいようなものだ。それにヒールのある靴では動きづらいだろう。

「いいんぢゃない？ 流石にその格好で城から出れないしね」

「だな」

思わずその格好で街中に出た時を想像するが、目立つやら何やらの次元の問題ではない。明らかに浮くことは間違ない。急がなければいけないが、着替える時間はあるだろう。

二人はエステリーゼの後をついて行く形になる。先程の男たちのお陰で騎士たちの数は多いものの、簡単にやり過げさせた。

「それにしても呆れるべうござる警備よね。一応、帝国の象徴たる“城”なのに」

こうも簡単に動き回れるならざる警備と言つても間違つていない。これが彼等の警戒体勢なのか。コーリの方は慣れているのか呆れるよりも馬鹿にしているようである。

「ま、名ばかりと言つても過言ぢやねえからな騎士は。内側は腐つてるんだよ。そんな奴らばつかだからフレンが苦労すんだよ」

誰よりも眞面目な友人。かつて理想を抱いた青年たちは騎士団へと身を投じた。

しかし腐敗しきつた騎士団に一人は去り、一人はそんな現状を変えるために上を目指した。

前者がユーリ。後者がフレンだ。

騎士を辞めたことに後悔はない。フレンは上に行つて人々の未来

を守ればいい。

だが今苦しんでいる人々は誰が助けるのだ。

「エリシアがわたしの部屋です。では着替えて来ますね」

「ちゃんと見張つてるから安心して着替えて来て」

「はい」と返事をして、エステリーゼは部屋の中に消えた。周りに騎士たちの姿はない。油断は出来ないが、騎士たちは彼女が部屋には戻らないと判断したのだろうか。

エリシアは壁に背を預けたままユーリに尋ねる。ユーリやエステリーゼの会話から想像は出来たが、ユーリの口から直接聞いたかったのだ。

「……フレンってどんな人なの？」

「そうだな……誰よりも眞面目で眞っ直ぐな奴だよ。羨ましいくらいにな。オレはあいつに勝てたためしがねえんだよ。剣でも何でも。いや、料理だけは別か。それでいてユーリ、大丈夫？なんて言って手を差し出してくる」

悔しいくらいに余裕があつて眞っ直ぐで。だからフレンには上に行つて、弱き者が虐げられる世界の仕組みを変えて欲しかった。ユーリはとても柄ではない。

苦い顔をするユーリを見てエリシアの口から思わず笑い声が漏れた。

「でもユーリはそのフレンって人、好きなんだね」

「まあな。でなきやずっとつるんでねえよ」

「お待たせしました」

扉が開き、エステリーゼが現れる。

着替えたエステリーゼはドレス姿の時とは全く印象が違った。今も品は良さそうに見えるが、少なくともお嬢様が着る服ではない。後ろで纏めていた髪も下ろしているだけで随分イメージが違う。

白を基調としたジャケツは肩が膨らんだ作りになつており、アクセントに黄色のラインが引かれている。彼女の髪と同じ薄紅色のスカートは、見る者に花の薔薇を思わせた。

「どう、ですか？」

「……似合わねえな」

「……ユーリ。大丈夫、ドレスよりずっと似合つてるから」

失礼なことを口走るユーリを半眼で睨み、エステリーゼに視線を向ける。

似合つている、は嘘ではない。エリシアの心からの言葉だ。まだ会つて間もないが、こちらの方がずっと彼女らしいと思つた。

エステリーゼにもそんなエリシアの心が届いたのか、ぱあっと顔を輝かせた。

「エステリーゼ、エステリーゼ……ちょっと呼びづらくない？」

「そりでどうか？」

小首を傾げるのは栗鼠のようで非常にかわいらしいのだが、箱入り娘というのは、いや貴族の少女は皆、“こう”なのか。

それとも彼女が特別なのか、エリシアはいまいち『貴族の娘』といふのが掴みきれていなかつた。

「じゃ、エステルってのはどうだ？」

「うん。良いと思う。エステル？」

「……エステル、エステル」

エステリーゼにすれば不思議な気持ちだつた。彼女の周りの人々は皆、例外なく自分をエステリーゼ様、と呼んでいた。

誰も呼びづらい等と言つたことはない。考えればそれは当たり前であるが、エステリーゼ エステルにしてみれば嬉しかつた。自分を愛称で呼んでくれる人なんていなかつたから。あのフレンでさえも自分をエステリーゼ様、と呼んだから。

「エステル？ 急いづ」

自分を気遣う声にエステルはふと我に返る。こうやって思案に耽るのは悪い癖だ。

慌てて顔を上げると、自分を待つてゐるエリシアとどこか斜めに構えたユーリが目に入る。

「ぐずぐずしてるとおいてくぞ」

どこか呆れ混じりの声には僅かの優しさが含まれていた。エステルの表情が徐々に笑みへと変わる。

生まれてからずつと箱庭の世界で生きて來た少女は、城では決して手に入らぬ何かを噛み締めるように頷き、駆け出した。

至宝抱く女神像

「女神像、ですか？」

その肝心の場所をエリシアは勿論、コーリも知らない。彼の場合は忘れているだけだが、はい脱出出来ずに牢屋に逆戻りだけは避けたい。

城に住んでいるエステルならもしさと思い、聞いてみたのだが。エステルは少し考え込むような表情を見せ、やがて思い出したよう顔を上げた。

「はい。確かにありますが、それが何か？」

「多分だけど、女神像まで行けば城から出られると思う。案内してくれる？」

そう言つた直後、鏡のように磨かれた廊下に反響する複数の足音。誰か来る。

こぞとなればエステルの部屋に隠れる手があるが、あまりよろしくない。第一、誰かが来た場合、一階、それも密室では逃げ場がないからだ。

そして二人とも、先ほどのザギとの戦闘で思つた以上に疲れていた。

「エステル、取りあえず案内してくれ。時間はあまりねえみたいだからな」

「分かりました」

エステルに続いて、北側にある階段をあくまで静かに駆け降りる。周囲の警戒も忘れない。階段で見つかればそれこそ逃げ場はないし、隠れる場所もあるはずがない。

廊下の突き当たり、エステルが騎士に追い詰められていた所と同じような作りの開けた場所。ほのかな明かりが照らす中央に女神像はあった。

恐らくは名匠の手によるものだらう。背にはまるで本物であるかのように精緻な翼が広がり、纖手と呼ぶに相応しい手には帝国の至宝、宙の戒典テインノモスが握られている。

こんな事態でなければゆつくり眺めていたのだが、そんな訳にもいかない。

「それにしても、どこに抜け出す手掛かりあるんだよ」

あのおっさん信じなれば良かつただろうか。ため息を付きかけたヨーリを余所にエリシアは、女神像が置かれている床にしゃがみ込んだ。

直接手で触れてみるとやはり、僅かに引きずったような跡がある。

「おい、エリイ、何してんだ。見えるぞ」

何が、とは言えない。ちなみにエステルは全然分かつてないようだ、ただきょとんとしている。エリシアはヨーリに見えるように、平然とスカートの裾を掴んで持ち上げてみた。

「これ？ 下履いてるから別に見えてもいいけど？」

白のミニスカートの下には動き易いよつと黒のスパッツを履いてある。

するとヨーリが何だか凄く微妙な顔をした。まるで期待外れだった、とでも言いたいのだろうか。

「……色氣ねえな」

「悪かったわね！ それよりもここ、動かすから手伝つて」一度ヨーリには女心というものを説かなければならぬと思いつつ、女神像を指差す。

一人で女神像を退かすと、下から現れたもの。それは階段だった。まずヨーリ、エステル、エリシアの順で降りていく。

鼻を突くかび臭さと湿つた空気。石造りの通路には鼠に似た魔物が徘徊していた。

正直な話、エリシアとヨーリがいた独房と変わらない。女神像の下に隠されていたのは整備されてはいるものの、かび臭さが拭えない地下通路。女神像の下に隠されていたことを考へると、皇族のための隠し通路なのかもしれない。

「本当に隠し通路なんてあつたんですね」

エステルは目を輝かせて言うが、本当に貴族といつのは分からない。

こんな水っぽくてかび臭い通路の何処が良いのだろう。それはヨーリも同じようで、エステルを見た後、エリシアに向けて小さく首を竦めた。

「エステル、油断は禁物だから」

銃を構えたエリシアに、慌ててエステルは後ろを向く。すると鼠

より一回りは大きい鼠の魔物が倒れていた。しかもふすふすと白煙を上げて、である。

肉の焦げる（生焼き）臭いが辺りに漂う。

エリシアやユーリはともかく、エステルは少し気分が悪くなつたが、我慢して引き攣つた笑顔を浮かべた。

だが魔物は一匹だけではない。

「すみませんエリイ、ありがとうございます」

「にしても魔物、多いっつーのー、蒼破刃！」

ユーリの剣から放たれた青い衝撃波が、纏めて魔物を吹き飛ばす。エリシアも後ろから銃と魔術を巧に操つて、ユーリを援護する。エステルも一人に負けじとサーベルを振り上げた。

「いきます！ スターストローク！」

「これであらかた片付いたか」

エステルがサーベルを振り上げると、ユーリの蒼破刃とよく似た、だが少し違う地を這う白い衝撃波が生まれた。それは真っ直ぐに魔物に直撃する。

ユーリは剣を鞘に戻して周囲を確認した。もう気配は感じない。

その時、先を歩いていたエリシアが何か見つけたようであつ、と声を上げた。

「どうした？」

「出口よ」

エリシアが見上げる先には、地上へと続く一本の梯子が伸びていた。

視界を妬く光にヨーリは思わず目を閉じる。

梯子を上った先は閑静な住宅街。皮肉にもヨーリが突き止めたモルディオの屋敷前だつた。

ヨーリはエステルとしんがりのエリシアに手を貸して引き上げる。

「うわ、まぶしつ……」

「あ～あ、もう朝かよ。一晩無駄にしたな」

結局朝までに戻るつもりであつても、間に合わなかつたといふことか。そんな解釈の仕方は割と楽観的なのかもしれない。

エリシアは自分が酷く空腹であることに気付いた。昨日の夜、独房で出された夕食にも殆ど手を付けていないし、魔物やあのザギとか言う男との戦闘で体を動かしたせいもある。

そしてエステルはと言えば、忙しなく辺りを見回していた。別段、変わつたものがあるわけでも無いのだが、彼女の瞳には好奇の色が見える。

「そんなにキヨロキヨロしてどうしたの？」

「窓から見ると全然違つて見えます」

それは当然だろう。

しかしエリシアが気になるのはエステルの物言い。これではまるで城から出たことがないみたいではないか。

「そりや大袈裟だな。城の外に来るのが初めてみたいに聞こえるぞ」

「……そ、それは……」

「ま、お城に住むお嬢様ともなれば好き勝手に出歩けないか」

「ヨーリの声に我に返ったエステルは言い訳しようとして、だが何も思い付かず視線を宙に泳がせた。

確かにヨーリの言う通りだが、エステルが思わず呟いた一言はそういう意味ではなかつた気がする。ヨーリもそれを分かつていて、わざと助け船を出したのかもしれない。

「は、はい、そうなんです」

嘘であることがバレバレである。

どもつているし、何より視線が宙に浮いたままだ。城から一歩も出たことがないとは、あながち間違つていないかもしれない。

「ま、とうあえず脱出成功つてことで」

「お疲れ様っ」

エリシアはヨーリが出した手に、自分の右手を勢い良く合わせる。ぱちんと小気味良い音が響いた。所謂ハイタッチ、である。

一人を見たエステルはまたしてもきょとんとした表情で尋ねた。

「それ、何ですか？」

予想もしなかつたエステルのあまりのお嬢様ぶりに、エリシアとヨーリは苦笑いを隠しきれなかつた。

フレンの行き先

「ハイタッチだけど？」

「ハイタッチですか？」

「で、エステルはこれからどうすんの？」

首を傾げる彼女は、まるでハイタッチという言葉の意味を理解しないようである。エステルだけというより他の貴族も知らないのだろうか。

これからどうするのか、それはエリシアも気になっていた所だ。既にフレンは部屋にいなかつたし、部屋が片付いていたことから、暫く城に戻るつもりはないのだろう。そうなれば行き先は当然、結界の外である。

エリシアが窺うようにエステルを見ると、彼女は躊躇うこと無く口を開いた。

「フレンを追います」

部屋を抜け出して（しかもサーべルを持つてまで）行動を起こしたり、思い切りの良さが彼女のいいところなのかもしない。

エリシアはエステルに付き合つのもいかと考え始めていた。別段目的がある旅でもないし、純粹に彼女が気に入つたからだ。それに、彼女一人でフレンを追うのは流石に無茶すぎる。

「フレンって人の行き先、知つてるの？」

「先日、騎士の巡礼に出ると話していましたから……」

「あ～、あれか。帝国の街を回つて、善行を積んでこいつてやつ」

エリシアはさつぱりだが、コーリは知つてゐるらしい。コーリも訓練生時代に聞かされたことがある。結局その前に辞めたが、規則やら何やらに厳しい友人は律儀にも街を回るらしい。

最初に目指す街は決まつていたと思うが、何分眞面目に聞いていなかつたことと、数年も前の話しだ。コーリは一々覚えていない。

「はい。だから花の街ハルルを目指します。騎士の巡礼では最初にハルルに行くのが慣わしですから」

「となると、結界の外か」

コーリは青く澄んだ空を見上げる。見えるのは人々の暮らしを守る輝く光輪。結界魔導器の恩恵を受けぬ外の世界には狂暴な魔物が徘徊している。

結界の中は安全だがそれ故に自由もなく、全てが管理されている。それは正に箱庭の世界と言えるだらう。

一步街から出れば結界魔導器の守護はなく、自分の身は自分で守るしかない。夜も安心して眠れず、気が休まる事もない。正に弱肉強食の世界。魔物に襲われ、命を落とす者も少なくないのだ。箱庭の世界を出るにはそれ相応のリスクがつきまとつ。

「二人は結界の外を旅したことあります？」

「私はまあ、ザーフィアスの人間じゃないし。つい一日ほど前に來たところ」

エリシアも昨日の朝はまさか、一日の内に騎士に捕まり、揚げ句

の果てには脱獄するなどと夢にも思わなかつた。次にレイヴンを見つけたら、絶対に問い合わせてやると心に誓つたエリシアである。

もともと野暮用で訪れただけであり、用が済めばすぐにでも故郷の街、ダングレストに帰るところだつた。

「少しの間だけならな。興味はあるけど、下町を留守にするわけにはいかないしね。オレも下町に戻るから、それまで一緒にな」

「ありがとうございます」

頭を搔くユーリに、律儀にお辞儀をするエステル。エリシアを含めた三人は連れだつて歩き出す。少し不謹慎だと思つがエステルの心は、雲一つない青空のように晴れやかだつた。

一行は貴族街を抜け、一番下層にある下町まで下りて來た。途中でルブランとアデール、ボッコスが性慾りもなく追い掛け來たが、あの二人はユーリが投げたつぶてを受けて仲良く氣絶したといふ訳である。

そんな三人をハンクスが出迎えた。あれほど水が吹き出でていた水道魔導器も今は出る水が無くなつたのか、すっかり地面も渴いていいる。

「おお、ユーリ！ ビニに行つとつたんじゃ！」

「ちよいとお城に招待受けて優雅なひと時を満喫してた」

とユーリは冗談めかして言うが、少なくともそんな訳ではないことはハンクスにも分かる。

今までユーリ以外を注視していなかつた老人は、視線をエリシアとエステルに向けた。

「何を呑氣な……おお、あんたは昨日手伝ってくれたお嬢さんじやな。コーリ、お前さんの知り合いか？ そっちの娘さんは見たことないがの」

「ま、そんなとこだ」

話を向けられたエステルはハンクスの前まで歩いて来るとペコリとお辞儀した。エステルの身なりもあり、これではされた方が畏まつてしまつ。

案の定、ハンクスはしばらくの間、目を瞬かせていた。

「ほんにひま、エステリーゼと申します」

「いや、じつは『じー寧』に……それよりも騎士団じやよ。下町の惨状には田もくれずお前さんと誰かを探しておつたぞ。やはり騎士団と揉めたんじやな」

エリシアは申し訳なさ過ぎて愛想笑いを浮かべるしかない。揉めたというか、結局は脱獄するはめになつたとは口が裂けてもいえない。

元はと言えばエスティルが原因だが、今それを持ち出したつてどうにかなる話しどもない。

脱獄もそうだが、大方エステルが自分たちと共にいることを、気絶させた騎士たちが話したであろうせいもある。

ハンクスが言つたコーリと誰かの誰かは間違いなく自分だらう。エリシアは思わず頭を抱えくなつた。これは何が何でも捕まる訳には行かない。ここまで来ればもう半ばやけくそ、もしくは意地だ。

「ま、そんなどじだ。ラピードは戻ってるか?」

「ああ、何か袋をくわえておつたようじやが……」

コーリは辺りを見回して、何かを探しているらしい。二人の会話から推測するにラピードとは名前らしいが、くわえていた、ということは人間ではないのだろうか。

エリシアは黙つてコーリとハンクスの会話に耳を傾けた。

「後で取りに行つて振つてみな。いい音すんぜ。モルディオも楽しんでた。ま、逃げちまつたけどな。家も空き家だつたし、貴族つて肩書きも怪しいな」

「……とこつ事はやはりわしらは騙されて……」

妻の形見の品まで売り払つたハンクスには言ひづらいが、それが事実だ。

水道魔導器も魔核がなければ動かない。ある程度の貯水はしているだろうが、それも長くは続かない。ならばコーリがすべきことは一つ。

「騎士団は何もしてくれねえし、やつぱ泥棒本人から魔核取り戻すしかねえな。心配すんなよ。ちょっとくら行つて直ぐに戻つてくつから

頼みのフレンもいないので騎士団が下町のために動いてくれるはずがない。新しい魔核を手に入れる余裕がなければ、モルディオ本人から取り戻すしかない。アスピオに行けば何らかの手掛かりは見つかるはずだ。

エリシアとエステルは驚き、彼らの会話を聞いているしかない。

「はん。誰が心配なんぞするか。ちよつといい機会じや。しづらへ
帰つてこんでいい」

コーリとハンクスの会話を聞いてエリシアはコーリが下町の人々に愛されているのだと実感した。それはエステルも同じようで、微笑を浮かべて一人のやり取りを見守つていた。

と、その時である。

「コーリ・ローウェル！ お縄だ、神妙にお縄につけ～！」

ショヴァーン隊、小隊長ルブランの声が聞こえたのは。アデコールとボッコスの声が聞こえないのは、気絶した一人を置いて来たからに違いない。

コーリが盛大にため息をつき、エリシアはどこかげつそりした様子でルブランの姿を見た。皮肉を言つ辺り、まだ元気なかもしないが。

「仕事熱心ね。私にとつては迷惑なだけだけど……正に騎士の鑑よ
ね」

「それ後の二人にも聞かせてやれよ。ま、ひとつ事情もあるから、
しばらく留守にするわ」

本当に適当に諦めてくれればいいも楽だとこつに。馬鹿にされたままでは気が済まないと呟つのか。

コーリとエリシア自身は丁重にお断りしたい限りだ。

「やれやれ、いつもいつも騒がしそやつだな。これで金の件に関し
ては、貸し借りなしじゃぞ」

「年甲斐もなくはしゃいで、ぱっくりいくなよ？」

「はんっ、お前さんこそ、野垂れ死ぬんじゃないぞ」

二人のやり取りを聞いていると、思わず笑ってしまう。

コーリはハンクスに片手を上げて答えると、外に向けて走り出した。

その間にも下町の人々が屈伸をしたり、腕を伸ばしたりと準備体操を始める。彼らの瞳は輝いており、まるで玩具を見つけた子供のようだ。

「コーリ、早いってば！ それじゃあハンクスさん、私たちも行きますね」

「あ、待って下さい！」

エリシアはハンクスの方に向き直ると小さくお辞儀する。エスターも同じように、彼女は深々と頭を下げた。

一人の少女に頭を下され恐縮しつつも、これから彼女らの苦労を考え、苦笑した。

「あやつの面倒を見るのは苦労も多いじゃろうが、お嬢さんらも気をつけてな」

「コーリならしつかりしてますから大丈夫ですよ。はい、ありがとうございます」

エリシアにしてみれば、どちらかと言つとエステルの方が心配なのが。そんな所で、追い掛けて来たルブランの姿がはつきりと見

え、礼を言つと慌ててユーリを追う。

それ待つていましたと言わんばかりに、下町の人々がまるで砂糖に群がる蟻の如く、ルブランに集まつて行く。

「これじゃあ実力行使出来ない分、下手に手に負えないわね」

「ばかも〜ん！ 通れんではないか！ 公務の妨害をするでない！」

声を高々に叫んでいる、が下町の人々には通じない。

老人がルブランを見て拝み倒したり、子供がわーい、騎士様だとはしゃいでいる辺り彼等もノリノリらしい。ようやく人垣を抜けたルブランはまだ近寄つて来る人々を押し退け走つて来る。

「げつ」

と思つた刹那、どこからか現れた犬が華麗に足払いを掛ける。足元に注意していなかつた中年騎士は派手に転んだ。

足払いを掛けた当人はユーリの前で誇らしげに胸を反らせた。ルブラン自身は何が起こつたか分かっていないようで尻餅を付いたまま、ぽかんと間抜けな表情を浮かべている。

「な、なに」とだー

「ラピード……狙つてたる。おいしいやつだな」

彼がユーリの言つていたラピードで、相棒なのだろう。

狙つてたる、と笑うユーリに応えるようにラピードも一鳴きした。

「どこまで一緒に分かんねえけどま、よろしくな、エリイ、エステル」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願ひします、ユーリ、エリイ！」

「こちらこそ。取りあえずの目的地は北のディードン署かな

「しばらく留守にするぜ」

「行つてきます」

これまで一人旅だつたからエリシアは、エステルとはまた違う意味でこれから旅に心躍らせていた。

ユーリとエステルは今一度名残惜しむように、ひと時の別れを告げるよう、ザーフィアスの町並みを見つめた。エリシアが初めてダングレストを旅立つた時も一人のような心境だつたのかもしれない。

「じゃ、行きましょ」

三人の前に行儀よく座つていた犬ことラピードが元気よくわん、と吠えた。

一人はまだ見ぬ世界に心躍らせながら、また一人は直ぐに戻る使い感覚で、一人は一時の三人旅を楽しむようにザーフィアスを旅立つた。

その先に待ち受けの運命を今の三人はまだ知らない。

帝都を出た三人の前には、雲一つない鮮やかな青空が広がり、なだらかな平原は緩やかな曲線を描いている。

城の中では決して見ることの出来ない景色にエステルは緑の瞳を輝かせた。

城での日々は少しの自由もない窮屈な生活だった。エステルの立場を考えればそれは仕方のないことだろう。それでも読書の時間だけは別だった。本を読んでいる僅かな時だけ『』という立場から解放されたから。

「凄く空が青いですね。私、外の世界に憧れていたんです。いつも本の中でしか旅が出来なかつたから」

「旅は今まで見えて無かつたものが見えてくるから私は好き。……貴族も色々と大変なのね」

エリシアは騎士と同じく、貴族には良い印象を抱いていなかつたが、彼等には彼等の苦労があるのだろう。いつもしてエステルと出会わなければそんな事、思いもしなかつた。

久しぶりの“外”にエリシアは猫のよつて田を細め、うんと背伸びをした。

「えつ、そ、そんなことないですよ?」

「何で最後疑問形なんだよ」

ユーリから鋭いツツ「ミ」が入る。このエステルといつ少女は会話していく微妙に変なところがある。それは今のような疑問形な話し

方であつたり、とんちんかんな言動であつたりとだ。

とその時、今まで大人しくしていたラピードが牙を剥き、唸り声を上げた。

「じゃ、ちやつちやつと^ハ付けちやいましょ」

エリシアは銃を抜き、コーリが鞘から剣を抜く。エステルはやや緊張しながらサーべルを構えた。ラピードも背負っていた鞘から小振りの太刀を抜き、臨戦体勢に入る。

現れたのは栗鼠を大きくしたような魔物。目がくりくりしていて見た目は可愛いが、魔物は魔物。侮ってはならない。結界魔導器の加護が及ばぬ外の世界にはこいついた魔物が徘徊しているのだ。

「よつと」

コーリは器用に剣をジャグリングさせて切り付ける。左腕に付けていた武醒魔導器が淡く輝いた。

「蒼破刃！」

剣から放たれた青い衝撃波が魔物の体を穿つ。ラピードもコーリに負けてはいない。素早い動きで敵を翻弄し、鋭い体当たりをお見舞いした。

「ノクターナルライト！」

「これで終わりです！ スターストローカ！」

エリシアの銃から生み出された白い光と、エステルが振り上げた

サーべルから放たれた衝撃波が一つとなり、残った魔物を薙ぎ払つた。

エリシアがエステルに向けて手を上げると、彼女は人差し指でちよんとエリシアの手の平に触つた。

「あははは……」

「前途多難、だな」

またもやエリシアとコーリが呆れを通り越して苦笑したのは言つまでもない。

ラピードですらこりや駄目だと前足で頭を搔く。当のエステルは何か間違いましたかと不思議そうに一人を見つめていた。

「　舞い踊る風靈、刹那にて軌跡を描け。ウインド・カッター」

掲げた右手から生み出された一陣の風が立ち塞がる魔物を切り裂いた。

瞬間、エリシアは身を翻し、銃の引き金を引く。白銀の銃口から打ち出された光が、今正に牙剥かんとしていた魔物の体を焼いた。

「あつーー！ つやーー！」

戦闘ももう何度目になるだろ？ 数えるのも面倒になつて来た。エリシアは半ばやけくそ気味で銃を乱射しながら悪態を付く。

「そりばやくなつて。これ終わつたら休憩にしようぜ。三散華！」

振り上げたユーリの拳が魔物の顔面を強打する。襲い掛かってくる魔物を退けた三人と一匹は見渡しが利く所に座り、よりやく一息ついた。

ぐう、とエステルのお腹が控えに自己主張する。

ザーフィアスを出てから戦闘の連続ではそれも仕方ない。それが自分のお腹の音だと気付いたエステルは俯き、顔を真つ赤にして謝つた。

「す、すみません」

「はい、ユーリ。私もお腹空いた」

エリシアも一人で世界を旅する以上、グミや携帯食料、保存が利く缶詰めに水は持参している。

だが全て一人分だし、何より携帯食料は美味しいくない。

「あのなあ。オレに言つたつて飯は出て来ないつての……おつ」

荷物を整理していたユーリが声を上げた。

帝都を出る時に皆から渡されたものだが、地図にグミなど旅に必要な物が一式揃つてある。用意周到さにユーリは思わず舌を巻いた。それに加え、食べ物らしき物まで入つてある。試しに容器を開けて見ると綺麗にサンドイッチが並べられていた。卵やハムにキュウリが挟んだものなど、四人分はあるだろう。

「美味しそう」

「わんつー！」

「じゃ、頂くか」

元気よく声を上げる辺り、ラピードもお腹が空いていたのかもしない。幸い玉葱は入っていないようで、これなら彼も食べられるだろう。

腹が減つては戦は出来ぬとよく言つたものだ。慣れない旅では体力も気力も消耗する。

貴族のエステルも居ることであるし、適当に休憩しつつ進むのが一番だらう。

三人と一匹は、作つてくれたであろう人にお礼を言つてサンドイッチを頂いたのだった。

三人がディードン砦に着いたのは、太陽が真上に近くなる昏前のことがだった。石造りの重厚な砦は、外敵を阻むかのように鎮座している。

この砦は行商人たちが行き交う交易地もあり、魔物の侵入を阻むための拠点もある。だがそれにしては帝国騎士たちの姿が多いのは、気のせいではない。

「ユーリとエリイを追つて来た騎士でしょうか？」

「少なくとも先回りしてたつてことはないと思つ。帝都から来る旅人を見る訳でもなさそうだし」

騎士たちがエリシアたちの方を見る様子はない。

しかし比較的のどかな砦に似合わないこの物々しい雰囲気は一体何なのだろう。騎士は皆、武器を手に今にも戦いに赴けるのではないかという格好である。

「ま、あんまり立たないようにな」

「はい。わたしも早くフレンに追いつきたいですから」

言いつつ物珍しさからかエステルの視線は騎士団の詰め所やら、砦の見張り台やらに向かっている。砦の周りを見回してから分かったのだが、騎士だけでなく、行商人や旅人の姿も多い。

「エステル、ちょっと情報収集していくわ。行くぞ、エリイ」

「え、ちゅひ、ユーリー！」

行商人の集団に夢中になつているエステルを尻目にユーリはラピードだけを残し、ひょいと猫のようにエリシアの首根っこを掴んで引きずつて行つた。

一人残されたエステルがラピードと顔を見合わせぽつりと言ふ。「ユーリ？ エリイ？ ラピード、一人はどこに行つたんでしようか？」

「何かあつたのかな？ 私が来た時はこんな事なかつたんだけど…

…

「いつちょ聞いてみるか？」

エリシアが簪を抜けた時は騎士の数も多くなかったし、物々しい雰囲気だつたということもない。北門前で佇む旅人たちの顔はどこか不安そうだった。行商人の一人に尋ねてみれば、思いも寄らぬ答えが返つて来る。

「何でも簪の向こうに魔物が出たらしい。お陰で足止めを食つてゐるんだ」

非常にヨリしょくない状況である。エリシアたちとて、ここに足止めを食う訳には行かない。

追つ手は勿論、フレンがハルルに向かつたのは数日前。下手をすれば居ないハルルに可能性もある。

刹那、見張り台に設置されている鐘がけたたましい音を響かせた。

「早く入りなさい！ 門が閉まるわ！」

頭上にある見張り台から女性の声が響く。

遠くに見えるのは、巻き上げられる砂塵。門を目指して必死に旅人や行商人たちが走り込む。

「……よし、待避は完了した！ 門を閉めろお！」

同じく見張り台に立つ騎士が叫ぶが、明らかに外に残された人々がいる。今門を閉めれば逃げ遅れた人々は、確実に間に合わない。それに気付き、隣の見張り台から鋭い声が飛んだ。

「閉門を待ちなさい！ まだ残された人が……」

騒ぎを聞き付けてか、門の前には多くの人々が集まっていた。エスティルとラピードの姿もある。

魔物大群により砂埃が舞い上がる光景を呆然と見つめ、エスティルはぽつりと呟いた。

「あれ、全部、魔物なの……」

エリシアもまたエスティルとは違う意味で驚いていた。本来ならこれほどまでに魔物が出没する季節ではない。

事実、エリシアがここを通り抜けた数日前は、別段魔物の数が多いという訳でもなかつた。

一方のユーリはとくに驚いてはいたようだが、それよりも

彼は自嘲めいた笑みを浮かべていた。

「帝都を出て早々にとんでもないもんにあつたな。オレ、なんか憑いてんのか？」

何だか本当にそんな気がしてきた。独房にぶち込まれかと思えば、エリシアと共に脱出することになり、何の因果か親友を知る貴族の少女を助けることになるわ田まぐるしい一田である。

逃げ遅れた人を残し、無情にも門が閉められようとしていた。ユーリが地面を蹴り、ラピードと共に走り出す。

ラピードの鞭のような尾が門を閉めようとしていた騎士の体を打つた。

「な、なんだ、おまえ！ うわっ、うわっ！ 止めろー！」

「エリイとエステルはそこで待……って、おこつー！」

思わず乱入者に騎士は腰が抜け、思わず座り込む。ラピードのお陰で門は半分が閉まつた辺りで止まった。

ユーリが一人を振り返つたその時だ。エリシアとエステルがユーリを追い越した。

そもそもユーリは自分がそう言われて、はいそうですかと待つていると思っているのだろうか。魔物の大群を前にしても不思議と恐怖は感じない。

迷いはなかつた。いや、迷うといつ選択肢自体、エリシアの中にはじめから存在しなかつた。

「ユーリは女の子を、エステルはあの男の人をお願い！」

「はいはい……」

後ろからユーリの呆れたような声が返ってくる。それでもユーリだけを危険な目に合わせる訳にはいかない。自分だけ安全な所にいるなんて真っ平御免だ。

エリシアとエステルは急ぎ、男性と少女の母親らしき女性に近寄つた。女性は怪我はないものの、腰が抜けたようで地面に座り込んでいる。

「立てますか？」

「「」「めんなさい。腰が抜けた……」

エリシアは女性に肩を貸して立ち上がり、早足で歩き出した。エステルは足を押さえてうずくまる前に膝をつき、怪我の状態を見る。出血はしているようだが、そこまで深刻な傷ではないことに一先ず息をつく。

「た、助けて……立てなくて……ひつ！ 魔物が、魔物が！」

「大丈夫ですよ」

取り乱す男性を落ち着かせるように声を掛け、術式を展開する。両手を前で組んだエステルの足元に現れる魔法陣。治癒魔術特有の金色の紋様が一際強く輝いたかと思うと傷は跡形もなく綺麗に房

がっていた。

ユーリもまた泣きじゃくる女の子を抱えて走る。

「……あ、た、立てる」

「早く避難してください」

エステルも走り出した男性に続いて、門の中に走り込んだ。見れば猪に似た魔物がシルエットが分かるくらい直ぐそこまで迫っている。

とその時、ユーリが助け出した少女が門の外を指差して叫んだ。

「お人形、ママのお人形！」

少女が指を差した先には確かに、人形が落ちている。本来なら取りに行くなんて自殺行為だ。それは分かっている。

エリシアは反射的にエステルが飛び出そうとするのを止め、地面を蹴つて走り出そうとする。

だが誰かに強引に手を掴まれそれも叶わない。

「お願い、行かせて！」

「ここで待つてろ！」

ユーリは掴んでいたエリシアの手を離し、またも外へと疾走する。背後から聞こえる声を無視して。ユーリが行かなければエリシアが行つていただろう。

もう一刻の猶予もない。急ぎ、ぽつんと落ちている人形を拾い上げた。

「つたく、めぢやくぢや田立つてんじやねえか！」

しかしほやいでいる暇はない。既に門は閉まり掛けている。

背には魔物の大群、前は閉門間近の大門。ヨーリが助かる術はただ一つ。

「「ヨーリ！」」

二人の声を受け、人一人がどうにか入れるかという隙間にヨーリは滑り込んだ。と同時に大きな地響きを立てて門が閉じられた。砦の中にまで魔物が門に体当たりする音が響いて来る。頑丈に作られているため破壊される恐れはないが、それでも本能的な恐怖を呼び起こされる気がしてならない。

安心して一息ついた三人の元に助けた男性と母子が歩み寄った。

「娘共々助けて頂いて、なんとお礼を言えればいいか」

「でも本当に無事で良かったです」

母親は娘と手を繋いだまま頭を下げる。エスティルも慌てて同じようく頭を下げた。

エリシアはしゃがみ込むと、優しい手つきで人形を大事そうに抱えていた女の子の頭を撫でる。

女の子は気持ち良さそうに目を閉じると次の瞬間、花が咲くような笑みをエリシアに向けた。つられてエリシアも女の子に笑い掛ける。

笑顔が見たいから。ただそれだけでお節介だと思いつつも困つている人を助けてしまうのだと思う。

「怪我まで治してもらつて、本当に助かりました」

男性もまた頭を下げる。魔物との戦闘で分かつたことだが、エリシアと同じくエステルも治癒術を扱うことが出来るらしい。

エステルはただ守られているだけのお嬢様ではない。剣の腕も騎士に引けは取らないし、治癒術も扱える。実力は言つまでもなく十分だった。

三人が去った後、気が抜けたのか、エステルはぺたりと地面に座り込んだ。今になつて恐怖を感じたのか握つた手は小刻みに震えている。

「……みんなが無事で本当によかつた。あ、あれ……」

「安心したとたんそれかよ」

ユーリとエリシアもエステルの隣に腰を下ろした。
無理もない。彼女は箱入り娘だった訳でこんな経験、初めてだろう。それにしては思い切りが良すぎる所もあるが、無謀といふことでもない。

「エステルは何もかも初めてだから仕方ないよ。でもちゃんと自分も大事にしないと。見てて危なつかしいから」

「それはエリィもだろ。オレから見たらエリィもエステルも変わんねえよ」

エステルを見ていると冷や冷やするというか何というか。後先考えない辺りは昔のエリシアとそつくりであるとは口が裂けても言えない。

ユーリからすればエリシアも見てて十分危なつかしい。この少女は本当に自覚していないのか。

人形を取りに飛び出しそうになつたり、危険を省みずザギとかい
う男の間に割つて入つてくるわで下手すればエステルよりも危険な
気がする。

「エステルよりはマシ……だと思つナビ?」

「でも結界の外つて、狂暴な魔物が沢山いて、こんなに危険だつた
んですね。ここに結界魔導器を設置出来ないんでしょうか?」

「マシで一旦考えた辺りエリシアにも自覚があるのだろう。ならば
尚更自覚のないエステルよりも始末が悪い。コーリも人に言えたこ
とではないが、彼女も相当なお節介らしい。

そこへ一仕事終えたラピードが帰つて来てちょこんとコーリの横
に行儀よく座つた。

魔導器、取り分け結界魔導器は数ある魔導器の中でも特に値がは
るものである。人々が生活している街でもない限り、帝国は一皆に
わざわざ取り付けようとはしないだろう。

「そりや、無理だろ。結界は貴重品だ」

「例えあつたとしても帝国は、設置はしてくれないでしょ? い
つだつて一部の人間だけが恩恵にあやかり、弱き者は虐げられる。
それが今の世界の“仕組み”だから」

その仕組みを作つたのはこの世界唯一の国、紛れもない帝国。腐
敗しきつた騎士団や評議会などあてにならない。

帝国には自由も平等もない。だから父は帝国を捨て、騎士を辞め、
ギルドを作つたのだと。

エリシアだつて帝国の全てを否定している訳ではない。ただ彼等
の中にはどうしようもなく救いようのない人間がいるのも事実だ。

語るエリシアはコーリが見てもどこか冷めたというか達観したような顔をしていた。

「魔導器を生み出した古代グライオス文明の技術が甦ればいいのに……」

エステルがぽつりと呟く。

古代グライオス文明。千以上も前、エアルの存在を発見したクリティア族は魔導器を発明した。現在使われている魔導器の殆どがこの時代のものであると言われている。

それに加え、現在の技術と知識では筐体は別だが、魔核の生産は困難であり、発掘に頼るしかない現状だ。刹那、立ち上がった三人の前に槍を手にした騎士が近付いて来た。

「そこの三人、少し話を聞かせてもらいたい」

何やら騒がしい。どうやら騎士と男一人が言い争っているらしく、その内顔に傷のあるフードを被った男が声を荒げた。

二人とも身のこなしだけを見ても手だれであると分かる。

「だから、何故ここを通さんなのだ！ 魔物など俺様がこの拳でノックアウトしてやるものを！」

見覚えのある一人を見つけたエリシアは思わずコーリの背中に隠された。

あまり出会いたくない相手である。個人的にもそうだし、立場的もだ。この際、ユーリやエステルに不審に思われても構わない。それよりも今は隠れる方が重要である。

「エリイ？」

「ちょっとこのまままでいさせて」

気付かはしないだろうが、エリシアはユーリの肩に手を置いて顔を半分だけ出して様子を伺う。

端から見れば奇妙な光景だが、エリシアにしてみれば他人の目よりも、あの一人に見付かることが色々と面倒なのだ。

「簡単に倒せる魔物じゃない！ 何度言えば分かるんだ！」

「貴様は我々の実力を侮るというのだな？」

騎士がどうにか説得しようとするが、フードの男の隣に佇んでいた薫色の髪の男が口を開いた。地の底まで響くかと思つ声は、騎士を気圧すには十分だろう。

男は言つなり、背中の剣というには大き過ぎるそれを抜き、正面で掲げる。そして騎士の制止を振り切つて渾身の力で地面に叩きつけた。

衝撃で砂埃が舞い、辺りを砂色に染める。余程力で叩き付けられたのだろう。地面は剣の形に陥没していた。

「邪魔するな！ 先の仕事で騎士に出し抜かれた鬱憤をここで晴らす！」

「おい！」

一触即発の状態に三人に声を掛けた騎士も、他の作業をしていた者もそれを中断して駆け寄つた。騎士らは果敢にも槍や剣を突き付けているが、仮にもギルドの首領である男にしてみれば鳥合の衆同然だろう。

「これだからギルドの連中は！」

一人の騎士が呆れたように言つたが、そこは聞き捨てならない。別にギルドに所属している者全員が彼等のように血の気が多い訳ではないのだ。本当に思わずばやいてしまう。

「ギルドって言うより魔狩りの剣なんだけど……」

「何か言つたか？ にしてもあの様子じゃ、門を抜けるのは無理だな。騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

心の中で思つていたつもりだが、口に出してしまつたらしい。ごまかすためにも、とりあえず愛想笑いをしておくことにした。エリシアはユーリの背に隠れたまま、その場を後にする。一人の姿が見えない所まで来るとほつと胸を撫で下ろした。

カウフマンの提案

「ねえ、あなた。私の下で働かない？ 報酬は弾むわよ

情報を求めて廊内を歩き回っていた一行に（といつかコーリに）話掛けたのは、護衛らしき人物を引き連れた赤毛に眼鏡の女性。だが当のコーリは女性を軽く一瞥しただけで問いかねには答えず視線を逸らす。エリシアはと言えば、またしても内心焦っていた。

彼女はギルド、幸福の市場の首領カウフマンである。魔狩りの剣を率いるクリントと違い、直接の面識はないものの、獅子の咆哮の関係者だと知られれば色々と話がややこしくなる。

そんなコーリの態度に後ろに控えていた護衛が眉を寄せた。

「社長に対して失礼だぞ。返事はどうした？」

「名乗りもせずに金で吊るのは失礼って言わないんだな。いや、勉強になつたわ」

「名乗る時はまず自分が礼儀よね。といつも私たちを無視してる時点で失礼だと思わない？」

おどけて言うコーリにエリシアもエスティルとラーペードに目を向けて言つてやつた。

「旦はまた隠れようとも思つたが、こそぞしていの方が怪しいし、もしばれた時はその時だ。どうせなら堂々としてこよ。

「お前らー。」

こきり立つ寸前だった護衛を女性 カウフマンは差し出した片

手で制した。

怒っている訳ではない。静かに笑っているだけだ。

「予想通り面白い子ね。それと貴女も。確かに先に名乗つて置くべきだったわね。私は、ギルド『幸福の市場』のカウフマンよ。商売から流通までを仕切らせてもらつてるわ」

一口に商売から流通と言つても侮るなれ、様々な情報に通じてなければならない。

それは商品の相場であつたり貴重な情報であつたりと色々だが、下手をすれば魔狩りの剣などよりずっと敵に回せば厄介だ。

「ふうん、ギルドね……」

コーリが生返事をするが、ザーフィアスに住んでいる者がギルドの人間にあまり良い印象を持つていなことが分かる。それはある意味エリシアが騎士を良く思つていなことと同じだ。

その時、一行の耳に魔物が門に体当たりするけたたましい音と地響きが届いた。

カウフマンは苦笑しつつ肩を竦めて見せる。

「私、今、困つてゐるよ。この地響きの元凶のせいだ

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか?」

その間にも地響きは未だ鳴り止むことなく、大地を揺らしている。もしそれが魔物の仕業だといふのなら、正に人の手に負えるものではないだろう。

「ええ、平原の主のね」

「どこか別の道から、平原を越えられませんか？ 先を急いでるんです」

今まで黙っていたエステルが遂に痺れをきらせて口を挟んだ。
彼女にしてみれば一刻も早くフレンの後を追いたいということだ
ろうが、それが出来ればカウフマンとて既に皆にはいないだろ？

「さあ？ 平原の主が去るのを待つしかないんじゃない？」

エステルだけは気付いていないが、そういつ彼女には何か含みがある。フレンがハルルにいる場合、ここで足止めを食うのはあまりよろしくない。

だが焦つてもどうにかなる事態ではないことも確かだ。そこでエリシアは諭すようにエステルに言つ。

「エステル、焦つても仕方ない。まずは落ち着いて」

「待つてなんていられません。わたし、他の人にも聞いてきます！」

しかしエステルは言うないなや走り去つて行つた。

おすわりの体勢だつたラピードがユーリに田配せした後、長い尻尾をたなびかせてエステルを追つ。

エリシアも彼女のことは気になつたが、ユーリを放つて行くこと出来ず、結局留まることにした。ラピードもついているなら心配ないだろ？と踏んだからである。

「流通まで取り仕切つてゐるのに別の道、ほんとに知らないの？」

ユーリの問いは暗に何か知つてゐるだろ？との確認でもある。

H

リシアもまたカウフマンは絶対に何かを知っていると確信していた。世界の流通を一手に引き受ける“幸福の市場”的情報網は伊達ではない。でなければ世界の流通を取り仕切ることなど出来はしないのだ。

「主さえ去れば、あなたを雇つて強行突破つて作戦があるけど、協力する気は……なさそうね」

「おい、エリイ、何で顔してんだよ」

「何でもない。でも護衛なら他のギルドに頼めばいいんじゃない？ 蒼き獣とか。後は……暁の雲に獅子の咆哮とか」

他のギルドの護衛を引き受けるギルドは、エリシアの父が率いる獅子の咆哮を始めとして、蒼き獣や暁の雲などがある。

特に獅子の咆哮は護衛を専門としており、五大ギルドではないが、それに匹敵する知名度を誇るのだ。

「そーそ。そんなに護衛が欲しいなら、騎士にでも頼んでくれ」

「冗談は止めてよね。私は帝国の市民権を捨てたギルドの人間よ？ 自分で生きるつて決めて帝国から飛び出したのに今さら助けてくれはないでしょ。当然、騎士団だつてギルドの護衛なんてしないわ。他のギルドに頼みたくても通れないんだから意味ないわ」

そもそもギルドとは帝国のやり方に反発する自治組織である。騎士団や評議会の腐敗、人々を省みない政治に不満を持つ者は多く、そんな彼等は帝国の市民権を捨て、帝国の関与を受けないダングリストを始めとした街を作り上げた。

彼等の街は帝国の中にありながらも治外法権であり、帝国の法は

一切通じない。彼等は帝国からの自由を得た代わりに『えられるべき全てを捨てたのだ。

「へえ、自分で決めたことにはちゃんと筋を通すんだな

『言ひコーリの顔は微かに驚きの入り混じつた笑みを見せた。ギルドの連中もそれほど悪い者たちではないらしい。少なくともちゃんと筋を通す人物はコーリは嫌いではない。

「そのくらいの根性がなきゃギルドなんてやってらんないわ

確かにそうかもしれない。ギルドの首領をやつしていくとなれば中途半端では無理だ。相応の覚悟と責任、根性がいる。父も笑いながらよく言つていたから。エリシアはそこで始めて力ウフマンに好印象を持った。

「なら、その根性で平原の主も何とかしてくれ

「『いから西、クオイの森に行きなさい。その森を抜ければ平原に向ひて出られるわ

クオイの森。ザーフィアスとハルルを結ぶ深い森。確かにそこなら縫を通ることなく、北に抜けられる。

エリシアが旅の途中、小耳に挟んだ話では靈が出るとか、呪われているやの普通なら係わり合いになりたくない噂ばかり。

正直な所、エリシアは魔物よりも幽霊の方がよっぽど怖い。出来れば通りたくないのだが、見上げたコーリの顔は不敵な笑みに彩られていた。

「けど、あんたちはそこを通らない。つてことは、何かお楽しみが

あるわけだ

暗にそういう訳である。でなければ何の見返りもなしに情報をくれたりはしないだろ？。コーリにも大体の察しあつつく。

コーリにしてみれば何があらうとも構わないのだが、隣のエリシアは諦めたような哀愁漂う顔をしている。

「察しのいい子は好きよ。先行投資を無駄にしない子はもつと好きだけど」

「礼は言つとくよ。ありがとな、お姉さん。仕事の話はまた縁があれば」

手を振つてコーリが歩き出したため、エリシアもまた礼を言つてコーリの隣に並ぶ。カウフマンが思い出したようにエリシアを呼び止めた。

嫌な予感がして顔だけを動かして振り向く。呼び止めた本人は満面の笑みでこいつ言った。

「お父様によろしくね」

流石は幸福の市場の首領だと言つべきだろ？。

一瞬言葉に詰まつたがそこはエリシアも仮にもギルドの首領の娘である。いつも父がしているように胸に手を当て優雅に礼をした。顔には余裕の笑みを浮かべて。

「ええ、伝えておきます」

「……血は争えないってことなのかな？」

「知り合いか？」

「ううん。直接の面識はないけどあつちが知つてたみたい。それは置いといてクオイの森つて呪いの森とも呼ばれているみたいで……出ぬいじことよ」

知り合いか、と問うコーリに首を振る。エリシア自身はカウフマンと話したことはない。向こうが一方的に知つていたのだろう。獅レオンハルト子の咆哮の娘、といつのは自分が思つよりずっと知られているのかもしれない。

コーリはまだ何か気になつていいよつだが、エリシアにしてみれば遠慮したい。愛想笑いを浮かべ、どうにか話を逸らす。魔物はまだいいが、『あれ』は勘弁願いたかった。そもそも得体の知れない、よく分からぬものが嫌なのだ。コーリはと言えばふーんと生返事を寄越すだけ。

「……もしかして怖いのか？」

「わ、私が？ そんな事ない。幽靈でも何でもないよ」としてやるから

精一杯笑おうとしているが、顔が引き攣つてこむ」とエリシア自身は気付いていないらしい。

それがユーリの笑いを誘い、少し意地悪だと思いつつ後ろを指差した。

「エリイ、後ろに何かいるぞ」

その一言で面白いように笑顔が引き攣つた。

途端、弾かれたように走り出したかと思つとエリシアはユーリの胸に飛び込んで来た。ちょっと遊び過ぎたかと後悔しつつ、子供にするように彼女の頭を撫でてやる。

「冗談だ。悪かった。まさかそんなに怖がるなんて」

思わずしがみついてしまったエリシアは恥ずかしくて顔を上げられない。

ぼこぼこにすると言い切ったのに情けないと想つ。ところがユーリにはバレバレだつたようだが、ユーリはまるで子供にするように頭を撫でてくれる。

子供扱いされているみたいで嫌なのだが、ユーリの手で撫でられると何故か安心した。

落ち着いた所で顔を上げると、彼にしては珍しく何の皮肉もない笑顔のユーリと目が合つ。笑われているのに不思議と腹は立たない。

「落ち着いたか？」

「うん、大丈夫」

頷いた直後、まだユーリに抱き着いたままに気付き、慌てて体と手を離す。恥ずかしく顔から火が出そうなくらいエリシアは動

揺していた。

この年になつてとも思つが怖いものは怖いのだ。分かり易く百面相をするエリシアをユーリは笑いを堪えつつ見つめている。

戦闘の時は頼もしいのに時に見せる一面は年頃の少女そのものだ。

「おし、エステル探しに行くか

「きつと疲れて座り込んでると思つた

だから今は気付かない振りでもしておけ。ユーリはエリシアが付いて行きやすいように、ゆっくりと歩き出した。

案の定エステルは地面上に座り込んで一息ついていた。隣にはお目付け役のラピードが行儀よく座っている。俯いた彼女は元気がないようになっていた。

聞かなくとも分かるが、皆を通らずにハルルに行く方法は見つからなかつたのだろう。

「エステル

「……ちょっと休憩です。魔物が去るまでこんな場所で待つたりしませんから

ユーリが声を掛けても、エステルは目を合わせようとしない。

焦るなと言われたことにまだ怒っているのだろうか。

「あつそ。じゃあ、一人で抜け道に行くことにするわ」

「エステル、行こう。……私はあんまり気乗りしないけど、ね」

ユーリは言うだけ言うと、背を向け入口へと歩き出す。エリシアはエステルを気にしつつ、後ろを振り向きながらユーリに続く。正に寝耳に水であったエステルは立ち上がって慌てて二人の後を追つた。

「え？ 分かったんですか？ 待って下さいー」

呪いの森

鬱蒼と生い茂る木々は踏みに入る者を拒むように佇んでいる。天を目指すように伸びた枝と葉のお陰で空は見えず、所々隙間から漏れる日の光が森を照らしていた。

時折聞こえる鳥とも獸ともつかない遠吠えは立ちに入る者に恐怖を与えるには十分だ。その例に漏れず、エリシアの顔もまた引き攣っている。

だがエステルは全く彼女のそんな変化には気付いていない。

「……この場所にある森って、まさか、クオイの森……？」

辺りを見回しながらエステルは呟く。城にあつた本で読んだ覚えがある。

何分それも古いもので真偽さえ怪しいものだが。

「へえ、エステルよく知ってるね」

「クオイに踏み入る者、その身に呪い、ふりかかる、と本で読んだことが……」

城育ちのお嬢様と云ふことで世間知らずなのだろうが、エステルは意外に博識である。

物騒な噂のお陰で、クオイの森には近隣の人間も滅多に近寄らないといふ。

森の奥へと続く道も街道のように舗装されている訳でもなく、正に獸道というのに相応しい。

「なるほど、それがお楽しみってわけか

言いつつ、ユーリの足は既に森の中に向いている。

エリシアも精一杯の強がりで彼の後に続くが、右手と右足が同時に出ていることに本人は気付いていないのだろう。一方のエステルは何やら躊躇つているようで、微妙な表情をしていた。

「行かないのか？ ま、オレはいいけど、フレンはどうすんなの？」

「……分かりました。行きましょう…。」

皆が通行出来るまで、待つていてはとても間に合わない。覚悟を決めたエステルは力強く頷いた。生命力溢れる雑草を搔き分け一行は進む。先頭をラピード、これは彼が犬である故の聴覚と嗅覚を持つため、にエリシア、エステルと続き、しんがりをユーリがつとめる。

エステルが真ん中なのは、彼女が一番実戦経験や諸々で皆より劣るためと魔物に襲われたとしても対応しやすいようにだ。

ただエリシアは周囲を油断なく警戒しているものの、今度は左手と左足が同時に動いている。

森の奥に進むにつれ、木々の間から光が射す場所も少なくなり、得体の知れない鳴き声がこだましていた。

『私、絶対父さんみたいに強くなるからー。』

それが幼い頃の私の口癖だった。皆を率いて戦う父の姿は本当にかつこよくて、自分もいつかは強くなつて父の役に立ちたかった。わざわざ銃や術を選んだのも非力な自分の弱点を補うため。旅に出るまでは、空いた時間を見つけては毎日のように稽古をつけて貰つていた。

思えば父とはもう一年近くも会っていない。ザーフィアスへの用事も父のギルドのメンバーから聞いただけであるし。

自分はあの頃から強くなれたのだろうか。父と並ぶまでは到底行かない。だけどそう、背中を追うぐらいうまく出来ているとエリシアは思う。

何だか騒がしい。

半ば覚醒しつつある意識の中でエリシアの耳は言に争う男女の声を捉えた。

「ユーリー！ 女の子の顔をそんなにまじまじと覗き込んでじゃいけませんよ」

「はいはい、分かってるって。にしてもまだ田、覚めないのな」

このまま眠りたい衝動に駆られたが、意を決して重い瞼を上げる。誰かが自分の顔を覗き込んでいた。ただ逆光に遮られて表情までは分からぬ。

半分寝ぼけた意識では正常な判別すら出来なかつた。

「お、起きたか？」

その声でやつと頭が覚醒し、田が慣れたようで自分を覗き込んでいた人物が誰だか分かつた。ユーリである。

それと同時に自分の頭が何か柔らかいものの上に乗つていてことに気付く。

起き上がろうとするが、後ろから出て来たエステルの手に止められた。

「駄目です。まだ横になつていないと。エリイ、倒れたんですよ」

どうやら柔らかいものはエステルの膝だつたらしい。

倒れた、との言葉でエリシアは初めて、自分は倒れたのだと理解した。そう言われば、気分が悪くなつて……。その先は思い出せない。

「ん、ありがとうございます、エステル。でも私は大丈夫」

「駄目です！ もう少し休みましょうー、ねえ、ユーリ」

こんな所は結構強引なエステルらしいと思つ。実を言へばまだ少し気分が悪かつた。

エステルに話を振られたユーリもまた同意する。

「だな。もう少し休んでいいと思つぞ」

「……じゃあ五分だけ」

そこまで言われるなら、お言葉に甘えて休ませて貰つことにする。眠つてしまわないようにエリシアは軽く目を閉じた。

自分が倒れたのはエステルによるとエアルが原因らしい。何でも濃すぎるエアルは人体に影響を与えるとか。その証拠にエステルも気分が悪くなつたと言つていた。

ユーリやラピードはピンピンしていたが、エステルいわく体質が関係あるらしい。五分ほど休ませて貰つたエリシアは立ち上がり歩き出す。

「じゃあ、ユーリつて鈍いんだ」

「纖細じゃなくて悪かつたな」

と軽く頭をこすかれる。すると今まで黙つて歩いていたラピードが立ち止まり、低い唸り声を上げた。つられてラピードの視線の先を見ると、草むらが僅かに動く。かと思つと何かが飛び出して来る。

「エッグベアめ、か、覚悟！」

飛び出して来たのは少年だった。ぴんと跳ねた鳶色の髪と同色の瞳。その小さな体には不似合いな大きな鞄を下げている。

まだ十代前半かと思われる彼は、身の丈ほどもあるハンマーを振りかぶった。

しかし悲しいかな少年の力では振り回されるのがおち。

「うわっ、とっとっ！」

予想通り少年の体はぐるぐると回転する。突然の出来事に呆然とするエリシアとエステルに代わって、見兼ねたユーリは剣を抜き、切っ先を無造作に差し出した。

金属同士が触れ合つ特有の甲高い音を立ててハンマーが地面に落ちる。

「うあああっ！ あうっ！」

ハンマーが手から離れたことで少年は体重を支えきれず、盛大に尻餅を付いた。

だがそれでも勢いを殺せず、そのまま地面に大の字に倒れる。

「う、いたたた……」

倒れた少年の視界に、自分を覗き込む犬の姿が見えた。口にはキセルをくわえ、片方の目には大きな傷が走っている。

青い瞳で自分を見下げる犬を魔物と勘違いしたのか、少年は叫び声を上げて固く目をつむった。エリシアたちの姿など目に入つてもいないのだろう。

「ひいいつ！ ボ、ボクなんて食べても、美味しいくないし、お腹壊すんだから。ほ、ほほんとに、たたたすけて。ぎゃああーー！」

「忙しいガキだな」

呆れ口調だがラピードを止めない辺り、実にユーリらしい。エリシアは仕方なく少年の側に屈んでみる。エステルもエリシアの隣に並んだ。

「ラピードは魔物じゃないから平氣よ」

「はい、大丈夫ですよ」

「あ、あれ？ 魔物が女人に」

「つたぐ。なにやつてんだか」

視線をラピードから一人に移した少年は、戸惑っているらしく、目を白黒させている。

エリシアとエステル、そして呆れたようなコーリの声に、少年はやつとラピードが魔物ではないと気付いたらしく、ズボンに付いた土を払うと立ち上がり、一人前に胸をはつて自己紹介をする。

「ボクはカロル・カペル！ 魔物を狩つて世界を渡り歩く、ギルド『魔狩りの剣』の一員さ！」

その瞬間、エリシアの瞳が僅かに陰った。その事に気付いたのはコーリのみ。

エリシアは何も魔狩りの剣、全てが気に入らない訳ではない。

ただ彼等のやり方に疑問を感じるのだ。魔物だからという理由だけで人に害を出さない魔物まで狩るという彼等のやり方が。

この少年は違うかもしれない。それでも魔狩りの剣というだけで、自分が先入観を持つてしまうのもまた事実だ。

「オレはコーリ。それにエリイとエステル、ラピードだ。んじゃ、そういうことで」

だがコーリは適当に名乗り、ラピードを連れてそそぐかと森の出口に向かって歩き出す。

エリシアもまた、出来れば魔狩りの剣の一員には係わりたくないのが本音である。

「魔物結構出るみたいだから気をつけてね」

エリシアはコーリとラピードの後に続いた。エステルは迷つてまだおろおろしていたが、置いて行かれては堪らない。とりあえず謝つて一人の後を追う。

「あ、え？ ちょっとコーリ、エリイ！ エド、『ごめんなさい』

「へ？ ……って、わ、待つて待つて待つて！」

少年 力口ルは何故か、慌てて三人の前に回り込んだ。何かまずいことでもあるのだろうか。

「三人は森に入りたくてここに来たんでしょう？ ならボクが……」

「いえ、わたしたち、森を抜けてここまできました。今から花の街ハルルに行きます」

一時はどうなるかと思ったが、本当に道中、何もなくて幸いだ。出来ればこの森には一度と入りたくないトーリシアは切実に思う。森を抜ければハルルの街は直ぐそこである。

「へ？ うそ！？ 呪いの森を？ あ、なら、エッグベア見なかつた？」

「見てないと思つ。ねえ、ユーリ」

「ああ、見てねえな」

しかしエッグベアと言つと、この少年が相手にするには少々物騒な魔物である。

体格も当然彼より大きいし、狼などとは比べものにならない鋭い牙と爪の攻撃を受ければ一たまりもない。

何か理由があるのだろうが、それを聞けば厄介ごとに首を突っ込むのと同意義だ。

「そつか……なら、ボクも街に戻るうかな……あんまり待たせると絶対に怒るし……うん、よし！ 三人だけじゃ心配だから、魔狩りの剣のエースであるボクが街まで一緒に行つてあげるよ」

カロルと名乗った少年は、何やらぶつぶつ呴いた後、一人で納得してうん、と声を上げる。

次に三人の方に向き直ると大きな鞄に付いている武醒魔導器を見せた。

「ほらほら、なんたつてボクは、魔導器だつて持つてるんだよ」

そう言われてもユーリとエステルも「デザイン」が違うものの、左手に腕輪型の武醒魔導器を付けているし、エリシアも耳飾りとして付けている。

それにラピードだつて持つてているのだ。三人と一匹の魔導器を見た力口ルが仰天した。

「あ、あれ、皆なんで魔導器持つてるの！」

普通、魔導器というのは帝国が管理している。そのため、貴族ではない一般の人間が魔導器を手にする機会は無いに等しい。例外はエリシアや力口ルのように帝国の法の及ばないギルドの人間である。

ちなみにユーリはと言つと、騎士団を辞める際に無断に拝借して来たらしいとか。

「話しに夢中になるのは良いけど、後ろには氣をつけた方がいいわね」

エリシアの右手にはいつの間に抜いたのか魔導器　銀色の銃がある。

力口ルが武器を手に慌てて背後を振り向けば、白煙を上げて倒れる魔物の姿。力口ルが気配に気付かなかつたのは話しに夢中になつていたことと、魔物が植物に擬態していたせいもある。

「エースの腕前も剣が折れちゃ披露出来ねえな」

ユーリが言うよつに力口ルのハンマー（形だけを言えば剣に似ている）は先程、ユーリが剣で止めたお陰で刃先が無残に折れている。

「いやだな。こんなのただのハンマーだよ。あれ？　なんかいい感じ

？」

カロルが試しに素振りをしてみると、なかなか良い感じた。

しかし三人と一匹は少年を待つてはくれない。既にカロルを一人残して、森の出口へと向かっている。

カロルは置いて行かれたくない一心で三人の姿を追つて走り出した。

「ちょ、あ、方向分かつてんの〜？ ハルルは森出て北の方だよ。もお、置いてかないでよ〜」

閉ざされた森の中、ほんの十分ほど前にエリシアたちが休憩していた開けた場所に一人の男の姿があった。

緩やかに波打つ銀色の髪に、紅玉のように鮮やかな瞳。纏つた長衣は瞳同様血の色を思わせる赤。手には精緻な細工が施された抜き身の剣を下げている。

どうやらただの剣ではないらしく、刀身は赤と白のグラデーションをしており、見る者が見れば何故彼がと驚愕したに違いない。こんな所で何をするのかと思えば、男は朽ち果てた魔導器に向かつて剣を掲げた。

花の街ハルル

カロルを加えた一行は、クオイの森を出て、街道沿いに北上した。ハルルに到着したのは空が赤みを帯び始める夕刻に近い時刻である。街に入った瞬間、本来あるはずのものがないことにエリシアやユーリは気付く。空にはザーフィアスを初めとする街には必須と言つていいはずの結界魔導器^{シルトプラスティア}の輝きがない。

エリシアの記憶では、街の中央にある大樹が結界魔導器の役割を果たしているはずだが……。

入口からでもよく見える大樹は、色褪せて今にも枯れそうな程に元気がない。異変はそれだけではなく、街の周囲には魔物を警戒するように武器を携えた者たちの姿が見受けられる。

「この街、結界ないのか？」

「そんなはずは……」

「ない」と言いかけたエステルは空を見上げるが、どこにも結界魔導器^{シルトプラスティア}の存在を示す光輪はない。

茜色に染まりつつある空が広がっているだけだ。

「ユーリとエステルはハルルは初めて?」

「この街はね、ここからでも見えるでしょ？ あの大樹が結界魔導器の役割を果たしているの」

カロルが一人を振り返つて尋ねる。そもそも彼はハルルから来たのだから、結界が消えている理由も知つているのだろう。

その理由をエリシアがカロルに代わって解説する。

数ある結界魔導器の中でもハルルの魔導器は特殊で大樹と融合しているらしい。

だがそれ故に、花が咲く時期は結界が弱まつたりと普通の魔導器では考えられないイレギュラーな事態も多いといつ。

「樹の結界？」

「魔導器の中には植物と融合し、有機的特性を身に付けることで進化するものがある、です。その代表が、花の街ハルルの結界魔導器だと本で読みました」

コーリの問いにエステルは、目を閉じ、まるで本を朗読するようにすらすらと語った。

流石は帝都と言つことか。城には魔導器に関して詳しく綴つた文献もあるらしい。

「……博識だな。で、その由慢の結界はどういつたんだ？ 役に立つてねえみたいだけど」

辺りを見回せば、人通りは少なく、ちらほら見かける住民も皆一様に疲れた様子で地面に座り込んでいる。

普段結界に守られているからだろうが、いざ結界がなくなれば、ハルルの街は狂暴な魔物から身を守る方法は限られて来る。その一つが住民による見張りなのだろうが、魔物はこちらの都合などお構いなしだ。

いつ来るか分からぬ魔物に対しても常に気をはつて置くところは想像以上に辛いことである。

「毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるんだよ。ち

よ「うひ今の季節なんだけど、そこを魔物に襲われて……」

「結界魔導器がやられたのか？」

ハルル自身は他の街と比べて決して広い訳ではない。それでも全てを守るには無理がある。巡礼に訪れた騎士たちが魔物を退けたのだが、寧ろ人を守ることを優先させた結果が結界の消失だった。

普通の結界魔導器なら、こうはなつていなかつたかもしけないが、ハルルの結界魔導器は先も言つたように特別なのだ。

結界の消失など前例がない。全て手探りの状態なのである。

「うん、魔物はやつつけたんだけど、倒した魔物の血を樹が吸っちゃつて、徐々に枯れ始めてるんだ」

倒した魔物の血が土に染み込み、ハルルの樹を弱らせてしまった。植物や木は地面から養分や水分を吸收する。ではそこに毒となる魔物の血が染み込んでいたら？　強力な毒素を備えたそれを浄化することは簡単ではない。カロルが呪いの森と言われるクオイの森にいたのもこれが一重の原因である。

やや落ち込んだ様子で話していたカロルの前を一人の少女が通り過ぎた。

「あ！」

「どうかした？」

エリシアが聞いても、カロルは何やら少女が去つた方を見つめている。動き易そうな戦闘向きの服装だったことから恐らくは、同じ魔狩りの剣のメンバーなのだろうか。

カロルは数秒思案した後、慌ただしくあの少女を追つて駆け出し

た。

「『』めん！ 用事があつたんだ！ ジゃあね！」

「勝手に忙しいやつだな。エステルはフレンを探すんだよな……」

振り向けば、後ろにいたはずのエステルの姿がない。どこに行つたかと思えば怪我人の手当でだ。かいがいしく世話を焼いている。勿論、それは彼女の美点でもあるのだが、少しほそ自重してもらいたいものだ。

「大人しくしどけつてまだ分かつてないらしいな。それにフレンはいいのかよ」

「んー、多分だけども『』の街には居ないわね。そのフレンって人呆れたようなユーリに、エリシアはそう断言した。ざつと見回した所、警備に当たつているのも武器を携えた住民であるし、怪我人の治療もままならない状況のようでもある。

他の騎士ならともしらず、ユーリやエステルの言つ“フレン”なら率先して人々を助けるのではないか。

「かもしだねえな。ま、駄目もとで探してみるか」

「でもまずは怪我した人の手当が先かな。エステルだけじゃ手が回らないみたいだし」

女性たちで手分けして怪我人の治療に当たつてゐるようだが、治療を扱えるのは当然エステルだけ。無理をするのは目に見えてい

る。

無理をするという点ではエリシアも同じ、しかし彼女の場合は下手に自覚がある故に厄介だ。

「ユーリも早く！」

エリシアは怪我人の近くに膝をついて既に治療を始めていた。

ホントに城で厄介なもん拾つちまつたな、しかも一匹だぞ、とハピードにぼやきながらユーリは半ば投げやりに返事をした。

「あー、はいはい」

エリシアが手を組んだ先から生み出される煌めく金色の粒子。目にも鮮やかな光は、傷口に集束すると瞬く間に出血を止め、傷を負う前の綺麗な肌に戻した。

隣には彼女と同じように傷ついた人々を癒すエステルの姿もある。ユーリも包帯を巻いたりと自分に出来ることを手伝った。

「はい。これで大丈夫です」

手当てを終えたエリシアはさながら天使のようにこりと微笑んだ。子供も大人もその場にいた人々は、一人の少女によつて齋された魔法の光を驚きの表情で見つめている。

エリシアやエステルのようにここまで治癒術を扱える者は非常に稀だ。例え騎士団の者でも同じようにはいかないだろう。

「なんとお礼をいえばいいのか」

全ての怪我人の手当てを終えた後、街の代表らしき老人が皆に代わつて頭を下げる。

申し訳なさそうに礼を言う老人に一人は慌てて頭を横に振る。

「いえ、本当にいいですか？」「

「私たちがしたくてやったんです。そこまでお礼言われることでは……」

「まあ、そうだな」

「一人に同意するようにコーリも頷く。自分たちが何かしたくて勝手にやったこと。そこまで申し訳なさないように言わわれれば逆にこちらが恐縮してしまう。

人を助けるのに理由はいらない。エリシアはそう思つていいし、これからもその考え方を変えるつもりもない。

「謙虚な方々だ。騎士団の方々にも見習つてほしいものです」

「まつたくですよー。騎士に護衛をお願いしても何もしてくれないんですから」

老人がため息をつくと、他の人々からも怒りの声が上がる。本当に騎士のやることなのか、と街の中でも随分と話題になつた。住民では魔物から身を守ることさえ難しいのに、騎士たちは素知らぬふりを通したのだ。

「まあ、帝国の方々には私らがどうなると関係ないんでしょうな」

「うそ……そんなはずは……」

ないとはエステルも言い切れなかつた。フレン以外の騎士はそのだと心の中で理解もしていたのだ。

フレンの命が危険だと訴えた時も彼らは貴族の『』の戯言だとたかを括って、聞こうともしなかつたのだから。

「あ、でも、あの騎士様だけは違つてましたよね？」

と人々の輪の中にいた若い女性が思い出したように言った。

数日前から街に滞在していた巡礼の騎士一行。他の騎士たちとは違い、彼らは住民たちを魔物から守ってくれた。

「おお、あの青年か。彼がいなければ、今頃私らは全滅でしたわ。今年は結界が弱まる時期が早く、護衛を以来したギルドが来る前に襲われてしまましてな。偶然、街に滞在していた巡礼の騎士様御一行が、魔物を退けて下さったのです」

礼儀正しく、正に騎士の鑑と言つても過言ではない青年だった。彼らの活躍により魔物の殆どは避けられ、住民たちだけでも何とかやっていけるだろう。

それも結界が直るまでの時間稼ぎにしかならないが。

「ん、巡礼の騎士つてもしかして……」

確かフレンもそうだつたのではないか。エリシアの記憶が正しければの話だが。

フレンがユーリやエステルから聞いたような人間なら間違ひなく、その巡礼の騎士がフレンなのだろう。

流石ユーリの親友、エステルの知り合い。やはり彼も二人のようなお人好しなのだろう。ユーリに言えば、エリシアが言えたことではないと言われそ่งだが。

「その騎士様つて、フレンつて名前じゃなかつた？」

言いながら、コーリがよつこじらせと腰を上げて立つ。

老人は旅の人間であるコーリがその騎士の名を知っていたことにやや驚いた様子で頷いた。

「ええ、フレン・シーフォと」

「まだ街に居るんですか！？」

「いえ、結界を直す魔導士を探すと言つて旅立たれました」

結界魔導器を直そつと思えば、魔導器に精通した魔導士を探すしかない。

しかしハルルの結界は特殊であるため、普通の魔導士に直せるかどうかも分からぬ状況だ。

だが少しでも確率があるのなら、と騎士の青年は部下たちを連れて街を出た。ほんの数日前の出来事である。

「行き先までは分からぬいか」

「東の方へ向かつたようですが、それ以上のことば……」

東、東と言えば魔導士たちが集まる学術都市アスピオの方角だ。恐らくフレンはそのアスピオに向かつたのだろう。あそこならハルルの結界魔導器を直せる魔導士もいるかもしね。

「そうですか。でも、ここで待つていれば、フレンは戻つてくるんですね」

フレンがハルルに戻つて来ると分かつたことは、一先ずは良かつ

たと言える。そうなればエステルの随分短い冒険もここで終わりといふことか。

「よかつたな。追いついて」

「以外と早く手掛けり始めたね。んー、エステルの用事が終わりならこれからどうするかな？ コーリさえ良かつたら一緒に行つていい？」

魔核泥棒を追うのなら人数は多い方がいいし、何よりエリシア自身がコーリと一緒にいたかつた。ダングレストにいたせいか、今まで年の近い知り合いなんてそういうなかつたから。

もつとコーリや勿論エステルのことが知りたい。きっとこの旅も直ぐに終わる夢のようなもの。だけど、あと少しだけ一緒に居てもいいのだろうか。

自分の中に生まれつつある想いに困惑につつも、エリシアはそう切り出した。

「オレは構わないってか大歓迎だけどいいのか？」

正直、彼女の銃の腕や魔術を考えると、同行してくれるのはユーリにすれば有り難い。

だがそもそもエリシアはコーリと何の関係もないのだ。

いくら彼女が好意で言ってくれたとしても、これ以上こちらの事情に巻き込むのはどうかとコーリは思ったのだ。するとエリシアは軽く手を振つて答えた。

「いいのいいの。どうせ行く宛てのない旅だしね。それとも迷惑？」

父からの頼みはもう済んだし、次の目的地も特に予定はない。

けれどユーリが迷惑だと言うのなら、大人しく引き下がる。エリシアはユーリを困らせたい訳ではない。

そしてユーリも迷惑だなんてある訳がない。つぐづくお人よしだと思いつつ、ユーリは右手を差し出した。

「いや、そいじゃ改めてよろしくな、エリイ」

「うん！」

エリシアは嬉しそうに頷いて、差し出された手を握る。ユーリの手は父を彷彿させる、しなやかで力強い手だった。

かなり今更だが、何となくやっぱり男の人なのだと実感する。別に忘れていた訳でもないのだが、別段性別を意識していなかつたらなのかもしねり。

「おし、ハルルの樹でも見に行こうぜ。エステルも見たいだろ？」

「私も見たいな。近くで見たことないし」

「あ、はい！ でもいいんです？ 魔核泥棒を追わなくとも

エステルとしては是非とも、貴重な結界魔導器を見ておきたい。近くで見れるとなると滅多にない機会であるし、城に戻れば恐らくもう一度と自由に歩き回ることは許されないだろう。それまでにしっかりと外の世界を目に焼き付けたかった。

「樹見てる時間くらいはあるって」

エステルの言つことはもつともだ。しかし魔核泥棒 モルディオと名乗っていたそうだが、もし本当にモルディオならば間違いない

くアスピオにいる。

つまり目的地がはつきりしているなら急ぐ必要はない」ということだ。

「そうと決まれば早速、ね。はい、エステル」

すつとエステルの目の前にエリシアの右手が出される。彼女の笑顔は、見ているだけで思わず笑い返したくなる、太陽を思い出させる笑みだ。

一瞬、意味が分からずほうけていたエステルだが、エリシアの意図を理解したようで、ふわりと微笑んで彼女の手を取った。

天高く聳える大樹

三人が街中を歩いていると、走っていたはずのカロルが橋の上で何やらぶつぶつと呴いている。

自信満々に言い切っていた少年と同一人物とは思えないほどの落ち込みようだ。全身から落ち込んでますオーラを漂わせる彼の周りだけ心なしか暗い気がした。

「はあ、人違いか……ギルドのみんなも居ない……随分待たせたからかなあ。怒つて行っちゃつたんだ……満開に咲くハルルの花……。見せてあげたかったのに。そうすれば、きっと……」

「カロル、どうしたんです？」

人違いと言うのはカロルの前を横切った少女のことだろう。ギルドの皆、つまりハルルの住民が頼んで置いたギルドの護衛とは魔狩りの剣ということか。

あまりの落ち込み様にエステルが心配して声を掛けるが、全く気付いていない。エステルの声が耳に入つてないようである。頭を抱えて、地面ばかりを見つめて尚も呴いていた。

試しに今度はエリシアがもう一度、名を呼んでみるがやはり反応がない。もうおしまい、ホントにおしまいだ、と呴き、近付きがたく、暗い雰囲気を漂わせている。

「一人にしといてやるつぜ」

「うん。何だか深刻そうだし」

カロルが魔狩りの剣のエースではない事は分かっているが、彼に

は彼なりの苦労があるに違いない。ならば部外者が立ち入るべき問題ではないし、コーリが言うように一人にしておくのが最良だ。

一行が視線を力口ルから外した時、前から子供たちが走つて来る。手には木剣を持った少年たちの瞳は好奇心に満ち溢れていた。

「これで魔物と戦えるぞー！」

「フレン様みたいに、魔物もやつつけよー！」

「おーーー！」

まさか本気で街の外に出ていくつもりなのか。あながちないとも言い切れない。

エリシアは思わず子供たちの前に立ち塞がつた。所謂仁王立ちである。その姿は意外なほど板についていて、コーリから見ても妙に貫禄があった。

「「」—— やがて危ない」としづや駄目」

鮮やかな手並みでエリシアが少年たちから木剣を取り上げる。その隙に、コーリが逃げ出そうとしていた一人の首根っこを掴んで持ち上げた。

持ち上げられた少年は暴れるが、子供の力ではびくともしない。

「はいはい。エリイの話をすやすと聞こづな」

「あのね、君たちの気持ちは分かるけど危ない」としづや駄目だよ。もし君たちが怪我しちゃつたら、きっとお父さんもお母さんも悲しいと思つけどな」

エリシアにも経験があるからこそ分かる。幼い頃、少しでも父の役に立ちたくて無茶をしたことがあった。

魔物を倒そうとして大怪我をしたのだ。凄く怒られてその後、父はよく無事だったと涙を流して抱きしめてくれた。

痛いのは勿論、痛かつたが、怪我より何より父を悲しませてしまつたことが一番辛かつたのである。

だからエリシアは、この子たちを同じ田に合わせたくないのだ。しゃがんで視線を合わせ、悲しそうに笑うエリシアに子供たちも何かを感じたのか、しゅんと肩を落とす。

「街の皆を守るのはもつと、そのフレン様みたいに強くなつてからね。分かつたら、危なくない所で遊んで来ること!」

「うん、ありがと。お姉ちゃん!」

「おい! 早く来いよ!」

エリシアは太陽を思わせる笑みを浮かべ、木剣をそれぞれに返す。少年たちの顔がぱあっと輝いた。口々に礼を言い、街中に消えて行く。生き生きとした少年たちはまるで小さな嵐のようだった。ふうと一息ついたエリシアだが、一人の視線に気づく。ユーリは感心して、エステルは尊敬の眼差しで見つめている。

振り向いた先の二人の視線に居心地が悪いといふか、いたたまれなくなり視線を逸らした。

「……私も同じだったから。無茶して、怪我して初めて分かつた。自分を心配してくれる人たちのこと」

暫くの沈黙の後、エリシアは視線を逸らしたまま、ぽつりぽつりと自分の経験を語った。自分のことを話すのは少し照れ臭いけど、

何故か悪い気はしない。

「……ま、無くして初めて気付くものもあるだろうな」

ユーリもまた随分と無茶をしたことがある。騎士団に入る前も、騎士を辞めた後も、そして今でも、無くしたものは数えきれない。気付かされた事も何度もあった。

大切なものは無くしてから気づくのだ。その時にはもう遅い。

「無くしてから初めて気付くもの、ですか……」

エステルにはいまいち分からない。想像出来なかつたといえば正しいだろう。もし自分が地位を捨て、このまま城に戻らなければ、いつか自分はその選択を後悔するのだろうか？

だがいくら考えても、答えを見つけ出すことは出来なかつた。

「でも、あんな子供まで……。早く、結界が戻ればいいのに」

エステルはそう願わざにはいられなかつた。あんな子供たちまで戦おうとしていた。

この結界が早く直ればいい。でなければ今のハルルの状態は長く続かないだろう。限界は住民たちが思う以上に近い。

「そうだな」

「本当に……こんな状態、きっと長くは続かない。もうみんな、限界だもん」

エステルに同意しながら、エリシアは自分に出来ることがないか考えた。街の人のためにも何とかしたい。その思いはある。

けれど専門の魔導士ではないエリシアには結界魔導器の「ことなど分かるはずもなく。

エリシアとて理解している。自分一人に出来ることなどたかが知れると。

だが分かつっていても無力感に苛まれてしまつのだ。

（そう、お前一人じゃ何も出来ない、誰も救えないんだと言われている気がする。結局、私は父さんみたいになれないのかな……？）

「エリイ？」

つい自嘲めいた笑みが零れた。何を今更、そう思つ自分もいた。名前を呼ぶ声にふと我に返り、慌てて顔を上げると、ユーリの紫掛かつた黒い瞳と目があつた。ユーリはそれ以外、何も言わない。

彼の瞳を見ていると、全てを見透かされるような、そんな感覚に襲われる。居心地が悪いというか、いたたまれなくなつて、エリシアは視線を逸らした。

見れば何かに気付いたらしいエステルも不思議そうに自分を見つめている。

「ごめん」めん、と言つて一人歩き出す、彼女の後ろ姿を見つめながら、エステルは複雑な表情で口を開いた。

「どう思います？ ユーリ」

「ユーリにも色々思う所があるんだろ」

思えばユーリはエリシアのことは全くと黙つていいくほど知らなかつた。せいぜい知つてているのは名だけ。城の牢獄で出会い、半ば成り行きでここまで来た。

ユーリには少し眩しく、太陽のように明るい少女。胡散臭いおつ

さんと知り合いだつたり、地理にも詳しいかと思えば銃や魔術の扱いに長けている。

では自分は、彼女の何を知っているつもりだつたのだろう。その考えに至つたユーリもまた、自嘲気味に唇を歪めた。

「近くで見るほんと、でつけー」

ハルルの街の中央にそびえ立つ大樹は、ユーリが感嘆の声を上げるほどに強大だつた。幹は人何人が囲めば取り囲めるだろう。それすらも想像出来ないほどに大きい。

見上げなければとてもではないが木全体は見えなかつた。

「もうすぐ花が咲く季節なんですね」

本来なら生命力満ち溢れ、薄紅色の花を咲かせるはずの木にはやはり、元気がない。近くで見ればそれがよく分かつた。

木の下、根の埋まつた地面は普通の色ではない。茶であるはずの

士は赤黒く変色している。それがカロルが言っていた魔物の血なのだろう。

「どうせなら、花が咲いているところ見てみたかっただな」

「結界が直つたら皆でお花見してみたいね。きっと凄く綺麗だよ」

ユーリの言葉に頷き、エリシアも樹を見上げる。ハルルの樹が元気を取り戻した時には、ユーリやエステル、ラピードとお花見出来たらいいなと思う。

お昼も勿論いいけれど、夜はもっと綺麗なのだろう。薄紅色の花が闇に浮かび上がつて美しく、風流ではないのかと。

「そうですね。満開の花が咲いて街を守つてるなんて素敵です。お花見もぜひやりましょう！ あの、ユーリ、エリィ、わたし、フレンが戻るまで怪我人の治療を続けます」

エステルならそう言つとエリシアも分かつていた。きっと怪我人を見れば、いても立つてもいられないのだろう。

フレンが結界魔導器に詳しい魔導士を連れて来るまでは住民たちによる見張りが必要だ。

ならば当然怪我人も出る。住民たちも治癒術を扱えるエステルの存在は有り難いはず。

「なあ、どうせ治すんなら、結界の方にしないか？」

「ユーリ、今、なんて言った？ 私の聞き間違いじゃなければ、結界を治すつておっしゃりませんでした？」

樹を見上げていたユーリがぽつりと呟く。エステルとエリシアは

思わず我が耳を疑つた。

今、どうせ治すんなら結界の方にしないか、と聞こえたのは幻聴か。

最後の方が敬語になつてゐるが、エリシアは自分では気がついていない。目を点にしてユーリを見ると案の定、彼は笑つていた。悪戯を思い付いた子供のように。

「言つたつて。魔物が来れば、また怪我人が出るんだ。今度はさつきのガキたちが大怪我するかもしだねえ」

「それはそうですが、どうやって結界を？」

フレンたちですら治せなかつたといつのに。魔物の血を浄化出来れば恐らく、ハルルの樹は治る。しかし樹を枯れさせた原因である毒素を浄化しようにも、樹を侵す毒素が分からなければ治せない。だがそんな時間などなかつた。治癒術では無理なのだ。決して万能の奇跡の力ではないのだから。ではどうすればいい。

「それなんだよな

「ユーリも考えてなかつたのね。治癒術じゃあ治せないし、かと
つて他に方法はない……か

いくら考えても良い案が浮かぶはずもなく。いつしている間にも樹は死に始めているのだ。

その時、三人の目の前を俯き、不幸オーラを漂わせたカロルが通り過ぎた。いち早く彼の姿に気付いたエステルが慌ててカロルを呼び止める。

「あ、カロル！ カロルも手伝つてください！」

「……なにやつてんの？」

「結界を治す方法、考えてるの。カロル、さつき言つてた魔物の血を浄化する方法つてない？」

振り向いたカロルの顔は酷かつた。この世の不幸を一身に背負つたかのように引き攣つている。

カロルはこう見えて歳の割に博識なのだ。何でもハルルの樹が枯れかけている原因を突き止めたのも彼らしい。

カロルならもしかしたら、と思つたのだが……。

「あるよ、そのためにボクはエッグベアを……でも、誰も信じてくれないよ……」

魔狩りの剣の皆もそうだつた。誰一人としてカロルの話に耳を傾けてくれなかつた。僕は皆のようになくない。だけど、知識だけはあるつもりだつた。

（分かつてるよ。僕が臆病でどうしようもないってことくらい）

顔を上げようとしないカロルにユーリは、しゃがみ込み、目線を合わせた。

「なんだよ、言つてみなつて」

「パナシーアボトルがあれば、治せると思つんだ」

パナシーアボトルというのは万能の解毒剤と呼ばれる貴重なものだ。確かにあらゆる毒を浄化すると言われるパナシーアボトルがあれば何とかなるかもしれない。

その前に問題が一つある。あらゆる毒を浄化するとなれば当然、

それなりの値段がするところのものだし、この街の雑貨屋に在庫があるかどうかも怪しい。

「パナシーアボトルか。ようす屋にあればいいけど

「品切れだつたよ。ボクが確認しない訳ないじゃん」

雑貨屋に足を向けかけた三人と一匹をカロルが投げやり気味に止める。言われてみればそうかもしれない。

もし在庫があるならわざわざ危険を侵す必要はないし、カロルもそこまで考えなしではないだろう。そこでエリシアにある考えが浮かんだ。

「さつきエッグベアを探してたつて言つたけど、何か関係があるの？」

「あるよ。パナシーアボトルの材料にエッグベアの爪が必要なんだ……結局、見つからなかつたけど？」

それで納得が行く。だからカロルは一人で森にいたのか。先程カロルは皆は信じてくれなかつたと言つていた。つまりは魔狩りの剣のメンバーはカロルの話を信じず、彼は一人で呪いの森に足を踏み入れたということなのだろう。

しかしエッグベアなどそうそう見つかる魔物ではないし、仮に見つかつたとしてもカロル一人では倒せない。少なくとも今のカロルでは、という意味だが。

「オレたちが手伝えば何とかなるだろ」

「えつ？」

思わぬコーリの言葉に、俯いていたカロルが顔を上げる。すると
コーリもエリシアもエステルも笑っていた。

自分を馬鹿にするような笑みではない。純粹な好意だろうか。

「やうですね！　名案だと思います」

「でも出発は明日ね。もうすぐ日が暮れるから。夜の森は危険だし」

コーリだけでなく、エステルもエリシアも行く気満々らしい。ラ
ピードでさえ何度も尻尾を振っている。

カロルは不思議でならなかつた。何故、どうしてこの人々は自
分の話を信じてくれるのだろう。仲間たちでさえ信じてくれなかつ
たのに。

「どうしてボクの話を信じてくれるの？」

「他に手がないんでしょ？　それともカロル、嘘付いてるの？」

「違つ……違つけど」

エリシアが言つようにして他に方法はない。でも分からない。
カロルだってやれば出来るんだと、ギルドの皆さんに分かつてもらい
たかったのだ。満開になつたハルルの樹を、彼女に見せたかつただ
けなのに。

俯く少年の頭にコーリの手が乗つた。

「なら問題ねえだろ」

顔を上げると、コーリがにせりと笑つており、エリシアとエステ

ルも同じように笑う。その笑顔に脱力したカロルもまた同じように笑つた。いや、苦笑した。

その後、カロルを含めた一行は、宿屋に向かつと一人一部屋、四人分の部屋を取り、少し早めの夕食を取つた。

ユーリは剣を磨き、エステルは階にあつた本を借りて熱心に読み耽り、カロルは一心不乱に何かを書いている。エリシアは皆の邪魔をしないよう静かに、気付かれないように宿屋を出た。

既に日は暮れ、空には金色の月が輝いている。

その時、何かの気配に気付いて背後を振り返れば、何とラピードが立つていた。

「ラピードも散歩、一緒に来る？」

元気よく、わんと返りてくる。どうやら自分だけでなくラピードも暇だつたらしい。何をする訳でもなく、エリシアはラピードと街中をゆっくりとした足取りで回る。

街の中心部は勿論のこと、街外れにも見張りのために火が焚かれ、住民たちが武器を携えて見回りに当たつていた。

一人と一匹はそのままぐるりと街を一周すると、ハルルの樹へ向かつた。月明かりに照らされた大きな葉はエリシアが立つ地面に大きな影を落としている。ここにも勿論、見張りの住民がいたのだが、エリシアが見張りを代わると申し出たのだった。

一時間仮眠を取つて戻ると言つていたから、そう長い時間でもない。ラピードと一緒に幹に背を預けてハルルの街並みを眺める。

「星が綺麗。これなら明かりなんていらないか

真上に差し掛かかるうつとする月は、明々と全てを照らしている。淡い、包み込むような優しい光だ。ラピードが気を利かせてわん、と相槌を打つ。

ふと何かを思ついたエリシアは立ち上がり、そつと幹に手を当てた。

「絶対に治してあげるから、お願ひ、もう少しだけ頑張つて

「何してんだ？」

返事はあるはすがないのだが、それとは別にもう既に耳慣れた声が樹の後ろから聞こえてきた。無造作に剣を引っつかんだコーリである。

もしやコーリも散歩だらうか。それともエリシアとラピードが居ない事に気付いて、ここまで来たのか。多分、前者だらう。

「えー、決意表明みたいな感じ？　ユーリこそ、夜の散歩？」

「まあ、な。それと誰かさんが一人で宿を出たから様子を見に。つてもラピードが一緒なら心配なかつたけどな」

エリシアの顔が強張る。エステルとカロルは大丈夫だと思つては、やはりユーリにはばれてたらしい。別に悪いことをした訳でもないのだが、何故か申し訳ないような気分になるから不思議だ。変な顔になつているエリシアを横目に、ユーリはよつこらせと少女の隣に腰を降ろした。

二人の頭上に広がるのは満天の星空。月と星の光が街全体を照らしているため、明かりがなくともはつきりと見える。それでも火を焚いているのは魔物除けのためだらう。

「ユーリは星がよく見えるな」

エリシアもハルルの樹から手を離し、ユーリの隣に座つて空を見上げた。雲一つない綺麗な闇と銀の天蓋。これなら明日の天気は心配ないかな、と取り留めのない事を考える。

思い返せば怒涛の一日だつた。牢に入れられたかと思えば予定外の脱出劇。貴族の少女、エステルとの出会いに謎の男の襲撃まで。

半ば成り行きで旅に同行した。本当に田まぐるしい一日だつた。僅かな疲労感はあるけれど、疲れを上回る楽しげがあつた。

落ち着いてみれば何となくなのだが、ユーリと二人で話をするのは緊張する。

「ユーリ」

「エリイ」

意を決して口を開けば、見事にユーリの声と重なった。何となく恥ずかしくなつてユーリから視線を逸らせる。

「な、何？」

完全に声が裏返つていた。ここは緊張する所じゃないのに。エリシアは更に顔が上げられなくなつて俯く。見えるのは暗い地面と寝そべつたラピードの尻尾だけ。

「……いや、エリイのこと、何も知らなかつたなつて思つて。……エリイはギルドの人間なのか？」

ユーリの口から出た声は自分でも信じられないくらい、僅かに震えていた。全く情けない限りだ。武醒魔導器を持ち、戦闘慣れもしている。幸福の市場の首領の知り合いとなればギルドの人間以外の答えは考えつかなかつた。

では何故、答えを聞くことを躊躇うのだろう。真っ先に尋ねなかつた理由は、答えを聞けば彼女が去つてしまつのではないかと、そう思つたからだ。

「私は違う。父さんがギルドの人間つてだけだよ。魔術も銃の使い方も全部、父さんから教えてもらつたの。……元騎士だつた父さんから」

ユーリが確信しているのならもう、隠す必要はない。だけど私の口から出た声は私のものとは思えないほど冷たかつた。質問も何も許さない、突き放したような拒絕だった。

そんなエリシアにユーリは言葉を失う。いや、失つた訳ではない。

だが、今の彼はエリシアに掛けるべき言葉など見つからなかつた。

別に嘘をついていた訳ではない。だけど何故か罪悪感に襲われた。あの後、直ぐに交代の人が戻つて来てエリシアは、適当な理由をつけて逃げるようにコーリの前から立ち去つた。

逃げる必要なんてないのに一人で慌てて馬鹿みたいだと思う。直ぐ宿屋に戻る気は起きなくて、街中を歩いて時間を潰した後、宿屋に戻つてシャワーを浴び、直ぐさまベッドに潜り込んだ。

エスティルは隣のベッドで健やかな寝息を立てている。エリシアは固く目を閉じ、何度も眠ろうと試みた。

だが三十分経とうと一時間経とうと、羊を数えてみても眠れない。むしろ目は冴え渡つて来たくらいだ。

「駄目……外の空気吸つてこよう」

仕方なく立ち上がりエスティルを起こさないように部屋を出る。微かな明かりが灯るロビーには誰もいない。……いや、誰かいる。長い黒髪に黒い服。闇に溶け込みそうで白い肌が浮き上がっているように見えた。

コーリ・ローウェル。今、一番会いたくない人だ。

『戻ろ!』

だつて何を話せばいいかなんて分からない。黙つてごめん?

それとも迷惑だつた?

けれど意思とは裏腹に身体は動かない。まるで見入られてしまつたかのようだ。

「エリイ……」

少女の存在に気付いたコーリの声で、エリシアは我に返る。弾かれたようにコーリに背を向け、走り出した。

それは考えも何もあつたものではない。反射的な行動だった。

「エリイ！ 待てって！」

途端、右腕を掴まれたかと思えば、エリシアはコーリに抱き寄せられていた。この一日で随分と馴染んだ青年の香りが鼻腔をくすぐる。

体が熱い。自分を抱きしめる腕から逃れようと身をよじるが、力で敵うはずもなかつた。

「離して！」

「駄目だ。離したら逃げるだろ。そもそも逃げる必要あるか？」

コーリの言う通り、確かに逃げる必要なんてない。ただ怖かつただけ。

コーリの口から叱責の言葉が出ることを恐れてエリシアは口をつぐんだ。すると伸びて来た長い手がエリシア頭を優しく撫でた。

「「めんな」

「……コーリが謝ることなんてない。怖かつたの。ギルドの人間だつて知られたら一人の態度が変わるかもしれないって。……私のこと嫌いになつた？」

分かつてゐる。コーリもエステルもそんな人間ではないと。

でも本当にそう言い切れるのか。世の中に絶対なんてない。だから怖かつた。拒絶されるなんて耐えられない。

「」のまま何も言わずにただのエリシアでいたいと願つた。隠し通せるはずがない。エステルはともかく、ユーリは鋭いのだから。

エリシアは笑おうとして失敗した。いつの間にか瞳から流れ落ちた涙が頬を伝う。視界が涙で滲んで見えない。
怖くてユーリの顔なんて見れたものじゃない。

「あれ、おかしいな。何で泣いてるんだろ？」

拭つても拭つても、絶え間無くこぼれ落ちる涙。どうして泣いてるんだろう。

ユーリと魔核を取り返せばそこで別れておしまい。なのにどうしてこんなに悲しいのか。こんな気持ち、初めてだつた。

ユーリの長い指がエリシアの涙を掬う。その仕種があまりにも優しくてまた泣きそうになつた。

「オレもエステルもそんな事でエリイを嫌いに何かならねえよ。だから泣くな」

「本当に……？」

「オレが嘘ついた事、あつたか？」

見上げたユーリは悪戯っぽく笑つている。ない、一度もない。

こんなに簡単なことだつたのか。自分一人で勝手に沈んだり泣いたり、仕方ない奴だと思われてないだろうか。

一人百面相をするエリシアにユーリは声を上げて笑つた。

「せ、早く泣き止まねえと明日、腫れるや」

「う、うん」

ヒリシアが頷くと、コーリはまた、ぽんと頭を撫でてくれた。父と同じよっこ、いや、父よりも細い手で。

安心したら急に眠気が襲つて来る。自分でも現金なものだと思うが、こればかりはどうにも出来ない。自分が今、どんな状況にいるのかも忘れてヒリシアの意識は闇に沈んで行った。

もう大丈夫

瞼を刺すまばゆい光にエリシアは目を開ける。真っ先に視界に入るのは宿屋の天井と自分が置かれた状況。自分はちゃんとベッドに横になつているし、丁寧にシーツまで掛けられている。

しかしそく考えれば自分で部屋に戻つて来た記憶がない。

半ば覚醒した頭で考えれば昨日の夜中、ユーリと話をして、一人突つ走つていたことに気付いた。そして、どうしたのだろう。安心したら眠くなつて……。

「あーっ……」

そのまま寝てしまつたに違いない。きっとそうだ。まさか勝手に歩いて部屋に戻つたなんてことは有り得ない。

すると今の絶叫で目が覚めたらしいエステルが瞼を擦つて上体を起こした。

「ユーリイ、どうかしましたか……？」

起こしてしまつて申し訳ないのだが、今のエリシアには他人を気遣う余裕はない。自分のことで精一杯だ。

間違いなく、ユーリが部屋まで運んでくれたのだろう。そう思えば急に羞恥心が込み上げて来た。寝顔を見られたとか、変な顔してなかつたとか、そんな考えばかりが浮かんでくる。

どんな顔をしてユーリに会えばいいか分からぬ。

「顔赤いですよ？ 熱もあるんじゃないですか？」

顔を赤く染めるエリシアにエステルは見当違ひな心配をして、お

でこに手をあててみる。が風邪を引いた訳でも熱がある訳でもないので熱いはずがない。

慌てて彼女の手を離そうとするが、

「えっ、あ、エステル、大丈夫だつてば！」

「でも風邪は万病の元と言いますから、引きはじめが肝心なんです！」

普通の人間ならそこで終わつていただろうが、しかしそこはエスティル、中々引き下がつてくれない。エリシアにしてみればそれ以上、触れて欲しくない訳で、でも彼女を邪険にも出来ない。

けれど、このままでは針のむしろだ。エリシアは尚も心配するエステルを半ば強引に部屋の外に出した。

「本当に何でもないから。ねつ！ 先に顔洗つて食堂行つてて。私も直ぐに行くから」

「えつ、でも……」

それでも言い渋るエステルにエリシアは満面の笑みを浮かべたまま、有無を言わさず扉を閉める。

心配性のエステルを追い出されると、部屋に備え付けられている鏡に向かって笑つてみた。

『うん、大丈夫。私はちゃんと笑える。ありがとう、ユーリ』

カロルの話によるとパナシーアボトルを作るには材料が三つ必要らしい。

まずはカロルも探していたエッグベアの爪に、ハルルの樹の花びららしいルルリエの花びらとニアの実。花びらは長老に話を付けているということで残りはニアの実とエッグベアの実だ。

ニアの実はクオイの森で採れるらしく、一行は朝食を取った後、ハルルの街を出た。

「ねえ、どうして皆、ボーティプラスティア武醒魔導器持つてるの？」

カロルが言い出したのは、森の入口付近に差し掛かった時だ。そういうえば初めて会った時もそんなことを言っていた気がした。確かにカロルの疑問はもつともなことではある。

魔導器はその殆どを帝国が管理しているため、武醒魔導器とて滅多に手に入らない。素人でも強力な魔術を使えるから、と言うのが一応の建前らしいが、行き過ぎて独占になっているだろう。

「んなもんカロルだつて持つてるだろ」

「ボクはギルドに所属しているからいいの！」

カロルが言うようにギルドに属している者は、例外的に武醒魔導器を所有している。つまりはギルドの人間でもないエリシアたちが何故武醒魔導器を持っているのか疑問なのだろう。

「ひらめこひらめこ、武醒魔導器を所持しているのはそれぞれ理由があるのだが。

「ハッピーードは前の主人の形見でオレのは、騎士団を辞める時に餞別として貰つたんだよ。んでエステルは貴族のお嬢様だから、エリィはお前と同じくギルド関係者つてことだ」

「へえー、やうなんだ。えつ！？　エリイつてギルド関係者だったんだ！」

（うふ、ううう。 獅子の咆哮の首領の娘なのって言えるわけあるかー！　そうでなくとも魔狩りの剣と獅子の咆哮は仲よくないんだから、口が裂けても言えない。うん、絶対に言えない）

と心中で叫んでみる。もともとエリシアの父が首領をつとめる獅子の咆哮と魔狩りの剣は折り合ひが悪い。ここでわざわざそれを教える必要はないし、エリシアも出来れば言いたくなかった。

「あはははは……。まあ、私はカロルみたいにギルドに属してゐる訳じゃないけどね」

「ふーん、やうなんだ。でもボク、どこかでエリイを見たことがあるような……」

カロルはとくに、未だ答えに納得していないうで、顎に手を当てて何やら考へてゐる。

エリシアにしてみればまつたくもつて思い出さなくていい。まだ本名が知られてないことがせめてもの幸いか。流石に“クレセント”の名は知られては一発だらう。

「ダングレストに住んでるならどこかで見たことがあるって

あはは、と笑ってカロルを見る。苦し紛れな言い訳のよつな気がしないでもないが、これ以外の名案なんてある訳もない。笑いながら冷や汗をだらだらかいていると、見兼ねたコーリが助け船を出してくれる。

「おー、そろそろ行くぞ」

「え、うん。そうかなあ……」

エリシアは真っ先に返事をして、コーリとエステルの後に続く。カロルはまだうんうん唸っていたが、どうやら思い出せないらしい。やがて諦めてエリシアたちの後に付いて歩き出した。そんな彼に気付かれぬよう、ほつと胸を撫で下ろす。カロルが嫌いという訳ではないのだが、出来れば知られたくない。

「あつた！ これがニアの実だよ」

「一つでいいんじゃない？」

「せうだけど、ひとつぢまつするんだ」

カロルが手にしたのは橙色をした鮮やかな果実。一つあればこと足りるはずだが、彼は一つ地面から広い上げた。エリシアの問いに頷いたカロルは、ニアの実を鞄にしまつと持っていたもう一つを地面に置いてすり潰した。瞬間、辺りに立ち込める酷い香り。いや、香りというよりもおこがましい臭氣である。

「へやつ、お前へやつー。」

「ちよつ、何それ！ まるでボクが臭いみたいに」

コーリやエリシア、エステルでさえ、慌てて鼻を摘んで後ろに下がるが、それでもこの臭いはつらすぎる。

この臭いを上手く言葉で表現出来ない。取りあえず臭い。それしか言いようがないのだ。

自分たちですらこの有様なのだ。人間より遙かに嗅覚が鋭いラピードは、それこそ鼻が曲がるくらいに臭いに違いない。

「エッグベアは独特な嗅覚をしてるから、この臭いにつられて来るはずだよ」

「それなら先に言つてください……」

涙目になつたエステルが言つ。『もつともである。せめて心の準備くらいさせて欲しいものだ。』こつちは臭くて堪らないが、本人は結構平気らしい。

エリシアはカロルの服を掴んでひょい、と二人の背後に移動させた。

「臭いからカロルは私たちの後ろを歩いてね。前だと風で臭いが流れてくるから」

「えー！ 酷いよ、エリイ」

「エリイの言つ通りだな。この臭い、ラピードにはキツすぎるだろ」

魔物に詳しいカロルが言つのだから、この臭いがエッグベアをひきつけるのはまず間違いないだろう。

ラピードもコーリに同意するよつと、もしくは切実にわん、と鳴

いた。

皆に押し切られたカロルは仕方なく、しょんぼりと一行の後ろを歩いていた。すると悠々と前を歩くラピードを見て何か思う所があつたらしい。

「やつ言えばラピードって爪とか牙があるのに何で武器使つてるの？」

「そりや、爪や牙は犬の武器だからな」

「ラピードって犬じゃないの！？」

爪や牙は犬の武器だと事もなげに言つユーリに、ラピードを除く三人が驚きの声を上げたのは言つまでもない。ラピードは犬にしては少々大きい気もするが、どこからどう見ても彼は犬だ。犬に違ひない。犬しか考えられない。

「ラピードは自分の事を犬だと思つてない。ラピードはラピードって生き物だ。だから必要とあらば、道具だつて使う」

まるでその通りだと言わんばかりにラピードは胸を反らせて、わんと鳴いた。確かに普通の犬よりずっと賢いし、戦い方だつて随分と様になつてゐる。

もしやユーリはラピードの言いたい事が分かるのだらうか。

「確かにラピードからは氣位のようなものが感じられます」

エステルは妙に納得してラピードを尊敬の眼差しで見つめる。

しかしキラキラした目で見つめるエステルにラピードは、全く興味を示さない。どうやらエステルには興味がないらしい。

「そつ、だから敬えよ?」

「そ、そなんだ……」

取り留めのない話をしながら森の中を行くが、一向にエッグベアは姿を現さない。カロルの、と言つより臭いのお陰で他の魔物は寄つて来ないようである。

「何だか嗅覚が麻痺して臭くない気がするかも」

もう鼻を摘まなくともあまり臭くない。慣れとは恐ろしいものだが、それはそれで困るのだ。服に臭いが付いても分からぬだろうし。

試しに袖を近付けて臭いを嗅いでみたが、臭くはない……と思つ。どうやらエステルも同じ考え方に行き着いたらしい。エリシアと同じように服を気にしている。

「そうですね。でもそれはそれでちょっと……」

「でしょ。カロルもそう思わ」

エリシアが振り向いた瞬間だった。カロルの背後に彼の倍はある強大な影。ユーリもエステルも、カロルでさえも気付いていない。後から考えれば、銃を使うとかいくらでもやり用はあつたと思う。だけどこの時は咄嗟にカロルの体を突き飛ばしていた。

「えつ？」

突き飛ばされたカロルは訳が分からず尻餅をつくと、エリシアと

強大な影 エッグベアを見比べる。

そんな力口ルの目の前で、彼の代わりにエッグベアの一撃を受けたエリシアの体が宙に浮いた。

「エリイ！！」

不甲斐ない自分

カロルの悲痛な叫びにユーリとエステルは振り向いた。二人の視界に入ったのは、熊を思わせる魔物 エッグベアと尻餅を付いたカロルに、宙を舞うエリシア。一瞬で状況を理解し、走り出したユーリは反射的に彼女の体を受け止める。

既に意識はない。大きな外傷は見当たらないが、軽い脳震盪でも起こしたのか。抱え上げたエリシアの体は信じられないくらい軽かつた。

「エステル、ラピード！ エリイを頼む」

ユーリはエリシアをエステルに預け、カロルに迫るエッグベアの爪を受け止める。

そして返す刃で斬り付けた後、闘氣を纏わせた拳を突き上げ、エッグベアの巨体を吹き飛ばした。

「牙狼撃！ 何してんだカロル！ 立て！ 立つて戦え！！」

エリシアが自分を庇つて倒れたことで半ば放心状態だつたカロルは、ユーリの叱咤で我に返り、武器を構える。立ち上がろうとするエッグベアに向けてハンマーを力の限り振り上げた。

エッグベアの巨体が激しい音を立てて、木の幹に叩き付けられる。ほぼ同時に、とどめとばかりにユーリの剣から放たれた青い衝撃波がエッグベアの喉笛を深くえぐつた。断末魔の悲鳴を残して巨体が倒れる。二人はエッグベアが絶命したのを確認するとエリシアの元に走った。

「エリイは？」

「怪我は治しました。たいしたことはないと思います。もう少しすれば目が覚めるかと」

それを聞いて一先ず安心する。枕代わりにラピードの体に彼女の頭が乗せられているが、ラピードは嫌がる様子はない。それどころか心配そうにエリシアの顔を覗き込んでいた。

エスティルが大したことはない、と言つのならその通りだろう。少々世間知らずとは言え、彼女は優秀な治癒術の使い手だ。

「分かった。エスティルとラピードはエリイと周囲を警戒してくれ。カロル、エッグベアから爪取るぞ」

言つなりカロルを連れ、もはや動かなくなつたエッグベアから爪を切り取つた。作業を終えたユーリは、カロルが浮かない顔をしている事に気付く。

「どうした？」

「ボクのせいなんだ。エリイはボクを庇つてエッグベアに……」

カロルは今にも泣きそうな顔で、眠るエリシアの顔を見つめている。不注意では済まされない。もしあの時、彼女が突き飛ばしてくれなければ、カロルが危なかつた。大怪我をしていたかもしれない。だが代わりにエリシアが怪我をしたのだ。自分の代わりに。

己を責めるカロルにユーリは少年の頭に手を置き、乱暴に髪を搔き回した。

「気持ちは分かるが、あんま気にはすんな。エリイだつてきつとそう

頭がぼうとして何も考えられない。エリシアは自分が今、誰かに背負われているらしいとは理解出来たが、それ以外、何も考えられなかつた。考える氣さえ起きない。

背中から感じる体温はあつたくて、覚醒したばかりだと云つのに、心地よいまどろみに誘われる。まるで父のようだ。

いや、そんなはずがない。違う。父がここにいるはずがない。導かれるように目を開ければ、目の前は黒一色で染まつっていた。これは誰だらう。

慌てて顔を上げれば、コーリの頭が見える。覚醒したばかりで頭はまだ付いて来ていないが、ここがまだクオイの森の中だと云つことはエリシアにも分かる。

「あ、れ……」

「エリイ、目が覚めたんですね。気分はどうですか？」

前を歩いていたエステルが心配そうに尋ねる。カロルを庇つてエッグベアの前に立ちふさがつたところまでは覚えているが、その先是思い出せない。大方気絶したのだろう。

意識を失つた人間を運ぶには、エステルもカロルにも無理だ。背負つているのは消去法でコーリになるのは分かる。分かるが、意識

を失った人間が想像以上に重いこともエリシアは理解していた。つまり、凄く重かつたのではないだろうか。

「あ、うん。大丈夫。……ユーリ、ごめんね。重かつたでしょ」

「いや、全然。むしろ軽いぞ。ちゃんと飯、食つてんのか？」

「食べてます！……カロル？」

思わず敬語で叫んだエリシアは、カロルが浮かない顔で自分を見ていることに気付いた。

その顔は幼い頃、無茶して父に助けられた自分とつりふたつだから。カロルはきっと自分を責めているのだろう。

「エリイ、ボク……」

「カロルは悪くないよ。私が力不足だったから。それにたいした怪我もなかつたから、結果オーライってことでどうかな？」

「あん時はマジ焦つたぞ。あんまり冷や冷やさせんなよ

カロルの言葉を遮つてエリシアは言つ。彼は悪くない。注意力が散漫になつていたのは自分たちも同じなのだ。

カロルを庇つて意識を失つたのも自分が未熟だったから。

冷や冷やさせんなよ、と言われ謝ることしか出来ない。ユーリの言つ通りで、本当に申し訳なかつた。頭が上がらない。

カロルも納得してくれたよううん、と頷く。それにいつまでもユーリの背中を借りている訳にもいかない。現にユーリの両手は塞がっているから、魔物が出て来ても戦えないのだ。体の方ももう何ともないし、これ以上甘えることは出来なかつた。

「コーリ、もう大丈夫だから降ろして」

「コーリ・ローウェル！ エリシア・フランベル！ お前たちがこの森にいることは分かっている！ 大人しくお縄につけーーー！」

するとその時、森の奥から不吉な声が聞こえて来た。コーリやエリシアにしてみれば、出来ることなら係わり合いになりたくない彼ら等である。そうだ、そうだー、と聞きたくない同意の声までおまけに付いている有様だ。

声の主たちは間違いなくルブラン、アデゴール、ボッコスの三人組。ここまで職務に忠実な騎士も珍しいが、ほとほと迷惑な話である。

恐らく、仕事と言つよつ執念なのではとエリシアは思つ。本当に偽名で名乗つておいて正解だつた。流石に騎士団に本名を教えるほど、エリシアとて馬鹿ではない。

「あいつら……結界の外まで追いかけてきやがつたな」

「なに！？ どうしたの！？ コーリたち何に追われてるの

「騎士にちよつと、ね……話せば長くなるけど、罪状は脱獄に誘拐、かな？」

呆れたような顔をするコーリを見て、カロルの顔がひきつる。エリシアは彼に説明しようとして、うまい言葉が見つからず、ありのままを話した。

きつとエステルを連れ出したことは誘拐になるのだつ。それが彼女の意思だろうが何だろうが、彼等にはお構いなしだ。器物破損よりずっと恐ろしい。

「えつーーー！」

さくらと口にしたエリシアにカロルは無理もないが、驚愕のあまり口を開いて鯉のようにぱくぱくさせている。騎士に追われるなんて滅多にない経験だらうから。

「つて事でカロル、エステル走るぞ」

「え、私は？　コーリ、コーリつてば！」

コーリはエリシアをおぶつたまま、森の中を駆け抜けて行く。その後をカロル、エステルが続き、ラピードがしんがりをつとめる。エリシアの切実な叫びが最後まで聞き入れられなかつたのは言うまでもない。

そのままハルルに戻つてきたまでは良かつたが、結局、パナシーアボトルが完成したのは空に金の月が輝く夜になつてからだ。

街の中央部にあるハルルの樹の前には多くの者が集まつている。長老を始めとして街の人々、コーリとエリシア、エステルにカロルもその輪の中心にいた。

「い、いくよ」

大きめの瓶を慎重に抱えたカロルが皆の前に出る。ゆつくりと詮を外すと、中身を汚染された土にまいて行く。液体が地面に落ちた瞬間、土の黒ずみは薄れ、確かに元の土の色に戻つていた。カロルは同じように他の毒に侵された土の浄化を進める。

「結界よ、ハルルの樹よ、どうか蘇つてくれ……」

長老が懇願するように呴いたその時、カロルは全ての液をまき終わった所だった。それとほぼ同時にハルルの樹がまばゆい光を放つた。

だがそれも一瞬のこととて光は直ぐに消え、樹からは命あるものが放つ気配が感じられない

人々の中から落胆の声が上がる。カロルが慌てて足元を見た。確かに毒素は消えている。これで結界は治るはずなのに。それとも手遅れだったのか……。

「ど、どうして……薬の量が足りなかつたの？ それともこの方法じゃあ……もう一度パナシーアボトルを！」

カロルの言葉に長老は静かに首を振つた。材料であるルルリエの花びらがもう残つていないので。

皆、長老の言葉に希望を失い、重苦しい沈黙がその場を支配する。誰も動かない中、一人だけハルルの樹の前に歩み出る者がいた。

「そんな……そんなのって……」

「エステル？」

ユーリが訝しげにエステルを見るが、氣にもせず樹に近付いて行く。そしてもう一人、樹に近付く影があつた。エリシアである。

「昨日、治してあげるつて約束したのに」

「お願い……」

前に出たエリシアはエステルの傍らに寄り添つように立つ。エス

テルは目を閉じ、胸の前で両手を組んだ。彼女がいつも治癒術を使う時と同じように。

刹那、エステルとエリシア。一人を中心として風が巻き起こった。同時に一人の体が光に包まる。更に足元には金色の輝きを放つ複雑な魔法陣まで描かれているではないか。

「咲いて……」

「大丈夫。任せて」

「エステル！ エリイ！」

一いつの声が重なった時だつた。一人から生まれた美しい光が樹を照らす。

次の瞬間、長きにわたり街を見守り続けていたハルルの樹が人々の前にあつた。蘇つたのだ。ハルルの樹が。

確信なんてなかつた。でも何故かエステルと一緒に何とかなると思つたのだ。

エリシアは自分に起こつた異変を他人事のように感じていた。ふと隣を見れば腕を組んだエステルも同じように光つてゐる。

エステルと自分の声が重なつた時、樹は生氣を取り戻した。しおれていた葉が生き生きと伸び、くすんでいた幹も本来の色を取り戻す。

だがハルルの樹の変化はそれだけではない。今にも綻びそうな薔薇が生まれたのだ。そして薔薇は鮮やかな薄紅色の花を咲かせた。

明かりが照らす中、吹いた優しい風が花びらを街全体に運んで行く。薄紅色の花びらが舞う様は幻想的であるで雨のようだつた。瞬く間に街全体が薄紅色に染まる。

二人の少女によつて引き起こされた光景に人々は呆然と見入つて

いることしか出来なかつた。

「今のは治癒術なのか……」

「これは夢だろ……」

目を開けたエステルの体が傾き、尻餅をつくように座り込んだ。同じようにエリシアも立つていれらず堪らず隣に腰を降ろした。誰よりも先に我に返つたユーリは真つ先に二人の元へ駆け寄る。

「二人とも大丈夫か」

「あ……ユーリ？」

「大丈夫……じゃないかも」

頭は痛いし、ふらふらするし気分もいいとは言えない。そして様子を見る限り、エステルも同じらしい。白状すれば喋るのさえ億劫だ。術を使いすぎた時や疲れた時に似ていた。

エリシアもエステルもユーリの手を借りて何とか立ち上がる。その間に街の子供たちや長老にまで深々と頭を下げられた。

お札を言われるのは苦手な訳ではないが、何分自分が何をしたのかも分からぬのだ。カロルが嬉しそうに手を挙げ、ユーリも同じように手を合わせてハイタッチした。

「ユーリ」

「フレンのやつ、戻つて来たら花が咲いててびっくりだろうな。ざまあねえな」

一行がハルルの樹から離れ、宿を取ろうと街の入り口近くまで来ていた時に“それは”ハルルの樹がそびえる街の中心部にいた。

揃いの装束に身を包んだ奴ら。赤いゴーグルが闇の中で嫌に目立つ。彼等は城でザギと共にいた男と全く同じ不気味な服装をしている。すると男たちがこちらに気付いた。狙いはフレンではなかつたのか。

「あ、あれ……城で見た」

「ちつ……フレンだけじゃなくてオレたちも狙われてるのかよ。オレとエリイはアスピオに行く。エステル、お前はどうする？ 自分で決める」

狙われているのはフレンだけではなく、自分たちもらしい。城でのザギという男を退けたからだろうか。難易せよ、長居は出来ない。ここで戦えば街の人々に迷惑が掛かるだろうし、恐らく彼らを退けたとしても意味はない。新手が送られるだけだ。

ユーリに問われ、俯いていたエステルは顔を上げる。そこには今までの彼女にはない決意が、輝きがあった。

「……行きます」

「カロルはこれからどうするの？」

「ボクはカプワ・ノールに……」

カプワ・ノールはハルルから少し行ったエフミードの丘を越えた先にある。アスピオとは少し方向が違う。

ならば名残惜しいがここでお別れと言つことか。色々あつたが、エリシアはカロルが嫌いではない。むしろ面白い子だと思う。

魔狩りの剣だと関係ないのに自分は初め、変な先入観に捕われて力口ル自身を見ようとしていなかつた。

「ここでお別れだね」

「え、あの、その……急ぎの用事でもないし、もう少し皆に付いて行つてもいいかなあつて」

「決まりだな。あいつらに追いかれる前に行くぞ」

これ以上、ハルルに滞在すれば街の人にも迷惑が掛かる。今はまだ気づかれていないが、それももう限界だろつ。ハルルは決して広くはない。

月が天高く昇る中、一行は闇に紛れてハルルの街を後にした。

「太陽見れねえと心までねじくれるのかね。魔核盗むとか」

いくら何でもそれは身も蓋も無い気がする。とは言つても、魔導士といつもの割とコーリの言つ通りなので、口には出せなかつたが。

結局、エリシアたちがアスピオに辿り着いたのは夜が明け、陽が高くなつてからのことだつた。学術都市の名で呼ばれるアスピオは、洞窟の中に作られた珍しい街である。

ただエリシアも知識として知つてゐるだけで、来たことはなかつた。何故ならアスピオは帝国直属の都市な訳で、許可証がなければ入れてさえくれないのである。

その事実をすっかり忘れていたエリシアは騎士たちとの会話での事を思い出した。

「中に知り合いいるんだけど駄目か？」

「正規の訪問手続きをしていたのなら許可証が渡つてゐるはずだ。その知り合いとやらからな」

機転を利かしたコーリに、エリシアは拍手を送りたい気分である。これならばもしさ、と思つたが、門番の騎士から返つて言葉は実にそつけないものだつた。

その辺りは流石に徹底しているらしい。簡単には入らせてもうえない。

「いや、何も聞いてないんだけど。入れないってなんなら呼んで来てくれ」

三人は黙つて状況を見守ることしか出来ない。

許可証がない？ じゃあ入れません、さよならで終われる訳がなかつた。モルディオの事は勿論だし、フレンがいる可能性だつてある。それにここで諦めれば他に手がかりはない。ハ方塞がりだ。

「知り合ひの名前は？」

「モルディオ」

ユーリがモルディオの名を口にした瞬間、騎士たちが固まつた。恐ろしいものを見るよつた目つきでエリシアたちを見つめている。リタ・モルディオはよほど変人なのだろうか。もし彼らが兜を被つていなければその顔は青ざめていたことだろう。

「や、やはり駄目だ。書面にしてやり取りし、正式に許可証を交付してもらえ」

「ケチくせ……」

エリシアが思わず呟けば聞こえていたらしく、凄い目で睨まれた。流石に口には出せないので、この地獄耳、耳年増！ と心の中で叫んでやる。気が立つてしているのはきっとこの間で気を張りっぱなしだつたからに違ひない。

いつあの黒装束が追つてくるか分からぬ。夜の闇の中、ずっと張り詰めた状態で疲れないほうがおかしいだろう。まともな休息を取つていないので。

「あの、フレンと言つ騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「施設に関わる一切は機密事項です。些細な事でも答えられません」

それでも引き下がれないエステルは、せめてフレンが来たかどうかを確かめたくて尋ねる。

しかし正に取り付く島もない。モルティオと聞いた時のさつきの動搖は、どこに行つたのだろう。思わずそう言いたくなるほど落ち着きようだ。

些細なことでも答へられない。騎士の「つい」とも分かるが、ここで引き下がつてなるものか。

「フレンが来た目的も？」

「勿論です」

騎士は自信満々に答えるが、それはフレンが来たことを認めるということだ。完全に墓穴を掘つている。しかも彼はそのことに気づいていない。随分おめでたいものだ。

そこでエリシアはすかさず、何か言われる前に早口でまくし立てる。

「ふーん……なら、フレンはここに来たつて答えていいのね」

「あ、そつか」

エリシアの言葉にカロルも合点がいったように頷いた。顔は兜で隠れているために分からないが、騎士たちは相当焦つているようである。フレンが来た目的も、と尋ねて勿論です、と答えればフレンがアスピオに来たことを肯定してということだ。

言つては悪いがかなり間抜けである。油断し過ぎとも言えるだろう。

う。

「し、知らん！ フレンなんて騎士は……」

騎士は慌てて首を振るが今更遅い。どんなに取り繕つても無駄だ。しかしフレンがここに来たと言つことは分かつたが、中に入れてくれる訳もなく。邪魔そうにしつしつと追い払われる。犬じやあるまいし。まあ、確かにラピードは犬ではあるが。

「じゃあせめて伝言だけでもお願い出来ませんか？」

「やめとけ、ここに何言つても時間の無駄だつて」

墓穴を掘つたのが余程聞いたのか、騎士たちは頑として口を割らない。エステルは伝言だけでもと言うが、コーリが言うように時間の無駄だらう。どうせ伝えてくれないだらうし、フレンがまだアスピオにいるかどうかも分からぬ。

エリシアたちは仕方なく彼等の前から去り、別の入り口を探すこととした。

無理なら最終手段である。ちなみにコーリもエステルも、エリシアにも諦めるという選択肢はない。

「都合よく開いちゃいないか」

ドアノブに手をかけたコーリは落胆の声を上げた。

三人がいるのは騎士たちから少し離れた扉の前。恐らく魔導士たちが出入りするための裏口だらうが、そう都合よく鍵が開いている訳などなく。もし開いていたのなら、あまりに間抜けな話である。

「最終手段の強行突破してみる？」

正面が無理な以上、最初にユーリが言つたように壁を越えるしかない。が、エステルが納得してくれるかどうか。実際やるとなれば、絶対に駄目です、と言われるに決まっている。

エリシアが振り向くと、エステルは案の定、こう言つた。

「フレンが出てくるのを待ちましょう。お願いして中から開けてもらえれば……」

「フレンが出て来たとしても、モルディオは出てこないだろ。それにあいつ、この手の規則にはとことんうるさいから頼んでも無駄だつて」

エステルが言つたことは分かる。ユーリも考えたが、フレンの性格を思い出して一瞬で却下した。眞面目で思慮深いのは彼の長所だが、それは言いえれば頑固で融通が利かないということ。

魔核泥棒を捕まる、とちゃんした理由はあってもフレンは首を縊に振らないだろう。おまけに知り合いであるエステルを城から連れ出したのだ。何を言われるか分からぬ。

「もし本当に魔核泥棒なら絶対に出てこないわね。それにフレンだつてまだ街の中にいるかどうかも分からぬし……」

話に夢中になる三人は、先程からカロルが扉の前でなにやらしている事に気付いていなかつた。一番先にカロルに気付いたエステルが首を傾げて聞く。

「カロル、何をしてるんです?」

「よし、開いたよ

鍵が外れる小さな音がしたかと思うと、一仕事を終えたカロルが胸を張り、輝く笑顔を向けている。

エステルは鍵を開けて入ることに難色を示したが、結局、見張りは嫌らしく入ることに合意した。

“そこ”は正しく本の海だった。見渡す限りの本棚な天井近くまで届いており、魔導器やエアルについての小難しい専門書で溢れ返っている。一方で子供向けのお伽話やら、娯楽本など様々な本が本棚の中に乱雑に納まっていた。

皆一様に似たような作りのローブを纏い、手に持った本を読み耽っている。

自分のことで精一杯なのか、それとも他人に注意を払う気がないのか、裏口からお邪魔したコーリたちを咎める者はいない。

「なんかモルディオみたいのが一杯いるな……」

「魔導士って言つても殆どが研究に時間を費やしてるみたいだから、依頼以外で外に出る人は少ないよ？」

呴くコーリにエリシアが言つ。ばんばん実戦で魔術を使う、なんて早々ない。魔導士＝研究家でもあるからだ。アスピオは帝国直属の施設であるため、国の依頼があれば街を出るが、言い換えればそれがなければ外に出る機会は少ないらしい。

そんな中、エステルが一心不乱に本を読んでいる一人に話し掛けた。

「あの、少しお時間よろしいですか？」

「ん、なんだよ？」

エステルの声に気づき、眼鏡を掛けた青年は、やや迷惑そうな顔

をしながら顔を上げる。明らかに邪魔いやがつて、という顔だが、彼女は気づかない。そこは流石のエステルだ。

エステルは不機嫌そうな彼など物ともせずに尋ねた。

「フレン・シーフォといつ騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「フレン？ ああ、あれか、遺跡荒らしを捕まえるとか言ってた…」

…

「今、どうしたー？」

彼の話からすると、どうやらこの街には居ないらしい。つまりタインミングが悪いことに、入れ違いだつたということか。興奮気味にエステルが問い合わせるが、彼の返事は素つ氣ないものだつた。

「さあ、研究に忙しくてそれどこのじやないからね」

「そ、そりですか。……」めんなさい

「じゃあ、失礼するよ」

再び本に視線を落とそうとした青年の肩をヨーリが捕まえる。フレンがここにいないことは分かつたが、ヨーリの方はモルディオの居場所を聞いていない。

今のヨーリにはフレンの居場所よりモルディオの方が重要だ。

「ちょ、待つた。もう一つ教えてくれ。ここにモルディオつて天才魔導士がいるよな？」

ヨーリが“モルディオ”と口にした瞬間、彼も門番の騎士と同じ

ように顔が引きつり、恐らくな無意識だろうが後退った。リタ・モルティオ。弱冠一五歳の少女は一体どんな人間なのか。根っからの研究者である彼らが恐れるほど的人物。

「な！ あの変人に寄！？」

青年はと言うと、いくらなんでもそこまで驚くのだろうか、と言ふくらい素晴らしいリアクションを披露してくれた。一行の会話は筒抜けのはずだが、皆自分の世界に籠っているため、誰も気付いていない。

それがあまりよく思われていないであらう。“モルティオ”の名を聞いても同じだ。

「流石有名人、知つてんだ」

「……あ、いや、何も知らない。俺はあんなのとは関係ない……」

青年はエリシアたちが居ることも忘れて、うわ言のように繰り返す。よっぽどトラウマでもあるのだろうか。少なくともズレた眼鏡を直す余裕がないくらい動搖しているらしい。

「変人って知つてる時点で関係ないはないんじゃない？」

青年はエリシアの呆れた声にも反応せず、そそくさと一行の前を去ろうとする。

しかしそれは問屋がおろさない。コーリがまたもや青年の肩を掴んで引き止めた。

「まだ話は終わってないって。どこにいんの？」

「奥の小屋に一人で住んでるから勝手に行けばいいだろ！」

半ば吐き捨てるよつと、青年は再び持っていた本に目を落とした。もう話し掛けるなど暗に言つてはいるようだが、用件が済んだ以上、こちらとて邪魔する気はない。

「サンキュー。早速行くか」

アスピオは学術都市と言われるだけあり、他の街とは一風変わつてゐる。街中を歩きながらエリシアは辺りを見回した。洞窟の中に作られているため太陽の光は届かないが、代わりに淡い青の光が照明として設置されている。

建造物もいかにも図書館のよう堅苦しい学術都市と言つた作りだし、狭い場所に作られているせいか階段が多い。

だがそのお陰で意外にも早く、天才魔導士が住むと言う小屋が見つかつた。他の建物と比べ、明らかに浮いていたからだ。

「ここみたい。絶対入るな、モルディオつて書いてるし」

エリシアが指差したのは小屋の扉。

そこにはでかでかと『絶対入るな、モルディオ』と殴り書きがしてある。コーリはおもむろにドアノブに手を回し、開けようと試みるが鍵が掛かっていたため開かなかつた。

「開かねえな」

「普通逆だよ、コーリ。開かないなら魔術で壊してみる?」

「エリイが怖いです……」

「なに、悪党の巣に乗り込むのに遠慮なんていらないって」

しかしそこでヒリシアは術を使おうとして止める。ユーリはモルディオの顔は見ていないと言つていたが、それは本当にモルディオなのだろうか。アスピオの魔導士たちは殆ど街を出ることがない。おまけに皆、研究大好き人間である。果たしてそんな者たちが下町で盗みを働くだろうか。脱獄に誘拐、不法侵入まで加われば本当に洒落にならない。

モルティオの小屋にて

「だ、駄目です。」これ以上罪を重ねないでください

「なら、ボクの出番だね」

一人焦るエステルを尻目にカロルは、言うな呑や扉を簡単に開けてしまった。その鮮やかな手際はとても十一歳の少年とは思えない。一体どこで習ったのだろうか。意外な特技だ。

エリシアも簡単な鍵なら開けるが、いつも上手くは出来ないし、時間もカロルより掛かる。

「カロル、魔狩りの剣なんか辞めてそっちの仕事に就いた方が向いてない……？」

「ま、ちょろいもんだね」

ヨーリはつかつかと扉を開けて中に入つて行く。完全に不法侵入だが、全く気にしてないらしい。エリシアも心を決めてヨーリに続く。こうなれば自棄だ。もうなんでもこいである。

エステルはとうと、信じられないといった面持ちで一人を見つめていた。鍵を開けてアスピオの中に入つた時でさえ、渋つていたのだから驚くのも無理は無い。

「ええい、脱獄に誘拐までやつちやつたんだから、今更不法侵入なんて怖くないんだから！」

「待つて！ ボクも行くよ～」

「あ、待ってください！ もういいじていい……」

カロルもコーリとエリシアに続き、最後まで泣っていたエステルも結局は入ることになった。小屋の中は一言で表すなら、まるで泥棒にでも荒らされたかのような有様だった。

一階建てのようだが、部屋の端には本棚から抜かれた本が山になつて積まれており、殴り書きされたメモやくしゃくしゃになつた紙などが床に散らばっている。

「すっごい……。こんな感じじゃ誰も住めないよ~」

足の踏み場もない床をどうにか進みながらカロルが呟く。実際そのモルディオが住んでいるのだから、住めないは間違いだ。だがカロルがそう言いたい気持ちも部屋を見れば分かる。これでは何がどこにあるかさっぱり分からぬではないか。正に本の海である。

「その気になりやあ、存外どんなとこだつて食つたり寝たり出来るもんだ」

「住めば都とも言つしね。カロルだつてダングレスト、好きでしょ？」

エリシアやカロルの故郷、ギルドの巣窟と言われるダングレストはトルビキア大陸に位置することから、湿気が多く、雨が降ることも多い。他の大陸から来た者には鬱陶しいらしいが、住み慣れた者はそうは思わないのと同じことだ。それが当たり前、だから。つまりモルディオにとっては普通なのだろう。

「あ、うん。そう言つことか

「ユーリ、先に言つことがありますよー。」

中に入つてまで礼儀を気にするのはエステルらしい。勝手に入つている時点で礼儀も何もあつたものではないと思つのはエリシアだけだろうか。

しかし言い出したエステルはこれで結構しつこい。律儀なのだろうが、対応に困るのも確かだつた。彼女の気持ちも分かるのだが、エリシアとユーリは既に指名手配されているのだ。

「こひにちは。お邪魔しますよ」

当のユーリはまるつきり感情の籠つていない、かなりの棒読みである。既に玄関から小屋の中に足を踏み入れているのは実にユーリらしい。エリシアもただ立つていてる訳にも行かず、ユーリの後に続いて中にお邪魔した。

「鍵の謝罪もです」

「もつ勝手に入った時点で謝つても無駄な……」

「そんなことないです！ ね、エリイ」

エリシアが振り向けばエステルがにっこりと笑つてゐる。反論は許しませんと顔に書いてゐるではないか。

反論しようにもこれ以上、エステルの笑顔は怖くて見ていられない。普段、物腰は柔らかだし、怒ることもない。なのに時々怖い時があるので。

「え、そんな……はい、そうですね」

「カロルが勝手に開けました。『ごめんなさい』

コーリの口から出た声はまたも棒読みだった。エステルも先にコーリに言つべきではないだろうか。真つ先に小屋に入つたのは彼であるが、思いつつも声には出せない訳で。

カロルがコーリだつて入るうとしてたじちゃん、との声が飛ぶがコーリは当然の如く無視。

「実行犯はカロルでコーリが主犯だと思つけど見つかったら、私とエステルも不法侵入で捕ま……やつぱり、これ以上罪が増えるのは嫌ー」

「バレなきやいいんだよ。バレなきや」

頭を抱えるエリシアにコーリが軽く答える。
だが悲しいかなエリシアの神経はコーリほど凶太く出来てはいいな。それがなくても元騎士にして、ギルド、獅子の咆哮の首領レオン・クレセントの娘と言う立場なのに。捕まつて父に迷惑を掛けただけはしたくない。

「そう言つ問題じやない。バレなきや良いんなら、全ての犯罪者は捕まらないからー」

「ま、そりやそうだな。これだけ騒いでも何もないことは好都合。証拠を探すとするか」

コーリはそう言つと遠慮無しに小屋の中を調べて行く。ある意味、彼はマイペースなのだろう。人の話など全然聞いていない上に棚の中まで探る始末だ。

やつぱり自棄だと、自棄しないと腹を括ったエリシアも同じように調べて行く。すると壁立てかけてあつた黒板が目についた。

「これは……」

「術式、ですね」

答えたのは未だ入口に佇むエステル。黒板には田墨で白い紋様が描かれている。それは一般人にはとても理解出来ない複雑なものだ。エステルの言つように描かれているのは術式だらう。魔導士なのだからおかしなことではないが、それにしても難しい。

「中に入ったらどうだ？ 寒いだる、そー」

ゴーリの声に振り向けば、エステルはまだ入口に佇んだままだった。

少々頭の固い彼女はエリシアのよつに割り切れないらし。ややゴーリに批難めいた眼差しを向けている。

「これ以上、罪を重ねるわけにはこきません」

「やうだけど、入口に留ても中に居ても変わらないと黙つよ

エリシアの言葉にもエステルは頑として首を縦に振らない。その頑なさは彼女の長所でもあるのだろうが、少し融通を利かせていいのではないかと思う。そんな所も真面目な幼なじみにそつくりで、ゴーリは苦笑した。まだエステルの方がフレンよりはマシだらうが。入り口にいても中にも不法侵入した事実は変わらない。もはや中にも入り口にいても一緒である。けれど、気持ちの問題なのだう。

「不法侵入は、禁固一年未満、又は一万ガルド以下の罰金、です」

「それにしても、きつたない字。ボクの方がキレイに書けるよ」

厳しい口調で言ったエステルだが、別の場所を調べていたカロルがやつて来たかと思うと、黒板に書かれた字を見つてぽつりと呟く。黒板に書かれた字は所謂殴り書きだ。よほど焦っていたのか擦れて消えている部分まである。何にしても汚いというのは確かだ。

「字が汚いやつは心がキレイって言つけどな」

「なら、ボクは字も心もキレイなんだよ。エステル、術式の意味、分かる?」

そう返す辺り、カロルも結構言づらしい。カロルに言われたエステルはじつと黒板を見つめている。エステルは魔術に詳しいと言つてもその知識は殆どが治癒術だ。

だが黒板に掛けられた術式は見た所、どうも魔導器のものようだから、博識な彼女にも分からぬかもしれない。魔導器分野は専門的すぎて流石のエステルもお手上げか。

「火を使った術式に似てますが、わたしにはちょっと……エリィはどうですか?」

「多分だけど、イラプショーンに凄く似てる。でも魔導器の術式だと思つんだけ……」

「こればかりは専門の知識が無ければ分からぬ。エリシアとて魔導器の知識はそれなりにあると自負しているのだが、専門的過ぎて

殆ど理解出来なかつた。

三人が黒板に注意を向けていたその時、ラピードが山積みになつた本の山に向かつて警戒心を露にした。

「えつ？ めやあああ～つ！ あう、あう、あうあうあつ」

カロルが声を上げたのと、本の山から白いローブ姿の小柄な人間が現れたのはほぼ同時だつた。叫び声を上げて尻餅を付いたかと思うと、カロルは驚くくらい素早い動きでユーリの後ろに隠れた。ローブの人物がカロルを一瞥すると低い声で呟く。

「…………」

両手を胸の前で組み合わせる 魔術を扱う前の予備動作。眼前に赤い、火の魔術を表す魔法陣が浮かんだ。

ローブの人物の意図を一瞬で悟つたユーリとエリシアは横に飛ぶ。ちなみにカロルは一人、魔術の射程上に残されたまま。

「え？ あれ、ちょっと！」

「泥棒は……」

虚空に描かれた魔法陣が一際強い輝きを帯びる。今になつて状況を悟つたカロルはこめかみを冷や汗が伝うのが分かつた。今から避けようとしても間に合わない。避ける前に魔術が発動するだろう。

「うわわわっ、待つてえつ！」

「ぶつ飛べ！」

待てと言われて待つはずもなく、魔術は完成した。カロル目掛け打ち出される無数の火炎球。火属性下級魔術、ファイアボールだ。距離がある程度あつたなら、避けることも可能だろう。

しかしカロルとローブの人物とは正に目と鼻の先、当然逃げる暇なんてあるはずもなく、火球はカロルを直撃した。白煙が生まれ、エリシアたちの視界を覆い隠す。

「ぎやああ！ げほげほ。ひどい……」

白煙が収まつた後、尻餅をついたカロルの姿がある。火炎球と言つてもちゃんと威力は抑えてあつたようで、軽い火傷程度だろう。髪や服も焦げていない。多少、焦げていたとしてもそれはまあ、仕方がない。

エリシアはカロルに近寄ると両手を胸の前で組んだ。

「 聖なる活力、ここに。ファーストエイド。はい、いつちょ上がり」

「……ちょっと、あんた！？」

術の完成と共に金色の粒子が集束する。

すると突然、一部始終を見ていたローブの人物が驚きの声を上げ、エリシアの腕を掴んだ。その拍子に頭をすっぽりと覆つっていたフードが外れる。

「お、女の子っ！？」

エステルが驚くのも無理はない。エリシアも声に出さないだけで十分驚いていた。フードの下から現れた顔は整つてはいるが、幼さを残した少女のものだった。

赤み掛かった茶の髪に、エステルよりも少し濃い緑の瞳。だが彼女にはその年頃の少女にあるはずの子供らしさ、が全くと言つていいほど感じられない。

次の瞬間、いつの間に移動したのか、ユーリが鞘から抜いた剣を少女の喉元に突き付けていた。

「こんだけやれりやあ、帝都で会つた時も逃げる必要なかつたのにな」

少女は詠唱から魔術の発動までのタイムラグが驚くほどに少ない。ここまで円滑に魔術を発動出来るなら帝都で追い詰められた時も逃げる必要はなかつたはず。

すると少女は訳が分からないと言つた様子でユーリを睨み付けた。

「はあ？ 逃げるって何よ。なんで、あたしが、逃げなきゃなんないの？」

ユーリが剣を納めるのと同時に少女は掴んでいたエリシアの手を離してくれた。もしやと思うが、初見で気付かれたのだろうか。そう言えばリタ・モルディオは魔導器研究の第一人者とも聞いたことがある。エリシアもまさか年端もいかぬ少女だとは思わなかつたが。彼女は不快感を隠そつともせずに長身のユーリを睨みつけていた。

「そりや、帝都の下町から魔導器の魔核を盗んだからだ」

「いきなり、何？ あたしが泥棒つてこと？ あんた、常識つて言葉知つてる？」

「まあ、人並みには」

どの口が言うかとも思ったが、ここでそれを口にしても仕方ない。少なくとも常識というものが僅かでもあれば、人の家の鍵まで勝手に開けた上にあまつさえ、家の中を漁るという行動は起こせまい。

それはエリシアも同じであるため、偉そうなことは口が裂けても言えない。これしか方法がなかつたとは言え、犯罪であることには変わりないので。

「勝手に家に上がり込んで、人を泥棒呼ばわりした場句、剣を突き付けるのが人並みの常識！？」

この場合、人並みと言うよりヨーリの常識ではないだろうか。話によるとモルディオなる人物は、ヨーリとラピードに見付かって真っ先に逃げたと言うし、今の彼女の行動を考えるとそのモルディオが少女と同一人物とは考えづらい。

それに何より、先程からラピードが彼女に反応したのは、本の山から出て来た一度きり。つまり彼女は犯人ではない。もし彼女が魔核泥棒なら、ラピードは激しく吠え立てているだろう。

無論、ヨーリも気付いているだろうが、何か考えがあるに違いない。エリシアは大人しく、話の行方を見守ることにする。

「ちょっと、犬！ 犬入れないでよ！」

「犬じゃなくてラピードね」

エリシアの指摘にラピードはわん、と一聲鳴いた。それだけは譲れないらしい。

エステルも氣位のようなものを感じると熱心に言つてたし。ラピードには重大な問題に違いないが、彼女にしてはどうでもいいことだ。

「どうでもこいわそんな事…」

「どうでも良くなつて、ラッパーだよ。ね、ラッパー」

その通りだと呟わんばかりに、元ラッパーでもある一度、わんと呟えた。

すると玄関から移動したエスティルが少女の前に立つて頭を下げる。それには流石の彼女も戸惑つたらしく、無意識だらつが後ずさつた。

「な、なによ、あんた」

リタ・モルティオ

「わたし、エステリー、ゼット、言います。突然、こんな形でお邪魔してごめんなさい！……ほら、コーリとエリイ、カロルも」

ほら、と促すエステルには有無を言わせぬ何かがある。不可抗力とも言えなくないが、取りあえず謝った方が良さそうだ。勿論、エステルが怖いため、である。

コーリは謝る気はさらさらないらしく、あさつての方向を向いているが、カロルとエリシアは素直に頭を下げた。

「え、ごめんなさい」

「えーっと、勝手に入つてごめんね」

「で、あんたらなに？」

二人の謝罪を聞いた少女は盛大にため息をついた後、そもそもの理由を尋ねた。彼女の疑問はもつともである。

勝手に家に上がり込まれたかと思えば、見ず知らずの相手に剣を突き付けられる。少女が下町の魔核が盗まれた件と全く関係ないのなら迷惑極まりない話だ。

追い出されないだけまだマシではないか。

「えと、ですね……このコーリとエリイ、エリシアと言う人は、帝都から魔核泥棒を追つて、ここまで来たんです」

「それで？」

正確に言えばエリシアは帝都から魔核泥棒を追つて来た訳ではない。

そもそも一度、ダングレストに帰ろうと思つていたのだが、何の因果か脱獄の上に誘拐まで。当分は帰れそうにない。というか帰りたくないトエリシアは切実に願つ。怖くてとても父の顔を見られないからである。

コーリたちは知らないだろ？が、エリシアにしてみれば本当に恐ろしい。

「魔核泥棒の特徴つてのが……マント！ 小柄！ 名前はモルディオ！ だつたんだよ。で、実際のところどうなんだ？」

「ふうん、確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ。でもそんなの知ら……あ、その手があるか。ついて来て」

コーリが見た『モルディオ』は小柄で白のローブを纏つていた。顔も見えなかつたため、性別も分からなかつたらしい。言つまでもなく年齢も。

少女もといリタ・モルディオは呆れた様子でコーリを見ると、何かを思い出したようであ、と間の抜けた声を上げた。顎に手を当てた考え方込む姿勢でコーリの前を通り過ぎる。

「はあ、お前、意味わからんねえつて。まだ、話が……」

「いいから来て。シャイコス遺跡に、盗賊団が現れたつて話、せつかく思い出したんだから」

リタは有無を言わぬ口調で不服そつと言つてコーリを遮つた。そう言えば街中でも盗賊団がどうのとか騎士がどうのとか話していた気がする。

大方騎士といふのもフレンのことなのだろう。リタが口にしたそのシャイコス遺跡に下町の魔核を盗んだ盗賊団なる者たちがいるのか。

「盗賊団？ それ、本当かよ」

「協力要請に来た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ」

間違いないでしょ、と言葉を返すとリタの姿が本の海に消える。そこで四人と一匹は、リタに聞こえないよう細心の注意を払つて小声で話を始めた。

やはりエリシアが街で小耳に挟んだ（盗み聞きともいふ）話に間違いはないらしい。

『その騎士つてフレンのことでしょうか？』

とエステル。十中八九フレンに違いない。盗賊団を追うという選択をしたのならまずフレンに間違いないだろう。コーリやエステルから聞いた『フレン』は盗賊団を放置しておくような人物ではない。しかし何故かコーリが憐れむような顔をしているではないか。

『……だな。あいつ、フラれたんだ』

『フラれたは流石にフレンが可愛いそつだと思うけど。普通に断られたって言つてあげればいいのに』

フラれたんだ、は流石に身も蓋もない。リタは天才魔導士なのだから、遺跡に同行を願うのも頷ける。魔導士の存在は必要だろうし、そもそもアスピオは帝国の直属の都市だ。要請を受ければ断れないはずなのだが。

何にしてもリタが断つたからと言つて、別に嫌いだからという理由ではないはずだ。

『そう言えば、外にいた人も遺跡荒らしがどうとか言つてたよね?』

これはカロルだ。魔導士たちの会話に耳を傾けていたのは何もエリシアだけではない。頼りなく見えてもその辺りはギルドに属しているだけあつてしつかりしている。

盗賊団の目的はまず魔核^{コア}だらう。確かに辻褄は合つてているような気もするが……。

『つまり、その盗賊団が魔核を盗んだ犯人つてことでしょうか?』

エステルが一つの可能性にたどり着いたその時、リタがエリシアたちの前に現れた。

魔導士たちが纏うローブから着替えたリタは何と言つかよく言えばエキセントリック、悪く言えば奇抜とも言える服装である。赤み掛かった髪を飾るゴーグルにどこか異国情緒溢れる赤と黒を基調とした服。胸元にはペンやメモ帳、ルーペやメジャーが入られており、右腕には細長い黄色のリボンが巻かれていた。

「相談、終わつた? じゃ、行こ!」

言つなり、リタは一人すたすたと玄関に向けて歩き出す。聞いたところによると彼女は十五歳らしいが、これではエステルよりよほどしつかりしている。……本人に言えれば怒られそうであるが。

「とか言つて、出し抜いて逃げるなよ」

「来るのが嫌なら、ここに警備呼ぶ? 困るのはあたしじゃないし

「コーリが何気なく言つたが、リタは表情を変えることなく、一いちひらを振り返つた。緑の瞳からは何の感情も読み取ることは出来ない。警備を呼ぶといつらのなら、彼女は本当にそうするだろ。」

警備を呼ばねば困るのはエリシアたちであつてリタではない。自分たちは勝手にこの街に入ったのだから、見つかれば即追い出されるだろ。やつと手がかりを掴みかけた時にそれは不味い。

コーリも何が賢明か、分かつてゐるはず。

『行つてみませんか？ フレンもいるみたいですし』

『流石に警備呼ばれたら色々と面倒だしね。戦つにしても逃げるにしも都合、悪くなつちゃうよ』

エステルとエリシアは沈黙しているコーリに言葉を掛ける。警備をきり抜けられない、と言つことではない。ただここで逃げるにしても戦うにしても不利な状況にしか転ばないのだ。

その点、リタに同行すれば運が良ければフレンに会えるかもしれないし、下町の魔核を盗んだかも分からぬ盗賊団を探ることが出来る。

「捕まる、逃げる、ついてくる。どすんのかさつと決めてくれない？」

「分かつた。行つてやるよ」

リタの催促にコーリはしばらく考えた後、頷いた。元から選択肢などないに等しいのだ。ならば答えは一つしかない。リタが、シャイコス遺跡は街を出て更に東よ、と教えてくれる。

一行はリタの小屋を出て、裏口へと向かった。

「あんたたち、 じんな所から来たの…… 呆れた」

呆れた、 リタは本当に呆れたような顔をした。

こんな所というのはエリシアたちが入つて来た裏口である。 先程の騎士たちとのやり取りもあって、 正面から出れないからだ。 いくら騎士たちが抜けっていても、 彼らとエリシアたちが話したのはつい先ほどだ。 流石に気づかれてしまう。 その点、 裏口からならばれる心配はない。

「正面には怖いお兄さんたちがいるからな」

「やうやう。 ^{自己}紹介してなかつたよね。 私はエリシア。 リタって呼んでもいい？」

「冗談半分でユーリが言つ。 怖いと言つたか間抜けというか。 彼らとて先程見た顔をすんなり通してくれるほど馬鹿ではあるまい。 エリシアは戸惑つリタの手を取つて柔らかく微笑んだ。 今までの態度を見れば冷たくあしらうかと思ひきや、 リタは何も言わずに硬直している。

「どうしたの？」

不思議に思つて顔を覗き込もうとするが、 ぱつと顔を逸らされた。 僅かに頬が赤く染まつていたのは間違いではないだろう。

「別になんでもない。 あんたの、 エリシアの好きに呼んだら？」

「そうする」

魔導器しか信じない。そう思っていたのにリタは、エリシア手を振り払うことなんて出来なかつた。にこにこと能天氣そうに笑つているエステルしてもそうで、人間なんて信じられないはずなのに。リタは己の中に生まれつつある思いに戸惑つていた。

アスピオから東に進むこと少し、一行の前に朽ち果てた遺跡が現れた。遺跡としての形は何か保つていて、崩れ落ちていてるものも多い。雑草は伸び放題で、手入れも全くと言つていゝ程されない。地面には石柱が無造作に転がつてしたり、石畳はひび割れいたりと、まさに古代遺跡と言つた雰囲気だ。

皆の前を歩いていたリタが立ち止まって振り返る。

「「「」」がシャイコス遺跡よ」

「騎士団の方々、いませんね」

エステルが辺りを見回しても人の姿はないし、気配も感じられない。

しかしラピードが見下ろした地面、石畳ではなく土が露出した部分には確かに複数の足跡がある。ただ靴跡だけで騎士か盗賊か判別出来る訳ではないため、意味がないと言えば意味がない。

「騎士団か、盗賊団か、その両方ってところだろ」

「でもこの辺り一帯に人の気配ないよ?」

いくら気配を消すことに長けていたとしても、騎士はともかく、盗賊が完全に気配を絶てるとは考えづらい。と未だ熱心に足跡を見つめている四人に、痺れを切らしたリタが急かした。

「ほら、じつち。早く来て」

「モルティオさんは暗がりに連れ込んで、オレらを始末する気だな」

ユーリが茶化すようにリタを見る。ユーリには他人の神経を逆なでする才能があるのだろうか。無論、知つていてやつてているのだろうが、徹底ぶりにエリシアも苦笑せずにはいられない。

リタもリタで、しばらく黙つたかと思えば、幼さの残る端整な顔に不気味な笑みを貼付けていた。

「……始末、ね。その方があたし好みだつたかも」

「不気味な笑みで同調しないでよ」

「な、仲良くしましょうよ」

リタの不気味な笑みを目撃したカロルは、つつ込まずにはいられない。といふかそこは同意してはまづくないのだろうか。エステル

がそれでも何とか場を取り繕おうと微笑むが、その笑顔は完全に引き攣っている。

エリシアは纏まりと言つものが全くない（当たり前だが）一行に人知れずため息をつく。ラピードもエリシアに同意するようになん、と鳴いた。

大切なものの

それから暫くの間、辺りを探したが、一行は盗賊団はおろか騎士の姿さえ見つけることは出来なかつた。しんと静まり返つてゐる。遺跡はそれなりに広いのだが、見通しはそれほど悪くない。起伏の上に立つてゐる訳ではないので、ある程度見通しが利くのだ。だと説うのに入つ子一人見つけられない。本当に騎士や盗賊たちがいるかどうかも疑わしいほど静かである。

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もつと奥の方でしようか?」

「ううん。あれじゃあ進めないし、倒れた柱や石像を動かした形跡はないから違うと思つ」

「一リや咳き、エステルが向ける視線の先、エステルもつられるよつにそちらを見る。遺跡の奥の方は足場が悪い上に石像や柱が倒壊しているために進めない。それに騎士団にしても盗賊団にしても、障害物を動かした形跡もないし、奥に進んだとは考えづらいだろう。では秘密の地下室もあるのだろうか。エリシアが「冗談交じりにそう考へていいと。

「まさか、地下の情報が外にもれてんじやないでしようね。ここ最近になつて、地下の入り口が発見されたのよ。まだ一部の魔導士にしか知らされてないはずなのに……」

どうやら推測は当たつていたらしい。それまで沈黙を貫いていたリタが顎に手を当て、唸るように呟く。

だが情報が漏れるにしても一部の魔導士にしか知らされていないのなら、内通者がいると考えるのが自然だ。でなければ情報が漏れるはずがない。

「それをオレらに教えていいのかよ」

「しょうがないでしょ。身の潔白を証明するためだから。……発掘の終わった地上の遺跡くらい盗賊団にあげてもよかつたけど来て正解だつたわ」

オレらに教えていいのかよ、と言つたのは腕を組み、石の壁に持たれ掛かるような格好のコーリ。機密に近い情報を何の関係もない自分達に教えていいのか、ということである。身の潔白を証明するためとは言え、会つたばかりの自分たちに。

リタの言葉から地上の遺跡の発掘は終わっているものの、地下は発見されたばかりで発掘も途中なのだろう。もし盗賊たちが地下室を知っているのなら、貴重な魔核を奪われるかもしれない。

「地面に擦れた跡があるねなら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんでしょう？」

リタが見つめている地面を力口ルも見下ろした。そこには重い物を引きずったような形跡。その上には翼を広げた女神像。雨に打たれ、所々欠けた箇所もある。

力口ルは自らの倍以上もある翼を背負った女神像を動かそうとするのだが、少年一人の力で動くほど、石像は軽くはない。びくともしないし、息が上がるだけだ。

「はあ、はあ」

「ほら、行くぞ。もうちつと頑張れよ」

「あ、う、うん……」

見兼ねたコーリも石像の台座に手を添えて手伝う。するとカロル一人では微塵も動かなかつた象がゆっくりと後退して行く。最後の力を込めれば、なんと女神像の下から地下へと続く階段が表れた。しつかりとした石造りの階段にも入口で見たものと同じ、土のついた足跡が残つている。この足跡からも騎士か盜賊か判断するのは難しい。

「階段、ね。同じように複数の足跡。間違いないわね」

「カロル、大丈夫ですか？」

エリシアは階段の下を覗き込んで見るが、薄暗くてはつきりと見えない。

エステルが座つたまま、肩で息をする少年を心配する。息も絶え絶えと言つた様子なのにカロルは、こ、これくらい余裕だよと言い張つた。無理をしているのは誰の目にも明らかだが少年の小さな矜持だろう。

そんな気遣いとは無縁のリタはカロルなど気にもとめず、さっさと階段を下りていつてしまつた。

「じゃ、行くわよ」

遺跡の地下は思った以上に広く、下には土の代わりに水が湧き出でおり、その上に石の通路が作られている。かなり頑丈に作られているようで、入り口近くに重大な欠損は見つけられない。

地上から差し込んだ光が青い水面を照らしていた。何者も侵しがたい静謐な雰囲気。遺跡を目にするのも、何もかも初めての体験であるエステルは地下に広がる光景に息をのみ、ゆっくりと周囲を見渡す。

「遺跡なんて入るの初めてです……」

「ヤー、足元滑るから気をつけて」

周囲ばかりで足元が田に入つていないエステルのために、リタがさりげなく注意を促す。エリシアはそんな彼女を見て密かに笑った。やはりリタは優しいと思つのだ。それが表に出ないだけで悪い子ではない。

嬉しそうなエリシアや何か言つたそなユーリを含めた皆の視線に気付いたらしく彼女は、ふいと顔を逸らした。照れているのだろうか。

「なに見てんのよ

「モルティオさんは意外とおやさしいなあと思つてね

「うん、やっぱリタは優しいね

エリシアの言葉に今度はコーリが頭を抱えた。彼にしてみれば皮肉のつもりで、彼女のようには褒めたつもりはない。エリシアも変な部分でどこかエステルと通じる所があるらしい。

勿論、エリシア本人はそのことに気づいてすらいなかつた。鋭いことが多い彼女なのに、こんな所は鈍いのだ。

「はあ……やつぱり面倒を引き連れて来た気がする。別に一人でも問題なかつたのよね……」

「リタはいつも、一人でこの遺跡の調査に来るんです？ 犯とか魔物とか、危険なんじやありません？」

明らかに皮肉だと分かるコーリにふんわりと笑うエリシア。屈託のない彼女の笑みに少々毒氣を抜かれたリタは深いため息をついて視線を遺跡に向けた。

いくら魔導士といえど、犠牲や魔物の相手をするには一人では危険なのではないのか。そもそも魔術とは仲間の援護があつてこそ真価を發揮する。詠唱中はどうしても無防備になつてしまふからだ。そうエステルが尋ねると、リタは事もなげにこう答えた。

「何かを得るためにリスクがあるなんて当たり前じやない。その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

躊躇いなど微塵もない。リタははつきりと言い放った。犠牲もなしに何かを手に入れようなんて思わない。そう言いたいのだろう。とても十五歳の少女の言葉とは思えない。そう言わせるだけの何かを彼女は背負つているのだろうか。

「傷つくるのがリタ自身でも？」

「そうよ」

「悩む」とはないんです？ 躊躇うとか、……」

歩き出したリタにエステルは尚も言葉を投げ掛ける。自分は悩んで、躊躇つてばかりだとエステルは思つ。城から抜け出す時も、フレンを追うと決めた時も。だからエステルは迷いがなく、己の信念を持つリタが羨ましかつたのかもしれない。

それは何もリタに限つたことではなく、エステルやヨーリもそれに当てはまる。彼女たちは自分がすべきことを分かつてているのだろう。迷つてばかりの自分とは大違いだ。

彼女らは彼女らで、自分は自分だと分かつてているのに、聞かずにはいられなかつた。

「何も傷付けずに望みを叶えようなんて悩み、心が贅沢だから出来るのよ。それに、魔導器はあたしを裏切らないから……。面倒がなくて楽なの」

リタは息継ぎもなしに言い切ると、一足先に歩いて行つてしまつ。心が贅沢だから。エリシアはリタの言葉を噛み締めるように、頭の中で反芻する。言い切つたリタはどうか寂しそうに見えた。

「なんか、リタって、凄いです。あんなにきつぱりと言い切れて」

「何が大切なのか、それがはつきりしてんだな」

ほうとリタを見つめるエステルにヨーリが頷く。十五歳とは信じられないほど彼女は強い。何が大切かを理解している。大の大人でも難しいものを少女は分かつているのだ。

「私の勘違いかもしぬれいけど、少し悲しい顔してた。魔導器なら裏切らないって……寂しいよ」

「……そうだな」

コーリもこの時ばかりは真剣な表情で同意した。

十五歳の彼女に魔導器は裏切らないとまでいわしめる理由。エリシアには想像も付かないが、一人でいる寂しさなら分かる。魔導器なら裏切らない。確かにそうだろう。

でも魔導器は人のぬくもりを与えるはくれない、話しかけてはくれない。エリシアたちは何とも言えない気持ちでリタの後を追つた。

神秘的な遺跡内には盜賊団の姿も騎士団の姿もない。いるのは魔物だけで結局、誰も見かけぬまま、遺跡の奥まで来た時だった。目の前に見上げるほどに強大な何か。遺跡を守るゴーレムに似た、それよりも大きい人型魔導器に、弾かれたようにリタが近寄る。魔核がないのか、それとも壊れているのか、動く気配はない。

「あ、おい！」

「うわ、なにこれ？！　これも魔導器？」

あまりの大きさにエステルが目を輝かせ、カロルは驚いて後退る。エリシアもゴーレムは見たことはあるが、これほど巨大なものは初めてだ。

リタは早速、己の世界に入っている。

「動く気配ないし、動力ないのかな？」

「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器が欲しいな」

「ちょっと不用意に触らないで！　この子を調べれば、念願の自立術式を……あれ？　うそ！　この子も魔核がないなんて！」

ユーリが無造作に人型魔導器に触ると、じつくり眺めていたはずのリタから鋭い声が飛ぶ。

本来なら魔核が嵌まっている部分は空だ。何者かにより既に取り外された後である。もしや話にあつた盗賊団の仕業かも知れない。リタががくりと肩を落とし、人型魔導器全体が見渡せる真正面に移動した。

するとその時、何かの気配を察したラピードが激しく吠え立てる。

ラピードの視線は、右上部に設置された通路に向けられており、そこにはアスピオの魔導士であることを表す白いローブにフードを被つた人物がいた。

背格好からすると男だろうが、彼はエリシアたちに気づいて体を震わせる。何か後ろめたいことでもあるのだろうか。怪しいと言つほかない。

「リタ、お前のお友達がいるぜ」

「……友達ではないと思つよ」

どう考へてもリタの友人なはずがなかつた。そもそもここへは盗賊か騎士を追つてきたのだ。騎士であるはずがないし、アスピオの魔導士なら堂々としていればいい。それが出来ないということは、

残る答えは一つ、盗賊である。

軽口を言い合つコーリとエリシアに構つ」ことなく、リタはローブの人物を鋭く睨み付けた。

「ちょっと！ あんた、誰？」

「わ、私はアスピオの魔導器研究員だ！ お前たちこそ何者だ！ ここは立ち入り禁止だぞ！！」

ローブの人物 男はわめき立てるが、リタは全く気にした様子はない。むしろ更に冷ややかな視線を男に向け、ふんと鼻で笑つた。そう、この時点でおかしいのだ。裏口から入り、魔導士にリタについて聞いた際、彼は言つっていたではないか。まるで珍獸でも見るような顔で、あの変人に客だと。

「はあ？ あんた救いようのない馬鹿ね。あたしはあんたを知らないけど、あんたがアスピオの人間なら、あたしを知らないわけないでしょ」

「流石リタね……」

腰に両手を当てて呆れるように、馬鹿にするように言つ（実際どちらも正しいが）。無茶苦茶とも言えなくがないが、彼女らしいのかもしれない。

堂々とあたしを知らない奴はアスピオの人間じゃないとまで言い切つたことから、きっと自覚はあるんだろうとエリシアは勝手に納得することにした。

「くつ！ 邪魔の多い仕事だ。騎士といい、ここからといい……」

男は懐から取り出した魔核を人型魔導器に嵌める。するどどうだろ？。うんともすんとも言わなかつたゴーレムの瞳に光がともつたかと思うと、その太い腕で目の前にいたリタを吹き飛ばした。

一瞬のことで反応出来なかつた少女の体が思い切り壁に叩き付けられる。

真つ先に近寄つたエステルが慌てて治癒術を施す。掲げた手から溢れた暖かい光が傷付いたリタの体を癒した。ただ治療の様子を見守つていた少女はある事に気付き、思わずエステルの武醒魔導器が付けられている左手を掴んだ。

「あんた……」

エリシアに続き、エステルまでも同じなのか。リタがずっと追い求めていた公式の手掛けりが目の前にある。

手を捕まれたエステルは訳が分からず、あたふたするばかり。

「え、えつ？」

「エステル、リタ！ 大丈夫？」

人型魔導器が無差別に振り回す腕を避けながら、エリシアが声を掛ける。

一杯一杯なカロルからはサボつてないで手伝つてよ！ と涙声で叫ばれる始末だ。とその隙に男が必死に横を通り過ぎて行つた。ユーリやエリシアが止める間もない。

「あ、はい！ 大丈夫です」

「あ～、もうしょうがないわね！ 速攻ぶつ倒して、あの馬鹿を追うわよ！」

追おうにも人型魔導器を放つて置けない。リタは仕方なく立ち上がり、魔術の詠唱に入った。

「堅牢なる守護を、バリアー」

人型魔導器の攻撃を受け止めようとしていたユーリの耳にエスティルの声が届き、眼前に透明な壁が生まれた。

しかしそれは直ぐに見えなくなる。ついで衝撃。

だが結構な質量を受け止めたにしては衝撃は思ったよりも少なかつた。これも魔術のお陰か。

ユーリは、一步後ろに下がると魔導器に向けて剣を振り上げた。生まれた衝撃波がまともに足に直撃し、人型魔導器はバランスを崩してうずくまる。

致命的なダメージには成り得ない。ちつと舌打ちし、仕方なく距離を取つた。それはラピードやカロルも同じでユーリ同様、後ろに下がつたまま、攻めあぐねているようだ。

「さあやかなる大地のざわめき、ストーンブラスト！」

「舞い踊る風靈、刹那にて軌跡を描け、ウインドカッター！」

ユーリが後退した時を見計らい、リタが手にした鮮やかな帯が翻り、エリシアの周りに魔法陣が浮かぶ。二人の声が重なつた瞬間、人型魔導器の足元から噴出した無数の石つぶてが直撃し、刃となつた一陣の風が切り裂いた。

ダメージも限界を超えたのか、支えを失った巨体がぐらりと倒れる。地響き共に人型魔導器は前のめりに倒れたまま、ぴくりとも動かない。

エリシアは、もう戦う必要がないことを悟るとゆうくつと息を吐いた。

「終わったね」

「ああ、何とかな」

「魔導器の悪用は許さない！」

リタだけが言いようのない怒りにわなわなと拳を震わせていた。好き勝手に、私利私欲に魔導器を扱う男が許せなかつた。魔導器はただの物ではないのに。

動かなくなつた人型魔導器に手を当て、謝るとリタは倒れた背中に上る。

類は友を呼ぶ

「あとは動力を完全に絶てば……『メンね……』」

「リタも早く！」

「わかつてゐわよ！」

カロルが急かすが、リタは作業に集中すると完全に魔導器の動力を絶つた。動力が無ければ流石の魔導器も動けない。本来ならこんなことはしたくないし、気は進まないが仕方なかつた。また悪用されないという保証はどこにもないのだ。

悪用されるくらいなら、動力を止めた方がいい。魔導器が悪事に使われるなんて、リタには耐えられないのである。

「あんたも早く！」

「でも、フレンは……」

既に歩き始めたエリシアやユーリ、カロル。鋭いリタの声が飛び、エステルだけが後ろ髪を引かれるのかその場から動けずにいた。気持ちは分からぬではないが、ここにはフレンどころか騎士たちの姿も見えない。遺跡にはいないと考えるのが自然だろう。

「あんな怪しい奴が、うるうるしているところに騎士団なんていねえって」

「きっと入れ違いになつたのよ。今頃アスピオに戻つてゐるかもしない。急いで！」

まだ迷いのあるエステルに、ユーリとエリシアが言つ。

急がなければ男に追いかけない。ここで逃がしてしまえば、魔核泥棒に繋がる手掛かりはもうないのだ。ユーリの友人と言うくらいなら、フレンは心配いらない。彼のことより先に男を捕まえなれば。

それに、遺跡にいないのなら、入れ違いでアスピオに戻った可能性だつてある。

「は、はい！」

「あの子を調べたら自立術式を解析できたのに！」

慌てて頷いたエステルに対し、リタは悔しそうに歯を噛み締めている。

人形の魔導器をじっくり調べられなかつたのがよほど心残りだつたのだろう。エリシアは自立術式が何かは知らないが、リタの疑いを晴らすためにも男を逃がす訳には行かないはず。

しかしリタにとつてはそんなことより、魔導器を調べる方が大事なのだろうが。

「そのためにボクらを戦わせたの？」

「当たり前でしょ」

カロルの指摘にリタは何を当たり前の事を、と腕を組む。

良くも悪くも根っからの研究者なのだろう。調べるためにも動きを止めるしかない。つまりリタの目的ははじめから魔導器を調べることにあつたのだ。

エリシアもここまで来ると呆れを通り越して感嘆すら抱きそうで

ある。エリシアはぽかんと口を開けたままのカロルに言葉を掛けた。

「研究者って結構そんな人多いみたい。私の知り合いもそうだし。一々気にしてたらもたないよ? カロル」

「で、でも極悪人だよ!」

「泥棒探しのついでに手伝つてもらつただけよ」

「口じゃなく足使えよ!」

極悪人だとカロルが言えば、リタは悪びれもなく言う始末。結局は三人共ヨーリに怒られる始末だ。はい、と頃垂れ、あるいはどうでも良さそうに返事をした三人は、大人しくヨーリとラピードの後を付いて行つたのだった。

早足で逃げて行つた男の姿を見つけたのは、入口に近い所である。

「あ、いたよ!」

巨大な蛙の魔物に壁際に追い詰められ、情けない悲鳴を上げていた。面倒臭いことこの上ないが、仕方がない。

ヨーリが剣を抜き、先陣を切つて駆けて行く。その後にラピードとカロルが続き、エステルとリタ、エリシアが後ろからサポートすると言ういつものパターンだ。

「蒼破!」

青い衝撃波が敵を薙ぎ、エリシアが銃口から放たれた光とリタが詠唱した炎の球が蛙を吹き飛ばした。先程の大型魔導器ならまだしも、蛙に対して遅れば取らない。

瞬く間に戦闘を終わらせた一行は、今の魔物のよつに男を壁際に取り囲んだ。

「魔核盗んで歩くなんてどうしてやうつかしら……」

男の真正面に立つたリタが歯を噛み締め、不気味な笑いで手に手を掛けた。

震え上がった男が次に出した声は可哀相に（自業自得だが）、完全に裏返っていた。

「ひいいっ！ やめてくれ！ や、やめて、もう、やめて！ 僕は頼まれただけだ……。魔導器の魔核を持つてくれば、それなりの報酬をやるって」

「お前、帝都でも魔核盗んだよな？」

コーリがいつもより低い声で尋ねれば、男は必死に頭を振つて否定する。エリシアの目から見ても、今のコーリは迫力があった。犯罪者も思わず冷や汗をかくほどの怖さである。

男もすっかり震え上がったのか、腰が抜けて立てないらしい。

「帝都？ お、俺じゃねえ！ デ、デテッキの野郎だ！」

「そいつはどう行つた？」

「今頃、依頼人に金を貰いに行つてるはずだ」

これほどまでにべらべらと喋つてくれる様は、見ていて面白い。依頼人が誰かは知らないが、使つ人間はもう少し選んだ方がいいだろう。完全に人選ミスだ。

あるいは絶対にばれないと言つ自信から来るものなのか。どちらにせよ、こちらにすれば助かつたのだが。

「依頼人だと……。ビニのビニつだ？」

「ト、トリム港にいるつてだけで、詳しいことは知らねえよ。顔の右に傷のある、隻眼で馬鹿に体格のいい大男だ」

ユーリが尋ねれば、男は簡単に依頼人について吐いた。

男が口にした依頼人の容貌にまさかそんな筈はと思う。あそこは褒められたようなものではないが、そこまで最低な事はしないのではないか。

だが特徴全てが一致している。冷静にと言い聞かせてエリシアは問うた。

「……その男、片腕義手じゃなかつた？」

「あ、ああ、そうだ！」

男は頭を何度も振つて頷く。やはり予想通りだつた。魔核を盗ませていた依頼人。

いや、まだ駄目だ。まだ弱い。証言だけでは証拠には成り得ない。決定的な証拠がなければ……。

唇を噛むエリシアにユーリが口を開いた。

「エリイ、心当たりあるのか？」

「分かんない。確信がないし……今は考え方で」

「……分かつた。何にせよ、そいつが魔核を集めてるつてことかよ

……」

右手を頬に当て、考へ込む仕種をするエリシアにコーリも畠とは言えない。

黒幕が誰であろうとコーリのやることは変わらない。下町の魔核を取り戻す。

けれど、それはエリシアも同じだ。例え男が言う依頼人が自分の想像通りの人物だとしても、ユーリの手伝いを止めるつもりはない。エリシアがレオンの娘なら、嫌でも関わるのだから。

「何か話が大掛かりだし、すごい黒幕でもいるんじゃない？」

「カロル先生、冴えてるな。ただのコソ泥集団でもなさそうだ」

難しい顔をするカロルを見て、ユーリが笑う。帝都でも随分魔核が盗まれていたことを考へると、依頼人が手に入れた魔核は相当なものだ。大量の魔核を使って何をしようとしているのか。その辺りはまだ分からぬが、ろくなことではないのは確かである。

盗賊団なんてちやちな集団ではない。ならば組織か。

「騎士も魔物もやり過ごして奥まで行つたのに！ ついてねえ、ついてねえよ！」

男はそう言つて悔しげに地団太を踏んだ。

そんな事を言われても自業自得だから仕方ない。その執念を別の所に活かせばいいのではないか。そう思つたが、エリシアは魔核泥棒に言つてやる氣にもならなかつた。

「そりやあ、ご愁傷様。それより自分の置かれてる状況、理解してる？」

「騎士？ やつぱりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！ くそー！ あの騎士の若造め！」

騎士と聞けば何でもフレンの名を出すエステルにエリシアは思わず苦笑する。騎士という一文字に反応するのだろうか。

くそー、とまたも叫び出す男に「ふちん」と何かが切れた音がした。リタである。我慢の限界に来た彼女は遂に帯を振り上げた。

「……つちやい！」

ばちん、とかなり痛そうな音が遺跡内に響き渡る。振り上げられた帯が男に命中したのだ。

案の定、男は完全に意識をなくして床に転がった。ぴくりとも動かない。

氣絶しちゃったよ！ どうすんの！？ と慌てるカロルにリタは、ぱたぱたと手を振つて適当に答える。

「後で街の警備に頼んで拾わせるわよ」

「じゃあ逃げないように念を入れとかないと」

悪戯を思いついた子供のように笑うエリシアが取り出したのは捕縛用の縄だ。

コーリの記憶が正しければあれば、城で騎士から拝借したものだろ。まさか残りがあつたとはコーリも思わなかつたが。

街の警備に頼んで拾つて貰うのはいいが、警備が来るまでに逃げられてはたまたものではない。突然荷物から縄を取り出したエリシアに、カロルだけが驚いている。

「何それ！？」

「ん、城で騎士から貰つて来た残り。近くに魔物も居ないみたいだし、大丈夫でしょ」

待つこと約一分。そこには縛り上げられた上にまだ氣絶している男の姿があつた。これなら万が一目を覚ましても自力で逃げる事は不可能である。

遺跡には魔物も徘徊しているが、この辺りの魔物はエリシアたちが通る時に殆ど倒してしまつたため、心配ないだろう。一行は氣絶している男を一人残し、シャイコス遺跡を後にした。

「……肝心のフレンはいませんでしたね」

街道を抜け、一行は薄暗い洞窟に戻つて来た。ぽつりとエステルは呟く。

フレンが遺跡にいるかも知れないと足を運んだまではよかつたが、結局は入れ違いのような形になつてしまつた。エステルにしては無

駄足かもしれない。

しかしエリシアやコーリたちは十分な収穫があつた。魔核を盗んだ、いや、盗ませた者の手がかり。

どうやら事態は自分たちが考える以上に深刻だつたのかもしれない。今は考えてもどうにもならないが、依頼人がエリシアの予想通りの人物なら、大混乱になることはまず間違いないだろ。

「その騎士、何者なの？」

「コーリの友達です」

「ふうん、あんたの友達ね。それは苦労するわ」

リタはコーリを横目にしみじみと言つ。類は友を呼ぶと言つし、幼馴染とも聞いたから、コーリと付き合つているフレンもフレンなのだろう、と。

「でもコーリの友達ならきっと同類じゃない？」

「なんだよ？」

「嫌な顔するつてコトは少しは自覚してるんだ」

笑いを堪えながらエリシアがコーリの方を見る。

すると凄く不機嫌そうな顔で言い返された。コーリは眉間に皺を寄せて腕を組み、あのなあ、自覚してない訳ないだろ、と呆れている。

エリシアは少しだけ意外だつた。てっきりコーリは自覚してないのだと思っていたからだ。表情に出でていたのだろう。エリシアを見たコーリは、少しだけふて腐れたような顔をしている。

「で、なんでそいつがこの街にいるの？」

そんなコーリが面白くてエリシアとリタ、エステルは笑い合いつつ、リタはこほんと咳払いして上手く話を逸らせた。

「ハルルの結界魔導器を直せる魔導士を探して……」

「ああ……あの青臭いのね……あたしの所にも来たわ」

青臭いは流石にフレンが可哀想だらう。まるでキュウリかピーマンではないか。

アスピオは魔導士たちの街。魔導士の中にハルルの結界魔導器を修理出来る人物がいないか探しに来たのだ。

「フレン、元気そうでした？」

「元気だつたんじゃない？」

満面の笑顔で尋ねるエステルに答えるリタはかなりぞんざいだ。だが彼女が気を悪くした様子はない。そうですか、それはよかつたですと無邪気に喜んでいる。

「騎士の要請なら他の魔導士が動くだらうし、もうハルルに戻ったんじゃない？」

「……まあ、結界魔導器のことだしね。長い間結界が無いままじやフレンだつて気になるだろうし」

エステルはしうんと萎れた花のように元気が無くなつた。

結界が無ければ当然、街は無防備になる。結界が直つたことを知らないフレンが急ぐのも無理はないが、ハルルに戻つたとなればまた入れ違う可能性もある。追い付ければいいのだが……。

笑えない冗談

「で？ 疑いは晴れた？」

さらりとリタが言う。

そもそも彼女がシャイコス遺跡に行くことにした理由は、自分の疑いを晴らすためだ。デヂックと言う男が下町の魔核を盗んだ可能性が高い以上、リタの疑いは晴れたと言つていい。

もつとも、ヨーリもはじめから彼女を疑っていた訳ではないだろう。

「リタは、泥棒をするような人じゃないと思います」

「思うだけじゃやってない証明にはならねえな」

「ヨーリが言いたい」とは分かる。

だがリタはエステルの言うように泥棒をするような人間ではない。それはヨーリだって分かっているはず。知つていて、こんな態度を取つてているのだ。同意を求めるようにラピードの方を見れば、勿論だと言わんばかりに青い瞳がエリシアを見返して来た。

「でも……！」

「いいよ、かばってくれなくて。けど、ほんとにやってないから」

「ま、お前は泥棒よりも研究の方がお似合いだもんな」

もう一度リタが犯人ではない言おうとしたエステルを止めたのは他でもないリタ。そんなリタを見たヨーリは、呆れたように苦笑す

る。

遺跡の中で魔核のない魔導器を見つけた時もリタは魔核を盗むくらいなら、その時間を研究に費やす。それが研究者と言つものだと誇らしげに言つていた。

その時のリタは眩しくて、それは、ユーリにもむちゃんと伝わったようだ。

「ユーリは素直じゃないんです」

「だつて捻くれてるもん。多分、私やエステルの代わりに疑つてくれるんじやないかな」

ふふ、と笑うエステルにエリシアも頷く。

本当にユーリは人をお人よしだと言うけれど、彼だつて随分お人好しだ。それでいて、その事を他人に気付かせようとはしない。いつも損な役回りを進んで買って出てくれている。

捻くれてはいるが、ちゃんと自分たちのことを考えててくれているのだ。

「……変なやつ。警備に連絡してくるから、先にあたしの研究所戻つてて」

「つて言つても、あの怖いおじさんたちが通してくれるかどうか

理解出来ないと言わんばかりに首を竦めるリタに、おどけたように騎士を顎で指すユーリ。

通行証が無ければ通せないと言われるに決まっている。またあの裏口から出入りかと思われた時、リタが懐から一枚の紙を差し出した。

何やら小難しい文章だが、紛れも無い通行証だ。アスピオの関係

者に発行されるものだから、これを見せれば騎士も文句なく通してくれるだろう。

「これ持つてって。それ見せれば、通れるから」

「サンキュー」

「いい？ あたしの許可なく街出たら酷い目に合わすわよ」

「はいはい」

リタはいい、と念を押すと、即座にアスピオの街中に消えて行った。

出合ひ頭にファイアボールをぶつ放されたカロルは既にトラウマにでもなつたらしく、冷や汗をかいて青い顔になつてている。

大方、酷い目、と言われてファイアボールで黒焦げにされたことを思い出したのだろう。

「……酷い目つてな、何かな？」

「カロルが体験したやつじやない？ ファイアボールで黒焦げに違いないよ。それともストーンブラストで流血騒ぎか」

「……エリイ、あんまカロルを虐めんなよ」

「分かつてますって」

エリシアは冗談のつもりだは、カロルは更に青い顔になつてている。想像したに違いない。ユーリも一応、注意はするが、本気で注意している訳でもなく、笑いを堪えながらである。

リタの小屋ではなくて彼女いわく、研究所に再びお邪魔したエリシアたちは、大人しくリタの帰りを待っていた。

コーリは床に仰向けになつて寝転つてゐるし、ラピードもすっかりリラックスモードだ。コーリの隣に座つたカロルはキヨロキヨロと中を見回している。

エリシアは始め、本棚にあつた本を拝借して読んでいたのだが、あまりに専門的過ぎて直ぐに断念した。今は仕方なくコーリの隣に座つて銃のメンテナンスをしている。

エステルはどうやら落ち着かないらしく、座ることもせずに何度も行つたり来たりしていた。口ではああ言つていたが、やはりフレンのことが気になるのだろう。

「フレンが気になるなら黙つて出て行くが

「あ、いえ、リタにもちゃんと挨拶しないと……」

見兼ねたコーリが声を掛けるが、自分の行動を自覚していなかつたらしいエステルは、驚いたように首を横に振つた。フレンは心配だが、リタに何も言わずに出て行くという選択肢がないのだろう。

「なら、落ち着けつて」

「コーリの言つ通りだよ。そつきからずつと行つたり来たりしてた。エステル、気持ちは分かるけど焦つてばかりじゃ、いざつて時に失敗するよ」

二人に言われた彼女はようやく歩くのを止め、コーリの前に腰を下ろした。今のエステルは焦つて気持ちばかりが先行している。まづ自分が落ち着かねば始まらない。

二人に言われ、エステルもやつと戯びたのだろう。立ち止まって俯いた。

「そう、ですね……エリイの言つ通りです」

「ユーリとエリイはこの後、どうするの？」

「魔核泥棒の黒幕の所に行つてみつかな。デデッキつてやつも同じとこ行つたみたいだし」

カロルの問いにユーリはしばらく考えた後、一つの考えに至つた。正確な行方の知れない男を追つより居場所が分かつてゐる黒幕を先に叩くべきだ。下町もいつまでも貯めた水で生活が出来るわけではない。早く取り戻さなければ。

魔核泥棒の黒幕の元には下町から魔核を盗んだデデッキもいるはず。

「私はユーリについて行くから。例え火の中、水の中、地獄でも何でも来いよ」

エリシアは銃を弄る手を止めて前を見る。ユーリに向けて任せと、片目をつむつて見せた。

一方のユーリは仕方のない子供を見守るように呆れた、それでいて優しい、柔らかな表情をしていた。

「アテにしてるぜ」

「だったら、ノール港まで一直線だねー」

「トリム港つて言つてなかつたか？」

カロルの発したノール港と言つて一言に首を傾げるコーリ。自分の記憶が正しければ、男はトリム港と言つていたはずだ。それとも聞き間違いだろうか。

「コーリ、知らないんだ。ノールとトリムは一つの大陸に跨がった一つの街なんだよ。このイリキア大陸にあるのが港の街カプワ・ノール。通称ノール港。お隣りのトルビキア大陸には港の街カプワ・トリム。通称トリム港つてね。だから、まずはノール港なの。途中、エフミードの丘があるけど、西に向かえば直ぐだから」

トリム港に行くには、エフミードの丘を通りた先、カプワ・ノールを目指さなければならない。

何故ならトリム港は、今コーリたちがいるイリキア大陸の向かい側、トルビキア大陸にある。という訳で目的地はまずノール港ということだ。

「わたしはハルルに戻ります。フレンを追わないと」

ハルルに戻ると言うエステルは笑っているが、少し寂しそうな顔をしていた。ザーフィアスからずつと共に居たのだからエリシアも同じ思いである。それに彼女を一人でハルルまで行かせるのも心配だ。

さて、どうしたものかと考えれば、エリシアの中にある一つの考えが浮かんだ。

「じゃあ、私たちもハルルに戻らない?」

エフミードの丘を目指すならハルルは通り道だ。ノール港を目指す前にせめてエステルをハルルに送るくらいはしてもいいだろう。そ

れはコーリも同じだつたらしく、ああ、そうだなと同意してくれた。

「え？ なんで？ そんな悠長な」と言つてたら、泥棒が逃げちゃうよ！」

魔核を追つているのはコーリとエリシアな訳だから、何も本人たちよりカロルが焦る必要はないだろ？ 口を開いたコーリも緊張感の欠片もないゆつたりとした口調だ。

「慌てる必要はねえつて。あの男の口ぶりからして、港は黒幕の拠点っぽいしそれに、西に行くなら、ハルルの街は通り道だ」

「えへ、でもお……」

慌てる必要はない。あの魔導士もどきの話からすると、拠点は港だと考えられる。ならば急ぐ必要はないし、ハルルは通り道だ。エステルを送る時間くらいある。

尚も言い淀むカロルにコーリがにやりと笑う。面白いものを見つけた意地の悪い子供のような表情だ。

「急ぐ用事でもあんのか？ 好きな子が不治の病で、早く戻らないと危ないとか？」

コーリの言つカロルが好きな病弱な女の子、を想像したエリシアは堪え切れずに吹き出した。

いくら何でもそれは無いだろ？ そう言えればカロルは、満開になつたハルルの樹を見せたい人が居ると言つていた。それがコーリの言つ彼の思い人なのか。

だがカロルは笑うエリシアにも気付かずに深いため息を付いた。

「そんな儂い子なら、どんなに……」

「待つてるのは言ったけど、どんだけ寬いでんのよ」

振り向けば、そこには「王立ちをしているリタの姿。

怒氣を孕んだリタの声にカロルの身体が僅かに強張る。一番寬いでいたユーリが立ち上がり、リタの前に立つた。そして一言、彼女を疑つた事を詫びた。

「疑つて悪かった」

「軽い謝罪ね。ま、いいけどね、こつちも収穫あつたから」

リタの方は疑われていた事をさして気にしていないうで、ユーリの謝罪も早々にエリシアとエステル、そして立てかけてあつた黒板を見比べた。

年相応の少女の顔ではなく、魔導器研究者としての顔が覗いている。

「リタ?」

「んじゃ、世話かけたな」

彼女の表情からして、本当に何か収穫があつたのだろうか。

エステルが不思議そうにリタの名を呼ぶが、ユーリが別れを切り出したため、リタは結局口を噤んだ。代わりに微かに驚いたような表情をしている。

「なに? もう行くの?」

「もう少しリタと話したかつたけど、急ぎの用事があるから。ありがと、リタ」

まず心配はないだろうが、カロルが言つよつに逃げられてしまつかもしれない。

エリシアは腕を組んでいたリタの手を取り、両手で包み込んだ。リタが満更でもないような気がするのは、きっと自惚れではないだろう。

エステルもエリシアと同様にリタの前に立ち、律儀に腰を折つて一礼をする。

「リタ、会えてよかったです。急ぎますのでこれで失礼します。お礼はまた後日」

「……分かつたわ」

仲良いことは美しきかな

「見送りならいいでいいぜ」

一行がリタの小屋を出て広場まで来た時だ。コーリが後ろを歩いていたリタの方を振り向く。コーリにつられるようにエリシアとエスティル、カロルにラピードも振り返える。

しかし次に返つて来た答えはエリシアやエスティルだけでなく、コーリをも驚かせるものだった。

「そうじゃないわ。あたしも一緒にいく

「リ、リタ？」

「え、な、何言つてんのー？」

エスティルが目を瞬かせ、カロルも後ろに下がつて盛大に驚いた。当然だ。エリシアだつて驚いている。

アスピオの魔導士は言わば帝国直属の研究者である。しかも天才魔導士と謳われる彼女が気軽に旅に出ていいものか。初めは冗談かと思ったが、リタは大真面目らしい。どこか不機嫌そうな顔でエリシアたちを見つめていた。

「まさか、勝手に帰るなつてこいつことか？」

「でも形だけとは言え、リタは一応、帝国直属の魔導士なのよね？ 私たちについて来ていいの？」

リタは元から自分たちについて来るつもりだったのか。コーリの

問い合わせにあつたりトリタは頷いた。うんつて、そんな簡単に！ とカロルのツツ「ミが入るが、完全に無視だ。相手にされない少年が少し不憫に思える。

アスピオの魔導士の規程がどうなつているのかエリシアも知らないが、勝手にアスピオを抜け出していいものか。

だがそれはリタも同じようで顎に手を当て、押し黙つた。考えること数秒、回転の早い彼女の頭は即座に同行する理由を探し出す。

「……んんー……。ハルルの結界魔導器を見ておきたいのよ。壊れままじゃまずいでしょ」

我ながら良い考えだとリタは思う。ハルルの結界魔導器は本当に心配だし、じっくり見てみたい。

本当の目的は彼女らの旅に同行する 正しくはエリシアとエスティル、二人と共にいるためだ。例えここで反対されても、ごり押しでもどうにでもなる。最悪、後をつけてもいい。

それほどまでにリタは真剣だった。何故ならずつと追い求めていた公式の手掛かりが目の前にあるのだから。

何としても旅に同行する。すると返つて来たのは予想外の自慢するようなカロルの声。

「それなら、ボクたちで直したよ」

「はあ？ 直したってあんたらが？ 素人がどうやって？」

眉を潜め、カロルを問い合わせる。魔導器は素人が簡単に直せるものではない。詳しい構造を知らなくても魔導器は使えるが、修理をするとなればリタのような専門家か中身を詳細に把握していなければ不可能。

ここにいる全員、魔導器を修理するだけの知識があるとは思えな

い。

「蘇らせたんだよ。バーンと、H……」

「素人も、侮れないもんだぜ」

「もうそう、何とかなったから、結果オーライかな」

うつかり口を滑らせそうになつたカロルにコーリとエリシアが素早く声を重ねる。一人が機転を利かせたお陰で何とか「まかせた」ははずだ。

相手がどこかの馬鹿ならともかく、やはり相手がリタだと難しい。訝しげな表情でこちらを見つめている。何か隠していることはお見通しといふことだらうか。

「ふうん、ますます心配。本当に直つてるか、確かめに行かないと」

「じゃ、勝手にしてくれ」

半ば呆れ気味にコーリが呟くが、その言葉とは裏腹にコーリは笑つていた。

顔を輝かせたエステルが嬉しそうにリタの手を取る。突然の出来事にリタは目を白黒させるしかない。彼女はいまいち状況を理解出来ていないらしい。

「な、なに!?」

「わたし、同年代の友達、エリイだけなんです! だからリタは二人目ですね!」

無邪気に笑うエステルに驚いたのはエリシアも同じだった。

自分はいつの間にか彼女の友人第一号に認定されていたらしい。勿論、嫌な気なんてしなかった。むしろ嬉しかったと言つていいだろう。

ダングレストには友人もいるが、どちらかと言えば自分より年上ばかりで獅子の咆哮関連で男性が多い。ちゃんととした同年代の同性の友人はエステルだけだ。

「いつの間にか友人認定されたな」

「そうみたい。でも嬉しいよ」

苦笑するユーリにエリシアは微笑んだ。エリシアもエステルもリタも、置かれた環境や身分だつて違う。

でも“友達”にはそんな事、関係ないのだ。

「あ、あんた、友達つて……」

「ここまでしどろもどろになるリタも珍しい。相当動搖しているのだろう。

エリシアは笑いを堪えながら、ユーリの隣から二人の元に移動すると、エステルと同じようにリタの手に両手を重ねた。

「私とも友達になってくれる?」

「え、ええ……」

「よろしくお願ひします」

まだ笑うとまでは行かないが、ほんの少しだけリタの表情が和ら

いでいる。今はそれだけで十分だつた。エリシアとエステルも顔を見合させて微笑む。

「……仲良きことは美しきかな、か」

仲睦まじい三人の様子を見ていたコーリが呟く。
もしかしたら自分とフレンも他者から見たら、あんな感じだったのだろうか。幼い頃、何でも二人で分け合つたことを思い出す。小遣いで買った剣やパン。今は大きく違つてしまつたけれど、その思い出が色褪せる事はない。

コーリの呟きを聞き取つたカロルが首を傾げて尋ねるが、彼は笑つてはぐらかすだけだった。

ハルルの街は無数の花弁で埋め尽くされ、一面薄紅色に染まつていた。本来なら土があるはずの部分にも花弁が積もり、歩くために

は搔き分けて進まなくてはならない。

ひらり、と一枚の花びらがエリシアの前を舞い落ちる。

「げつ、なにこれ、もう満開の季節だつて？」

「へへ～ん、だから言つたじやん。ボクらで蘇えらせたつて

薄紅色に染まつた街と、中央にそびえるハルルの樹を見るなり、リタは驚きの声を上げる。

リタも何度か樹が花を咲かせる所は見てゐるが、こじこまで蕾が開いた状態を見るのは初めてだつた。

カロルが自慢げに言えば、リタはすかさず彼の頭に一撃を入れ、ハルルの樹の元へ走つて行く。突然の痛みにカロルが悶絶しようがお構いなしだ。既にリタの興味はハルルの樹に移つてゐる。

「おお、皆さんお戻りですか。騎士様のおっしゃつた通りだ」

するとその時、ハルルの長老が姿を現した。長老はエリシアたちを見て顔を綻ばせる。

騎士様のおっしゃつた通り、とはまたフレンと行き違いになつたらしい。エスティルが待ちきれずにフレンの行方を尋ねるが、長は申し訳なさそうに首を振つた。

「……結界が直つてゐることには大変驚かれてましたよ。わたしには何も……ただ、もしもの時はと手紙をお預かりしています」

長老がユーリに差し出したのは一枚の封筒。長老はまたいつでも来てください、と頭を下げると自宅へと戻つて行つた。

早速ユーリは渡された封筒の封を開けて中身を取り出す。そこには一枚の便箋と一枚の手配書が同封されていた。ユーリの手元を力

ロルが覗き込む。

「え？」「これ手配書！？ ってな、なんで？」

「ちょっと悪さが過ぎたかな」

「コーリだけじゃなくてしつかり私の分まであるし……下手な似顔絵だけね」

手配書にはコーリとは似ても似つかない黒髪の人物とこれまたエリシアには全然見えない、髪と瞳の色だけが同じ人間が描かれていた。

それぞれ、でかでかとコーリ・ローウェル、エリシア・フランベルと名前まで書かれてる。いくら何でもこの似顔絵から特定されることは思えないが、この場合は絵より名の方が問題だ。

「い、いつたいどんな悪行重ねて来たんだよ…」

「脱獄に器物破損に誘拐？」

カロルのツツコミに指折り数えながらエリシアが答える。後は公務執行妨害も入ってるのだろうか。それにしても悪行とは失敬である。

「コーリと同じにしないで欲しい。こつちは罪のない一般市民だ。巻き込まれた結果がこれである。後悔はしていないが、悪行とは言わないで欲しいのだが。

「疑問形じゃなくて間違いなくそれだな。しかし、たった5000ガルドって。エリイは何故か3000ガルドだな」

もう一度手配書を見てみれば、やはりユーリの方が金額が高い。この2000ガルドの差は何だろ。エリシアにすれば別に安くても構わないのだが、何だか複雑な気分である。

「これって……わたしのせい」

手配書を覗き込んでいたエステルが呆然と呟く。

他人を気遣う彼女の事だ。ユーリとエリシアを巻き込んだ事に責任を感じているのかも知れない。

だがエリシアはエステルにそんな顔をして欲しい訳ではない。友人を悲しませたくないのは当たり前だろ。

「そんなことないって。エステル、あんまり気にしないでね」

「……はい。ありがとう、エリイ」

気にする事はないと軽く言えば、弱々しい笑みだが笑ってくれた。きっと辛い事も苦しい事も一人で抱え込むであろうエステルが心配だ。

同じ年だと言うのにエステルは、世間知らずと言う所もあり、エリシアより年下に思える。だからユーリとは別の意味で気になってしまふのかもしれない。

「それで、手紙にはなんて？」

「僕はノール港に行く。早く追いついて来い。それと同封した手配書の彼女、君の知り合いかい？」

ユーリから便箋を受け取ったエステルが書かれた字を読み上げる。几帳面な彼らしい流麗な字だ。

しかしフレンは何故、エリシアとユーリーと知り合いだと分かつたのだろうか。それはともかく、手配書まで出回っているとなると手回しが早いものだ。

「早く追いついて来いね。つたぐ、エリイの事までお節介つてか余裕だな」

ユーリも賞金首になつた割には随分余裕である。

賞金まで掛けられたとなると余計に捕まる訳にはいかない。ユーリはともかく、エリシアたかが3000ガルドで捕まつてたまるものか。

「それから暗殺者には気をつけるよじこと書かれてます」

「ま、プロが標的を間違つはずないか」

手紙の内容から考えると、フレンの元にも刺客が行つたのだろう。それがあのザギと言う男がどうかは分からぬが。こちらに警告する余裕があると言つことは、それほど心配するなという裏返しもある。

文面から考えてもユーリとは正反対な性格なのだろう。だからこそ親友なのかもしれないが。

「なんか、しつかりした人だね」

「身の危険つてやつには気付いてるみたいだけじこの先、どうする？ オレはノール港に行くから伝言あるなら伝えてもいい」

ユーリの問いにエステルは直ぐに答えを返せずにいた。フレンが命を狙われている事を知つてゐるのなら、もう会いに行く理由もな

い。目的が果たされた以上、城に戻るべきだとも思っている。理解しているのに、いつしか外の世界に出て見て知りたい、もつと世界を見てみたい。そう思つよつになつていた。

「わたしは……」

「ま、どうするか考えときな。リタが面倒起こしてないかちょっと見てくる」

言ひよどむエステルを残し、コーリはラピードを連れてリタが居るであろうハルルの樹に向かつた。カロルも考えたい事があるからと街の中に消えて行く。

残つたのはエリシアとエステルの二人だけ。

「ちょっと歩こつか」

「はい」

気分転換に散歩もいいだろ。エリシアとエステルは連れ立つて、花びらが舞う街の中を歩き出した。

すれ違う街の人、全てがエリシアとエステルの一人に挨拶をして通り過ぎて行く。ハルルの樹を蘇えらせた奇跡は街中と言つても過言ではないくらい、知れ渡つているようだ。

花弁がそよ風に舞い踊る様は美しく、何度見ても飽きることはない。

甘い香りを胸一杯に吸い込みながら、エステルはハルルの樹を見上げた。満開の花は、結界に守られたザーフィアスでは、城の中では決して見ることが出来なかつた光景。

嬉しいと思う反面、付きあわせてしまつた二人には申し訳ない。

「……あの、ごめんなさい。わたしのせいでエリイとユーリを巻き込んでしまつて……」

気にするなと言つてくれたが、やはりエステルはどうしても謝りたかった。

エステルが城から出たいと頼んだせいで、エリシアは賞金首になつた上に手配書まで作られたのだ。

俯き、エリシアの顔が見れないエステルに、彼女は顔を上げてくれと頼んだ。エステルが怖ず怖ずと顔を上げれば、そこにはふんわりと微笑むエリシアの姿があつた。その笑顔がエステルの記憶に残る母の面影と重なる。

優しくて暖かで、それでいて彼女は心から自分を心配してくれるのだと分かつた。

「大丈夫。私もユーリも大丈夫だからそんなに悪い詰めないで。エステルは外の世界を見たいと願つた。でもそれは悪いことなんかじゃない。寧ろ、ずっとお城に居たんだから当たり前だよ。私はエス

「テルを助けた事を後悔なんてしてない。きっとユーリも同じじゃないかな？」

エステルが気に病む必要はない。城という鳥籠の中で生きて来たエステル。一切の自由もなく、世界を知らずに箱庭の世界で生きて来た少女が、外の世界を見たいと思うのは当たり前のことだろう。それを否定することなんて誰にも出来ない。誰がエステルを責めることが出来よう。

事が済めば城へ戻らねばならないと彼女は言つ。ならば、つかの間の自由を、猶予をあげたつて構わないはずだ。

「エリイ……」

「他人が言つからじゃない。エステルの気持ちは？　“エステル”はどうしたいの？」

エリシアは正面からエステルを見つめる。

肝心なのは彼女がどうしたいかだ。このまま城に戻ることも、未だ少し旅を続けることだって出来る。全ては彼女次第。

「わたしの気持ち……？」

「もしエステルがお城に戻るなら、私は一緒にザーフィアスまで戻る。旅を続けたいのなら、一緒に行こう？」

エステルがどちらを選んでもエリシアは彼女の意志を尊重しようとした決めたのだ。

城に戻るなら、ユーリには悪いがザーフィアスまで送るつもりだ。もし旅を続けたいと願うなら、共に行こう。決めるのはエリシアでない。エステル自身だ。

「わたしは……」

「そんなこと言われても直ぐには決められないよね。そろそろ戻るつか」

「はい……」

エリシアと並んで歩きながら、エステルはもう一度ハルルの樹を見上げる。一人でこの樹を蘇らせた時、自分にも何か出来ることがあるのだと思った。

でも何かをなすどころか、自分の気持ちすら整理出来ていない。エリシアが羨ましい。

彼女は自由で優しくて、エステルよりずっと強い。リタも同じだ。一人悶々と考えている最中も当然足は動いていた訳で、気付けばエステルは街の入口にいた。

「あ、エリイ、エステル」

「エスティーベ様！」

カロルが一人に向かつて手を振っている。それに応えながらエリシアは周囲を見回した。まだヨーリとリタの姿はない。エステルは未だ答えを出せずにはいるようで、心ここにあらずといった感じだ。聞き覚えのある声が聞こえて来たのはその時だった。エステルの本当の名を知っているのは仲間を除いて、騎士しかいない。

案の定、そこには三人の騎士の姿があつた。橙色を基調とする鎧を纏つた騎士は中年の男を真ん中に、それぞれ左右に小肥りの男と妙に細く背の高い男を従えている。

「帝都まで一重にお送りするのである」

「あとはユーリを取つ捕まえればいいのだ」

そこまでは腑に落ちないながらも、思い出せなかつたが、エリシアは一人の声を聞き、やつと彼等が何者かを理解した。

ユーリと自分を追い掛け回していたルブランにその部下アデコールとボッコスである。エリシアはすかさずエステルを庇い、彼女と騎士の間に割り込む。

「エステルの意見も聞かずに無理矢理連れ帰ろうなんて騎士失格ね、貴方たち」

「むむむ……我等の前に立ち塞がる貴様、何者である!」

背の高い騎士、アデコールがエステルを庇うように立つたエリシアに剣を突き付ける。ユーリと違つてエリシアが彼等の顔を知らないように、彼等もまたエリシアの顔を知らないのだ。

いくら何でも初対面の相手に武器を向けるとは、騎士としてどうなのか。

だがそちらがその気ならこいつだつて遠慮はしない。エリシアはホルスターから銃を抜き、アデコールの鼻先に銃口を突き付けた。

「私はただのエステルの友達。仮にも騎士なら、一般人に武器を向けるのはいただけないと思わない?」

「うむむむ……。ユーリ・ローウェルと共にいると言うことは貴様、エリシア・フランベルだな! ユーリ・ローウェル共々手加減せんぞ!!」

三人の騎士、もとい三馬鹿が何も言い返せずに唸つてゐるところにリタ、ラピードが坂を駆け降りて来る。

するとユーリの姿を見つけた中年騎士ルブランは、叫び声を上げてエリシアに剣を向けた。やはり直ぐに気付かれたか。

手配書が回つてゐるのだから当たり前なのが。あの下手くそな絵ならもしゃと思ったが、甘かったようである。小太りの騎士ボッコスも持つていた槍を構えて臨戦体勢に入つた。

「はつ！？ 意味分かんないんだけど… 一体なんなのよ…！」

状況が全く飲み込めないリタはユーリとエリシア、エステルと三人の騎士を見るが何も分からぬ。

思わずカロルの頭を叩くが、返つて来たのはちょっと、何すんの！？ と少年からの批難の声。

「ユーリとエリイは悪くありません。わたしが連れ出すように頼んだのです！」

すんなり言葉を聞いてくれるほど、彼等の頭はやわらかくない。エステルの言葉だとしても、だ。

現にルブランは何を勘違いしたのか、ユーリとエリシアを鋭く睨み付ける。

「ええい、おのれ、貴様ら！ エステリーゼ様を脅迫してゐるのだな！」

「違います！ これはわたしの意志です！ 必ず戻りますから、後少し自由にさせて下さい」

「それはなりませんぞ！ ええい、致し方ない。どうせ罪人も捕ら

えるのだから

エステルも引き下がらないが、それはルブランも同じである。やがて言い合いを不毛と感じたのか、それとも痺れを切らせたのか、ルブランは合図を送るとアデコール、ボッコスが一行に襲い掛かった。

ユーリに狙いを定めたらしいアデコールが斬りかかる。

しかしユーリは危なげなく剣をかわすとアデコールの顔面に裏拳を叩き込む。ユーリいわく「ボコ、ボコの方はどうやらエリシアをターゲットにしたらしく」。

二人以外には用がないと言つのか、彼等の視界にはユーリとエリシアしか入つていないようだ。エリシアはボッコスが振り上げた槍を銃を交差させて受け止め、詠唱していた術を解き放つた。

「仇為す者には光輝なる槍を。シャイニングスピア」

エリシアの目の前に金色の魔法陣が展開する。

シャイニングスピア、その名の通り光輝く槍が抵抗すら許さずボッコスを地面に縫い止めた。体を外して服一枚で留めただけでも有り難いと思つてもらいたいものだ。

アデコールの方もユーリの剣から放たれた青い衝撃波、蒼破刃をまともにくらつてぶざまに吹き飛んだ。

「任務」苦労さん

剣を鞘に納めたユーリが一言。もう彼等とは戦う気すらないらしい。と言つてエリシアも同じように銃をホルスターに納めた。

「しつこい男は嫌われるわよ?」

「ええいっ！ 情けなーいっ！」

言つた傍から無惨な姿を曝すアデコールとボッコスに代わり、ルブランが地面を蹴つた。

状況を傍観していたリタの足元に、赤い魔法陣が浮かび上がる。真つ先にリタの異変に気付いたカロルがちょ、リタと止めに入るが、もう遅い。既に彼女は印を切る所まで来ている。

「戻らないって言つてんだから、さつと消えなさいよ！」

刹那、ルブランを中心にアデコール、ボッコスを巻き込んでファイアボールが炸裂した。リタにしてみれば、三人組は飛んで火に入る何とやらだつたらしい。

若干可哀想な氣もするが、自業自得だと割りきつておこつ。

「燃え尽きたね、心が……」

「……うん、ボクもそう思うよ」

ぽつりと呟いたエリシアにファイアボールの（とこづかこの場合、リタの）恐ろしさをよく知るカロルが遠い目をして同意する。

その時、後ろを振り返つたエステルが悲鳴に近い声を上げた。

「ユーリっ！ あの人たち！」

エステルの視線の先には、独特な黒装束に身を包み、赤いゴーグルを付けた男たち。何度も姿を現した暗殺者たちである。

もう居ないのかと思ったが、そもそも行かないらしい。どうやら彼等も自分たちの存在に気付いたらしい。それを見たユーリが深々と溜め息をつく。

「やつぱり、オレらも狙われてんだな」

「今度はなに？！」

「ど、どうに？！」

呆れたようなユーリの声に、帯を翻したリタが苛立しげに、カロルが戸惑いがちに言う。彼等の狙いはフレンだけではなく、邪魔をした自分たちも含まれているらしい。勿論、リタやカロルは知る由もない。

「あのザギが居ないだけマシ、なのかな」

「そう、ですね……流石にあの人はちょっと……」

エリシアに同意するようにエステルが頷く。ザギと言う男なら、間違いなく所構わず仕掛けてくるだろう。それが例え街中であろうと関係ない。

まだザギがいないだけマシだと言える。こんな街中で彼と戦うのは危険過ぎるからだ。

「話は後だ！ カロル、ノール港つてのはどっちだけ？」

「え、あ、西だよ、西！ エフミードの丘を越えた先に、カプア・ノールはあるんだ」

「ここで戦うわけにはいかない。

一足先にユーリとカロル、ラピードが走り出す。エステルはまだ決めかねているようなのが表情は晴れない。

見兼ねたリタがエステルの手を取った。

「ほら、さつさと行く」

「でも、わたし……」

城にいた頃は何一つ選ぶことなんて出来なかつた。それ故にエステルは自分で何かを決めることが怖いのだ。
何かを選ぶことは、選ばなかつた一つを捨てる事と同意議である。選び取ることがこんなに怖いなんてエステルは初めて知つた。

「……エステルは一人じゃないよ。だから怖がらないで。私もユーリもリタも皆がいるから。本当にしたいと思うことは何。旅を続けたい？ それともあの人たちと帰りたい？」

エリシアがじつとエリシアの瞳を見つめる。まるで何かを訴えるように。

その時、本当の意味でエステルの心は決まつた。今ここで城に戻れば、自分は必ず後悔するだろう。城でしか出来ないこともあるかもしれない。

だが外の世界でしか出来ないことだつてある。

大切な物を見つけるためにも、今は城に帰る訳には行かなかつた。エリシアとリタが教えてくれたことだ。

「……今は、旅を続けます」

「賢明な選択ね。あの手の大人は懇願したつて分かつてくれないのよ」

リタはこれだから頭の固い大人共は、とため息をついた。

そしてユーリが状況についていけず、突っ立っていた三人 ル
ブラン、アデコール、ボッコスの前に立つとこやり、と脣の端を歪
める。

「騎士団心得ひとつ…『その剣で市民を護る』 そうだったよ
なあ？」

「その通り… いくぞ騎士の意地をみせよ…」

ルブランはユーリに同意するとアデコール、ボッコスの両名を伴
つて男たちに向かつて行く。
生き生きとする騎士たちにヒステルは後ろを振り返り、せめてご
めんなさいと呟いた。

「ねえ、みんな……お腹空いたよ

カロルがお腹を押さえて言い出したのは、ハルルを出でしばらく経つてからだ。ここまで遠くにくれば、流石にもう大丈夫だろうし、カロルだけでなく皆、アスピオを出てから何も口にしていない。ラピードもカロルに同意するようにきゅーん、と一声鳴いた。

エフミドの丘に入る前に腹ごしらえもいいだろう。食べられる内に食べておかなければ。何よりエリシア自身も既に空腹を感じ初めていた。

「そうですね。わたしももう……」

「魔物もいないみたいだし、一旦休憩でいいんじゃない？」

「そうだな。休憩にするか」

「リタは火をお願い」

休憩場所は、街道から少し離れたところに決めた。

ヨーリとカロルがまきを集め、エリシアとエステル、リタが食事の用意に取り掛かる。ラピードは周囲の見張り役だ。たかが火と侮るなれ、火を起こすのは意外と難しい。旅慣れていても結構時間が掛かるのだ。

「しょ、しょがないわね。揺らめく焰、猛追。ファイアボール」

魔術で火をつけるにも威力の調節が必須な訳だが、天才魔導士の

リタにならおてのものだろう。

リタが素早く印を切った直後、魔術が発動する。掲げた手の先、玉が生み出され、積み上げられたまきは瞬時に燃え上がった。流石はリタ、火の調節は文句のつけ所がない。完璧だ。

その間に一人で切り分けて置いた食材を火が通るまできちんと鍋で炒める。鍋はカロルの大きな鞄の中についた。ちなみに折り畳み式で、かさ張らない優れものだ。

「え、えっと、エリイ、次はどうしましょう？」

振り向けばエステルが鍋の前でオロオロしていた。彼女もやつと危なげなく包丁を扱えるようになったのだが、城の生活が中々抜けきらないらしい。

何たつて以前は、切つてもいない野菜をそのまま炒めようとしたのだから。

うん、やる気になつてくれるのは嬉しいけど、実行する前に聞いてね、と口を酸っぱくして言い含めたお陰で、やつと聞いてくれるようになつたのだ。

エリシアは荷物から缶詰を取り出してエステルに手渡す。

「次は貰つておいたトマトソースを入れて煮込んで」

「はい」

せめて隣に誰かがついていれば、最悪の事態は避けられるだろうから。

数十分後、鍋の中で煮込まれているのはミネストローネである。父と自分の二人分か大人數なギルドの皆の分という、極端な量しか作つたことがなかつたエリシアは少々加減が分からずに苦戦した。少なくとも見た目と香りには何ら問題ない。ミネストローネだと

ラピードは食べれないため、彼の皿にはラピード専用の犬ご飯が盛り付けられている。

見張りを頑張つてもらつたこともあり、いつもより心持ち豪華だ。

「いただきまーす！」

「ユーリに作つて貰えればよかつたかも。別に私が仕切らなくとも良かったんだけど、つい……」

エリシアはスプーンを口に運びながら横目でユーリを見る。

下町で一人暮らしをしていたためか、彼は一通りの料理を作ることが出来るとか。元騎士で剣の腕は言わずもがな、面倒見のよい兄貴分で、料理まで上手いとなると非の付けどころがない。

エステルはお嬢様なだけあって料理は全然だし、リタも好んでは作らないと聞いた。

エリシアが作る必要はないのだが、癖というものは恐ろしい。思わず手と口が動いてしまったのだ。

「また今度な。ま、オレはエリイの料理美味いから好きだけど?」

「わたしも大好きです！」

「ボクも…」

「……悪くはないんじゃない?」

好きだと言つてくれるユーリにエステルとカロルも同意する。リタも満足してくれたらしい。

作り手であるエリシアからすれば、そつ言つて貰えるのは嬉しい限りだ。誰かに美味しいと言つて貰えるだけで作りがいがあるし、

伊達にクレセント家の台所を取り仕切つて来た訳ではない。

嬉しいと同時に少しだけ照れ臭くて、エリシアは不自然に話の方
向を逸らした。

「そう言つてくれると嬉しいな。……一休みしたら出発しましょ。
エフミドの丘は直ぐ近くだから」

食事後、一休みした一行は街道に戻り、エフミドの丘を田舎した。
エリシアの言葉通り、暫くしない内になだらかな丘が見えて来る。
だがエフミドの丘にはハルルの街と同じくあるものがなかつた。
エリシアだけでなく、カロルも“それ”に気付いたらしく、澄み
渡る空を見上げて首を捻る。

「おかしいな……結界がなくなつてる。ここ通つたときはあつたん
だけど……最近設置されたつてナンが言つてたのに」

そう、カロルが言つよつてエフミドの丘には最近、シルトプラステイア結界魔導器が
設置されたのだ。

しかし頭上には空を彩ると同時に結界の存在を示す光輪はない。

「人の住んでないここに結界とは贅沢な話だな」

つらわれるよう屹立したコーリも空を見上げた。無論そこにはザーフィアスやハルルのような光輪はない。

結界とは本来、人の住む街などに設置される。デイドン砦にすらなかつた結界が丘にあるとは、何とも贅沢と言つか結界の無駄使いである。

そうでなくとも箱庭の世界を出て、外を旅する人間など稀なのに。

「あんたの思い違いでしょ。結界の設置場所は、あたしも把握しているけど、知らないわよ」

リタに限らずアスピオの魔導士は、結界魔導器が設置されている場所の殆どを把握している。

魔導士たちは帝国直属の人間だから当たり前だが、リタはエフミドの丘に結界が設置されたなどと聞いたことがなかつた。

「リタが知らないだけだよ。最近設置されたってナンが言つてたし」

「私が通つた時もあつたよ、結界。ところでナンつて誰のこと?..」

エリシアが初めてエフミドの丘を訪れた時に小耳に挟んだ話でも、つい最近設置されたらしいと聞いた。

カロルがつい口にしたナンという名前から推測するに少女なのだろう。ハルルの樹を見せたいと言つていた相手もその“ナン”ののか。

何となく聞いただけなのにカロルは明らかに焦つている。そこまで慌てなくても良いと思つただが。

「え……？ え、えつと……ほ、ほら、ギルドの仲間だよ。ボ、ボク、その辺で、情報集めてくる！」

言つなり、カロルは脱兎のごとく駆けて行つた。そんなに知られたくないのだろうか。かと思えばリタも、あたしもちょっと見て来ると言い残し、小走りで走り出す。

彼女が目指す前方には白煙を上げる魔導器の残骸が見える。結界魔導器とおぼしき魔導器は、修復が不可能だと分かるくらい、無惨に破壊されていた。

「つたく、自分勝手な連中だな。迷子になつても知らねえぞ」

「全つ然纏まりないわね。コーリが言えたことでもないんじやない。ね、エステル」

「えつと、はい。そうですね」

からかい半分のエリシアに話を振られたエステルも苦笑しつつ同意する。自分勝手の代表みたいなコーリに言われては一人も可哀相だ。

もつとも、彼の場合は自分勝手に見えて、いつも他人を思つての行動だとエリシアは知つている。

「あのなあ、エリイから見たオレつてどんだけ極悪人なんだよ」

エリシアの思いなど露知らず、コーリは勘弁してくれと頭を抱えるのだった。

リタは結界魔導器が白煙を上げる場所に近付くと魔導器を見下ろした。武器による損傷だろうか。魔導器には破壊された跡がある。普段ならいなはずの騎士の姿もあることを考へると、何者かの

手により破壊されたと考えて間違いない。結界魔導器と何かを見間違うことなど絶対にないだろ？

ならば結界魔導器を破壊した人物は、これが結界魔導器だと知つて破壊したのだ。

「ヒラヒラ、部外者は立ち入り禁止だよ！」

すると魔導器を調べていた男 恐らくは魔導士だらうが、リタを見つけて声を張り上げる。

しかし彼女もそれを予想していたようで、無造作に懐からアスピオの魔導士であることの証、紋章を取り出して男に突き付けた。

「帝国魔導器研究所のリタ・モルティオよ。通してもらひから

「アスピオの魔導士の方でしたか！ し、失礼しました！」

奇抜な格好をした少女がアスピオの魔導士だと知つた男の態度が文字通り一変する。

だが彼女は全く彼に興味を持たず、そのまま魔導器を詳しく調べ始めた。男が勝手をされでは困ります、上に話をと言つてはいるが、耳にも入つてないらしい。そんなリタを見ていたユーリが一言呟く。

「あの強引だ、オレもわけてもらいたいね」

「ユーリには必要ないかと、思つんすけど……」

「むしろあつたら困るつてば。ストッパー役がいなくなつちゃうか

「

「……エリイとエステルはもう少し自重しろつての

突つ走るリタとエステルにエリシアもまあ、そうだらう。カロルもストップーにはならないだらうし……。その前に、そもそもこんな事、真面目に議論しているのが馬鹿らしい。

ユーリからは呆れた視線を向けられる。自重出来るならとつこの昔にしているのだ。

エリシアは視線を逸らして向こう側を見ると、なんとカロルが息を切らして駆けてくるではないか。

「みんな、聞いて！ それが一瞬だつたらしいよ！ 槍でガツン！ 魔導器ドカンで！ 空にピューつて飛んで行つてね！」

休む間もなくまくし立てるカロルに、エリシアたちは困惑していた。

興奮しているのか焦つているのか、カロルが言おうとしている事がいまいち分からない。魔導器を槍で壊した犯人が空に逃げた、とも言いたいのか。

伺うように隣を見れば、ユーリもエステルも何やら訳が分からないと言つた様子である。

「……誰が何をどうしたつて？」

「竜に乗つたやつが！ 結界魔導器を槍で！ 壊して飛び去つたんだつてさ！」

カロルの口から出た竜と言つ単語にエリシアは首を傾げるしかない。竜と言えば勿論、人に害をなす“魔物”だ。そんな竜が人を乗せるなどと聞いたことはない。

信じられなかつたのはエリシアだけではなかつた。ユーリとエステルも口を揃えて首を振る。そんな話、初めて聞きました、と。

カロルは分かつて貰えないもどかしさに歯を食いしばった。

「ボクだってそうだけど、見た人がたくさんいるんだよ。『竜使い』が出たつて」

「竜使い……ねえ。まだまだ世界は広いな」

少なくとも見間違いではないのだろう。人が竜に乗るなんてにわかに信じがたいが、事実は認めるしかない。だからこそ世界は面白い、ユーリはそう思つ。

とその時、魔導器を調べていたはずのリタが金切り声を上げた。

「ちょっと放しなさいよ、何すんの！？ この魔導器の術式は絶対、おかしい！」

「おかしくなんてありません。あなたの言つてることの方がおかしいんじや……あなたにだって知らない術式のひとつくらいありますよー。」

何事かとリタの方を見れば、魔導士が苦しそうにリタの腕を掴んでいたところだった。抑えつけている男の方が苦しそうだとは変な話だが、普段体を動かすことすらしない魔導士なら頷ける。

術式がおかしいとの発言に魔導士は心外だとばかりに言い返した。リタも負けてはいない。魔導士の腕を払い退けて、破壊された結界魔導器を指差す。

「こんな変な術式の使い方して、魔導器が可哀そうでしょー。」

リタのように魔導器の専門家ではないエリシアには、一見しただけではどの術式がおかしいのか分からない。

けれど、ただの魔導士とリタ、どちらを信じるかと言われば、エリシアは迷わずリタと答えるだろ？彼女の知識は本物だ。

「ちょっと、見ていないで捕まえるのを手伝ってください！」

魔導士の助けを求める声に、警備をしていた騎士が駆け付ける。このままだと非常にまずい展開になる気がした。

早くも最終手段かとエリシアが銃を抜きかけた瞬間、カロルが声を限りに叫んだ。

後から思う。せめてカロルが事前に相談してくれたら止めてあげたのに、と。

「火事だつ！ 山火事だつ！」

「山火事？ 音も匂いもしないが？」

「あーあ……確かに注意はリタから逸れたけどこれは駄目だわ」

だから言わんこっちゃない、とエリシアは思わず頭を抱えたくなつた。つくならもつと、ましな嘘はなかつたのかと問い合わせしたい気分である。

煙も上がつてない上に、火事ではないのだから、焦げるような匂いなんてあるはずもない。

個人プレー大好きなんです

案の定、騎士たちは嘘をついたカロルを追い掛け走り出す。まさかこんなに早くばれるとは思つていなかつたらしいカロルも慌てて逃げる。

当初の、リタから注意を逸らすという目的は果たせたが、これはカロルと一緒にいた自分たちも気付かれるかもしれない。さりげなく視線を逸らせたが、そうは問屋が卸さない。

「お前たち、さつきのガキと一緒にいたようだが……ん？ 確か手配書の……」

カロルと共にいた場面を見ていたのか、一人の騎士がユーリとエリシアの顔を見て唸る。自分たちの手配書は末端の騎士にも回っているらしい。

流石にあの手配書から自分たちの素性が分かるとは思わないが、ここで事を荒げてはもともこもない。エリシアはなるべく自然に見えるように振る舞つた。

「手配書？ 何のことですか？ 私たち、アスピオから来たのでその辺りの事情はちょっと……」

最後は困つたような笑顔を浮かべれば完璧だ。そう思つた直後、ユーリがいなことに気づく。居るのはエリシアの演技に感心しているエステルだけだ。

ユーリはと言えば、リタを捕まえようとしていた騎士を手刀で昏倒させると、他の人間には聞こえないよう耳元で呴いた。今だ、と。逃げたリタを追おうともう一人の騎士が駆け出すが、そうはさせまいとラピードが背後から襲い掛かる。

「あ、こら、待て！」

「仕方ない、か。みんなホントに個人プレー大好きなんだから

自分が頑張った意味が全くない気がするが、仕方ない。

槍を構える騎士に覚悟を決めたエリシアは、一瞬でホルスターから銃を抜くと騎士に向けて引き金を引いた。銃口から溢れる淡い光

エアルが凝縮されたものである。

威力は落としているので直撃してもせいぜい気絶がいいところだ。現に地面に叩きつけられた騎士はぴくりとも動かない。そしてユーリとリタの姿も既になかった。律儀に謝るエステルの手を引いてエリシアも一人と同じ獣道に足を踏み入れた。

木々が生い茂る獣道をしばらく走った後、一行は足を止めた。辺りを見回しても人の気配はない。カロルに気を取られてくれたお陰でもあるが。

「ふう、振り切ったか」

「はあ……はあ……リタって、もっと考えて行動する人だと思つてました」

エステルもそしてリタも息が上がっている。

たいして疲れる距離でもないと思うのだが、旅慣れているエリシアとお嬢様、魔導士ではきっと体力が違うのだろう。エリシアの隣のユーリも息一つ乱れていない。

「確かにね。でもリタ魔導器のこととなると無茶しない？ シャイコス遺跡でもそうだったし」

小屋にあつた白い魔導器にもビクトリアと名前を付けていたし、シャイコス遺跡では人型魔導器に吹き飛ばされたことだつてある。今だつて魔導器に夢中になつて騎士に捕まる寸前だ。

「……あの結界魔導器、完璧おかしかつたから、つい……」

「おかしいって、また厄介事か？」

コーリと一緒にいると、つぐづぐ厄介事に縁があるような気がするのだが、エリシアの気のせいだらうか。それともコーリではなくエステルなのか。疫病神が憑いている気がしてならない。もしかすると、三人ともなのかもしけないが。

「厄介事なんてかわいい言葉で片付けばいいけど」

「オレの両手は一杯だからその厄介事はよそにやつてくれ」

コーリは間違なくエステルとエリシアを見た。

両手が一杯？ もしかしながら自分とエステルのことだらうか。迷惑かける自覚はあるが、コーリのお荷物になつてゐつもりはない。

何だか釈然とせずにコーリに詰め寄る。

「私！？ 私とエステルなの！？」

「……だから自覚があるなら自重しろつての」

自覚があつても自重出来ないから“こう”なつてゐるのだが。反論らしい反論も見つからなかつた（出来なかつた）のでエリシアは大人しく黙ることにした。視線をコーリから外すのは忘れない。

「……どの道、あんたらには関係ないことよ」

「ユーリ・ローウー・エル！ エリシア・フランベル！ デニに逃げよったあつ！」

その時、聞きたくもないルブランの声が耳に入つて来る。恐る恐る声のする方を見れば、木々の間からしつかりとルブランの姿が見えた。それを見たリタが茶化すように笑う。

「呼ばれてるわよ？ 有名人」

「またかよ。仕事熱心なのも考え方なんだな」

ユーリの口からはむづ、呆れを通り越してため息しか出ない。エリシアも同感である。

この調子なら、それこそ地獄の底まで追つて来るのではないのだろうか。

おまけにルブランだけではなく、アデコールの声までする。いい加減、諦めてくれれば有り難いのだが、あの三人のしつこさを知つた今では有り得ないと分かつていた。

「あんたら、問題多いわね。一体何者よ？」

リタが呆れ半分にため息をついて首を振る。

エステルの事情と城での出来事を知らない彼女がそう思うのも無理はない。エリシア自身、ザーフィアスを訪れてから、厄介事が増えたと自覚しているのだ。

「えと、わたしは……」

「ユーリ、出てこ～い！」

事情を話すにも話せず、エステルが「」もつた瞬間、タイミングがいいのか今度はボッコスの声まで聞こえてきた。ザーフィアスから始まり、まさかここまで追つて来るとはエリシアも思わなかつた。

「そんな話はあとあと」

「リタはあの三人の執念深さを知らないけど、早く逃げないと追いつかれるよ。ザーフィアスから追つて来たくらいだしね」

「いざとなれば三人ともボコボコにしてやつてもいいが、出来れば関わりたくない。何かの弾みで正体がばれれば更に最悪である。ふざけ半分に言つたエリシアは、僅かに感じた気配に銃に手をかけた。ラピードも長い尾を立てて警戒している。

しかし次の瞬間、聞こえて来た声は実に間抜けなものだつた。勢い良く走り出て来たのは、騎士を引き付けていた（追い掛けられた）カロルである。他の気配は感じないことから、上手く撒けたらしい。

「うわあああっ！ 待つて待つて！ ボクだよ！」

「……なんだ、カロル……びっくりさせないでください」

「そうそう。危うく撃ち抜くところだったかも」

カロルを見たエステルがほつと胸を撫で下ろす。エリシアはと笑つて腰のホルスターに手を当てた。

こう見えて抜き撃ちには自信がある。撃ち抜くところだったは流

石に冗談だが、お、おつかないよ、と青くなるカロルが面白いので黙つておこう。

「だからあんまりイイを怒らせるなよ？ つてことで面倒になる前に、わざわざノール港まで行くぞ」

「別に怒つても銃は乱射しませんから。……全く失礼よ、私は魔物が何かかつての。少なくともオタオタより無害よ！」

「いくら何でも節操くらいはある。怒つても仲間相手に銃を抜くことはない。」

ちなみにオタオタ、とは蛙の姿をした魔物である。自分で言つておいてなんだが、例えに蛙はないだろう。

「いや、それ例えになつてないから！」

「カロル先生に言われずとも分かつてるつてー！」

振り上げられた銀色の裸身が綺麗に魔物の身体を両断する。剣を持つ男は、息を付く暇もなく返す剣で振り向き様に斬り付けた。

体液を撒き散らす魔物は、断末魔の悲鳴すら上げられず崩れ落ちる。

彼は一体が絶命したことを確認すると剣を軽く振つて鞘に納める。

「首領！」

そう呼ばれた人物は、三十代半ばほどの長身の男だつた。戦士にしてはやや長めの淡い金色の髪に灰色の瞳。体つきはしつかりしているものの、大柄ではない。むしろ細身であり、すらりとしたシルエットだ。

整つた顔立ちは剣士と言つより城の貴族のよう。実際目にしなければ、誰も彼が鮮やかな手並みで魔物を倒したとは思わないだろう。細工が入つたシンプルなデザインの箠手をつけ、裾の長い、まるで騎士が纏つ装束を身に付けていた。

「どうした？」

「これを……」

やつて来た男が差し出したのは折り畳まれた一枚の紙。

促されるようにして紙を広げるとそこには一人の少女らしき人間が描かれていた。らしきと言うのも書かれた絵があまりに下手過ぎて髪の長さでしか性別を判別出来ないからだ。

似顔絵の下には特徴と名前が書かれている。名前はエリシア・フランベル。年齢は十代後半。薄紅掛かつた淡い金髪に金の瞳。賞金は3000ガルドと。

それを見た男は思わずため息をついた。一人でザーフィアスに行かせたのがまずかったか。

しかし彼女とてもう一人前。何があつたかは分からぬが、手配

書が回っていると「つ」とはまだ捕まつてはいないのだろう。

「ヒリシアちゃん、大丈夫ですかね？」

「……心配ない。あれももう一人前だ」

口ではそう言つてもやはり父として心配で仕方がない。自分がいつも死んでも一人で生きて行けるように鍛えて来たつもりだが……。しかし、早くに妻を亡くした男にとつてはたつた一人、残つた愛娘なのだ。

「行くぞ」

「は、はい！」

ギルド、獅子の咆哮の首領 レオン・クレセントは心情とは裏腹に、手配書を元通りに畳んで懐に入れるときれやかな足取りで歩き出した。

ヒリシアたちは丘の丘を登っていた。結界が壊れているせいで、何度も魔物とも鉢合わせたが、難なく倒して進んでいく。暫く歩いた所で、細い獣道が唐突に開ける。表れた光景にエスティラやリタ、コーリでさえも驚いた。

何故なら、視界一杯に青い海が広がっていたからである。太陽の光を受けて、きらきらと輝く様子は本で見るよりもずっと美しいとエスティルは感じた。

エスティルが感嘆のため息をつく中、リタもまた目の前の海に見入っていた。これが海、そして海と空の間、あれが水平線なんだと。

「コーリ、ヒリイ、海ですよ、海」

「分かつてゐつて。……風が気持ちいいな

僅かに上擦つた声から、顔を見なくともエスティルがはしゃいでいるのが分かる。母なる海、全ての生命は水より生まれたと古い本で読んだことがある。生命を生み出すものであるから、海はこんなにも美しいのだろう。

海から吹き付ける穏やかな潮風がコーリとヒリシアの長い髪を揺らす。

結界が破壊されたことにより、丘には魔物が徘徊している。戦闘の連続で少し汗をかいていたのだが、コーリが言つのように風が気持ちいい。

「海なら旅してると別段、珍しいものじゃないよ。でも改めて見るとやっぱり感動するね」

「本で読んだことはありますけど、わたし、本物をこんな間近で見るの初めてなんです！」

感動しているエステルを横目にエリシアも笑う。

ここは家や木々などの遮蔽物はない。見渡す限りの青い海は見慣れているはずのエリシアでさえ、一見の価値があると思う。海だけではない。森も魔物も目に映る全てがエステルにとつて物珍しかつた。読書は好きだから知識はある……と思う。

だがその知識は残らず本で“読んだ”ものだ。本物を目にすることも叶わず、城で暮らして来た彼女には嬉しくてたまらなかつた。

『良かつた。エステル、もう大丈夫かな』

お節介で心配性な彼女は色々と悩むことや考えることも多いだろう。今、エステルが置かれている“状況”についてもそうだと思う。だけどエステルはちゃんと前に進めてる。それが一歩ずつでも、悩みながらでも確実に。

そんなエステルを見ていたカロルが少しだけ得意げに言つ。

「普通、結界を越えて旅することなんてないもんね。旅が続けばもつと面白いものが見られるよ。ジャングルとか滝の街とか……」

「旅が続けば……もつといろんないと知ることが出来る……」

この世界の殆どの人間は外に出ることなく、作られた箱庭の世界で生涯を終えて行く。

ギルドの人間とは言え、まだ若い、十一歳のカロルやエリシアなどの旅人は珍しいのだ。

エステルはカロルの言葉を噛み締めるように心の中で何度も反芻した。ザーフィアスからハルルまでここまで本当に色々な物を見て、

感じた。旅が続けばもっと世界を感じられる。そう思つと嬉しくてわくわくして来る。

「そうだな……オレの世界も狭かつたんだな」

「ヨーリでもそう思うんだね。でも私は狭くてもいいと思うの。自分の世界は私とみんな。それが“私の世界”だから。狭くたつてヨーリやエステル、リタにカロル、みんなの世界を合わせたら狭くならないよ」

ヨーリは感慨深げに海を見つめる。彼の世界はザーフィアス、その中の下町だつた。海を見て思い知られたのだ。どれだけ自分が見ていた“世界”がちっぽけであつたかと。

エリシアから見たヨーリはいつも堂々としていて、自分の世界が狭いと言つのは意外だつた。

でも狭くたつて良いと思うのだ。

エリシアにとって“世界”は私とみんな、だから。一人一人の世界は小さくとも、合わせれば大きくなると思つてゐる。

「……そうか、そうだな」

エリシアの言葉にヨーリは目を閉じ、小さく笑つた。

そうか、そんな考え方もあるのかと。エリシアの発想は自分にはないものだ。屈託のない笑顔で言つ彼女が少しだけ羨ましくて眩しかつた。

「あなたにしては珍しく素直な感想ね」

「リタも、海初めてなんでしょ？」

殆どアスピオから出歩かない彼女も海は初めてらしい。その証拠に海を見た時、エステルほどではないにせよ、緑の瞳を輝かせていたから。

「まあ、そうだけど」

「そつかあ……研究ばかりの淋しい人生を送ってきたんだね」

カロルの余計な一言にぴき、トリタの顔が引き攣った。

この少年も、余計な事さえ言わなければもつと頼りになるのだろう。わざと言つているのだろうが、流石に相手は選んだ方がいい。この後、どうなるかは大体想像出来た。

ちなみにエリシアの中での頼りになる人はコーリ、次いでリタであるが。知識面で言えばリタに続いてエステルなのだが。

「あんたに同情されると死にたくなるんだけど」

「でもカロルも意中の人にはまだ振り向いて貰えないんでしょう？」

ほんの悪戯心から言つてみればカロルはだ、誰がナンなんか、と慌てて否定する。エリシアは笑いを堪えたまま、不思議そうな顔を作った。

「あれ？ 私、ナンとは一言も言つてないよ？」

「え、あの別に……エリイの馬鹿あ……」

海が見える丘に少年の叫びがこだまする。少しの悪戯心から言ってみたのだが、カロルは思つた以上にダメージを受けたらしい。げんなりしているではないか。

よほど、ナンが気になつてゐるのか、それとも別の何かなのか。

「IJの水は世界の海を回つて全てを見て來てるんですね。この海を通じて世界中が繋がつてゐる……」

エステルは水面を見つめながら、感慨深げに呟く。

IJの水は自分が知らないものを沢山見てきたのだろう。胸に手を当て、忘れないようにしつかりと今の光景を目に焼き付ける。とても素晴らしいことのように思えたのだ。エステルは自分がまだ世間知らずで、箱庭の世界しか知らないことを理解していた。だからこそ、水が羨ましかつたのだ。

「また大袈裟な。たかだか水溜まりの一つで」

「リタも結構、感激してたくせに」

リタは思わず、手を上げて叩こうとする。カロルは慌てて両手で頭を抑えたが、いつまで立つても衝撃はやつてこなかつた。

カロルが顔を上げるとリタは何事もなかつたかのように腕を組んでいる。それまで海を見つめていたコーリが一言。

「これが一つの見てゐる世界か」

騎士の任務でフレンは各地を旅し、様々なものをその目で見て来たのだろう。親友が見ている世界は広くて、自分とフレンの道が分かたれたあの時から、どれほど離されてしまつたのか。

エリシアはユーリを見て首を傾げる。さつきからコーリらしくない。そこまで考えて、おかしなことに気づいた。コーリらしい、とは何なのだろう。そこまで深く知つてゐる訳じやないのに。そう思つと胸の奥がちくりと痛んだ気がした。

「もつと前に、フレンがこの景色を見たんだろうな。追いついて来いなんて、簡単に言つてくれるぜ」

エリシアの想いなど露知らず、コーリは未だ紫掛かつた黒瞳を海に向けている。

本当にあの親友はたちが悪いが、実に彼らしいと思つ。何が追いついて来い、だ。コーリと彼が見ていた景色はあまりにも違う。いや、だからこそ、やる気が出てくるといつものだが。

「ハワイの丘を抜ければ、ノール港はもうすぐだよ。追い付けるつて」

「そういう意味じゃねえよ

フレンが言つた『追いついて来い』とは、カロルが言つような意味ではない。

上等だ、とコーリは思つ。どこか楽しそうな表情に変わつた彼を見て、エリシアも気付けば笑つていた。別に良いではないか。知らないのなら、これから知ればいい。今はまだ分からない。けど旅を続ければ、この答えが出るかもしれないのだ。

「さあて、ルブランが出てこないうちにに行くぞ。海はまたいくらでも見られる。旅なんていくらでも出来るさ。その気になりやな。今だつてその結果だろ?」

「……そうですね

名残惜しげに海を見つめるエステルに、コーリが声をかける。しつこい彼らのことだ。追いついて来ないとも限らない。気持ちは分

かるが、あまり長い間、ここにいることは出来なかつた。それに、海など旅をしていればいつでも田にすることは出来る。

頷いたエステルが何を思つたのか、彼女の表情からは窺い知ることは出来ない。

ほら先に行つちやうよ、とカロルが真つ先に走り出しが、

「慌ててると塵から落ちるだ」

「いや、まさかそんなはずないでしょ……」

カロルもそこまでドジではないはず。

しかしコーリの予言通りに足を滑らせたカロルが、うわあああつ！ との叫び声を上げた。間一髪、落ちることはなかつたが、それを見ていたリタが頭に右手を当て、はあつ、と息を吐き出す。

「バカつぽい……」

「それがカロルの良さなんぢゃないの？」

「そうかあ？」

「そ、そつですよー」

それがカロルの良さだと笑うエリシアに、首を傾げるコーリ、勢い良く叫ぶエステル。まさか背後でそんな会話が交わされているとは知らない少年は、ちょっと、何してんの！？ とこちらを振り向く。

走り出したカロルと、彼の後に続くコーリとエステル、そしてリタが一斉にエリシアの方を向いた。彼女の視線の先には小さな石。海が見渡せる丘の上に作られた墓標だった。

「なんだろ、これ？　ごめん、皆、先に行つて。魔物が出ても一人で大丈夫だから」

「そうですか？　本当に大丈夫ですか？」

エスティルが心配そうに首を傾ける。嘘ではない。

エフミドの丘には来たことがあるし、そもそもザーフィアスに来る前は一人で旅をして来たのである。そうそう魔物に遅れは取らないと自負している。

「大丈夫って言つてんなら心配ないだろ。エリイ、直ぐに追いついて来いよ。ほら、行くぞ」

「ありがと、ユーリ」

ユーリはそう言つと尚も心配するエスティルと皆を連れて坂を下つて行つた。この石はきっと、墓標の代わりなのだろう。では土の下に眠つているのは誰なのか。

エリシアは石の前にしゃがみ込むと目を閉じ、祈りを捧げた。別に神を信じてゐる訳ではないが、死者には祈りを捧げるべきだと思うからだ。

「……何をしている？」

「何つて祈つてゐるの」

目を閉じたエリシアの耳に何者かの声が届いたのは、それから直ぐのことだ。

祈つてゐる、と答えたエリシアは思わず背後を振り返つた。彼女

の真後ろに立つてゐるのは一人の男。一見した所、外見はヨーリヨリ少し上だらうか。

磨き上げられた紅玉を思わせる瞳に、緩く波打つ長い銀色の髪は、太陽の光を反射して美しく煌めいている。血のよう赤い長衣を纏つた男は、ここからでも分かる長い睫毛に纖細な顔立ちをしていた。

「……ど、どちら様？」

顔を引き攣らせて尋ねても、彼の表情は変わることはなかつた。一体彼は何者なのか。集中していなかつたとは言え、全く気配を感じなかつたのだ。ただ者ではないことくらいエリシアにも分かる。この静けさはまるで、戦う前の父を彷彿させた。

「何故祈る？ 誰が眠つてゐるのかも知らないだらうに」

「確かに知らない。でも誰か分からなくちゃ祈つちゃいけないの？ 貴方こそ、この墓の人の知り合い？」

立ち上がり、男を正面から見つめる。身長のお陰で見上げる形になるのだが。するとどうしたのかそれまで一切表情を動かすことのなかつた彼が僅かに笑つた。

「面白い娘だな。この墓に眠つてゐるのは私と共に戦つた友だ」

「そつ、じゃあ祈つて良かつた」

笑つたと思ったのは一瞬で、男は直ぐに元の無表情に戻つてゐる。会つたこともない人なのに、話していても不思議と変な感じはしなかつた。

祈つて良かつた、そう言えども男は不思議そうな顔をする。彼の赤い瞳からは、本当に意味が分からぬらしい事が伝わつて來た。別に変なこと言つていなければいいはずなのだが。

「何故だ？」

「ハリヤつて來てくれる人がいたから」

場所も場所だから、誰も来ないのかと思つていた。この場所に葬られたのはやはり、それなりの理由があつたからだろう。

それはエリシアが窺い知ることではないが、友人が訪れてくれるのはまだ幸せではないか。

「本当におかしな娘だな」

「娘娘つて、私にはちゃんとエリシアつて名前があるの」

おかしな、と言われるほど、エリシアは自分が変わつてゐるとは思つていない。それより男の方が随分と変わつてゐるのではないか。彼が纏う雰囲気は浮世離れしたと言つても過言ではなかつた。見た所、武器らしい武器は薄紫をした刀身の一振りの剣のみ。美しい細工が施された剣は、どう見ても実用的ではない。

「そりか……」

「で、貴方は？」

両手を腰に当て、男を見上げれば意味が分からなかつたのか、きよとんとしている。

会話が成立しない氣がしないでもないが、あえて氣にないでお

「」。

「私が名乗ったんだから貴方も教えてよ。分からなかつたら貴方と
しか呼べないじやない」

「……デユーク」

「そつか、デユークね。良い名前」

男はただ一言、デユークと言つた。主語がなく、あまりに唐突だ
つたこともあり、それが彼の名前だと氣付くまで数秒。

エリシアはデユークに背を向けて、丘に佇む墓標を見つめた。こ
の墓に眠る人物はどんな人なのだろう。デユークの友達なら、ユー
リとフレンのように正反対な性格をしていたのだろうか。

「……もし人がお前のよつな者ばかりなら……フルも……」

「え？」

振り向いた時にはもう、デユークの姿はなかつた。つい数秒前ま
で彼がいたと言う痕跡は、どこにも残つていない。丘には穏やかな
風が吹いているだけだ。

足はあつたから幽靈ではない……と思う、思いたい。エリシアが
無意識に首を振つた瞬間、先に行つたはずのカロルの姿。心配して
戻つて来てくれたのだろうか。

「おーい、エリイ！ 何してんのーーー！」

「『』めん！ 直ぐ行くーーー！」

エリシアは叫びながら、もう一度だけ墓標を見る。デュークの友人の墓標は当たり前だが、何も語ることはなく、変わらぬまま丘の上にあつた。

カプワ・ノール

結局、エリシアは、デュークと会つたことを誰にも言わなかつた。そもそも何と言えばいいだらう。彼の姿はすぐ消えていたし、それほど話をした訳ではない。

皆と合流した後、テントを張つて一泊し、ノール港へと続く街道を歩いている。すると今まで晴れていたと言つのにノール港に近付けにつけ、見上げる空は今にも泣きそうだ。

ノール港に到着した時に、は既に冷たい雨が降り出していた。

「……なんか急に天気が変わつたな」

「びしょびしょになる前に宿を探そつよ

カロルは濡れないよつに頭に手を乗せるが、大粒の雨ではそれも無駄に等しい。

エリシアも雨で服が張り付くのは嫌だが、少しでも濡れた以上、今から急いで宿屋に行つても同じだ。カロルに続き、宿屋に足を向けたユーリはエステルがじつと街を見つめていることに気付いた。

「エステル、どうした？」

「あ、その、港町というのはもっと活氣のある場所だと思つていました……」

ユーリもエステルが見ていた街の中心街に視線を向けた。

ノール港はイリキア大陸の言わば流通の拠点である街だ。資源の豊富な海に囲まれ、漁業も栄えており、当然人通りも多いはずである。

だが今、目の前に広がっている光景はとても大陸の流通拠点とは思えない。しんと静まり返っている。この雨のせいもあるが、明らかに露店の数も少ないし、何より活気がないのだ。

「確かに、想像してたのと全然違うな……」

「それは仕方ないと言えば仕方ないんじゃない？」

ユーリの呟きにエリシアも同じように街中を見回した。自分も変わつてしまつてから、ノール港を訪れた事はなかつたが、旅をしていれば色々と噂話は入つて来る。カロルも小耳に挟んだことがあつたのだろう。何とも言えない顔で同意する。

「そうだね。ノール港は色々と厄介だから」

「どういふことです？」

「ノール港はね、帝国の圧力が……」

「金の用意が出来ない時は、おまえらのガキがどうなるかよく分かつているよな？」

エスティルの問いにカロルが答えようとした瞬間だつた。明らかに柄の悪い大声が聞こえて来たのは。

一行がその声につられるように目を向けると、見るからに高そつだと分かる服を来た役人らしき人物と、帯剣したその護衛、そして地面にひざまずき、何度も頭を下げる男女の姿があつた。

二人は夫婦なのだろうか。服が泥水で汚れるのにも構わず、一心不乱と言つた様子で頭を下げ続けている。

「お役人様！！ どうか、それだけは！ 息子だけは返してください！ この数ヶ月の間、天候が悪くて船も出せません。税金を払える状況でないことはお役人様もご存知でしょう？」

「ならば、早くリブガロつて魔物を捕まえてこい」

頭と腕に包帯を巻いた夫は何度も懇願し、妻もまた地面に頭を擦り付ける勢いで頭を下げる。対して男たちはにやついた笑みを浮かべるだけだった。

リブガロを捕まえてこい、と護衛は吐き捨てる。すると隣の役人も嫌な笑みを貼付けたまま、護衛の言葉にうんうんと頷いた。

「そろそろ、あいつのツノを売れば一生分の税金を納められるぜ。前もそう言つただろう？」

二人の男たちは言いたいことだけ言つと、泥水に塗れた夫妻を見下ろしてその場から去つて行つた。

一連の場面を見ていた（と言つより見せられていた）リタがあからざまに眉をひそめる。

「なに、あの野蛮人」

「カロル、今のがノール港の厄介の種か？」

「うん、このカプワ・ノールは帝国の威光がものすごく強いんだ。特に最近来た執政官は帝国でも結構な地位らしくてやりたい放題だつて聞いたよ」

尋ねるユーリは意外に冷静だった。頷いたカロルは、この街がお

かしい理由を語る。

つまりはその部下の役人横暴な真似をしても誰も文句が言えないつてことね、トリタが厳しい表情で吐き捨てた。

あの者たちは、人を何だと思っているのか。弱き者は虐げられ、一部の力のある者だけがのさばっている。

自分にはどうすることも出来ない世界の仕組みにエリシアは唇を噛んで呟いた。

「……最低」

それは果たして、誰に対しても呪かれたものなのか、彼女以外は知るよしもない。不条理な世界にか。あるいは名も知らぬ執政官にか。一方、エステルは呆然とうずくまる夫婦の姿を見つめていた。

「そんな……」

城にいた頃は、帝国の恩恵は全ての民に等しく与えられるはずだと思っていた。それが間違だと気付いたのは旅を始めてから。ヨーリが住む下町を見て、エリシアの話を聞いて。

それでも心のどこかでは信じていたのだ。“帝国”を。

なのに、それは間違いだつた。これが現実だ。ディドン艦隊でエリシアが言つたように、変えられない世界の仕組み 理だ。

「もう止めて、ティグル！ その怪我では……今度こそあなたが死んじゃう！」

唐突に聞こえた叫び声に振り向くと、立ち上がりうとする夫を、妻が必死で止める所であった。ティグルと呼ばれた男は止める妻の

手を振り払い、何とか出口に向けて歩き出す。

宿屋の壁に背を預け、両手を組んでいたコーリーは無言で足を出し、男の足を引っ掛けた。

完璧な足払いに男はバランスを崩して思わず倒れてしまつ。もともと怪しい足取りであつたことも原因だらつ。

「痛ッ……あんた、何すんだ！」

「あ、悪い、ひつかかつちまつた」

コーリーは言いながらも、全く悪びれる様子もない。謝る気などはなからないのか正に棒読みである。

追いついて来たエスティルが急いで男の前にしゃがみ込んだ。遅れてエリシアやリタも一人に駆け寄つた。

「もう… コーリー… めんなさい。今、治しますから」

「貴女も怪我してるみたいですね。見せて下さー」

エスティルは胸の前で両手を組むと、足元に輝く魔法陣が生まれる。金色に煌めく聖なる光は、傷付いた体を優しく包みこんだ。

それを見ていたエリシアも、クラスと呼ばれた女性の体に幾つもある擦過傷に気付き、有無を言わさず手を取つた。夫よりは軽いが、それでもこのまま治療しなければ傷が化膿してしまう。小さな傷とは言え、放置するのは衛生上よろしくない。

戸惑う女性に構わずエリシアは治療を始めた。彼女の足元にもエスティルと同じ金色の魔法陣が浮かび上がる。淡い金色の光は瞬時に肌に刻まれていた傷を全て綺麗に治した。

「あ、あの… 私たち、払える治療費が…」

傷一つない肌を見つめながら、ケラスが恐る恐る口を開いた。確かに治癒術士と医師を兼業する治癒術士はいるし、それで収入を得ている者も多い。それほど高額ではないが、彼らの事情を考えるとその治療費を払えるだけのお金もないのだろう。

「その前に言つことあんだけ」

「え……」

訳が分からないと言つた様子でケラスは声を漏らした。ユーリは呆れたように息をついた。エスティルやエリシアが金田町に傷を治したとも思つていいのだろうか。

金の心配をする前に、一人に何かいうことがあるのではないか。

「まつたく、金と一緒に常識まで絞り取られてんのか？」

「……」「はじめんなさい。ありがと」「やせこます」

「いえ、好きでやつたことですから」

ユーリが言いたいことを理解したケラスは慌てて頭を下げた。申し訳なさそうな表情の彼女を見て、治癒を終えたエリシアが答える。エスティルの方はまだ時間がかかりそうだ。元々怪我を負った部分が多いことと、予想以上に傷が深いことが関係している。いくら治癒術と言えど、深い傷を一瞬で治すのは不可能だからだ。

その様子を見つめながら、ユーリは視線を背後に向けた。黒い装束に赤い目がユーリの視界の端を過ぎる。仲間たちに気付かれぬよう、彼は静かにその場を後にした。

「……ユーリ？」

真っ先に彼の不在に気付いたエリシアはユーリの名を呼ぶ。しかし彼の姿はどこにもなかつた。

仲間たちから離れたユーリは路地裏にいた。

煉瓦の壁に貼られた無数の手配書に積み上げられた木箱。降りしきる冷たい雨が容赦なくユーリの体を濡らす。先程、目にしたのは特徴的な黒衣に赤いゴーグルを身につけた男。

それは間違いない城で、ハルルで見た暗殺者たちである。一見すると狭い路地には誰もいないように見える。

だが見えなくとも感じるのだ。自分に向けられた殺氣に気付かないほど、鈍くはない。無造作に剣を手にしたユーリが笑う。

「おいおい、それでもプロだろ？ いくらなんでもお粗末過ぎるつてな」

刹那、ユーリの前に姿を現したのは黒装束の男たちだつた。数は三人だが、感じる殺氣はそれだけではない。繰り出される斬撃を難無くかわし、抜き放つた刃ではなく柄の方で刺客の腹部を強打する。しかしながら、相手も訓練を受けた者たちだ。その程度では倒れはしない。

ユーリは腹を押さえる刺客に足払いを掛けると、背後から襲い掛

かつて来た刺客の剣を跳ね上げ、剣から発生させた衝撃波 **蒼破** 刃で弾き飛ばした。だと言うのに、刺客たちは何度も起き上がる。

コーリは思いきり地面を蹴り、助走を付けて高く跳んだ。かと思えばそのまま刺客たちの中心に飛び込み、剣を振り上げる。

「……めんどくせえ。まとめて終わりな！」

コーリは振り上げた剣をそのまま地面に叩きつけた。

瞬間、剣の周りに円状の衝撃波が広がり、刺客たちに襲い掛かる。その手のプロでもある彼らは、衝撃を逃がすことには成功した。だがそこに一瞬の隙が生まれる。彼らが怯んだ隙にコーリは即座に叩き付けた剣を、今度は地面に向けて突き刺した。

「もひとつ！」

コーリを中心に生まれた金色の衝撃波が刺客たちを大きく吹き飛ばし、頑丈な煉瓦の壁に叩きつける。ちらりと見やつた男たちは動く様子はない。完全に意識を失っているようだ。

終わつたか、誰にともなく呟き、コーリは小さく息を吐いた。が、頭上から感じた殺気に反射的に空を見上げた。民家の屋根から飛び降りて来たのは新たな刺客。

（勘弁してくれっての）

コーリは心の中で悪態をつき、短剣の一撃を剣で受け止めるが、弾き返すには至らない。刺客たちは個々の力はコーリに及ばないものの、コーリも先の戦闘で予想以上に体力を消耗していた。冷たい雨と使つた技も理由の一つである。

コーリが刺客の剣を受け止めた瞬間、別の角度からもう一つの刃が迫る。避けきれない。痛手を覚悟で飛び込むか、それとも……。

「ユーリが覚悟を決めた瞬間、彼と刺客の間に入り、刃を受け止めた一本の剣。

剣の持ち主は輝く金の髪に青空と同じ色の瞳を持つ青年だった。まるでどこかの王子と言わっても差し支えのない整った顔立ちに、雨に濡れて光沢を放つ騎士団特有の鎧を纏っている。刺客の剣などものともしない。一切無駄のない最低限の動きで攻撃を捌き、跳ね返す。突然の登場に啞然とするユーリを尻目に青年は晴れやかに笑った。

「大丈夫か、ユーリ」

「フレン！ おまつ……それはオレのセリフだろ！」

「まつたく、捜したぞ」

その言葉で我に返ったユーリは、呆れた顔で青年を見上げる。剣を下げたまま、青年 フレンが言う。

捜したとフレンは言うが、どちらかと言うと、それは自分が自分が使うべきではないか。なんせあのお嬢様に付き合つて、彼の行方を追つっていたのだから。

「それもオレのセリフだ！」

叫ぶユーリに刺客は一旦剣を引いて後ろに下がる。もう一人の仲間と目配せをすると素早く地面を蹴つた。

ユーリはちらりとフレンを見る。フレンも同じように彼を見た。二人の間に余計は言葉は必要ない。ユーリが小さく笑い、フレンもまた顔を綻ばせる。

一人は同時に、しかも寸分の狂いもなく同じ動きで刺客の剣を弾くと何度も斬り付ける。まるで合わせ鏡を見ているかのように二人の動きは完璧に同じだった。はつ、とコーリとフレンの口から息が吐き出される。

刹那、二人の剣から放たれた衝撃波が刺客を直撃し、奥に積み上げられた木箱に激突させた。

今度こそ辺りから殺氣が消えた後、コーリはやれやれと剣を鞘に納めた。

「マジで焦った。助かったぜ、フレン」

コーリの目の前にフレンの剣が振り下ろされる。コーリは反射的に剣を鞘から抜き、フレンの剣を受け止める。いくら何でも再会早々これはないだろう。

流石に友人に斬られるような事をした覚えはなかった。

「ちょ、お前、なにしやがるー。」

「コーリが結界の外へ旅立つてくれたことは嬉しく思つていぬ」

フレンは口では嬉しいと言つても、剣を振るう手を止めることはない。コーリは相手の剣をことじりとく捌きながら、軽く言つた。

「なら、もつと喜べよ。剣なんて振り回さないで」

「これを見て、素直に喜ぶ気がうせた」

「あ、10000ガルドに上がった。やり。ってエリイも上がつてんな。後で教えてやるか」

フレンは剣の切つ先を壁に向けた。正確には壁に張られた紙に。紙には下手くそな似顔絵とコーリ・ローウェルの名が書かれている。ふと隣に張られた紙に目を向けると、そこには薄紅掛かつた金色の髪の少女とエリシア・フランベル、賞金5000ガルドと殴り書きがしてあつた。

後でエリシアにも知らせてやろう。色々と吹つ切れたらしい今の彼女には、どうでも良いことかもしれないが。

「騎士団を辞めたのは犯罪者になるためではないのだ」

剣を鞘に納めながらフレンは、コーリに分かるよつに大きくため息をついた。

一方ユーリは彼に背を向け、色々と事情があつたんだよ、と返す。ユーリとて最初から犯罪者になるつもりで指名手配された訳ではない。言うなれば成り行きだ。詳しい話をしては口が暮れるし、許してくれるとも思えなかつた。

そして案の定、そんな答えでは生真面目な幼なじみが引き下がるはずがない。

「事情があつたとしても罪は罪だ」

「つたく、相変わらず頭の固いやつ……あつ」

どこまでも変わらない幼なじみに、もうため息すら出なかつた。そう、そうなのだ。フレンは確かに頼りになるし、剣の腕は言つまでもない。致命的な聲音痴ではあるが、料理はレシピ通りに作れば驚くほど美味かつた。何でも器用にこなし、一見すると欠点などなさそうなのだが、何よりも頭が固すぎる。

どうやって頭の固い幼なじみを説得するか。コーリが思案した時、ナイスなタイミングで現れた別の人間の声が路地裏に響いた。

「コーリ、せっかくここで何か事件があつたようですが」

現れたのはティグルの治療を終えたエステルと恐らく、彼女一人で行かせるのはまずいと思ったのであらう、エリシアである。突然姿を消したコーリを捜しに来たのだ。

仲間たちを巻き込む訳にはいかず、一人で路地裏に来たことを知られれば怒られそうだ。

「ちゅうどい」ということ

コーリにつられるようにフレンも声の方を見る。フレンの姿を認めたエステルと、エステルを見つけたフレンが呆然と立ち戻した。どちらも驚いているのだろう。フレンはまさかエステルがここにいるとは知らず、エステルもまた彼に会えるとは思つていなかつたのだ。

「……フレン！」

「え、エステル！？」

我に返つたのはエステルが先だつた。状況が分からず目を白黒さ

せるエリシアそつちのけで走り出した彼女は、勢いよくフレンに抱き着いた。

「よかつた、フレン。無事だつたんですね？ 怪我とかしてませんか？」

「……してませんから、その、エステリーゼ様……」

「大丈夫、ユーリ？ 赤目と一戦やらかしたんでしょう。怪我はないみたいね」

無事を確かめるようにエステルは、フレンの腕や胸をべたべたを触る。彼が戸惑っているのも構いなしだ。フレンも戸惑いながらもエステルの好きなようにさせている。

そんな二人を一瞥し、入り口から歩いて来たエリシアがユーリに声を掛ける。

路地裏を見回すと、木箱はばらばらだし、凄い有様だ。ここで戦鬪が行われたというのは一目瞭然だ。黙つて姿を消したことも考えると、相手はあの暗殺者たち。

ユーリも誤魔化しは無駄だと分かっているのだろう。素直に肯定した。

「ああ。探しに来てくれたのか？」

「だつて勝手に居なくなつたから。それであの人がフレンね。ユーリとエステルから聞いた通りの人みたい」

エリシアの視線の先には、困ったように微笑む青年。ユーリのお馴染みで親友、確かに何から何まで正反対な感じがする。

エステルに心配されているフレンは戸惑いながらも嬉しそうだ。

確かに見た感じ、眞面目そうではあるが、ユーリが言つてゐるに融通が効かないようには見えない。

「……」「ん」

フレンは何を思ったのか、そう言つてエステルの手を掴んだ。え？ あ、ちょっと……フレン、お話しが……！？ と慌てているのもおかまいなしである。彼女の手を引いたフレンは、ユーリとエリシアを残し、足早に路地裏から消えて行つた。

「行つちゃつたけど、いいの？」

二人が去つた方を見つめた後、視線をユーリに戻す。エステルは勿論、ユーリも久しぶりに彼と会つたのだろう。再会したばかりなら、色々と積もる話もあるのではないかと思ったのだが。

「……城のお嬢様だからな。色々あんだる」

「ユーリがそう言つならいいけど。エステルのことだから、きっと話は長引くんじゃないかな。折角だから街、見て回らない？」

あのエステルのことだ。城から出て何をしたとか初めて見たものだとか話は弾むに違いない。それに自分たちには聞かれたくない話もあるのだろう。

彼女は貴族の姫で、こちらはしがない一般人。聞かれたくないと言つよりは聞かせたくない話、かもしだれないが。

「そうだな。雨も小振りになつて来たことだし」

空を覆う雲は厚く、太陽の光はまるで見えない。

しかし先程と比べ、少しだけ雨の勢いはましになつた気がする。ノール港は帝国の威光が強いこともあり、エリシアは殆ど見て回つた記憶がない。一人なら不安だが、コーリが一緒ならきっと大丈夫。それにもう賞金首になつたのだから同じことである。

「あ、エリィ、賞金5000ガルドに上がつてたぞ。おめでとせん。ちなみにオレは10000ガルドな」

「なんで上がつてるの！？ コーリも私もあれから何もしてないのに……」

さりとて言つたコーリはまるで、世間話をするようなものだ。だからエリシアも一旦聞き流したが、賞金と言つた単語が耳に引っ掛かった。手配書が出回つたのは丁度ハルルの街に戻つて来てから。それからエーフィードの丘を越え、ノール港まで来た。罪は重ねてない……はずだ。

「そりゃあ、エステルがいるからだろ？」

「あ、そつか。つまりは雪だるま式……あ、悪夢としか考えられないと」

エステルが城に帰らない限り、賞金は上がる一方だつ。と言つことは今も上がり続けていると。（嗚呼、カミサマ。そんなもの居るかどうか知らないけど、私が何をしたつて言つんですか）

思わず恨み言が出たが、いもしない神に祈つても無駄だ。現実は容赦無いし、自分が置かれた状況も変わらない。嘆く前に行動を起

」すべきだ。

「まあ、気楽に行こうぜ」

「そう、だね。今更何言つたってどうにかなるものでもないし。コ
ーリ、張り切つて行こう。ほら早く」

一転、立ち直ったエリシアは、皿をしづかせるコーリの手を取
つて歩き出す。元気を取り戻した様子の彼女を見て、コーリは気付
かれぬよう小さな笑みを作った。

雨がしつとと振り続く中、カプワ・ノールで一番大きな館
この街を修めるラゴウ執政官の屋敷に向け、正面から堂々と歩いて
行く少女の姿があった。

年の頃は十代前半から半ばにはまだ届かない。金色の髪を左右で
三編みにし、頭の上にはレースを縫い付けた海賊帽をちょこんと乗
せている。

着ている濃紺に白い縁取りの服も、大人用の上着をワンピース代
わりに着ているような感じだ。

少女は口に串に刺さった何かをくわえたまま、門を通り過ぎよう
とする。

しかし、そつは問屋が卸さない。警備の傭兵に首根っこを掴まれ、

あつと悲鳴を上げた。

「何入る?としてんだ、このガキが

「まあまあ、これでも食つて落ち着け」

「こりねえよ。ガキが来るといじやねえんだ、こいつ

少女が差し出したのは、今まで彼女がくわえていた、おでんと言われる食べ物である。男は掴んだままの少女をひょいと投げ飛ばした。

するとちょうど前を通り掛かったコーリとエリシアの前方から、何と少女が飛んで来るではないか。コーリが慌てることなく少女の体を受け止める。

「おつと、つと……」

「むむ

コーリの顔を真正面から見た少女が何やら変な声を上げた。怪我はないようだが、もしかすると、どこかぶつけたのかもしていない。そう思つて、エリシアは案じるよつに顔を覗き込む。

「大丈夫?」

「つむ。何ともない

石畳に下りされた彼女は胸を張つて答える。服装からして地元の少女ではないのだろう。服はどう見ても海賊のようだし、雰囲気が違う。そして、この街の子供とて、執政官の館には近付こうとはしま

ないはずだ。

それにしても、いくら勝手に館に入ろうとしたとは言え、こんな子供に些か乱暴ではないか。そう思つたのはコーリも同じらしい。

「子供一人に随分乱暴な扱いだな」

「そうよ。貴方それでも大人？」

コーリが受け止めていなければ、彼女は怪我をしていたかもしない。おまけに彼女はまだ十代半ばほどだろう。そんな子供を相手にこの仕打はいくらなんでも酷過ぎる。

男はと言つて、二人の言葉をものともせずに吐き捨てた。

「なんだ、お前らは。そのガキの両親が何かか？」

目が点になつたのは言つまでもない。どこをどう見れば、そんなふざけた答えが出て来るのか、是非とも教えて頂きたい。

コーリはエリシアの額に青筋が立つたのを見逃さなかつた。頼むから暴力沙汰は勘弁してくれよ、エリイと心の中で呼びかける。

「オレらがこんな大きな大きな子供の親に見えるつてか？ 嘘だろ」

「……全く笑えない」冗談をありがとつ

我慢、我慢よ、私、と言い聞かせて笑みを浮かべる。

ここがノール港ではなく、相手がただの傭兵ならエリシアは間違いないぐぶつ飛していただろう。それはもう完膚なきまでに叩きのめしていた。負ける気など皆無だし、勝てる自信は大いにある。

「再チャレンジなのじゅ

「あ、ちょっと……」

諦めが悪いと言つべきか。エリシアの制止も聞かず、少女は果敢にも正面突破を試みる。

しかし男が抜いた剣を鼻先に突き付けられては彼女も止まるしかない。あう、と短い声を上げて後ずさつた。寸での所で止まつたらまだ良いが、もし刃が彼女を傷付けたらどうするつもりなのだろうか。

「おいおい。丸腰の子供相手に武器向けんのか」

「ガキにはこれが大人のルールだつてことを教えてやるだけだよ」

ユーリが咎めるが、男は悪びれる様子などこれっぽっちもない。いい大人が子供を相手に大人げないにもほどがある。エリシアは呆れたように男を見た。何が大人のルールか。そもそも大人なら、無闇矢鱈に子供を怖がらせることはないし、間違つても武器を向けることもない。

「その前に大人の懐の広さを見せてみなさいよ」

「えいっ！」

懐に何やら手を入れた少女は、取り出した物を石畳に叩き付ける。一瞬で辺りが煙 しかも黄色である、に包まれた。普通の煙幕ではないのか鼻をつくこの臭いは……。煙に包まれた向こうから男たちの、なにしやがる！ うつぶ……や、やりやがった……との悲痛な悲鳴が上がるが因果応報だ。

煙で周囲が見えづらい中、ユーリが走り去ろうとした少女の手を

掴む。

「おこおこ、いいやつとこで逃げる気か？」

「美少女の手を掴むのには、それなりの覚悟が必要なのじゃ」

「じ、自分で美少女つて言つ貴方も凄いと思つよ」

何とか声には出したものの、この臭いはちょっと辛すぎる。涙まで出て来る始末だ。コーリが心配して大丈夫か、と声をかけてくれたが、全然大丈夫じゃない。クオイの森でニアの実の臭いを嗅いだ時と同じだ。言葉にするのも難しい。とにかく臭いのだ。

少女は慣れているのか、それとも何かしているのか、平然と動いている。

「己の美しさを理解して」少女の武器とつものじや。名残惜しいが別れの時、さらばじや

さりげに凄い事を言わなかつただろうつか。少女は煙が消える前に男たちの間を通り過ぎ、館の中へとかけて行つた。

エリシアは吸い込んだ煙を入れ替えるように何度も呼吸を繰り返す。

その間にも、少女が屋敷に侵入した事には気付いたらしく男の一人が悪態をつき、彼女を追つて姿を消した。

「おー、お前らもさつと消えるんだな」

「言われなくともそのつもつよ。コーリ？」

「つたく……やつてくれるぜ」

残つた一人がエリシアたちを一瞥した。言われずともこの館に用はない。

ユーリは彼女の手をしっかりと掴んでいたはずだが、今彼の手に握られているのは少女を象つた人形である。人形と言つても結構しつかりした作りだし、服や帽子まで再現されていた。

「へえ、あの子には私たちの助けは必要なかつたかもね」

「かもな。そろそろ戻るか。フレンとエステルの話も終わつた頃だろ……」

エリシアたちが助けずとも、彼女は彼女で上手くやつたのかもしない。ならば自分たちがしたことは、お節介だつただろうか。何にしても、今更考えても仕方がない。

結局街を見て回る時間は殆どなかつたが、時間を潰すという目的だけは達成出来たと言えるだろう。

これ以上、面倒事に巻き込まれないためにも一人は執政官の屋敷を後にした。

「用事は済んだのか？ そつちのヒミツのお話も？」

エリシアとコーリが、会流したリタとカロルと共に宿屋の一室を訪れたのは、執政官の館から戻った直ぐのことだった。宿屋の主人はフレンの名を告げるとすぐに案内してくれる。

豪華ではないが、きちんと整理された清潔感溢れる部屋の端には白いソファーが置かれてあり、フレンとエステルは向かい合つて座っている。

「……までの事情は聞いた。賞金首になつた理由もね。そこの君も。まずは礼を言つておく。彼女を守つてくれてありがと」

フレンはソファーから立ち上がりコーリとエリシアを見た。エステルも彼と同じように立ち上がって、あ、わたしからもありがとうございましたと丁寧に頭を下げる。本当に律儀なのだらう。

コーリはそんな幼なじみを見て苦笑していた。

「なに、魔核泥棒探すついでだよ」

「私もお礼を言われるほどのことでも。困つててる人を助けるのには理由はいらないでしょ？」

コーリがフレンは頭が固いと散々言つていたが、ちゃんと話が分かるではないか。

しかしエリシアの耳は、問題はそつちの方だな、と呴いたフレンの声を聞き逃さなかつた。それはコーリも同じらしい。眉をひそめて首を傾げる。

一方、フレンはつづて変わつて固い表情をしていた。

「どんな事情があれ、公務の妨害、脱獄、不法侵入を帝国の法は認めていない」

「『』、ごめんなさい。全部話してしまいました」

一転して態度を変えたフレンに、エステルは申し訳をさうに頭を下げた。どうやら全ての罪はフレンに簡抜けらしい。エステルの性格で隠すのは難しいだろう。嘘もつけないだろうし。

勿論、エリシアがヨーリと同じように賞金首であることも知っているのだろう。でなければ初めに礼を言つた時、わざわざこいつらを見ないはずだ。

「しかたねえなあ。やつたことは本當だし」

「すゞしく落ち着いてるけど、つまりそれ相応の処罰を受けるってことだと思つけど……」

言いつつもヨーリは表情も声音も変わつていない。そんなに冷靜でいいのだろうか。どんな理由があれ、罪は罪。だから彼は罪を認め、おとなしく処罰を受けると言いたいのだろう。

エリシアの指摘にフレンも軽く目を伏せて頷いた。

「彼女の言つ通りだ。いいね？」

「フレンー!？」

どうして、とエステルの声が上がる。ヨーリとエリシアは自分を助け、ここまで守つてくれたのだ。そんな二人に恩を仇で返すよう

な事はしたくない。

しかし抗議しかけたエステルをコーリは無言で制し、何でもない声で言った。

処罰を受ける前に自分にはいや、自分たちにはまだやるべき事が残っている。

「別に構わねえけど、ちょっと待つてくんない？」

「下町の魔核を取り戻すのが先決と言いたいのだろう？」

分かつていて、とばかりにフレンが頷く。なんだかんだ言つても流石は幼なじみ、以心伝心である。その通りだとコーリは不敵に笑つて見せた。

その時、数回のノックと共に一人の人物が入つて来る。

一人は茶色の髪をした小柄な少年だ。アスピオの魔導士が纏う白のローブを着込み、緑のフレームの眼鏡。背には身の丈以上もある杖を背負つていることから魔導士だろう。

もう一人は生真面目そうな雰囲気を漂わせる女性騎士。

女性にしては短めな赤茶の髪に切れ長の紫の瞳はまるで猫のよう。女性であることから、纏う鎧はフレンより若干金属部分が少なく、腰にさげた鞘には一振りの剣が納められている。

「フレン様、情報が……なぜ、リタがいるんですか！？ あなた、帝国の協力要請を断つたそうじゃないですか？ 帝国直属の魔導士が、義務づけられている仕事を放棄していいんですか？」

少年はフレンに視線を向けようとしたが、壁にもたれ掛かつたり夕を目にした途端、早口にまくし立てた。エリシアは窺うようにリタを見るが、心当たりはないようだ。リタの知り合いではないら

しい。一方的に知っているだけなのだろうか。

コーリが誰かと尋ねるが、彼女の顔からするに返事は期待出来ない。そして案の定、リタは少年の顔に全く見覚えがなかった。

「……誰だっけ？」

「忘れたとか？」

「さー？ 悪いけど、全然見覚えないわ」

いつそ晴れやかに笑うリタに少年の口元が引き攣った。だつて覚えてないのは仕方ないでしょ、つていうかあたしの記憶に残らないくらい存在感が薄いのが悪い。とトドメの一発も忘れない。これはかなり精神にくる一発だ。覚えてないと言われるのは地味に痛い。

「……ふん、いいですけどね。僕もあなたになんて全然まったく興味ありませんし」

少年は少しだけ眉を潜めると、眼鏡を押し上げる。

負け惜しみのような言葉にも聞こえるが、リタは一向に気にしない。フレンはリタと少年の間に立ち、一人を紹介した。

「紹介する。僕……私の部下のソディアだ。こつちはアスピオの研究所で同行を頼んだウイチル。彼は私の……」

「……いらっしゃ……賞金首のつ……」

ソディアと紹介された彼女は軽く会釈をして一行に視線を向ける。彼女の目がコーリを捉えた瞬間、既に剣に手を掛けていた。

ソディアは即座に剣を抜き放ち、ユーリと隣にいるエリシアに突き付ける。二人に向けられているのは紛れもない殺氣だが、ユーリは気にした風でもないし、エリシアだって平氣そうにしているではないか。

「剣を抜いたのなら本氣でいかなきや。即座に敵の武器を弾き飛ばし、反撃を封じる。隙を与えてはならない」

相手を挑発するくらいだ、余裕があるのだろう。

ユーリに似た不敵な笑みを作ったエリシアは銃に手を掛けてしまいものの、その気になれば銃を取ることも、高速詠唱だって出来る。

いくら自分たちが賞金首としても、いきなり武器を突き付けられるのは気に入らない。そちらがその気ならこちらも容赦しない。まだ捕まる訳にはいかないのだ。

そしてそれはソディアも同じようである。気に入らないとでも思つたのだろうか。剣を持つ手は僅かに怒りで震えていた。

しかし部下をこのまま放つて置くフレンではない。ソディアの前に立ちふさがり、じつと彼女を見つめる。

「ソディア！ 待て……！ 彼は私の友人だ。勿論、彼女も」

エリシアが賞金首となつたのも、エステルを助けた事が原因である。一応、その前に脱獄はしているが、脱獄だけでは賞金首にはならない。フレンもそれを知つていて、考える方が妥当だ。

しかし今、ソディアにそれを説明しても彼女は納得しないだろう。それよりはとユーリと同じように友人と紹介してくれたのだろうか。ユーリとフレンは全く違うように見えてやはり似ている。そう思えば、少しだけ嬉しくなった。

ウイチルは兎も角、ソディアはフレンの説明に納得していないよ

うだ。

「なつ！ 賞金首ですよー。」

「事情は今、確認した。確かに軽い罪は犯したが、手配書を出されたのは濡れ衣だ。後日、帝都に連れ帰り私が申し開きをする。その上で、受けるべき罰は受けてもらひ。」

フレンの言葉にソディアは渋々と言つた様子で剣を納める。

もしかしながら、エリシアもザーフィアスまで連行されるのだろうか。この言葉はどちらかと言えば、ソディアではなく、エリシアやコーリに向けられたものなのだろう。

「し……失礼しました。ウイチル、報告を」

「ここの連続した雨や暴風は、やはり魔導器のせいだと思います。季節柄、荒れやすい時期ですが船を出すたびに悪化するのは説明がつきません」

ソディアに促され、ウイチルが報告を始めた。それを聞きながら思い出したことがある。

先程会った夫婦、ティグルが長い間、天候が悪くて船も出せないと言っていた。

ウイチルの言つ通り、季節柄、荒れやすい時期ではあるが、ノール港は比較的穏やかな気候である。エリシアの出身でもあるトルビキア大陸ならいざしらず、この大陸で雨や暴風が続くことはまずない。

「ラゴウ執政官の屋敷内にそれしき魔導器が運び込まれたとの証言もあります」

ウイチルの報告にゾディアが付け加える。

その魔導器が異常気象に関係していないはずはなかつた。きな臭くなつて来た所の話ではない。全てラゴウが仕組んでいたのだろうか。天候が回復しなければノール港の人々は漁に出れず、当然税金も払えない。

「待つて。魔導器で天候を操るなんて可能なの？ 私はそんな話、聞いたことないリタは？」

魔導器で天候を操るなど聞いたことがない。そもそも、そんな便利なものがあるのなら、砂漠が生まれることなんてないし、水不足に悩まされることもない。有り得ないのだ。

もし発掘されていれば、ライイングゲート遺構の門から何か発表でもあるだろう。遺構の門は発掘を専門に行うギルドで、アスピオの魔導器研究所と共同で魔導器の発掘を一手に引き受けているのだ。

まだ公式に発表されていない事態だつてあり得る。魔導器研究家のリタならあるいは、と思いリタを見るが、表情を見る限り彼女も知らないようだった。

「あたしは……天候を制御できるような魔導器の話なんて聞いたことないわ。そんなもの発掘もされてないし……いえ、下町の水道魔導器に遺跡の盗掘……まさか……」

リタは顎に手を当て、何やら呟き始める。

心辺りでもあるのだろうか。下町から盗まれた水道魔導器の魔核に遺跡の盗掘、全ては繋がつてているのかもしぬれない。考えてはみたものの、さっぱり分からぬ。

「執政官様が魔導器使って、天候を自由にしてるつてわけか」

「街の人にしてみれば迷惑な話ね。聞いた所、そのラゴウつて人、随分評判が悪いみたいだし。ほぼ間違いない。でも決定的な証拠がなければ貴方たちは動けない」

呆れたようなユーリにエリシアも同意する。ほぼ間違い無いだろうか、ここで問題が一つ。

ラゴウ執政官は貴族、つまりは評議会の人間だ。皇帝が空位の今、帝国は一つの組織によって支えられている。一つはフレンたちの所属する騎士団、そしてもう一つが貴族によって纏められる評議会だ。平民でもなれる騎士とは違い、評議会は貴族でなければ所属することが出来ない。

そうなれば当然、一つの組織には溝が出来るだろ。皇帝がいなこと言つことは、どちらかが帝国の実権を握ると言つことである。それがまた両者の溝を深めていると言つても過言ではなかつた。

「……ええ、ラゴウは悪天候を理由に港を封鎖し出航する船があれば法令違反で攻撃を受けたとか」

「それじゃ、トリム港に渡れねえな……」

「で、そんな大事な話、部外者の私たちに話していいの?」

一通りの話を聞いたエリシアは視線をフレンに向けた。

つまり雨を、と言うよりその天候を操る魔導器をどうにかしなければ、トリム港には渡れない。それはそうとして、そんな大事な話を一般人に聞かせていいものか。

敵対しているとは言え、ラゴウとて帝国の人間だろう。貴族であるエスティルや、魔導器研究者のリタは別として、自分やユーリは全くもつて関係ないのだから。

もつともな問いにフレンは頷く。

「確かに君たちは民間人だ。だが信頼しているからね。それに執政官の悪い噂はそれだけではない。リブガロという魔物を野に放つて税金を払えない住人たちと戦わせて遊んでいるんだ。リブガロを捕まえてくれれば、税金を免除すると言つてね」

エスティルが口を抑えてひどい、と呟いた。

魔物を目にすることもない人々がいきなり魔物を捕まえるなんて士台無理な話だ。そもそも捕まえるというのは殺すよりも難しい。ラゴウは初めから無理だと分かつていてやらせているのだ。

「……最低、外道よ。人は玩具なんかじゃないのに」

出来ることなら一発殴つてやるといいくらいだ。何が貴族だ。何が執政官だ。先程の夫婦の怪我もその魔物を捕まえるために負つたものなのだろう。下手をすれば死んでいたかもしれないのに。

「入り口で会つた夫婦の怪我つて、そういうからくりなんだ。やりたい放題ね」

「そういえば、子供が……」

夫婦のことを思い出すと同時に、彼らの会話も。子供がどうかしたと言つていなかつただろうか。

言いかけたカロルにフレンが首を傾げる。

「子供がどうかしたのかい？」

「なんでもねえよ。色々ありすぎて疲れたし、オレらこのまま宿屋

で休ませても、うつわ

カロルが言う前に、背を向けたユーリーが遮った。

そう、フレンは前だけを見ていいのだ。余計な事は全て自分で任せて置けば。そのための自分だ。フレンが光ならユーリーは影でいい。

そのまま余計な事を口走らないようにカロルを伴って部屋を出る。リタも一人に続き、エリシアも僅かに考えた後、直ぐに後に続いた。

「それと……例の『探し物』の件ですが……」

皆と同じように背を向け、歩き出そうとしたエステルの耳にソディアの声が入つて来る。小声であつたために聞き取れなかつたが、探し物と言つたのは確かだ。

探し物とは何だろう。エステルの頭の中で何かが引っ掛かつたが、それ以上は聞こえない。深く考えること無く、直ぐに諦めて部屋を出た。

穩便な方法とは

雨脚は僅かにマシにはなつたものの、まだ雨は降り続いている。中々止まない異常とも言える雨も魔導器が起こしているとなれば納得出来た。

しかし宿屋を出たのはいいが、港が閉鎖されている事を考えるとエリシアたちが出来ることは少ない。全てはどう動くかにかかるとくるとも言えるだろ?」

一向に止む気配がない雨を見せられでは、気分まで憂鬱になつてくるというも。エリシアと同じように空を見上げたカロルが誰にともなく尋ねた。

「これからどうする?」

「わたし、ラゴウ執政官に会いに行つてきます」

フレンが無理でも、自分なら何とかなるかもしね。そう思つたエステルは、今にも駆け出しそうな勢いで言つ。

「いくら執政官と言えども“エステル”の存在は無視できないはず。そう考へたからだ。」

「え? ボクらなんか行つても門前払いだよ。いくらエステルが貴族の人でも無駄だつて」

「とは言つても、港が封鎖されちゃトリム港に渡れねえしな。『デッキつてこそ泥も、隻眼の大男も海の向こうにいやがんだ』

カロルが驚いたような顔をするが、今出来ることがそれしかないのだ。

「コーリの言う通り、港が封鎖されていてはノール港から動けない。隣の大陸、トリム港に渡る事が出来なかつた。

魔核泥棒であるデデッキは勿論、隻眼の大男が誰であるのか、エリシアは確かめなければならない。

もし男がエリシアの想像通りの人物なら、この一件の裏には大きなものが隠れているかもしないのだ。場合によつては父に連絡を取る事態もありうる。

「うううだ考えてないで、行けばいいじゃない」

「今はそれしか選択肢はないみたいだしね」

何にしても今は情報が欲しい。隻眼の大男のこともラゴウの目的も。

闇雲に動く事は危険だが、今は正に手詰まり状態。このまま手をこまねいている訳にもいかなかつた。多少の危険を覚悟して動かなければ。

「話の分かる相手じやねえなら別の人間を考えればいいんだしな」

「ちょっと物騒だけど仕方ないわよ。大方、話の分かる相手じやないと思うけど」

コーリの言つ別の人間が十中八九、穩便ではないことくらい付き合いの浅いエリシアでも分かる。どうせ話の分かるような人物ではないのだ。

ここの人々を散々な目に合わせて来たのだから、それくらいは許容範囲内だろう。

「では、ラゴウ執政官の屋敷に向かいましょう

「ねえ、何なら話が分かる相手か賭ける? あ、ボクは分からないに1000ガルドね」

雨の中、歩き出したカロルが胸を張つて提案する。コーリからは分からない方に10000ガルドな、との答えが返つて来た。

「私も分からないに10000ガルド」

「……あたしも」

「もあ。それじゃあ賭けにならないじゃん!」

エリシアとリタも分からぬ方に賭けると、カロルが不満気に頬を膨らませた。そんな事言われても、今までの話を聞いて、話が分かる人物だと思う方がおかしいのではないだろうか。

「話せばきっと分かつてくれます!」

「……前言撤回。ここに一名いたか」

空氣を読まず、と言ひかいつそ清々しいまでに力説するエステルに、コーリとエリシアは思わず頭を抱えくなつた。

一行は宿屋を出ると、ラゴウ執政官の屋敷を日指す。

屋敷の前には先程も見た傭兵一人が佇んでいる。しかしにやつて来るエリシアたちを目にした傭兵は、あからさまに訝しげな顔をした。

「なんだ、貴様ら」

「ラゴウ執政宮に会わせて頂きたいんですが」

エステルはそんな傭兵の態度には気付かず、丁寧にお辞儀をする。勿論、ただお願いしただけで会わせて貰えるとは思えないのだが。カロルはそんな傭兵を見て、不安気にコーリを見た。

「コーリ、この人たち、傭兵だよ。どこのギルドだろ？……」

「道理でガラが悪いわけだ」

「ブラッヂ・アライアンス紅の絆傭兵団でしょ。でも傭兵が皆が皆、ガラが悪い訳じゃないから」

紅の絆傭兵団は五大ギルドの一つに数えられると書つて、信義に反する行いが多い。おまけにギルドに所属している傭兵のガラも悪かった。

父が率いる獅子の咆哮レオンハルトも護衛はするが、こんな奴らと一緒にされでは、皆がかわいそうではないか。奮然とした様子で語るエリシアに、事情を知らないコーリとカロルは首を傾げるしかない。

彼女はどうして怒っているのだろう、と。

「エリイ？ どうしたの？」

「別に何でもないから…」

「何でもなくねえだろ」

不思議そうな顔をする仲間たちに何でもないと首を振る。コーリたちがギルドに対してもいい印象を抱いていないのは仕方が

ない。確かにギルドの中でもガラの悪いギルドや評判のよくないギルドだつてある。

だがそれと同じ、いやそれ以上に良いギルドだつてあるのだ。

コーリに怒つてゐる訳ではない。ただ、道理でガラが悪い、と言われたのは正直悲しかつた。

「ふん、帰れ、帰れ！ 執政官殿はお忙しいんだよ」

「街の連中痛めつけるのにか？」

案の定、簡単に通してくれるはずがなかつた。傭兵はさも面倒くさそうと言つた顔で一行を追い払おうとする。コーリは挑発するよう傭兵を見た。

何が忙しいのだろう。散々人で遊んでおいて。

「さうよ。そんなくだらない事をするのが執政官の仕事じゃないでしょ？」

「おい、貴様ら、口には氣をつけろよ」

傭兵たちは武器こそ抜かなかつたものの、言葉には僅かな殺氣が込められてゐる。望むところよ、と乗つてもいいのだが、騒ぎを起こす訳にはいかない。

二人共、見た所、たいした実力ではないだろうが。

「だから、相手にされないつて言つたじやないか。大事になる前に退散しようよ」

カロルが不満そうに唇を尖らせる。もつとも、この中で話を聞いてくれると思つていたのはエステル一人だろうが。決定的な動きこ

そないものの、正に一触即発と言つた雰囲氣である。コーリもここはカロル先生に賛成だな、と返す。ここで騒ぎを起こしても意味が無い。

「でも、他に方法が……」

「エスティル、今は行け。ここにいても出来る」とはないから

どうにかエスティルを宥めに掛かる。

方法ならまた考えればいい。ここに屈座つて揉め事を起こした方がまずい。

自分たちだけでなく、フレンにまで迷惑がかかるだろ。エスティルは最後まで渋つていたが、皆が引き返す中、遂に諦めて後に続いた。

執政官の館から少し離れた場所で一行は思案していた。分かつていたが、やはりそう簡単にはいかないらしい。

「正面からの正攻法は騎士様に任せるとしかないな」

とコーリ。所詮、一般人である自分たちに出来るとは限られている。

強硬突破は可能だが、少なくとも波風は立てたくないのが本音だ。自分たちは騎士では無いのだから。

では他にどんな方法があるだろう。

「それが上手くいかないから、あのフレンってのが困つてるんじやないの？」

「まあな。となると、献上品でも持つて参上するしかないか」

丁度、街についた時に役人が言つていたではないか。ヨーリの顔が不敵な笑みへと変わる。

こんな時のヨーリは何というか悪知恵が働くらしい。本人に言えば怒られそうなので、ヒリシアは言葉を呑み込んだ。執政官なんて偉そうな人間への貢ぎ物なら当然、それなりの物でなければならないだろう。

「献上品つてまさか……リブガロ?」

「そつ、価値あんだろ?」

な、と笑うヨーリはどうやら本気らしい。

言われてみれば、角を持つてくれば一生分の税金を納められるとか言つていた気がする。一番手つ取り早くて、尚且つ波風を立てない穩便な方法だろう。

「あ、なるほど。一生分の価値になるなら、もしかして……」

「まあ、そんだけ高価なもんなら面ぐらい拝ませてくれるだろ」

天候を操る魔導器のことなどは、角を渡す時に調べればいい。我ながら良い考えだとヨーリは思う。いくら忙しくても、角さえ手に入れればラゴウは姿を見せるに違いない。

するとそれまで黙つて話を聞いていたリタが口を挟んだ。

「リブガロつてのを捕まえるつもり?」

「だつたら今がチャンスだよー。雨降つてゐし」

チャンスだよ、と元気に声を出したのはカロルである。まるで水

を得た魚のように生き生きしている。

でも、そのリブガロと雨に何の関係があるのか。

彼の言葉の意味を測りかねているのは何もエリシアだけではない。エステルやリタ、コーリもだ。

「雨がどうかしたんです？」

「リブガロは雨が降ると出てくるんだよ。天気が変わった時にしか活動しない魔物つてのが、時たまいるんだよね」

それならエリシアも聞いたことがある。リブガロについては知らないが、小耳に挟んだことがあった。

身体構造が関係しているのか何なのか、雨や曇りの日にしか姿を見せない魔物がいるらしい。とは言え、魔物の生態にはまだ謎が多いため、詳しくは分かつていらないらしいが。

得意げに教えてくれたまではよかつたが、肝心な所が抜けている。コーリもエリシア同様、それに気づいたようだ。

「よく知ってるな、カロル先生。それで？」

「……それでつて？ それだけだよ？」

カロルは本当に不思議そうな顔をしている。

傍らのリタが深いため息をついた。ため息をつきたくなる気持ちも分かるというもの。呆れ顔でリタが口を開く。

「場所が分からないと捕まえられないじゃない。ビニールの？」

「あ、ああ……」

カロルはコーリやエリシアから瞳を逸らし、視線を宙にさまよわせるだけ。

エリシアも少しだけ後悔していた。こんな事になるなら、もっと眞面目に魔物について勉強すれば良かった。魔導器同様、多少の知識ならあるが、特殊な魔物は専門外だ。

「じゃあ、街の人には話を聞きましょ」

「聞きましょ、いいのかよ、エステル」

名案です、と楽しげに言つたのは緑の瞳を輝かせるエステルだ。邪険されても全く意に介していない様は流石というべきか。自分が口にした言葉の意味を分かつていの彼女は、はい？ とじてんと小首を傾げる。

今のノール港では執政官が正義だ。いくらエステルが貴族と言えど、ラゴウに逆らつて無事でいられるのか。

「下手すりや、じつちが犯罪者にされんだぞ。この街のルール作つてんのは帝国の執政官様だ。そいつに逆らおつってんだからな」

「私とコーリはもう犯罪者だけね」

ね、と笑いながらコーリを見ると、それは言つなつて、と軽口が返つてくるが、本当のことだ。エリシアやコーリは既に賞金首だ。手配書が出回つている時点で犯罪者なのなら、今更執政官に逆らつたってなんてことはない。

それにあんな場面、を見せられたのに引き下がれる訳がなかつた。一発どころか何発も殴りたい気分である。

「……わたしも行きます」

「いいんだな」

「はい」

顔を上げたエステルはもう、晴れやかな顔をしていた。
この中で一番辛いのは間違いなくエステルだろう。自分と同じ貴族が街の人々を虐げ、我が物顔で街を仕切っているのだ。優しい彼女はきっと心を痛めているに違いない。

「リタもいいんだよな？」

「天候操れる魔導器つていうのすごい気になるしね」

ユーリが尋ねると、彼女は思いの外けりりとしていた。リタにとつてラゴウなど、天候操る魔導器に比べれば、どうでもいいのだろう。

天候操るとなれば、当然仰々しいものになる。魔導器研究者である彼女には興味深いものだろう。先程のエステル同様、瞳を輝かせるリタは既に魔道士としての顔だ。

「決まりですね！」

「じゃあ、まずリブガロを探すとしますか」

「おーー！」

すべき事が決まつたら後は行動あるのみ。まずは街の人々からリブガロの場所を聞いてからだ。

気合い十分に街中に下りて行く一行に、取り残された、と言うか

雰囲気に乗り切れなかつたカロルががくりと肩を落とした。

「ボクは聞いてもくれないんだね……」

「そりゃあ、リブガロの場所は知らなかつたけど、雨の日には姿を見せるつて分かつただけでもお手柄だよ。そう思わない、ラピード？」

同意を求めるように足元のラピードを見れば、彼はカロルを一瞥した。顔を逸らされ、大きい息を吐かれる始末である。これは完全に馬鹿にされている。カロルが確信した瞬間、エリシアの声に走り出すラピード。

カロルは置いていかれないよつ、慌ててラピードの後を追つた。

「なに、今、ボク馬鹿にされた！？ わー、待つてよみんな！！」

真っ直ぐな彼

大所帯で聞き込みをするのも何なので、二人一組に別れることになつた。ユーリとエリシア、リタとエステル、カロルとラピードである。それぞれ、リタがエステルのストッパー役でラピードがカロルのお目付け役とも言えるだろう。

街の人々から話を聞いた結果、リブガロの住処と思われる所は一力所しかなかつた。街の南に位置する高台である。

何でもリブガロは子を宿しているため、普段より凶暴になつているらしい。

兎に角、行つてみなければ始まらない。合流した一行が街を出ようとしたその時、入り口近くからフレンと少年魔導士ウイチルが歩いて来る。

明らかに出掛ける様のユーリを見てフレンは苦笑した。

「相変わらず、じつとしてるのは苦手みたいだな」

「人をガキみたいに言うな」

心外だとユーリが首を竦める。それだけで、二人が互いをどれだけ“信頼”しているかが窺い知れた。短い付き合いのエリシアでも、だ。

ユーリを見つめていたフレンが、一転して真剣な顔に変わる。

「ユーリ、無茶はもう……」

「オレは生まれてこのかた、無茶なんてしたことないぜ。今も魔核泥棒を追つてゐるだけだ」

言いかけたフレンをゴーリが遮った。あくまで自分の目的は魔核泥棒だと。

「ゴーリは分かってるはず。どれだけ自分が無茶をしているか。でも彼は知つていて無茶をするのだ。自分が守ると決めたもののために。普段は斜めに構えているため分かりづらいが、その思いはすごく真っ直ぐで曇りがない。」

ゴーリとフレンの会話には、とても第三者であるエリシアが口を挟める雰囲気ではなかつた。

「ゴーリ……」

「お前じゃ、無理はほどほどにな」

ゴーリは咎めるように口を呼ぶフレンにも、話すことではないと言つように背を向けて歩き出す。リタやカロル、ラピードがそれに続く中、エスティルとエリシアだけがその場に佇んでいた。

フレンは控えていたウイチルの方を振りむいて指示を出している。ウイチル、魔導器研究所の強制捜査権限が使えないか確認を取つておいてくれ、と。

フレンの言葉を聞いたウイチルは無言で頷き、駆けて行く。き真面目な騎士は、幼なじみの後ろ姿を見つめると呆れるように呟いた。

「まったく、帝都を出て少しばは変わったかと思えば……これでは無茶の規模が膨れあがつただけだ。ゴーリは守るべきものそのためなら、とても真っ直ぐなんですよ。そのために自分が傷付くことを厭わない。それが羨ましくもあり、そのための無茶が不安でもあるんですがね」

それを本人の前で言おつなら、お前にだけは言われたくない、と

威勢よく返つてくるだろうが。

フレンが語つたことはエリシアと同じだった。ユーリは自分が守ると決めたものに對して真撃だ。エステルの事にしても、巻き込まれる形になつたエリシアに對しても。

どんなに傷付こうともユーリは己の思いを曲げない。

苦しくても、痛くてもそれを他人に見せようとしないのだ。気付かせようともしない。

見ついて辛かつた。『エリシア』はそんなに頼りないのだろうか。何もユーリだけが背負う必要はない。エリシアだつて、こうなつたのは自分で選んだからなのに。

「……君がエリシアだね？」

「え……、あ、はい」

「そんなに畏まらなくていいよ」

柔らかく笑うフレンに、エリシアは更に恥ずかしくなつた。一人で何を焦つているのだろう。

自分が“エリシア”だと分かつたのはやはり、あの下手くそな似顔絵からだ。性別すら判別が付かないが、ユーリと一緒にいる人間で、手配書に書かれた特徴に当て嵌まるのはエリシアだけだ。分かつて当然かもしれない。

「どうかユーリを……エステリーゼ様のことを頼むよ。ユーリはああ言つて無茶するだらうし、エステリーゼ様もきっと同じだ。君に頼むのも、何だかおかしな感じだけね」

「私が言えた義理でもないけど任せで。でも、いいの？ 私もフレンの言う犯罪者だよ？」

エリシアもユーリと同じ賞金首だ。そんな自分に頼むのも、変な話かもしれない。

ユーリがフレンを気にかけているように、彼も彼なりにユーリを心配しているのだ。ばつが悪そうに、あるいは言いつらうに苦笑する彼女を見て、フレンは小さく笑った。

「さつきも言つたと思うけど、君が賞金首になつたいわれはエステリーゼ様から聞いた。心配しなくていい。感謝こそすれ、責めるつもりはないよ」

独房に入れられた経緯も、子供を助けたためだと聞いたし、脱獄する気もなかつた。城の中で騎士に追われていたエステルを助けたことも全て。

今まで彼女を守つてくれたことに感謝こそすれ、罰するつもりは毛頭ない。ただ手配書の方はフレンの一存ではどうにもならないのだ。フレンは一騎士でしかない。手配書を撤回する命など出せなかつた。

「そつが、なら安心した。でも出来ればユーリを許してあげて。ユーリは分かつて、全部一人で背負つてきたから」

幼なじみであるフレンには、言わずとも分かつているのだろう。自分などよりずっと長い付き合いなのだから。

しかし言わずにはいられなかつた。気付いてあげられなかつたことが悔しくて、支えになれない自分が情けない。フレンなら、ユーリの無茶に気づいて、それを諫めることが出来たかもしれない。彼一人に重荷を背負わせることだつて。

「……君は優しいんだね。ユーリに代わつて礼を言うよ。ありがと

う

ありがとう、とにかく微笑むフレンにどう答えていいか困ってしまう。改めて礼を言わることなんてないし、何より恥ずかしい。

すると一人を待っていたカロルからおーいと声が上がる。

「エリィ、エステル、もう行こう。ユーリに置いていかれるよ」

「ええ、わたしたちもこれで」

「ありがとう、フレン」

エリシアはフレンに礼を言つてカロルの後に続く。エステルも同じように歩き出そうとするが、フレンが彼女を呼び止めた。

エリシアも知つていながら立ち止まることはない。前だけを見て歩く。

二人には一人の話がある。事情を知らない自分が立ち聞きする訳にもいかないだろう。

「……その、どうですか？ 外を、自由に歩くと言つのは？」

呼び止めたまではいいものの、フレンは聞きあぐねていた。

一瞬、悩んだ上、怖ず怖ずと切り出したのは“外”について。エステルはしばらく考へた後、自分の考えを纏めるよつて言つた。

「全部をよかつたというのは、難しいことですけど……わたしにもなすべきことがあるのだと分かり、それがうれしくて、楽しいです」

城にいた頃は自分に価値を見出せなかつた。鳥籠の世界から外に

飛び出した事をよかつたと一言で済ませてしまつことは出来ない。だが今の“エステル”にはなすべきことがある。大切な仲間と呼べる人たちもいる。

今もまだ自分がやりたい事は分からぬけれど、今は毎日がとても充実しているとエステルは胸を張つて言えるだらう。全ては仲間たちのお陰だ。

「そうですか。それはよかつた……」

淀みなく答えた彼女にフレンは顔を綻ばせた。
城から出ることすら出来なかつた彼女が、外の世界を田にすることが出来た。それにエステルにも良い影響を与えていくようだ。
本来なら心配するところだが、彼女の側には心強い幼なじみと親身になつてくれる少女がいるのだ。

「フレンと何話してたんだ？」

先頭を歩いていたユーリが前を向いたまま、エリシアに聞いた。
高台へ向かう道中である。

何だかんだ言つても、やはり気になつっていたのだろう。エリシアは周囲を見回しながら何気なく答えた。

「ユーリのこととか、エステルのことかな？ フレンから一人のこと任せちゃつた。やっぱり持つべきものは友だちね。フレン、ユーリのことと遠く心配してたし」

その瞬間、ユーリからはあ、あのフレンが？と返つてくる。

フレンもユーリも意地つ張りと言うかお互い、あまり弱い部分を見せようとはしないのだろう。幼なじみであり、友人であるなら当たり前かもしだれないが。

流石は友人、似た者同士である。正直、他人を任せられるほどではないが、任されたからにはやるしかない。

「ユーリもエステルも危なつかしいんだって」

エステルは他人を助けるためなら平氣で無茶するし、一見ストップ役に見えるユーリも同じだ。

ユーリからエリイには言われたくないけど、と言われたかと思うと後ろを歩いていたエステルからは危なつかしくないです！と返つて来た。

「あれ、そう言えば雨、止んだみたいだけど、天候を操る魔導器はノール港周辺に雨降らせてるのかな？」

後力口ルが疑問の声を上げた。歩き始めてしばらくすると、今まで雨が降っていたとは思えないほど、空は青く澄み渡つている。雨の気配など皆無である。ノール港付近だけが分厚い雨雲に覆われているのだ。

ならばやはり、魔導器はノール港周辺だけに雨を降らせているのだろう。

「実際、見てみないと分かんないけど、規模から考えるとまず間違いないわね」

カロルの問い合わせたのは専門家のリタ。

“天候”を操る魔導器など存在しない。恐らく、寄せ集めの魔核

で作っているのだろうが、あまりに危険過ぎる。ろくな知識を持たないものが使つていい代物ではないのだ。

ただでさえ、寄せ集めの魔導器である。重大な事故を起こさないとも限らない。

「でも大丈夫なのですか？ リブガロは雨の日しか現れないと……」

「多分大丈夫じゃない。高台の辺りに雨雲が集まつてゐるから、直ぐに降り出すと思つけど」

エリシアが指差す先、木々が生い茂る高台の上空は灰色の雲が覆つてゐる。近い内に雨が降り出すだらう。

エリシアの言つ通り、高台に辿り着く頃にはぽつぽつと雨が降り始めていた。しばらく休憩したからまだ良かつたものの、雨に打たれ続けては流石に風邪を引いてしまう。雨は容赦なく体温を奪つて行くのだから。

そう考えれば、ノール港の入り口で出会つた夫婦、夫のティグルはユーリが止めて正解だ。体力が落ちている上にあの傷では、本当に死ぬところである。

「あの、カロル。リブガロつてどんな魔物なんですか？」

鬱蒼を茂る森を歩きながら、エステルが聞いた。ちなみに先頭が剣を扱うユーリとカロル、真ん中に治癒術の使い手のエステルと魔導士であるリタ、しんがりが鼻が利くラピードと背後からの強襲にも対応しやすい銃使いのエリシアである。

「えつと動物に例えるなら馬に似てるらしいよ。黄金の^{たてがみ}鬚と角、体毛は金だったと思つ」

流石はカロル先生。伊達に魔狩りの剣の一員ではない。

しかし雨が続いているためか、地面がかなりぬかるんでいる。足を取られれば危険だし、何より問題は足だ。黒いブーツのユーリと素足のラピードはまだいいが、エリシアとエステルのブーツは白である。

泥まみれになつた上に気持ち悪い。念入りに洗おうと決意して、エリシアは前を向いた。

すると、前を歩いていたエステルからきや、と短い悲鳴が上がる。案の定、泥に足を取られて滑らせたらしい。危うく倒れそうにな

つたエステルを慌てて受け止めた。流石に彼女の体重を支えきれずに一緒に倒れるという失態は、いくら何でもおかしい。

「大丈夫？」

「はい、ありがとうございます」

エステルの後ろにいたのがまだエリシアでよかつたくらいだ。カロルやリタなら、彼女を支えきれずに一緒に倒れていただろう。気を取りなおして前に進む。それからどれくらい歩いただろ。先頭を歩いていたユーリが何かを見つけた。

「おい、カロル先生、あれがそのリブガロじやねえか？」

「さつき聞いた特徴には一致するわね。多分、そななんじやない？」

ユーリが指差したのは少し先、余計な木々がない開けた場所だ。そこにうずくまるようにして座っているのは、金色の体毛に立派な黄金の鬱、頭に角を持つ馬に似た生物。リタの言つように先程、カロルが言つていたリブガロの特徴、全てが一致している。

「間違いないよ！ リブガロだ！」

幸い周辺に他の魔物の気配はない。目の前にいるのはリブガロ一匹だけだ。

しかし遠くからでは分からなかつたものの、近くまでくればリブガロの様子がおかしいことに一行は気付く。

「何だか様子がおかしいよ

「……怪我してる？」

リブガロが座り込んだ地面には血溜まりが出来ており、切り傷が多数。どれも深い傷ではないが、放つて置けば危険だ。遠からず命を落とすだろう。

一行に気付いたリブガロが警戒心を露にし、立ち上がろうと脚に力を入れるが、立ち上がれない。

エリシアは思わずリブガロに近寄った。攻撃してはこないもの（あるいは攻撃するだけの力がないのかもしれない）、人間であるエリシアを警戒して唸り声を上げる。

「酷い傷……街の人付けられたんだ。大丈夫、私たちは敵じゃない。大人しくして」

リブガロの傷は全て刃物による裂傷だ。リブガロを連れて来れば税金を免除すると言う言葉につられた街の人間に追い回されたのだろう。

安心させるように言うと、今まで低い唸り声を上げていた魔物が静かになった。リブガロの瞳は試すようにエリシアを見つめている。リブガロは人を見かければ見境なく襲つてくる魔物ではない。

「どうすんの？ 戦う？ それとも……」

腕を組んだままのリタがコーリとエステルを見た。コーリは相変わらずのポーカーフェイスでエステルは眉を潜め、戦いたくないといつた感じだろうか。

すると何を思ったのか、コーリが無言でリブガロに近寄る。

訝しげに名前を呼ぶエリシアには答えず、コーリは鞘から抜いた剣をリブガロに向けて振り上げた。エステルが最悪の事態を予想し

て目をつむる。

しかし聞こえて来たのは剣が肉を裂く音ではない。何かが地面に落ちる鈍い音。

「手土産ならこれでいいだろ?」

ユーリの手にはリブガロの黄金の角が握られている。確かに役人の一人がリブガロの角は価値があると言っていた。

それにしてもハラハラさせないで欲しい。エリシアでさえ一瞬、ユーリがリブガロを斬るかと思ったのだ。

「……でも、いいの? 魔物だよ」

「私はこの子より、ラゴウの方がよっぽど許せない。魔物だからって全てを否定するなんて私はしたくない。こんなに怯えてるのに。……怖がらせてごめんね」

カロルは正しい。それが魔物に対する正しい見解なのだろう。では魔物とは何なのだろう。人間に害をなす存在? ならば人が善で魔物は全て悪だと言うのか。カロルに言ってどうにかなる事でもないと分かつていて、思わず口にしてしまったのだ。

それにリブガロは人を脅かす魔物ではない。人が自ら関わらなければ森の中でひつそりと暮らしていたのだろう。

リブガロは酷く怯えている。街の人々に追い回されたのだから、自分達に敵意を剥き出しにするのも当たり前だ。

「まあ、そうだな」

「わたしも……そう思います」

エリシアの言葉にユーリが同意し、エステルも頷いた。既に手土産を得るという目的は果たしたのだから、傷ついている魔物を倒そうとは思わない。

向こうから襲い掛かれたのなら仕方はないが、リブガロからはもう敵意を感じないので。リタやカロルもそれならば、と納得してくれたようだ。

「いいんじゃない」

「みんなが良いならボクも異論はないよ」

エリシアはリブガロを落ち着かせるように髪を撫でると、精神を集中させる。

リブガロの傷は体全体に及んでおり、ファーストエイドでは少々心もとない。彼女の足元にファーストエイドよりも複雑な魔法陣が浮かび上がった。

「燐然たる癒しの光を。ヒール」

花弁に似た温かな光がリブガロを包み込んだかと思つと足や顔、体に付いた傷を塞いでいった。失つた血までは戻せないが、これで命を落とす事はまずないだろう。

リブガロはゆっくりと立ち上がり、塗れた体を乾かすために身震いさせた。

これからは気をつけてね、と声を掛けると、言葉を理解したのかどうかは分からぬが、リブガロは何度もこちらを振り返りながら、森の奥に消えて行つた。もう人里近くに現れる事はないだろう。

「……俺達も行くか」

「……あつがとつ」

魔物は倒すべき敵なのに、みんなはエリシアの思いを分かつてくれた。魔狩りの剣の一員であるカロルもだ。礼を言つエリシアにエスティルは静かに首を振つた。

「お礼を言われる」とじゅあつません。わたしもエリヤと同じ思いですから」

「もうもう。取り合えずノール港に戻つたらまず体を暖めないとね。これじゃ凍えちゃうよ」

自分で自分を抱きしめるようにカロルは肩を抱いた。ただでさえ森の中であるし、雨が降つたことで周囲の気温が下がつていいのだ。雨に濡れた体は冷たく、風邪を引いてしまいそう。

「ちやつちやつと戻るわよ。こんな木しかない場所に長留する理由ないし」

「確かに。これ以上、雨に濡れると風邪引いちやいそうだしね」

言つたそばからカロルが盛大なくしゃみをする。

リタがちょつ、汚つ！ 飛ばさないでよ、と容赦なくカロルの頭を叩く。それを見たラピードが呆れるよつてへうんと鳴いた。

「べくしゅー、べくしゅんー！」

「だから飛ばないでって言つてんでしょう！」

盛大なくしゃみと共に一筋、カロルの鼻から鼻水が垂れた。ノール港に戻つた一行は宿屋に直行した。窓の外を見れば、雨は未だ止むことなく降り続けている。

頭にタオルを乗せたまま言つリタも随分寒そうだ。次の瞬間、扉が開いたかと思いきや、トレイを持ったエリシアが入つて来る。

「お待たせー。ホットミルク貰つて来たよ」

コーリやラピードは平氣そうだったが、エステルにリタ、カロルの三人はかなり体が冷えているようだったので、気を利かせてホットミルクを貰つて来たのだ。

カロルやエステルにも飲みやすいように蜂蜜も入れてある。ちなみにラピードにも人肌程度に温めたミルクを用意してあつた。

「ありがと、エリイ……」

「カロル、鼻垂れてるよ」

そばにあつたティッシュの箱を手渡すと、カロルは思い切り鼻をかんだ。

あー、すつきりした、と晴れやかな顔をしているとまたリタに頭を叩かれたらしい。つぐづく不幸な少年である。

「はい、カロルとエステルは蜂蜜多めに入れてあるから

トレイに乗せていたマグカップをそれぞれに手渡す。

宿屋の人がわざわざ用意してくれたマグカップは柄も多彩だ。カロルはクマでエステルが花、リタがボーダー柄でエリシアは月、ユーリはシンプルな黒である。

「一休みしたらラゴウの屋敷に突入？」

「だな。これ持つてれば門前払いってことはねえだろ」「

ユーリが取り出したのはリブガロから手に入れた黄金の角。一生分の税金の価値があるかどうかは分からないが、光を弾いてキラキラと輝く角は確かに美しい。

だが、元はと言えば、街の人々もリブガロもラゴウに振り回されたお陰で酷い目にあつたのだ。いい迷惑である。

「そのラゴウの面つてのは是非、おがんでみたいわね。どうせ口クな顔じゃないだろうけど。魔導器をあんな事に使うなんて絶対に許さない」

右手にマグカップを持ったリタは、空いている左手をきつく握りしめた。魔導器はただの道具ではないのに。魔導器だけではない。人もリブガロも。

「私だって。面白半分に街の皆やリブガロを傷付けて何様のつもりなの？」

誰もラゴウに逆らえないというのなら、自分が言ってやる。エリシアの気持ちはリブガロを目にしたことで更に高まっていた。

ラゴウは神でも何でもない。ただの人間だ。どう繕つても命を弄ぶ権利なんてありはしない。

ホットミルクで体を温めた一行は早速、ラゴウの屋敷に向かうべく宿屋を出た。

するとその時、知った声が耳に入つて来る。反射的にそちらを見れば、そこにはあの夫婦の姿があつた。

妻 ケラスが出て行こうとする夫、ティグルを止めようとするが夫は全く意に介さない。しかも手には剣まで握られているではないか。

見兼ねたヨーリがティグルの前に出る。

「そんな物騒なもの持つてどこに行こうってんだ？」

「あなた方には関係ない。好奇心で首を突っ込まれては迷惑だ」

ヨーリは答えず、無言で取り出したものを彼の前に投げた。瞬時にティグルの目の色が変わる。何故ならそれは彼等が探し求めていたものだからだ。

金色の角。リブガロの角である。

「い、これは……っ！？」

「あなたの活躍の場奪つて悪かったな。それは、お詫びだ」

ヨーリはティグルの返事も聞かず、彼に背を向けて歩き出す。

ティグルと彼に追いついたケラスは、突然の事態に戸惑いながら

も地面に座り込み、ありがと「う」わーますと頭を下げる。

コーリの行動に驚きながらも、エリシアたちは、宿屋の前に戻つて来た。

「ちよ、ちよっとー あげちゃつてもいいの？」

「あれでガキが助かるなら安いもんだろ」

何考てんの、と慌てるカロルに対し、あくまでもコーリは軽い。そんな二人が面白くて、エリシアとエステルは顔を見合わせて笑つた。

エステルもコーリを見ながら、最初からひつするつもりだつたんですね、と小さく笑う。

だからコーリはわざわざリブガロの元に行つたのだ。ただ屋敷に入るだけなら、手段を選ばなければ他の方法だつてある。あえてリブガロを探す必要はなかつた。

しかし、それならそれで、一言くらいい相談してくれても良かつたのではないか。

「教えてくれたつて良かつたのに」

「思いつき思いつき」

「その思いつきで献上品がなくなつちやつたわよ。どうすんの」

エステルの指摘にもコーリは、思いつきと答えるだけで認めよつとしなかつた。

あー、呆れたとリタが腕を組んでコーリを睨む。これでリブガロの角を献上品に、ラゴウに会うと言う事は出来なくなつた。つまり、何か別の手を考えなければならぬ。

何か考えているんでしょうね、トリタの無言の圧力に、エリシアも苦笑するしかなかつた。素直じゃないのは彼女も同じだ。

「ま、執政官邸には、別の方法で乗り込めばいいだろ」

付け足すよ、ゴーリが言つと、リタはやつぱりねと深くため息をついた。

早速行き詰まつた所で何やら思いついたらしいエステルが提案する。

「なら、フレンがどうなつたか確認に戻りませんか？」

「とつくゴウの屋敷に入つて、解決してゐるかもしれないしね」

カロルが言つよつと、フレンが解決してくれてゐるのなら、わざわざ自分たちが乗り込む必要はない。

だが先程、話を聞いた限りではそう都合よく行かないことも分かつてゐる。腐つた人物とは言え、ラゴウは仮にも執政官であり、騎士であるフレンとて迂闊な行動は出来ないだろう。

「フレンたち宿屋に居たつけ？」

「さあな。でも他に場所もないだろ」

ノール港に戻つて来てから騎士の姿は見ていなかつた。他に拠点となる場所がない以上、フレンがいるとすれば宿屋だらう。どの道、行つてみなければ分からぬ。

ここで話していても埒があかないので、エリシアたちが出てきたばかりの宿屋に逆戻りすることになつた。

宿屋の主人に聞いてみると、やはりフレンたちは戻つているらしい。ならば会つて話が聞けるだろう。

コーリはノックすらせず、遠慮なく扉を開けた。室内には真剣な表情をするフレンとソディア、暗い顔をしたウイチルがいる。

「相変わらず辛氣臭い顔してるな」

「色々考えることが多いんだ。君と違つて」

普通の人間からすれば皮肉と取るだろうが、慣れているのかフレンも軽く答える。ただし、思いつめたような顔のままだ。

友人が友人ならコーリもそうなのか、フレンの君と違つて発言にもふーんと返すだけである。

（そこ怒るところじゃないんだね、コーリ。普通に返すフレンも凄いけど）

その辺りは流石は幼なじみと言つたところだ。飄々とするコーリを見て、フレンは心配そうに尋ねた。

「また無茶をして賞金額を上げて来たんじゃないだろうね」

コーリを心から察じてゐるのだろう。彼の態度を見ているだけでそれが分かる。ただ、フレンの中ではコーリ＝無茶と言つた圖式が成り立つのだろうか。

いつかコーリがフレンは心配性だと言つていたが、あながち間違いではないかもしれない。コーリはそれには答えず、確かめるように聞いた。

「執政官どこに行かなかつたのか」

「行つた。魔導器研究所から調査執行書を取り寄せてね。……ただ、執政官にはあつさり拒否された」

「なんで！？」

カロルから驚きの声が上がる。

いくら執政官とは言え、騎士団は無視出来ない存在ではないのか。それとも、帝国の法に詳しくないエリシアとカロルには分からない、込み入つた事情でもあるのだろうか。

「魔導器が本当にあると思つなら正面から乗り込んでみたまえ、と安い挑発までくれましたよ」

「私たちにその権限がないから、馬鹿にしているんだ！」

怒り半分、悔しさ半分で唇を噛んだのはウイチルとソーティア。そう、つまりは彼等には権限がないのだ。証拠がない限り、フレン達は動けない。ラゴウはそれを知つていて、わざと挑発している。そしてラゴウの挑発に乗つてはいけない事もフレンは重々承知していた。

ソディアも悔しそうにきつく手を握り締める。そんな三人から話を聞いたユーリは一言。

「でも、そりやそいつの言つ通りじゃねえの？」

「何だと！？」

「はいはい。今ここで貴方が怒るべきなのはユーリじゃないでしょ

声を荒げてゴーリに詰め寄りつゝするソーティアを、慌ててエリシアが止める。

こんな狭い部屋で剣など振り回されではたまたものではない。ゴーリもゴーリで、わざとソーティアを挑発しているのではないだろうか。

「ゴーリ、どつちの味方なのさ？」

「敵味方の問題じゃねえ。自信があんなら乗り込めよ」

もう、と呆れて口を挟んだカロルに、ゴーリは不敵な笑みを浮かべたままフレンを見た。

敵味方などどうでもいい。自信があるのなら、踏み込めばいいではないか。そんな彼とは対照的に、フレンの表情は晴れない。

「いや、これは罷だ。ラゴウは騎士団の失態を演出して評議会の権力強化を狙っている。今、下手に踏み込んで、証拠は隠蔽され、しらを切られるだろ？」

評議会と騎士団は正に犬猿の中だ。下手に動けば失態を犯す危険もある。

わざわざ安い挑発をしたのがその証拠。もしレーレラゴウの挑発に乗つても証拠は見つからないだろ？

「動きたくても動けない、それがフレンの今の状況ってこと？」

「……やつ詰つことになるね。明らかに黒だと分かっているのに動けない。これほど悔しいことはないよ」

ヒリシアの問いにフレンは重々しく頷いた。

踏み込みたくとも罷である可能性がある以上、迂闊な真似は出来ない。これは騎士団全体にも関わることなのだ。

動きたくても動けない、フレンはそんなもどかしさに捕われていた。

「ハーヴ執政官も評議会の人間なんですか？」

「ええ。騎士団も評議会も帝国を支える重要な組織です。なのに、ハーヴはそれを忘れている」

「とにかく、ただの執政官様つてわけじゃないってことか。で、次の手考えてあんのか？」

本来なら皇帝が不在である以上、騎士団と評議会は協力して帝国を支えなければならない。
今彼等がすべき事はいがみ合いつことではないの。ハーヴはそれを忘れて、騎士団をおとしめようとしている。

一筋縄で行かないのなら、他の方法を考えればいい。部外者である自分たちならまだしも、騎士であるならまだ他の手はあるだろう。ユーリはそう聞いたつもりだったのだが、フレンは答えない。悔しそうに瞳を閉じただけだ。

「なんだよ、打つ手なしか？」

（お前はそんな奴じやないだろ？、フレン）

打つ手がなければ自分を使えばいい。フレンは騎士で自分は犯罪者だ。何を躊躇うことがある。押し黙ったフレンに代わり、ウイチルが口を開いた。

「……中で騒ぎでも起これば、騎士団の有事特権が優先され、突入出来るんですけどね」

「騎士団は有事に際してのみ、有事特権により、あらゆる状況への介入を許される、ですね」

ウイチルの言葉をエステルが継ぐ。帝国の法に詳しくないエリシアとカロルのためにだろう。

つまり今の状況では屋敷の中で騒ぎが起きない以上、フレンたちは動けない。ならばコーリがやるべきことは一つしかなかった。

「なるほど、屋敷に泥棒でも入つて、ボヤ騒ぎでも起こればいいんだな」

わざわざ宣言するようにコーリは言つ。

彼らしい笑みを浮かべるコーリにフレンの表情は未だ硬い。ここまで言えば、事情が分からないエリシアにだつて分かる。

コーリはラゴウの屋敷に乗り込むつもりなのだ。そんなコーリの演技に、エリシアも白々しく乗つた。

「フレンたちは見回りに出た方がいいんじゃない？ 手配書に書かれた犯罪者が街をうろついていたみたいだし」

犯罪者は勿論、エリシアとコーリのことである。

見回りと言つ名田があれば、街の中を自由に動き回れるだらつ。コーリはその辺りも計算していたのだ。

「コーリ、それとエリシアもしつこいつただけだ……」

「無茶するな、だろ？」

「無茶するな、でしょ？」

見事に一人の声が重なる。

顔を見合わせて悪戯つ子のよつた笑みを浮かべるコーリとエリシアを見て、フレンもまた微かに笑つた。青年騎士は顔を引き締め、ソディアとウイチルに向き直ると、迷いなく言い放つた。

「市中の見回りに出る。手配書で見た窃盗犯が執政官邸を狙うとの情報を得た」

「……よひじいのですか？」

一行が部屋を出た後、それまで沈黙を保っていたソディアが尋ねる。今、フレンがしょうとしている事は犯罪を見て見ぬふりをすると言つことだ。

いくらかでもない執政官とは言え、許可なく屋敷に入る事は犯罪である。

他に手はないとは言え、犯罪を黙認していいのか。ソディアはそう言いたいのだろう。

「ソディア、君には分からぬかもしれないが、綺麗事や正論だけでは守れないものもある。時には彼の言つよつた手段が必要となる時もあるのだと僕は思つてゐる。それにコーリなら必ずやつてくれると信じてゐるよ」

「コウに正論は通用しない。理想と現実は違う。

例えそれが正しいことであつたとしても現実は正しいもの全てが通る訳ではない。

騎士団に入団し、少隊長となつた彼には嫌と言つほどのよく分かつ

ている。分かつていても、ユーリのように行なうこととは出来なかつた。

ユーリがしようとしている事が正しいことなのか、それはフレンにも分からぬ。

だが今のフレンには、友人を信じることしか出来ないのだ。

「フレン様がそおおっしゃるのなら、僕たちは従うまでです。そうでしょう、ソディア」

黙つてしまつたソディアにウイチルは諭すように同意を求めた。何故、フレンが手配書の人物と付き合いがあるのかソディアには理解出来ないが、ウイチルの言つ通り、自分達はフレンに従うだけだ。既然としない思いを抱いたまま、ソディアは頷く。

「……分かりました。では早速参りましょう」

顔を上げた彼女はそおう言つと一人先に部屋を出て行つた。生真面目で融通のきかないソディアには敬愛するフレンが、賞金首と友人であるとは信じられないのだろうとウイチルは思つ。

「大丈夫でしょうか?」

「こればかりは納得して貰うしかない。今の彼女には分からぬことなのかもしけないが……」

それは果たして出て行つた彼女のことなのか、或いはラゴウの屋敷に向かつたユーリたちのことか。

ソディアは真つ直ぐ過ぎるのだ。騎士になつたばかりの、かつての自分と重なるほど。だからこそ彼女の気持ちはよく分かる。

今すぐには言わない。世の中の全てが正論で回つている訳では

ないと、ソディアにも気付いて欲しい。

「ウイチル、僕たちも行こう」

彼らは彼らにしか出来ないことをやろうとしている。
こちらものんびりしている訳にはいかない。フレンはウイチルを
伴つて部屋を出た。

雨は飽きたことなく降り続いている。

宿屋を出た一行は屋敷からやや離れた場所にいた。勢の限りを尽くされた豪奢な屋敷は頑丈な壁に囲まれ、出入口も正面しか見当たらない。

しかも唯一の出入口である門の前には、数刻前に訪れた時と同じく、傭兵らしき一人の男が佇んでいる。

「で、来たのはいいけど、どうやって入るの？」

木の影からそろりと屋敷を覗くのはカロル。万が一にも気付かれないように声を潜めて、である。

正面から正々堂々は不可能だし、かといって高い塀はとても乗り越えられるような高さではない。正面が駄目なら裏口はどうだろう。エスティルがそう提案した直後、背後から見知らぬ声が聞こえた。

「残念、外壁に囲まれてて、あそこを通らにゃ入れんのよね」

コーリたちには見知らぬ、エリシアには耳慣れた声に一同は振り返る。

そこには一人の男の姿。驚いて思わず叫びそうになつたエスティルに、男はしつゝと唇に人差し指を当てた。こんな所で叫んだら見つかっちゃうよ、お嬢さん、と。

見た所、外見は三十代半ばだと思われる。コーリよりも色の薄い黒髪を無造作に頭上で束ね、無精髭を生やしている。

服装も一風変わった異国情緒溢れる装束だ。コーリにひとつ帝都で会つた、というより隣の牢だつた男である。エリシアにしてみればよく知る、と言つうか一応は“知り合い”に分類される男だ。

「えっと、失礼ですが、どちら様ですか？」

「いや、違うから、ほつとけ」

卷之三

あのなあ、誤解を招く発言は止めたよ、ねつねつ。やつはわんば

かげに異を見る——

「呆れたゴーリのそっけない言葉に、男はとも悲しいと言わんばかりにエリシアに向き直つてみせた。

「おいおい、ひどいじゃないの。お城の牢屋で仲良くしたじゃない、コーリ・ローウェル君よお。ねえ、エリシアちゃん」

「私に同意を求められても困るんだけど、レイヴン？」

あの時、自分が何をしたのか覚えていないのだろうか。自分は騎士団長と出でていった拳銃、姿も現さなかつたのだから。

「あつやー、まだ怒つてんの？」「あんね。おつむんこも色々あるのよ、ホント」

「どうだか」

エリシアは適当に返事をしてそっぽを向いた。言い訳はもう沢山

だ。

「ごめんね、と謝るレイヴンは反省しているように見える。少なくとも表向きは。

確かに彼はいつも見えて、五大ギルドの一つ、天を射る矢の幹部である。言動と見た目からとても想像出来ないが、ギルドコニオンの長からの信頼も厚い。おまけの父の友人もある。

だがレイヴンは飄々とし過ぎていて、時々何を考えているのか分からぬ。

「え？ 何？ ハリイ、このおじさんと知り合って？」

「んー……。一応は知り合いでいいのかな？」

「オレに聞かれてもな」

エステルもカロルも訳が分からずに田を白黒させている。リタも同様だ。

どうやら状況を飲み込めていたのは、ハリシアと事情を知るユーリだけのようである。

帝都では知り合いつて言つてただろ、と頭をかくコーリーに、腕を組んでもう一度レイヴンを見つめた。レイヴンは呑みのある笑顔で、相変わらず何を考えているか分からぬ。

「一応つて、おっさんとハリシアちゃんの仲じやない。そんな冷たい態度取られるとおっさん傷付くなあ。これでも硝子のハートなのよ？」「

「違うから。それに硝子のハートつて何？ 試してみようかな。ねつ、レイヴン？」

顔には笑顔をはり付けたまま、エリシアは瞬時に腰の銃を抜き放つた。そのままレイヴンの心臓に銃口を突き付ける。

隣でエステルが何やら青くなっているが、何も本気で撃つつもりはない。いつもの悪ふざけ。それはレイヴンとて分かっているだろう。現に彼は笑っていた。

「お～、怖い怖い。ちょっとした冗談だつて」

怖いくらいに満面の笑顔を浮かべるエリシアに対し、レイヴンはやる気なさげに両手を上げ、降参のポーズを取った。

焦っている訳でもなく、慌てもいない。表情にはまだ余裕があるし、飄々としている。

仕方なく銃を下ろし、ホルスターに納めた。ほっとエステルが胸を撫で下ろしたのが分かる。本当に何を考えてるのか分からぬ。

「それより、青年とエリシアちゃんたら随分有名になつたみたいじゃないの」

レイヴンが無造作に懐から取り出した一枚の紙。ノール港に来てからも何回か見かけたコーリとエリシアの手配書である。

レイヴンがコーリの名前を知っていたのも、その辺からだろう。間延びした声でカロルが「一人は有名だからね、と言つが、エリシアにしてみれば全く嬉しくない」。

しかしレイヴンが手配書のことを知っている。とてつもなく嫌な予感がした。

「もしかして、この事……父さんも知つてゐる……よね

返事は聞かなくても分かる。

レイヴンが手配書を持っているということは、十中八九知られて

いふと考えていい。父ひづりせりて言い訳するか、考えただけで早く頭が痛くなつて来た。

「まあ……そりゃあ、知つてゐるしょ。逆に知らない方がおかしいとおひさん思ひナビ」

一人ぢつと疲れたよつな顔をするHリシアをそつとして置いて、ユーリは見るからに鬱陶しいと言つた様子でレイヴンに向かつてひらひらと手を振つた。んじや、レイヴンさん、達者で暮らせよ、と。実際にそつけないユーリだが、レイヴンはめげずに話を続けよつとする。

「つれないこと言わないので。屋敷に入りたいんじょ？　ま、おつそんに任せときなつて」

ユーリが何か言いかける前にレイヴンは木の側を離れ、歩いて行く。どこに行くかと思えば、そのまま門に向かつたではないか。ちなみに本来なら止めに入るはずのHリシアは、父への言い訳を考えているのか反応がない。

「どんだけふざけたやつなのよ。にしても止めなことまづこんじやない？」

レイヴンの一連の行動を黙つて見ていたリタがユーリを見る。完全に信用出来るわけでもないが、今はまだ様子を見てもいいだる。

「あんなんでも城抜け出す時は、本当に助けてくれたんだよな

ユーリが言つ通り、ああ見えても助けてはくれたのだ。

何故か牢の鍵を持つていたようだし、隠し通路の存在も知っていた。城にいるはずのエステルでさえ知らないのに、だ。

コーリの言葉にエステルが少し驚いた顔をする。そういえば、彼女には詳しい話をしていなかつた。

「そうだったんですね？ だつたら、信用できるかも」

「だといいけどな。おい、エリイ、いい加減、用覚え覚ませよ

「んあ、あー……はいはい」

ペシリ、とコーリに軽く頭を叩かれた。

（いや、寝てたわけじゃないんですけどね。ただ父さんと会つた時の言い訳を考えてただけで。まあ、その時はコーリに何とかして貰おう、うん。我ながら良い考え方かも。父さんならコーリのこと気に入りそうだし）

エリシアはそこで初めて、レイヴンがいないことに気付いた。レイヴンは、屋敷の前にいる門番に近付いたかと思えば、何やら耳打ちしている。

しかも今、レイヴンが一瞬だけこちらに視線を向けた。これはもう完全にはめられた、と全員が思つたその時、

「な、なんかこっちくるよ?」

突然、門番が一行が隠れていた木を目指して駆けて来る。

一方、背後ではレイヴンがエリシアたちに向かって満面の笑みを浮かべると、屋敷内へ消えて行つた。思つた通り、まんまと一杯食わされたのだ。

「あいつ、馬鹿にして！ あたしは誰かに利用されるのが大つ嫌い

なのよ！」

「また一人抜け駆けしたじゃない！ 何が事情よ！ 知つたこっちやない！」

ユーリが止める暇もない。リタとエリシアが勢いよく門番たちの前に飛び出した。二人とも怒りに我を忘れているようだが、その手元は全く危なげない。

素早く胸の前で印を組んだ二人は瞬時に詠唱に入る。浮かび上がるのは赤と緑、鮮やかな魔法陣。

「 摆らめく炎、猛追！ ファイアボール！」

「 舞い踊る風靈、刹那にて軌跡を描け！ ウィンドカッター」

リタが放つた火球とエリシアが生み出した風は苦もなく門番を吹き飛ばした。本来ならレイヴンをぶつ飛ばしたい所だが、流石にこの距離では届かない。

あ～あ～、やつちやつたよ。どうすんの？ と、呆れたように肩を竦めるカロルの前で綺麗に気絶している一人の男。

二人共もちゃんと手加減していたのか、火傷をしている様子もなければ裂傷も見当たらない。

「 どうするつて、そりや、行くに決まつてんだろ？ 見張りもいなくなつたし」

結果はどうあれ見張りがいなくなつたのだから、この期を逃さない手はない。レイヴンを追い掛け、おとしまえを付けさせるのだ。エリシアは出来るだけ冷静に門番一人を木陰に隠し、武器を草むらに投げ込んで置いた。

「はい、これで当分は大丈夫。安心してレイヴンを追いましょ」

「えっと、ヒリイ。わたしたちの目的とは違いませんか？」

「仕事を終え、晴れやかに言つエリシアに、意外と冷静に突つ込むエステル。カロルもそんなエステルにうんうんと同意する。え？ レイヴンをぶつ飛ばすことじやないの。すると痺れを切らしたリタが真っ先に駆け出して行つた。

「ほら、そつと決まつたら早く行く！」

「ちよい、待つた。正面はさすがにやめとけ。裏に回つて通用口でも探すぞ」

つい正面玄関から入るとした彼女をコーリが止める。

このまま正面から突つ込むのはいくら何でも無策過ぎた。コーリを先頭にしてエリシアにエステル、リタにカロルと続き、ラピードが最後尾を行く。

「よう、また会つたね、無事でなによりだ、んじや」

通用口に向かつた一行の目に入つたのはレイヴン。

エリシアたちを見ても悪びれる様子は一切ない。男は直ぐさま昇降機に飛び乗つて視界から消えて行つた。

「待て、じりー！」

レイヴンを追つようつて一行も残つた昇降機に乗り込んだ。ただ、向かう先はレイヴンが消えた上ではなく下、地下である。乗つてしま

まつてはもう戻れない。抵抗虚しく一行は地下へと降り立つた。

それはまさしく腐臭と言つても違ひなかつた。ただ腐つた臭いだけではなく、血と何かが混ざつた異様な臭氣。それを一言で表すなんてとても出来ない。

昇降機から降りた先は、かなりの広さだらう地下室だつた。日光を取り入れる窓は勿論ない訳で辺りは薄闇に包まれてゐる。設置された僅かな明かりから周囲がぼんやりと分かる程度だ。

思わずエステルが口元を覆つた。流石に彼女やカロルはキツイだらう。まだ慣れているはずのエリシアでさえ顔をしかめるほどなのだから。

「なんか、くさいね……」

顔を青くしてカロルが呟く。周囲を確認するにも明かりが少なくて、とても部屋全体は見渡せない。

地下室はこの部屋だけではなく、他にもあるらしい。風の流れで分かる。一方、リタの方は昇降機の操作パネルを見て悪態をついた。

「あ～もう一、ここからじや、操作出来ないようになつてる……」

「……血と、あとはなんだ？ 何かの腐つた臭いだな」

コーリはエステルやカロルのように取り乱してはいない。紫掛かつた黒の瞳は鋭く部屋の中を見つめている。それにこの気配。何かいるのは間違いない。

「凄く嫌な臭い……エステル、大丈夫？」

「は、はい。何とか……」

エリシアの心配げな声を聞き、エステルは何とか笑みを返すが、顔色は悪い。大丈夫です、そう言いかけた時、ラピードが牙を剥き出し、低い唸り声を上げた。

一行の前に現れたのは、黒い体毛にカロルよりも一回り大きい体躯。狼、だろうか。

しかし牙は狼のそれより鋭く尖り、口端からは涎を垂れ流している。

「……魔物！ ち、地下室で飼つてたの？」

「かもね、リブガロもラ「ウが放したみたいだつたし。カロル、びくびくしないで武器構える」

恐怖から体を震わせるカロル。

エリシアはホルスターから銃を抜き放ち、油断なく辺りを見回した。魔物は前と右だ。ユーリも素早く剣を抜き、リタも精神を集中させ、詠唱に入る。

「ユーリとラピードは前をお願い。エステルは援護を。カロルとリタは右お願ひ！」

「言われなくても！ 蒼き命をたたえし母よ、破断し清冽なる産声を上げよ。アクアレイザー！」

瞬間、リタが描いた立体魔法陣がまばゆい光を放つ。リタから魔物を結ぶ、直線上に吹き上がる水流。時には石すら削り取る水の刃は苦もなく魔物の体を切り裂いた。

踊り出たラピードが狼の喉笛を切り裂き、ユーリが振るうつ剣が銀色の光となつて軌跡を描く。

カロルも負けじと大斧を振るい、エステルも後方から援護する。

エリシアもリタと同じように魔術で、時には銃を使ってユーリたちをフォローした。

「これで最後！」

銃口から放たれた光は瞬時に魔物の体を焼き尽くす。魔物の姿がないことを確認し、武器を納めた。エリシアたちの耳に、か細い声が入つて来たのはその時だった。

「パ……パ、マ……助けて……！」

か細い声を聞き、反射的に駆け出したのはエリシアとエステルだ。ヨーリたちも一人の後を追つて部屋を出る。

次の部屋も今までいた場所と代わり映えしない部屋だった。広さも同じくらいで相変わらず暗い。

ヨーリに続いた力口ルが悲鳴を上げる。石の床に散乱していたのは性別すら分からない人骨。中には肉が付いたものもあつた。

血と腐った肉の臭いは、先程よりも酷い。普通の人間がここにいれば、あまりの臭いに嘔吐してもおかしくない。それほどまでに酷い臭いだった。

「えつぐ、えつぐ……。パパ……ママ……」

部屋の隅からはつきりと聞こえた子供の声。声の方に視線を向けると、少年が膝を抱え、俯いたまま座つていた。

魔物の姿がないことがせめてもの幸いか。

真っ先にエステルの足が動き、少年と目線を合わせるよつにしゃがみ込む。エリシアも同じよつに体勢を変えた。

「怖かったね。でも、もう大丈夫」

優しい声に少年は怖ず怖ずと顔を上げた。ずっと泣いていたのだろう。目は痛々しくらいに腫れ、頬は流した涙で濡れている。

少年は不安そうな眼差しでエリシアとエステルを見上げた。

エリシアは安心させるよつに微笑んで、ゆっくりと腕を伸ばすと、少年の背中を摩つた。

「何があつたのか、話せる？」

それからしばらくして、彼が落ち着いた事を確認してエステルは優しく問うた。

エステルの自分を気遣うような声に少年は嗚咽を堪え、意を決して口を開く。

「こわいおじさんにつれてこられて……パパとママがぜいきんをはらえないからって……」

「ねえ、もしかしてこの子、さつきの人たちの……」

街で出会つたあの夫婦、ティグルとケラス。確か税金を払えなければ俺たちの子供はどうなるんだ、そう言つてはいなかつただろうか。

少年の話を聞いたエステルは顔を伏せ、なんてひどいこと、と呟いた。年端もいかぬ少年をこんな所に閉じ込めるなんて。下手をすれば魔物に襲われていたかもしれないのに。

「……あれは元は連れて来られた人たちなのね」

鼻を突く血と腐つた肉の臭い、転がつた人骨。それはかつて人であつたものの成れの果て。

恐らくラゴウは、税金を払えない人々を連れて来て魔物に食わせていたのだ。こんなこと、許されるはずがない。人を人とも思わぬ所業である。

エリシアは沸き上がる怒りを抑えられずにいた。生きながら魔物に食われる恐怖は相当だったはず。

どれほど辛かつただろう、痛かつただろう。死んでいった人々の思いを考えれば到底、許せるものではなかつた。

「パパ……ママ……。帰りたいよ……」

少しは落ち着いたとは言え、少年はエリシアにしがみついて、中々離れようとはしなかった。それも仕方がない。大の大人でも辛い中、暗闇で恐怖と戦いながら一人耐えて来たのだ。

そんな少年を見ていたエステルは、これ以上怖がらせないよう、こいつこりと微笑んだ。

「だいじょうぶ。もう、だいじょうぶだからね。お名前は？」

「ポリー……」

やはり少年はあの夫婦の子供なのだろう。夫婦の子供の名前もポリーと言つたはずだ。

それまで黙つて話を聞いていたユーリが膝を付き、ポリーに視線を合わせた。彼が少年を見る瞳はユーリにしては珍しく、第三者から見ても分かる優しいものだ。

「ポリー、男だろ、めそめそすんな。すぐに父ちやんと母ちやんにはあわせてやるから

「うん……」

「で、どうするの？ 連れてくんでしょう？」

そこで口を挟んだのはリタ。街に戻ることは出来ない。引き返せない以上、ポリーを連れて行くしかないだろう。それならば細心の注意を払う必要がある。

ユーリはしばらく考えた後、行儀よく座るラペルードに手を向けた。

「よし、じゃあポリー、あのでつかい犬の傍から離れるなよ。頼んだぞ、ラピード」

「う、うん……」

やや不安そうに頷くポリーに、ラピードは汗せりと血の風に元気よく、うおんと呟えた。

「あの階段、屋敷の中に続いているみたいね」

恐らくは地下室の終わりを告げる最後の部屋は、冷たい鉄格子で仕切られていた。

奥に伸びる階段の先は屋敷の中だろ？

階段の先を見上げるエリシアは、ポリーと手を繋いでいる。ただし何があつても動けるよ、利き手である右手は空けてあった。

「ああ。やっぱり、鉄格子は鍵かかってんな」

コーリの視線の先、頑丈とまではいかないものの、唯一の扉には鍵がかかっている。

例え、連れて来られた人々がここまで辿り着けたとしても到底、出ることは叶わない。或はここを作った人物はそれが見たくて、わざとこんな作りにしたのだとしたら。悪趣味なことこの上ない。

そこへ、階段から何者かが降りて来る。

「はて、これはどうしたことか、おいしい餌が増えますね」

年配の男だった。というより老人と言つてもいいだらう。

細いフレームの眼鏡を掛け、白い鬚をたくわえている。帽子から覗く髪もまた白い。細められた瞳は明らかに他者を見下すような光に満ちている。

纏つた服も金にあかせて作つたであろう豪奢なものだ。生地を見ればすぐ分かつた。

とても街人が買える生地ではない。あれは絹だ。これから考えられる人物は一人しかいない。

そう、田の前の老人はラゴウ執政官に違ひなかつた。

「あんたがラゴウさん？ 隨分と胸糞悪い趣味をお持ちじゃねえか」

「趣味？ ああ、地下室のことですか。これは私のような高雅な者にしか理解できない楽しみですよ。評議会の小心な老人どもときたら退屈な駆け引きばかりで、私を楽しませてくれませんからね。その退屈を平民で紛らわすのは私のような選ばれた人間の特権というものでしちう？」

エステルやエリシアを庇つうに、コーリが一步前に出た。

コーリの問いを否定しなかつた。つまり彼がこの街の執政官、ラゴウといつことになる。

老人は一行を馬鹿にしたかと思つと、とても執政官とは思えない言葉を平氣で口にした。後ろにいるエステルがぎゅつと田を閉じ、

エリシアが唇を噛む。

「まさか、ただそれだけの理由でこんなことを……？」

エステルの眩きはラゴウの耳に入ることはない。
何が選ばれた人間の特権だ？ ふざけるな、エリシアは出来るならそう叫びたかった。

繫いだボリーの手が震えている。連れて来られた時のことを思い出したのかもしれない。

「さて、リブガロを連れ帰つてくるとしますか。これだけ獲物が増えたなら、面白い見世物になります。ま、それまで生きていれば、ですが」

「リブガロなら探ししても無駄だぜ。オレらがやつちまつたから」

「……なんですって？」

ラゴウは嫌らしい笑みを作ると、エリシアたちから背を向け、歩き出そうとした。そんなラゴウの背中にコーリが言葉を投げかける。振り返ったラゴウの顔からは初めて笑みが消えていた。
ラゴウからすれば、角を失つたリブガロに価値はないだろう。もし見つければ殺そうとするかもしれない。

顔を歪め、怒りに肩を震わせるラゴウを見つ、コーリは不敵に笑う。

「聞こえなかつたか？ オレらが倒したつて、言つたんだよ

「くつ……なんといつ」と……

「飼つてるなら、わかるよつて鈴でもつけときやよかつたんだ」

馬鹿にするよつてコーリは肩を竦めてみせる。そんな青年を見たラゴウは、そもそも忌ましこと言つた風に唇を噛み締めた。飼つているなら、鈴をつけておけばよかつた。辛辣な、と云つて、コーリらしい皮肉である。

ラゴウの表情が変わつた。元の人を小馬鹿にしたよつな顔に、だ。

「まあ、いいでしょ。金さえ積めば、すぐ手に入ります」

「この男は金さえ出せば、全てが解決するとでも思つてゐるのだろうか。

遂に我慢出来なくなつたエリシアはコーリの後ろから飛び出した。

「ふざけないで！ 何様のつもりなのー？ 命は貴方の玩具じゃないのよー！」

「ふん、平民如きが偉そう」

執政官だから何だといつのだ。

ラゴウに人の命を弄ぶ権利などない。他人を苦しめて何が楽しいのだろう。理解出来ない。

しかしエリシアの怒りの声にも、ラゴウは鼻で笑うだけだ。我慢の限界を通り越したのは何も彼女だけではない。黙つて見守つていたはずのエスティルも。

「ラゴウー、それでもあなたは帝国に仕える人間ですか！」

「むむつ…………あなたは…………まさか？」

普段のエステルからは考えられない強い口調だつた。

笑い飛ばそうとしたラ'ゴウは、視界にエステルの姿を捉えて首を捻る。まさかこんな所にいるはずがない、と。

ラ'ゴウは何を思ったのか、もつと良くなじみエステルの顔を見ようと鉄格子に近寄つた。

コーリは突然、鞘から剣を抜き放つと勢いよく振り上げた。瞬間、剣から生まれた青い衝撃波が鉄格子に襲い掛かる。

鉄格子そのものは脆くはない。

だがコーリの蒼破刃を正面から喰らつて耐えられるはずがなかつた。

大の魔物でも仕留める汎え渡つた剣技を受けた鉄格子は激しく揺れる。継いで響いた甲高い音。

鉄格子を繋いでいた止め具が外れたのだ。支えを失つた鉄格子は、激しい音を立ててラ'ゴウの方に倒れた。

「き、貴様！ な、なにをするのですか！ 誰か！ この者たちを捕らえなさい！」

「早いとこ用事すませねえと敵がぞろぞろ出てくんぞ？」

喚くだけ喚くと、ラ'ゴウは驚くべき速さで走り去つて行く。

この状況で傭兵たちに出てこられれば、とても証拠を抑えるどころではない。振り返つた先のリタは既に印を組み、術の詠唱に入つてゐる。

後少しで魔術が完成する。その時、コーリがちょっと待て、とおりタを止めた。術の発動を直前で止められたリタは、憮然とした顔で呟く。

「……何よ、騎士団が踏み込むための有事つてやつが必要じやない

の?」

「まだ早い。まずは証拠の確認だ」

騎士団は有事に際してのみ有事特権により、あらゆる状況への介入が許される。そう、エステルが教えてくれたはず。

ただ、その前にすべきことがあるではないか。天候を操る魔導器を見つけなければ、今までと同じようにしらを切られるだけ。それどころか下手をすれば、エリシアたちの立場も悪くなる。自分たちの目的と役割を間違えてはならない。ここで失敗すれば、フレンたちにも迷惑が掛かるのだ。

「天候を操る魔導器を探しましょ」

エリシアの言葉に一行は頷き合つと、ラゴウを追つて屋敷の中に足を踏み入れた。

幾度夜が明け、日が暮れ、時が過ぎたか。遙か悠久の時に流れ、世界が忘れた友の名をこの瞬間^{とき}、この場所で万の想いと共に叫ぼう。果てなき運命^{きだめ}を繰り返す、愚かで愛しい世界の為に。

友よ、お前の魂は今何処に在る？ 世界と共ににあるのか、それとも泡沫と消えたか。

その想い、私が代わりに引き継^{つい}。その願い、私が代わりに叶えよう。光と消えた友の為に。

なだらかな曲線を描く草原を、一人の男が歩いていた。

若い、恐らくは二十代であろう男だ。鮮やかなルビーを思わせる瞳に、光を反射する艶やかなシルバー・ブロンドがふわりと風に揺れた。

身に纏う服は鎧ではなく、血の色をした長衣。荷物という荷物は持つておらず、一振りの剣を携えている。

複雑な模様が彫り込まれた刃は一種の芸術品と言つてもいい。

果てしなく広がる青々とした草原にそよ風に草花。自然の雄大さを感じさせる風景がそこにはあった。周囲には魔物の姿もない。もしここに、エリシアが居れば彼を見て驚いていたかもしれない。Hフミニアの丘で数度だけ言葉を交わした男。デュークである。

「……祈つてよかつた、か」

デュークは歩みは止めずに突然、ぽつりと呟いた。

思い出すのは友の墓前で会った少女。何故彼女は、見ず知らずの自分と話し、友の墓に祈りを捧げる気になつたのか。デュークには理解出来ない。

もし、もしも人間が皆あの少女のようだつたのなら友は死なずに済んだのだろうか。過ぎた事を言つても仕方がないのは分かる。

どうしても考えてしまうのだ。

だがデュークには友に代わつてやらなければならないことがある。過ぎたる薬が毒となるように、増えすぎたコアルは世界にとつて毒となる。友の名に誓つた。そのために彼は世界を回るのだ。

「……エルシフル」

デュークは遂に立ち止まり、今は「き友の名を口にする。するとどうした事だろつ。デュークに応えるように優しく、柔らかな風が吹き、彼の長い髪を揺らした。

階段を上がつた先は、いかにも貴族らしい豪奢な屋敷だつた。敷かれた真紅の絨毯に、調度品の類は住民ならばとても手が出せない値段なのだろう。何にしても、エリシアたちには部屋をじっくり見ている暇などなかつた。

部屋数が多過ぎて、ラゴウがどこに逃げ込んだのか分からぬのである。

恐らく天候を操る魔導器が置かれた部屋だろうが、ちんたらしている暇なんて皆無だ。証拠を隠滅されれば元もこもない。

「ああ、もう！ 部屋が多過ぎて分かんないよー！」

真っ先に耐え切れなくなつたカロルが叫ぶ。

このまま迷い続けるのは出来れば遠慮したい。フレンたちが来てしまうではないか。こうなつたら、もう頼れる人物は一人しかいなかつた。

エリシアは勢いよく、考え方をしていたリタの方を振り向いた。

「ねえ、リタ、魔導器が置いてある部屋の見当付かない？」

「魔導器の力を十分に発揮するには、なるべく外に近い方がいいから。踏み込まれることを考えても奥の方じゃない？」

「じゃあ、こっちだね！」

一つ一つ部屋を探す暇はない。研究者である彼女なら、魔導器が置かれた場所も見当がついているかもしれない。そう思つたのだ。そして予想通り、暫しの沈黙の後、リタが口を開く。

推測を聞いたカロルが勢いよく扉を開ける。

次の瞬間、目の前に飛び込んで来た光景に一向は言葉を失つた。何故なら部屋の天井から伸びたロープに、寝具ごとぐるぐる巻きになつた少女が吊り上げられていたからだ。

「いーい眺めなのじや……」

少女は吊り上がつたまま、体を揺らして脳天気に言つた。遊んでいる訳ではない……と思つ。

彼女はあれだ。三つ編みにした金髪に丸い碧眼。レースの付いた海賊帽を被っている。

屋敷の前で会った奇妙な少女だ。まんまと傭兵たちを撒いたのかと思つていたのだが、どうやら違つひしこ。

「モード何してんだ?」

「見ての通り、高みの見物なのじゃ」

呆れたようなコーリーの声に、少女はえつへんと胸を張つて答える。一行を曰にしても驚くこともなく、またここにいる理由を尋ねる訳でもない。

高みの見物だと彼女は言つが、体は未だぐるぐる巻きのまま。どう見ても高見の見物ではないだろう。

「ふーん、オレはてつきつ捕まつてるのかと思つたよ」

「あの……捕まつてるんだと思つんすけど……」

控えめに言葉を挟むエステル。彼女の正しい、と言つが分かりきつた指摘にも少女は首を振つて、そんなことないぞ、と反論した。少女が捕まつていないうるように見える人物がいれば病院に行つたほうがいい。これが捕まつてゐる以外の何に見えるのだろう。新しい貴族の遊びだとでも言つのだろうか。

「その格好で言つても全然説得力ないって

「お……? おまえたち、知つてゐるのじゃ。えーと、名前は……ジヤックとメアリー?」

エリシアも冗談半分に、尚も楽しそうにぶら下がる彼女に突っ込んでみる。

ふとユーリと自分を見た少女は眉を潜め、頭を捻った。

しかしぬるに少女から出た名は全くの別人。あまりに適当すぎるジヤックとメアリー発言に、思わずすりつけそつになつたのは何も、エリシアだけではないはずだ。

「えつと、誰なんす?」

少女に気圧されたように、躊躇いがちに、ヒステルは面識があるらしいユーリとエリシアを見る。

誰と言われても、自分もユーリも知らない。顔見知りではないし、そもそも一度会つたきりだ。取り敢えず、不思議そうな顔をする彼女にかいつまんて事情を説明した。

「オレはユーリだ。こつちはエリイ。おまえ、名前は?」

「パーティなのじや」

ユーリが自己紹介をすれば、少女はパーティ、と名乗つた。
氣のせいかもしれないが、少女 パーティがユーリを見る目が少し違う気がする。違うといっても、何がどう違うのか、エリシアも上手く言えない。言つなれば女の勘である。

「パーティか。さつき、屋敷の前で会つたよな」

「おお、そうなのじや。いつの手のぬくもりを忘れられて、追いかけてきたんじやな」

「どう考えたらその答えに行き着くのか教えて欲しいかも」

ユーリはパーティの置き土産である彼女そつくりの人形を掲げる。瞳を輝かせてユーリを見るパーティには呆れるしかない。やはりエリシアの勘は当たっていたようだ。

確かに初めて会った時もそんな事を言つていなかつたか。

(……まあ、ユーリ、格好いいし)

「あの、エリイ、どうしたんです？ 難しい顔して」

「難しい？ 私が？」

怪訝そうな表情のエステルが顔を覗き込んでくる。
難しい顔をしていたのだろうか。難しい顔になる理由なんてない、
はず。そんな必要などないはずだ。

そもそも、何に対して怒つていたのだろう。一人青くなつたり悩
んだりと、忙しいエリシアにエステルは不思議に首を傾けた。

「もしかして自覚なかつたんですね？ 眉間にシワ寄つてましたよ？」

「あ、そう。ありがとうございます、エステル」

答えたエリシアは上の空というかどこか元気がない。わたし、何
か変なこと言つたでしょ？ とエステルはおろおろしていた。も
しかして余計な一言だつたの？

しかし壊滅的に鈍い彼女に分かるはずもなく。

一人慌てるエステルと、暗くなつてゐるエリシアを尻目にカロル
が尋ねる。

「ね、こんな所で何してたの？」

「何つて捕まつてたんでしょう」

「失敬な。宝を探していたのじゃ」

リタから鋭い指摘が飛び、確かにそつなのだが、それでは流石に身も蓋も無い。

リタの捕まつていた、が気に入らなかつたのか、パーティは心外そうな顔をしていた。言動も妙に年寄り臭いパーティだが、ラゴウの屋敷に侵入した目的もぶつ飛んでいたようである。

まさか宝探しのためにこんな危険を侵すとは誰も思つまい。

「宝? こんなとこ?」

「あの道楽腹黒ジジイのことだし、やつらのがめてても不思議じやないけど……」

「宝つて言つて税金でしょ。街の人たちからも随分絞り取つてゐみたいだし」

首を傾げるカロルに、あながち間違いではないと同意するリタ。しかし、今までの話の流れから行くと、溜め込んでいるのは宝というより税金ではないだろうか。この屋敷だけでなく、外の庭園にもかなりの金がかかっているのだろう。

屋敷の内装も勿論、明らかに高価なキャビネット、シャンデリア。上げればきりがない。

その全てが街の人々から巻き上げた税金が使われているのだ。怒りを通り越して呆れすら抱く。

「だらうな。つたく、無駄なものばっかだな」

「ヨーリは近くにあつた獅子の置物を蹴った。恐らくは大理石で出来ているのだろう。磨き上げられた鏡のような像はかなり重い。倒れて壊れました、ではザーフィアスの城の一の舞である。ただ、犯罪者になつた時点で気にするだけ無駄であり、そもそもヨーリが気にするはずがない。

「パーティは何してる人？」

「冒険家なのじゃ」

パーティの一言に凍り付いたのは、カロルとエステルである。ヨーリは相変わらずなにを考えているか分からぬし、リタも動搖した様子はない。こんな年端もいかない少女が冒険者とは。嘘をついているとも思えないし、誤魔化している訳でもなさそうだ。

「と、ともかく、女の子ひとりでこんなところウロウロするのは危ないです」

「そうだね。ボクたちと一緒に行こう」

「ホン、と咳払いをして落ち着いてから、エステルは話の方向を逸らした。カロルもそれに便乗する。

その点はエリシアも同じだ。

流石にこのまま 天井からぶら下がつたまま放置するのはかわいそうだと思う。捕らえられた彼女が危険な目に合わないという保証はない。

「この際、宝は諦めた方が賢明だと思うけど、どうする？ どうしても天井からぶら下がつたままがいいなら、無理強いはしないけど」

「人のこと言えた義理じゃねえがおまえ、やつてること冒険家つて
いうより泥棒だぞ。ま、まだ宝探しするつてんなら、オレも止めな
いけどな」

不法侵入をした時点で、冒険者ではなく犯罪者だろ。しかもお
目当ての宝を見つけたなら、当然持つて行く氣なのだから、やはり
泥棒である。

それでも宝を探したいなら、コーリもエリシアも止めない。パテ
イを説得する余裕も猶予もないからだ。

「冒険家といつのは、常に探究心を持ち、未知に分け入る精神を持
つ者のことなのじや。だから泥棒に見えても、これは泥棒ではない
のじや。……しかし、たぶん、このお屋敷にはもうお宝はないのじ
や」

色々並べ立てているが、つまりは一緒に来たいといつことなのだ
る。素直ではないといつか、変な少女である。ただ、憎めないの
は確かだ。

「それじゃ行くか」

「ちょっと待つのじやー、うちを降ろすといつ肝心な」とを忘れて
おるー。」

「ほんの冗談だつて」

「コーリが言つと冗談に聞こえないから」

部屋を出て行ひつあるコーリに、パーティは体を揺らして叫んだ。

悪戯っ子のような笑みを浮かべるユーリを見ても、本気なのか冗談なのか分からぬ。そのままパーティを放つて置きそつた氣もする。

エリシアが苦笑しながら言つと、そつか？、と軽い声が返つて来た。

ユーリと旅をするよになつて結構経つが、未だにふとした時の考えが読めない。

レースのついた海賊帽に、大人用の紺の上着をワンピース代わりに着ているパーティ。見た目は普通の少女なのだが、どこか変わつてゐるといふか喋り方がかなり年寄り臭い。

「これで……！」

エリシアの愛銃の銃口からほとばしる雷撃が、寸分の狂いもなく、剣を振り上げた傭兵を捕らえた。

バチッ、と鈍い音がした瞬間、傭兵は冷たい床に崩れ落ちる。氣絶させるにはこれが一番手つ取り早いのだ。

「こいつで……ラストだ！」

ユーリが振り上げた剣から発生する衝撃波 既に旅の中で見慣れたものになりつつある蒼破刃である。蒼い衝撃波は、防御もまゝならぬ男を容赦なく壁へとたたき付けた。

ユーリは襲いかかつて来た傭兵全員が昏倒したことを確認して、

剣を鞘に納める。

「急がないといけませんね」

「進む度に傭兵の数が増えてる事を考へると、この先に魔導器があるのはまず間違いないわね」

やや焦ったように剣を納めるエステルに、確信を得たリタは組んでいた手を下ろした。

しかし本来の目的では絶対に使われない、戦闘を繰り広げたお陰で、部屋の中は例えようのない有様だった。あえて言つなら、空き巣に入られたような感じか。

高価な絵画には弾け飛んだ傭兵の剣が突き刺さっているし、部屋の隅に置かれた観用植物は、吹つ飛ばされた傭兵のお陰でめりやくちやである。

「こんな危険な連中のいる屋敷をよくひとりでウロウロしてたな」

「危険を冒しても、手に入れる価値のあるお宝なのじゃ」

仲良くおねんねしている男たちを見下ろし、ユーリは言った。
門番たちを出し抜いたのは見事だったが、捕まつたのでは元も子もない。そんな危険を冒してまで、パーティが求める宝とは何なのだろう。

「それってどんな宝？」

「アイフリードが隠したお宝なのじゃ」

興味津々と言つた様子で尋ねたカロルにパーティは何気なく答えた。

アイフリードが隠した宝だと。

“アイフリード”。その一言を聞いた瞬間、カロルが驚愕し、リタが微かに眉を吊り上げる。

ユーリは相変わらずのポーカーフェイスで、エリシアは僅かに目を見開き、エステルはカロルと同様に驚いていた。

「有名人なのか？」

場違いな質問を投げかけたのはなんと、ユーリである。

さつきのあればポーカーフェイスというより単に知らなかつただけらしい。それもある意味では仕方がないのだろう。彼はザーフィアスで暮らしていたのだから。博識なエステルは恐らく、本で知つていたに違いない。

アイフリードの名はギルドに属する、或いは関係者なら知らない者はいなかつた。

「つてユーリ、一人驚いてなかつたのは、知らなかつただけ？」

「ん？ ああ、さつぱりな」

別の意味で驚く旨にユーリは飄々と笑つた。やはりユーリは大物に違いない。

誇れるよつた生き方

「う、海を荒らしまわった大悪党だよ」

カロルがややつつかえながら、アイフリードがどんな人物であったかを語る。

アイフリードの名は、ギルドの人間なら知らぬ者はいない。それくらいアイフリードと、アイフリードが率いたギルドは有名だった。しかしアイフリード率いるギルドが起こしたある事件から、ギルドの人間でなくとも有名である。

「海賊ギルド、セイレーン海精の牙を率いた首領。アルトスク天を射る矢とも並び称されていたんだけど……」

「アイフリード……移民船を襲い、数百人という民間人を殺害した海賊として騎士団に追われている。その消息は不明だが、既に死んでいるのではと言われている、です」

言い淀んだエリシアに、ユーリは首を傾げる。何か言いづらっこいもあるのだろうか。

彼女に代わって答えたのはエステルだった。

移民船を襲い、民間人を虐殺したとされるアイフリードが表舞台から姿を消して数年という時が流れた。

本来ならギルドには干渉しないはずの騎士団に追われていたアイフリードは、生きていらないというのがもっぱらの噂だ。

「ブラックホール事件って呼ばれてるんだけど、もうひどかったんだって」

「……まあ、そう言われどるの」

呟いたパーティは前を向いたまま。一行からは彼女がどんな表情をしているか分からぬ。

だがその聲音は変わらぬものの、少しだけ悲しそうだった。少な
くともエリシアはそう感じる。パーティはもしかして、アイフリード
の関係者なのだろうか。

宝を探していると言つし、纏う服もどこか海賊を思わせる。悲し
げな声も、彼女がアイフリードの関係者だからではないのだろうか。

「パーティ？」

「なんでもないのじや」

元気よく振り返った彼女に、先程の憂いはない。わざと元気に振
る舞つてているような感じがするのは、エリシアの氣のせいだろうか。
何にしても、無理に聞く必要はないだろう。パーティとて聞かれた
くないに違ひない。

「でも、あんたそんなもん手に入れて、じうすんのよ」

「どうする……？ 決まってるのじや、大海賊の宝を手にして冒険
家としての名を上げるのじや」

リタの疑問はもつともである。海賊の宝を手にしてどうするのか。
確かに大海賊の宝を手にしたとなれば当然、冒険家としての名を上
げることは出来るだろう。

しかしそれは、こんな少女が危険を冒してまで、手に入れなけれ
ばならないものだろうか。事情があるのかもしけないが、それにし
ても危険過ぎる。雲を掴むような話だ。

「危ない目に遭つても、か？」

「それが冒険家といつ生き方なのじゅ」

パティはコーリの問いに淀みなく答える。

冒険家であれ騎士であれ、生き方といつものは簡単に曲げられるものではない。まだ十三、四歳だとこのに妙に達観している所もあつた。

ヒリシアは思う。パティは凄い。自分などよつずつと。誰かに誇れるような生き方なんて、出来るのだろうか。

「ふつ……面白いじゅねえか」

「面白いか？　じゅじゅ、つかと一緒にやらんか」

パティの言葉を聞いたコーリは、感心するよつて微笑んだ。言動もそうだが、この少女はコーリを驚かせる何があるらしい。

そんなコーリを見てパティもにやりと笑う。

一緒にといつことはパティと共に冒険家をするといつことだらう。しかも彼もまんざらでもないよつな感じだ。もしかしなくとも受けるのでらうか。

ヒリシアが固唾を飲んで見守つてゐる。

「性には合つたうだけど、遠慮してくれ。そんなに暇じゅないんでな」

「コーリは冷たいのじゅ。サメの肌より冷たいのじゅ」

「サメの肌……？」

コーリは肩をすくめただけで、誘いを断わった。パーティは残念そうにふうと息を吐く。

何だかほつとしたように息を吐く。その事実に、ヒリシアは自分では気付かなかつた。

そんな事より、もつと分かり易い例えの方がいいのではないだろうか。そもそもサメの肌くコーリなのだろうか。

マイチ例えが飲み込めない一行などそつちのけで、パーティは悪戯っ子のように微笑む。

「でも、そこが素敵なのじや」

「素敵か……？」

顔を輝かせるパーティを横田に、突っ込みを入れるリタ。つまり、と言つかやはり、パーティはコーリのことが好きなのだろう。ここまで来れば誰にだつて分かる。現にカロルだつて気付いているだろ？

「もしかしてパーティってコーリのこと……」

「ひとめぼれなのじや」

「ひとめぼれ……」

パーティは片目を瞑つてみせる。その後ろではリタが盛大に息を吐いた。

すると今度は、リタの隣にいたエステルがいつも以上に「ゴー！ゴー！」している。ヒリシアが彼女の前で手を振つてみても全く反応がない。

「おーい、エステル？」

エリシアが話しかけても反応がない。それ所か、まだひとめぼれ、ひとめぼれと繰り返している。本当に大丈夫だろうか。かく言うエリシアも少なからずショックとまでは行かないが、を受けていたと言つてもいい。エステルが普通であれば顔に出ていただろう。

「何でもいいけどさつさと行くわよ。一刻の猶予もないんだから」

相変わらずポーカーフェイスのユーリに、我関せずと言つたラピードとカロル。

機嫌よさそうにふんふん鼻歌を歌うパティに、ニコニコ微笑むエステルと、彼女の肩を持つて揺さぶるエリシア。

まったくと言つていいほど纏まりの無いパーティーを一瞥し、リタは深くため息をついた。駄目だわ、こりや、と。

それはきっと魔導器なのだろう。低い駆動音は魔導器が稼動している証だ。

強大な、天井に届かんばかりに伸びた魔導器は青白い光を放つて、一般に魔導器と呼ばれるものと比べてやけに大きく、全体は洗練されたとは言い難いフォルムを描いていた。

部屋全体を覆うそれが、フレンが言つていた天候を操る魔導器に間違いない。

部屋に入つて魔導器を見るなり、リタは真っ先に駆けて行く。

そしてスロープを見つけて、魔導器の正面に立つた。かと思うと、一行に背を向け、虚空に指を走らせる。

現れたのは半透明の制御パネルである。恐ろしい速さで指が動くのをコーリたちは呆然と見守っていた。

「ストリムにレイトス、ロクラーにフレック……複数の魔導器をツギハギにして組み合わせている……この術式なら大気に干渉して天候操れるけど……こんな無茶な使い方して……エフミードの丘のといい、あたしよりも進んでるくせに、魔導器に愛情のカケラもない！」

半ば怒りながら、しかしそれでもパネルを走る指が遅くはない。途切れ途切れに聞こえて来るリタの独り言から推測するに、この魔導器は複数の魔導器を組み合わせて作られたらしい。（でも、リタより進んでるってあれを作った魔導士って誰なんだろう……？）

「これで証拠は確認出来ましたね。リタ、調べるのは後にして……」

「……もつひょつと、もつちょつと調べをせて……」

エスティルに言われても、リタは中々離れよつとはしない。呆れたコーリが仕方なく声をかけた。このままではリタが納得行くまでここを離れられない。

「あとでフレンにその魔導器まわしてもらえばいいだろ？ セツと有事を始めようぜ」

「セツだよね。有事じゃないとフレンたちは突入出来ないし」

とりあえず派手にぶつこわせばいいだろ？との考え方はエリシア自身は否定するかもしれないが流石、ギルドの人間である。彼等は何にしても豪快なのだ。

そんな彼女にエスティルもすっかりその気になつたのか、何か壊していいものは……と呟いて辺りを見回している。そして、ここにもその気になつた人間が一名。

「よし、何か知らんが、うちも手伝うのじゃ」

パティが楽しそうな顔でどこからか取り出したもの。

何と銃である。少女が扱うにしてはやや大きい、ゴツめのものだ。フォルムを見れば分かる。エリシアのような魔導器ではない。いつちよ前に銃を構えた彼女は、適當な的はないのかとキヨロキヨロするが、それはあえなくユーリに阻まれることとなつた。

「お前は大人しくしてろつて」

「あう？」

思わぬところからやつて来た衝撃にパティは思わず尻餅を付いた。余計なことはしないで貰いたいものだ。変な所を壊されては堪らない。

一方、カロルは魔導器を操作するために、組上げられた足場を支える柱に狙いを定め、思い切り斧を振り上げる。次いで衝撃。

その時、カロルの頭上でパネルを操作していたリタの中で何かが切れた。

「あ～つ……もつ……」

「うわあつ！　いきなり何すんだよつ！」

浮かび上がる赤い魔法陣。彼女が得意とする最もポピュラーな魔術、ファイアボール。それにより発生した火球が、カロルの直ぐ近

くに着弾する。

突然飛んで来た炎にカロルは堪らず、後ろに下がるしかなかつた。一步間違えば火傷では済まない。リタが手加減していれば別だが、あれは本気だろう。

エリシアはリタのファイアボールに巻き込まれないように壁際に移動して、天井の装飾を撃ち落とす。

「うーん……動かない的撃つても練習にもならないかあ

いくら天井が高くて狙いづらい位置にあるとは言え、魔物に比べれば断然当てやすい。が、動いてもいない的を撃つてもちつとも練習にならないのだ。

普通の人間から見れば、あんな位置の装飾を狙つて撃ち落とすのは十分凄い。

しかしエリシアにとつては、見て驚くような距離を狙い撃つのは朝飯前である。

でなければ獅子の娘などやつていられない。父の名に恥じぬよう、鍛錬を欠かさないのである。

「こんくらにしてやんないと、騎士団が来にくいでしょー！」

リタが掲げた手から絶え間なく放たれるファイアボール。

部屋に大きな衝撃が走る。無数の火球は壁に激突すると白い壁を黒く焦がした。

流石にやり過ぎではないだろ？ あまりのリタの勢いに、エステルは壊していい物を探していることさえ忘れていた。

「でも、これはちょっと……」

「なに、悪人にお灸を据えるにはちょうどいいくらいなのじや」

ユーリに大人しくしろと言われたパティは目を閉じ、悟ったように後ろで手を組んだ。

悪人と言っているが、そもそも彼女はラゴウの所業を知っていたのだろうか。

その時、騒ぎを聞きつけたのか、赤い装束を纏つた傭兵たちを引き連れたラゴウが姿を現した。

「人の屋敷でなんたる暴挙です！ お前たち、報酬に見合った働きをしてもらいますよ。あの者たちを捕らえなさい。ただし、くれぐれもあの女を殺してはなりません！」

「まさか、こいつらって、紅の絆傭兵团？」
ブラッドアライアンス

ラゴウが指差したのはエステルである。

何故エステルなのか。その答えは先ほど口を滑らせた一言にあつた。

命令を受けた傭兵が武器を構え、一行を包囲する。

斧を構え、臨戦態勢を取ったカロルが男達の服装を見て叫んだ。紅の絆傭兵团は、主に護衛を主とするギルドである。彼らの服には五大ギルドの一つ、紅の絆傭兵团を示す徽章が付けられている。

「やうよー！」

傭兵たちを見てエリシアが頷く。父のギルド、獅子の咆哮と敵対しているギルド、紅の絆傭兵团を自分が見間違えるはずがない。彼らは仮にもギルドを纏めるはずの五大ギルドの一つだと叫つのに、ここ最近、信義に反する行いが目立っている。

「それ、もういっちょーー！」

リタの方は視界の下で戦っている仲間たちには目もくれない。無駄のない動作で印を切り、手を掲げる。何度も炎の玉は、今まで以上に室内を縦横無尽に駆け巡った。

やや危なげなもの、カロルの斧が傭兵の武器を弾き飛ばし、ラピードがいつか帝都で見せたような足払いを華麗に披露する。エスティルは危なげなく盾で剣を受け止めるが、隙をついてサーベルを振るつた。

エリシアは愛銃で器用に傭兵たちの武器を弾き飛ばし、コーリは遠慮なく峰打ちで男たちを気絶させる。

ちなみにこの峰打ちというものは物凄く痛い。思いきり殴り付けられたのだから当たり前だが、手加減したとは言え、コーリのことだ。恐らく青筋となつて残ることだろう。

「十分だ、退くぞ！！」

「何言つてんの、まだ暴れ足りないわよ！」

「リタは十分暴れたでしょ」

あらかた片付けた後、退くぞ、と皆に聞こえるようにコーリが叫ぶ。すると抗議の声は上から降つて来た。声の主はリタである。

それともあれだけファイアボールを連射していたのは、彼女の基準では、暴れる内に入つていないのである。

エリシアにしてみれば本来、怒りをぶつけたい相手はいないのだから。

「早く逃げないとフレンと御対面だ。そういう間抜けは御免だぜ」

「まさか、こんなに早く来れるわけ……」

直後、リタの手から炸裂する火球。まだ来るわけがない、そう反論しようとしたところに響く複数の足音。

扉から姿を現したのは紛れもなく彼である。

鮮やかな金の髪に帝国騎士であることを表す鎧。コーリにしてみれば、厭味なくらい貴公子然とした顔立ちの青年、フレン・シーフオとその部下、ソディアとウイチルだった。

竜と竜使い

「執政官、何事かは存じませんが、事態の対処に協力致します」

エスティルがフレン、と彼の名を呼ぶ。この友人を侮つてはならない。自分たちが“騒ぎ”を起こして間もないというのに、フレンは部下を引き連れてやつて来た。

（つたぐ、ちよつとは遅れて来いよな、フレン）

無駄だと分かっていてもユーリは苦笑するしかない。ほらみる、と。

「ちつ、仕事熱心な騎士ですね……」

「う、ウが忌まぬまいといった風に舌打ちした瞬間だつた。天井近くに設置されている硝子張りの窓が甲高い音を立てて砕け散る。割れた窓から現れた影は見たこともない異形だつた。体の両側から広がるのは固い鱗に包まれた青い翼。長い尾に鋭い瞳は薄い青色をしている。

鳥でもなく、爬虫類でもない。数多くいる魔物の中でも滅多に目にすることのないもの、それは“竜”。しかも竜の背に、何者かが跨がっているではないか。

顔を含めた全身を覆う白い鎧を身につけていたため、年齢も性別すらも分からない。ただ、身の丈もある業物の槍を携えている。

「うわあ…………！　あ、あれって、竜使い！？」

竜使いの姿を認めたフレンは部下たちを即座に散開させる。ウェーチルが援護するようにファイアボールを放つが、燃え盛る火

の球もフレンとゾディアの剣も当たらない。

竜が空中を泳ぐように優雅に魔導器に近付くと、竜使いは一瞬で中央に象眼されていた魔核を薙いだ。

ぱちぱちと奇妙な音を立て、魔導器から黒煙が上がる。ここまで壊されてしまえば誰も修復出来ない。あまりに突然の出来事に呆然とするラゴウとリタ。

だが魔導器を愛するリタの方はたまたものではない。それが例えリタの魔導器でなくとも。

「ちょっとー！ 何してくれてんのよー 魔導器を壊すなんて！」

「人が魔物に…… 本当だつたんだ」

しかし、リタの叫びも竜使いには届かない。魔導器を破壊したことで、もう用は済んだとばかりに飛び去る。する。

エリシアは空中の竜と竜使いを見上げた。エフミードの丘でカロルが聞いた話は本当だつたのだ。あれが竜使い。でも何のために魔導器を壊すのだろう。

「待て、こりー！」

リタが再度ファイアボールを放つが、これも竜には届かない。フレンとゾディアも後を追おうと走り出しだが、竜が放つた灼熱の吐息に阻まれる。

竜の口から放たれた息吹は、容赦なく室内を燃やして行く。このままでは部屋全体に炎が広がるのも時間の問題だった。

「くつ、これでは！」

悔しげにフレンが叫ぶ。

「のまま炎が燃え広がれば証拠である魔導器を調べることが出来なくなる。魔導器はラゴウが天候を操る魔導器を所有していた事を裏付ける貴重なものだ。

しかし混乱する騎士たちを尻目に、ラゴウは船下の傭兵たちに命じる。船の用意を、と。

混乱に乘じて逃げるつもりだ。証拠を手に入れるためにもフレンはラゴウを追つことが出来ない。ここで追つてしまえば全てが水の泡になる。

コーリはそんな幼なじみの心情を十分承知していたので、仲間たちに聞こえるように叫ぶ。

「ひつ、逃がすかっ！－ 追つぞ！」

燃え盛る部屋を抜け出し、エリシアたちは屋敷に隣接する庭園にいた。空は相変わらずの曇り空であったが、長い間港を濡らしていた雨はもう上がっている。そこにはもう、ラゴウと傭兵たちの姿はなかった。船の準備をと口にしてこたことから、船着き場に向かったのだろう。

「つたく、なんのよー あの魔物に乗つてんのー！」

それまで抑えていた怒りを遂に抑えきれなくなり、リタは叫んだ。理由は至極簡単である。調べていた魔導器をあんな形で破壊されたのだから。たださえ、魔導器を愛するリタにしてみれば許せない。

「ことだといひの！」。

「あれが竜使いだよ」

「竜使いね……エフミードの丘とここ、どうして魔導器を破壊して回つてゐるか疑問ぢやない？」

カロルの呟きにエリシアは首を傾げた。

ノール港とエフミード丘。破壊された二つの魔導器に類似、あるいは一致するものとは何なのか。

前者は天候を制御するもので、後者は結界魔導器である。共通するものは魔導器ということだけ。

「そんな理由どうでもいいわ！ それに何が竜使いよ！ あんなの、バカドラで十分よ！ あたしの魔導器を壊して！」

「バカドラって……。それにリタの魔導器ぢやないし

冷静なカロルのつっこみも、頭上から降つて來たリタのきつい一撃に阻まれる。

訂正、リタは随分立腹のようだ。こうなつた彼女は誰にも止められない。よつて、嵐が過ぎるのを待つしかないようだ。リタの怒りがあまる時を待つしかないのだろう。諦めに似た達觀が必要なのだ。

(それにしてもレイヴンはどこに行つたんだろ?)

屋敷にはレイヴンの姿はなかつた。そもそも何故、屋敷に入ろうとしていたのかも聞いていない。天アルトスクを射る矢が関係しているのか、それとも……。

分からぬ。レイヴンの行動は、エリシアにも全く読めなかつた。

「ねまえうらとほせ」でお別れだ

「ハーリーにわるい人をやつつけに行くんだね

言いながらコーリーは振り返った。

視線の先にはララードの傍に立つ小さな男の子、ポリーと頭に海賊がかかるような帽子を乗せたパーティ。するとポリーは頷き、逆にラゴウを倒しに行くのかと問うた。

コーリーはにっこり笑うとポリーの頭を乱暴に撫でる。くすぐったそうにほしているが、嫌ではないらしい。

「ああ。急いでんだ」

「うふ。だいじょうぶ。ひとつで帰れるよ」

「いい子だ。お前も危ない」と口元を突っ込むんじやねえぞ

流石は男の子。たくましいものだ。ポリーが無事だということを早く両親に見せ、二人を安心させてあげなければならないだろ。コーリーはもう一度だけポリーの頭を撫でると、今度はパーティに向き直った。行動を共にしたのは短い間でしかなかつたが、この少女に釘を刺しても無駄だろとは薄々感じていた。

だが何も言わないよりはマシだらう。……恐いくは。

「分かっているのじゃ」

「気をつけやね」

コーリーの注意とパーティの言葉に、パーティはうそうと頷くとポ

リーと共に、街の方へと駆け出して行く。

その後ろ姿に一抹の不安が拭えないのは、ユーリとエリシアだけではないはず。

「あれ、絶対分かつてないわよ」

「多分、ね……」

そもそもそんなに物分かりがいいなら、彼女は一人でラガウの屋敷に侵入しないだろう。

明らかに期待していないと言ったように片手をつむるリタに、エリシアも同意するしかなかつた。

「エステル、どうしたの？」

先程から全く会話を加わらないエステルを見て、カロルが心配そうに声をかけた。顔色が悪いのは気のせいではないだろう。

エステルはすみません、と言つた後、ゆっくりと語り出す。

「わたし、まだ信じられないんです。執政官があんな酷いことをしていたなんて……」

「よくあることだよ」

帝国はこの世界唯一の国。

光があればまた影が生まれるように、帝国の影の部分を垣間見ることは何も珍しいことではない。カロルだってエリシアだって、何度もそんな場面を目にしている。

世界は弱いものに辛く、強いものに優しい。それが今のテルカリュミレースの摂理だ。

「帝国がつてんなら、この旅の中でも何度か見てきたる?」

「……ハルルではフレン以外の騎士は助けてもくれなかつた」

結界が消失し、魔物の脅威に怯える住民たちに、フレンと彼の部下以外は、手を差し延べさえしなかつた。民間人を守ることが騎士のつとめではないのか。

そして魔導器を管理といつ畠で独占する帝国。

「でも……いいえ、今は執政官を追いましょう」

言いかけて、エステルは止めた。考えることは後でも出来る。しかし今、フレンのためにも執政官を逃がすわけには行かない。悩みながらも彼女はそれを分かつていて。葛藤は後でいい。今はラゴウを追わなければ始まらない。

「その意氣だ」

「取つ捕まえてフレンの前に出してあげましょ」

コーリが領き、エリシアがエステルに向けて悪戯つ子のように笑う。エステルも同じように笑い返すと、皆の後を追つて走り出す。一行が船着き場に到着した時には、既に豪奢な船は今正に出港しよとしてた。緩やかに波に乗り、陸から離れて行く。

あたしはこんなところで何やつてんのよ……。船を追いかけるように走るリタがぽつりと呟く。

答えるなら、船を追いかてるんだと思います、だらう。同じよつて並走するコーリが静かに言つた。

「行くぞ」

言つなり、ユーリはカロルの体をひょいと横から抱えあげた。抵抗する暇も抗議の声をあげる暇もない。一瞬の早技である。そしてそのまま大きく地面を蹴つた。ふわり、と体が宙を浮く。

「ちょっと待つて待つて待つて！ 心の準備が～～～～～！」

カロルの叫びも虚しく、高く飛び上がつたユーリはそのまま、船に飛び移つた。

ラピードとエリシアも難無く後に続くと、ユーリとエリシアが手を伸ばし、残りの二人を引き上げる。

甲板に乗り移つた一行は一通り、船の中を見渡す。

特に変わつたものは……あつた。リタの目の前に置かれた木箱。箱自体は何の変哲もない箱そのものだったが、中身が問題である。何気なく箱を開けたリタは途端、絶句した。

「……これ、魔導器の魔核じゃない！」

リタの声に驚き、エリシアたちも箱の中身が見える位置に移動する。

確かにリタの言つ通り、木箱の中には種類も色も全く違つ魔核が詰め込まれていた。

「なんでこんなにたくさん魔核だけ？」

「知らないわよ。研究所にだって、こんな数揃わないと元に！」

魔導器を研究しているアスピオの研究所にだって、ここまで数は揃わない。魔核が貴重だからこそだが、それがこんな船の中に無

造作に置かれているなんて。

驚くリタにエリシアは確信していた。

「正規のルートで手に入れた魔核じゃない。全ては魔核ドロボウと繋がってる、か」

これほどの魔核を集めるのは容易ではない。しかも研究所ですら揃わない数なのだ。

そうなれば目の前にある魔核は当然、正規のルートで手に入れた品ではありえない。

「やはり関係があるんでしょうか？」

「かもな」

後ろから魔核を覗き込むエステルに、ユーリが同意した。エリシアが言ったように全ては繋がっている。

既にその時、確信していた。屋敷に紅の傭兵団がいたのだ。あの男が無関係とは考えられない。むしろラゴウと手を組んでいたと考える方が自然だろう。

「けど、黒幕は隻眼の大男でしょ？ ラゴウとは一致しないよ」

「だとすると、他にも黒幕がいるってことだな。ここに下町の魔核、混ざってねえか？」

だがエリシアの考えを知るよしもないカロルは、首を傾げてみせる。ラゴウはどうみても隻眼でも、大男でもない。

ユーリは難無くその“答え”にいきついた。これほどまでの魔核を集めめる理由はわからないが、ラゴウだけが黒幕ではない。

実行犯は別にいる。それも手慣れていなければ、大量の魔核は手に入れられない。盗まれた下町の魔核も、もしやと思ったのだが……。

「残念だけど、それほど大型の魔核はないわ」

瞬間、ラピードが真っ先に反応する。

沸き上がった殺氣。現れたのは数人の男たちだつた。一目で傭兵だと分かる服装に短刀。彼らが何者であるかを確信したカロルが叫ぶ。

「じじつら、やっぱり五大ギルドのひとつ、『紅の絆傭兵团』だ」

「どうしてこんな……『ロウの悪事に加担してるので?』

前々から気にくわないと思っていたが、ここまで腐つているとは思わなかつた。

そもそも、ギルドとは本来、帝国の支配に抵抗して作り上げられた組織だ。帝国の法によつて守られることはないが、完全に“帝国”の支配から抜け出した者たちの集団でもある。

基本的に、ギルドと帝国の仲は良好とは言えない。

他のギルドを纏める立場にある五大ギルドが、政府の要人であるラゴウと手を組むというのは考えられないことだ。

その時、隻眼の大男が船室から現れる。

「はんつ、ラゴウの腰抜けはこんなガキから逃げてんのか

血のよつに赤い服を身に纏い、巨大な片刃の剣を携えている。筋骨隆々でお世辞にも人受けするような顔ではない。正に悪人面だ。

片方の瞳には恐らく刃物による裂傷が走り、左腕は生身ではなく、奇妙な形の義手であつた。

「……バルボス」

「ん？ てめえ、どつかで見たことあるな」

自らの名を呼ぶエリシアに、男の視線が彼女に向いた。

男は隻眼の大男（ラジドアライアンス）と聞いた時、頭に浮かんだ人物と同じだった。五
大ギルドの一つ、紅の絆傭兵団（ラジドアライアンス）の首領（ボス）、バルボス。

「バ、バルボスって紅の絆傭兵団の首領だよ！」

エリシアの呟きを聞いたカロルが悲鳴を上げる。そして次の瞬間、バルボスの背後に回ったユーリが首筋に剣を突き付けていた。

「隻眼の大男……あんたか。人使って魔核盜ませてるのは」

勝利は誰の手に

「そうかも知れねえなあ……」

首筋に剣を突き付けられても、バルボスは全く動じない。それどころか唇の端を歪め、楽しそうに笑っているではないか。

もう自分を知っているエリシアへの興味はなくしたようだ。それは有り難いのだが、何かの拍子に思い出さないとも限らない。

バルボスは視線を前に向けたまま、無造作に剣を一閃した。ユーリはそれを横に跳び、バルボスの剣を避ける。かと思えば、次の瞬間にはエリシアの隣に移動していた。それを見たバルボスが不敵に笑う。

「いい動きだ。その肝つ玉もいい。ワシの腕も疼くねえ……うちのギルドにも欲しいところだ。だが、野心の強い目はいけねえ。ギルドの調和を崩しやがる。惜しいな……」

「そりや 光栄だね」

意外なバルボスの申し出にユーリは、肩を竦めてみせる。本気なのかそれとも冗談なのか、表情からは読み取ることが出来ない。

バルボスが笑いながら鋭い瞳でユーリを見据えた時、男の背後、船室の方から聞き覚えのある甲高い声が聞こえた。現れたのは黒衣を纏った老人 ラゴウである。

「バルボス、さつさとこいつらを始末しなさい！」

「ラゴウ！」

バルボスの後ろに隠れながらこちらを指差すラゴウ。そんなラゴウに、バルボスは眉を顰めている。煩わしいといった感じだろうか。協力していると言つよりは互いに利用しているのかもしれない。

「金の分は働いた。それに、すぐに騎士団の連中が来る。追いつかれでは面倒だ」

言つなり男は、ユーリたちを残して歩き出す。追おうにも囲まれた状態では下手に動けない。動けたところでバルボスを退けるのは骨が折れる。

だがエリシアは本当に頭にきていた。しまった、と思つた時には既に声に出していたのだ。

「バルボス！ ふざけないで。貴方、それでも五大ギルドの一つを纏める首領なの？ 何がギルドよ、やつてる事は帝国と一緒にやないい」

帝国のやり方に反対し、ギルドを立ち上げた首領でありながら、ラゴウに手を貸して悪事に手を染める。しかも彼は五大ギルドの一つ、紅の絆傭兵団の首領だ。ギルドの誇りを忘れたとしか言えない所業に、黙つていることなど出来るはずがない。

エリシアの痛烈な批判にも、バルボスが答えることはなかつた。身を翻して歩き出す。

「小僧ども、次に会えば容赦はせん」

「待て、まだ中にちつ……！」

バルボスとラゴウはそのまま船内を歩くと、取り付けられた小型艇に乗り込み、つり上げていたロープを大剣で切り落とした。

振り返ったラゴウの視線がある場所に向く。

「ザギ……！ 後は任せますよー！」

「卑怯者！ 質問に答えてーーー！」

エリシアの叫びも虚しく響いた水音。バルボスとラゴウを乗せた小型艇が海面に浮かび上がった。

ラゴウが最後に叫んだ“ザギ”という言葉を受け、船内から一人の男が姿を現した。すらりと伸びた肢体、異様な光を宿す切れ長の瞳。

拘束具のようなベルトを巻いた奇妙な服を纏っている。くすんだ黄と紅色の髪。無造作に下げた剣は今にも血を求めて襲い掛かってきそうだ。

「誰を殺させて、くれるんだ……？」

爛々とした瞳がエリシアたちを映した。彼を目にした瞬間、ユーリとエリシア、エステルは驚きを隠しきれなかつた。忘れられるはずがない。帝都ザーフィアスでコーリをフレンと勘違いし、問答無用で襲つた男だつた。

男を見たコーリはまず、大きなため息を付く。

「どうも縁があるみたいだな」

「つぐづく嫌な縁だけどね。出来れば一度と会いたくなかったし」

全く危機感なるものを感じていないコーリがエリシアはつらやましい。

こんな縁は誰もいらないだろ。見るからに粘着質っぽい変な人

物だ。現に蛇のように絡み付く視線も気持ちがいいとは言えない。

「刃がうずくつ……殺らせり……殺らせりおつ！」

「うわ」との如くに呴いた瞬間、ザギが床を蹴った。

後退する暇もない、放たれた矢のようにヨーリの懷に潜り込む。ザギの手から唸りを上げて振り下ろされた剣をヨーリは冷静に避け、時間差で迫つたもう一つの刃を自らの剣で受け流した。

「うおっと……お手柔らかに頼むぜ」

不敵に微笑むヨーリに本能的に何かを感じたのか、ザギは距離を取る。互いに剣は構えたまま、いつ激突してもおかしくない。

視線をザギから離さぬまま、ヨーリは言った。

「そつちは雑魚頼む。流石にエステルやカロルにはコイツの相手はきついだろ。ラピード、エリイ、サポートしてやってくれよ」

はつきり言つたが、カロルやエステルではザギの相手は荷が重い。魔導士であるリタも同様だ。

わざわざ一人に呼び掛けたのも、ラピードとエリシアに三人が自分とザギの戦いに手を出さないように見てもらうためだ。

何となくヨーリの意図を察したカロルが気をつけてね、と叫び、神妙な面持ちでエステルが頷く。リタは不機嫌そうに、それでいて全てを理解したような顔をしている。

ラピードを伴い、彼らは残つた傭兵たちと向かいあつた。……ただ一人、エリシアを除いては。

「水臭いんじゃない、ヨーリ？ 私だってあの時、巻き込まれたんだから一蓮托生よ。のけ者になんてしないよね？」

「エリイ……分かった。どうせオレがなに言ったって退かないだろうしな」

エリシアはユーリの隣に並んだ。鈍く光る銃口はザギに向けられている。口調 자체はいつもと変わらないが、顔は真剣そのものだ。エリシアという少女は、一度決めれば頑としてそれを曲げない、貫き通す。そんな姿勢、ユーリは嫌いではなかつた。あるいは、志半ばで騎士団を去つた自分にとって、彼女は眩しいのかもしれない。そう考えて自嘲するように笑うと、直ぐ様雑念を打ち消すように意識を集中させる。

「始めますかつてな！」

ユーリが剣を握りしめ、エリシアは引き金に指をかける。ザギの唇が嬉しさのあまり、弓のようになじめられた。刹那、三人はほぼ同時に甲板を蹴つた。

まずエリシアがザギを牽制するように銃から光を放つ。当たらない。だがそれでいいのだ。当てるつもりはないのだから。

ほんの一瞬、エリシアに気を取られたザギに今度はユーリが肉薄する。

「三散華・追蓮！」

ユーリはザギを連続で殴りつけた後、剣を引き渾身の突きを放つ。ザギの体が大きく後退する。

だが、剣が肉を貫いた感触はなかつた。ザギは咄嗟に両手の剣を交差させ、ユーリの剣を防いだのだ。

「休むには随分早いわよ！ 深淵にて佇む煌姫、彼の者を永遠の眠

りに誘え、クリスタルアーク！」

エリシアの眼前に展開する光の魔法陣。魔術名を口にした瞬間、ザギの足元から吹き上がる燐然たる光の奔流。ザギは真横に飛んでそれを避ける。直後、数秒前までザギがいた位置に出現した水晶の柩。

いくら魔術でも当たらなければ意味がない。

ザギが再び目標をユーリに定めたその時、目にも鮮やかな光の結晶は何の前触れもなく炸裂した。四散した水晶の破片が容赦なくザギを切り裂く。

剣などの武器と違い、タイミングも方向も違う破片を全て防ぐのは不可能。

「しぶといやつは……嫌われるぜ」

水晶の雨が終わりを告げたのを確認し、ユーリは甲板を蹴った。ザギも同じようにユーリに向かつ。

ぶつかり合う刃と刃。ザギが首を狙つて剣を閃かせるとユーリは寸でのところでそれを弾く。そしてまた鎧ぜり合いになるの繰り返しだ。

ザギの剣は早く、变速的であるため剣筋が読みづらい。どこから刃が襲つて来るのかまるで予想出来ないので。下手に距離を取ることも出来ず、かと言つてこの距離では攻撃を防ぐことに注意を奪われ、決定打を見い出せないのもまた事実。

ユーリがザギと打ち合つてゐる間、エリシアはサボつていた訳ではない。鎧ぜり合いの時は下手に手は出せないし、一人の距離が近いと魔術と銃も使えない。ユーリを巻き込む危険がある。

ただ、このままではいつまでも決着がつかないのではないか、とそんな気までしてくる始末だ。

矢継ぎ早に繰り出されるザギの剣をコーリは危なげなく受け止めているものの、そこから反撃に転じることが出来ない。

硬直状態を破るには、コーリとザギ以外が中に割つて入るしかないのだ。一步間違えばコーリを危険に曝すだろ。」

けれど、迷つている暇はない。エリシアは素早く詠唱に入るとコーリに向かつて叫んだ。

「コーリ、避けて！」

エリシア声にコーリは迷うことなく大きく後ろに下がる。

途端、ザギの頭上から降り落ちる光の槍。光に属する中級魔術シヤイニングスピア。当たれば断罪の光槍は容赦なく肌を灼くだろう。その恐るべき速さで迫る槍をザギは真横に移動してかわした。が、避けきれなかつた一本の槍が腕を掠つた。じゅつ、と肉が焦げる音が耳朵を打つ。流石に剣を取り落とすことはないが、ザギの顔が苦痛に歪んだ。

「今よ！」

言われるまでもなく、この機を逃すコーリではない。瞬く間にザギとの距離を詰めると飛んで来たザギの刃を切り払い、がら空きになつた胸を風いだ。

だがザギも普通の人間ではない。訓練された暗殺者だ。反射神経も並ではなく、切り付けられる瞬間、後退することでからうじて致命傷を避けていた。

しかしコーリもザーフィアにいた頃とは違つ。暗殺者に引けを取る彼ではなかつた。あれから結界の外を旅し、強靭な魔物とも戦つて來た。コーリは逃がさないとばかりに更に踏み込むと剣を振る。コーリの剣はザギの左腕を完璧に捉えていた。防御もままならなかつた腕から、とめどなく溢れる鮮血。遂にザギが剣から手を離す。

「ぐうあああつ……！ 痛え」

「流石にあれじゅあ、もう戦えない」

左腕を抑えてうずくまるザギに、ユーリは静かに言った。勝負あつたな、と。離れた場所にいたエリシアも銃を構えたまま、彼の隣に並んだ。

左腕をだらりと下げたザギは笑っていた。抑えた右手が鮮血で塗れ、真っ赤に染まりながらも、ただ楽しそうに。まるでお氣に入りの玩具を見つけた子供のよう。

「……オ、オレが退いた……ふ、ふふふアハハハッ！ 貴様、強いな！ 強い、強い！ 覚えた覚えたぞユーリ、エリシアっ！！ おまえらを殺すぞユーリ！！ エリシア！ 切り刻んでやる、幾重にも！ 動くな、じつとしてろよ……！ アハハハハハハ」

ザギは覚えたばかりの一人の名を繰り返して呼んだ。まるで熱にうかされた人間のように、嬉しそうにただ、ひたすら。

狂気じみたザギの言葉に一人は答えない。いや、答える言葉など持つてはいなかつた。このザギという人間に何を言つても意味がないということを理解していたから。

ザギは無事な右手で剣を拾い上げるが、足元は覚束ない。

特徴的な笑い声を上げた直後、傾いたザギの体は吸い込まれるようになへと落ちて行つた。海面を叩く鈍い音、ついで水しぶきが上がる。

「終わった？」

「ああ

エリシアはザギが消えた先を見つめ、隣のユーリに問う。ユーリが頷き、剣を納めると同時に銃をホルスターに戻した。傭兵たちを相手にしていたカロルやエステルたちも二人に合流する。

「……なんか凄かつたね」

「はい、思わず見てしました」

唖然とした様子のカロルとエステル。何が凄かつたかは言わずもがなである。

一行が一息ついたその時、それは起つた。船の下方部から起つた火の手に突然聞こえた爆発音。足元が大きく揺れる。小柄なカロルは武器を支えに何とか立つているが、立て続けに起こる爆発のお陰で、立つているのもままならない。

「火薬でも仕込んでたんじゃない！」

ラゴウかバルボスの差し金だろうが、何のためにこんな大それた仕掛けを施したのか。少なくともユーリたちを始末するためではない。自分たちが船に乗り込んだのは本当に偶然だからだ。勿論、本来の目的の“ついで”ということも考えられる。

「え？ なに？ 沈むの……！？」

「海へ逃げる……！」

「……げほつ、げほつ……誰かいるんですか？」

ユーリの指示に従い、走り出そうとするエリシアたちだったが、

そこに本当に微かな声が聞こえて来た。

聞き間違いはありえない。エリシアは咄嗟に足を船室の方に向けた。

自分を蔑ろにする訳ではないが、助けを待っている人間を見捨てて逃げるという選択肢は彼女の中に存在しなかつた。

「エリイ、待てって……」

隣にいたコーリが素早く、走り出そうとしたエリシアの腕を掴む。明らかに咎めるような視線を向ける彼女に構わず、コーリは一人、無言で炎の中に飛び込んだ。

てっきり止められたとばかり思っていたエリシアが止める暇もない。次の瞬間、船が傾いたと思えば再度起こった大きな爆発が船と一行を襲う。

「ユーリ！」

「エステリーゼ！ ダメ！」

ユーリの名を叫び、彼の後を追おうとするエステルをリタが止める。

流れ落ちた血のよう鮮やかな紅蓮の炎は、瞬く間に甲板に広がっていた。更に酷くなつた炎の中に飛び込むのは自殺行為だ。ここまで燃え広がつてしまえばもう、リタの魔術でも消し止められない。

「私が……」

何とか目の前の炎だけでも魔術で消せば。そう思い、印を組もうとしたエリシアを今度は横から伸びて来たカロルの手が止めた。

「無茶だよ！」

「あんたも何してるのよ！」「ちやーちやー言つてないで、飛び込むの！ ガキンちょ、あんたはエリシアを！」

言つなり、リタは尚もロードのエステルを海に突き落とし、自らも飛び込んだ。

一方、カロルの方は大変だった。一向にその場から離れようとしてないエリシアを引きずるだけでも大変だと言つのに、彼女は抵抗を止めようとはしない。

「ユーリが！」

「だから無茶だつて！ 死にたいの！？ ユーリなら大丈夫だよ！ ！ 仲間を信じないでどうするの！？ 今行つたつて状況は悪くなるだけだつて、エリイだつて分かつてんでしょう！」

悔しいがカロルの言つ通りだつた。エリシアの体から力が抜ける。自分が行つたところでどうにもならない。逆にユーリの足手まといになる可能性だつてある。

抵抗を止めた彼女にカロルはホッと一息付いた。

もはや一刻の猶予もない。エリシアはもう一度だけ振り返ると覚悟を決め、海に身を躍らせる。

彼女が飛び込んだのを確認して、カロルも思い切つて床を蹴つた。

直後、けたたましい爆発音と共に船が遂に崩壊する。真つ二つに別れた船体は壊れる時とは正反対に、静かに海の中へと沈んで行つた。

どこまでも広がる青い海。そこに浮かぶのはつい先程まで船であつたものの残骸だ。浮袋代わりに大きな鞄につかまつたカロルが仲間たちを見回した。

「みんな、大丈夫？」

カロルの声に皆が頷く。

ラピードは悠々と前足で水をかいているし、リタやエステル、エリシアも無事だ。ただそこに、心配していたユーリの姿はなかつた。

「わたしは……でも、ユーリが……」

今にも泣きそうに顔を歪めたエステルに、彼女を止めたリタは俯いた。彼女なりに気にしているのかもしない。エリシアは何も言わず、じっと海面を見つめていた。

大丈夫、ユーリなら絶対に大丈夫だと。何の根拠もない、ただ祈るように、縋るように一心に海面を見つめている。

すると田の前で水が割れた。現れたのは見間違はずのない長い黒髪。

「ユーリ！」

「ユーリ！ よかつた……」

深い息を吐き、ユーリの名を呼ぶエリシアに、ほつと胸を撫で下ろすエステル。

ユーリに気を取られて気付かなかつたが、彼の腕には見知らぬ人物が抱えられていた。口に残つていた海水をペッペッと吐き出したユーリは何とも言えない表情を浮かべている。余程しょっぱかつたのだろう。

「ひー、しょっペーな。だいぶ飲んじまつた

「その子、いつたい誰なの？」

尋ねるカロルにヨーリはさあな、と首を竦めてみせた。

ヨーリが助けたらしい少年はエリシアが聞いた声の主で間違いないのだろう。年の頃はエステルと同じくらいか。フレンのよつな金の髪に、着ている服は一見して高級なものだと分かる。

意識を失っているのか瞳は閉じられたままだ。見た感じ怪我はないうらしいが、少年の姿を見たエステルが驚きの混じった声を上げる。

「ヨーデル……！」

「なに、あんたの知り合い？」

リタの問い掛けにエステルは押し黙る。普段の彼女なら、何らかの答えが返つて来るはず。何も言わない、と言うのは、答えられない、あるいは何と言えばいいのか分からぬと言つた感じだろうか。その時、タイミングのいい事に、ノール港の方向から一隻の船がこちらに近付いて来る。

「助かった、船だよ！ おおい！ おおい！」

「フレン？」

「どうやら、平氣みたいだな。……っ！ ヨーデル様！ 今、引き上げます。ソディア、手伝ってくれ」

カロルの声に振り返れば、近付いて来る船の先には金色の髪をした騎士 フレンの姿があつた。船の上からヨーリたちの無事な姿を確認した彼は、ヨーリの腕の中にいる少年を見て酷く驚いている。エステルとフレンの知り合いであるのなら、恐らく貴族なのだろう。

間もなく少年を含めた全員が、フレンたちの手により冷たい海から引き上げられた。

あれからフレンらに助けられた一行はそのまま海を渡り、海峡を挟んだ西側、カプワ・トリムに到着していた。船旅の間も結局、あの少年が何者なのか聞き出せず。

同じく港に到着したフレンから詳しいことは宿屋でと言われたため、一行はフレンが待つ宿屋に向かっている。その時、後ろを歩くカロルが何となしに呟いた。

「ユーリとエリイって、妙な知り合いが多いよねカプワ・ノールであつたレイヴンとか、襲ってきたザギってやつとかさ」

カロルのこの言葉には反論したい。百歩譲つてレイヴンはいいとして、ザギは別にエリシアやユーリの知り合いではない。

知り合いのカテゴリに入れないので欲しいものだ。向こうが城で勝手に自分たちを気に入つただけ。

彼は人事だからいいかもしれないが、こちらとしては「冗談でも言つて欲しくない。

「好きで知り合いになつた訳じゃないし、全然嬉しくない。むしろ迷惑」

ザギはユーリにお熱なのかと思いきや、しつかりエリシアの名前まで覚えられてしまつたではないか。フレンは知らないだろうが、恨むわよ、フレン、とついた口にしたくなる。

「ザギって方は妙なんてもんじやないわよ。なんのよ、あれは」

「んなもん、オレが聞きたいや。あんなんにすかれてもちつとも嬉かねえぞ」

「んー……一言で言つなら“変人”？ 後は異常者か。どっちにしても一番たちが悪いタイプよね」

リタが呆れるように肩を竦めてみせると、コーリもそもそも迷惑だと鬱陶しげに髪をかき上げる。

変人と異常者以外でザギを表す言葉なんてないと思つ。これつきだと嬉しいのだが、しつかり名前は覚えられたことから、また戦う可能性もある。

ああいうタイプは非常にたちが悪いのだ。それはもう、地獄の果てまで追いかける勢いではないだろうか。

「異常者だろ？ つたぐ、だからあんな戦闘狂はヤなんだよ。あんな奴らは死ぬことなんて恐れちゃいねえ。それが何より厄介ってな

ザギは血を見るのが大好きな戦闘狂だ。勿論、徹底されたプロでもあるが、他人の命や自分の命なんて勘定にすら入つていない。ただ戦闘によつてもたらされる緊張感、高揚感を求めて人を殺す。

コーリは理解している。躊躇わないこと。それが一番厄介なのだ。彼らには失うものが何もない。己の命さえ、彼らにとつては価値などないのだから。

「でも、海に落ちたみたいですし、もつひとつともないんじやありませんか？」

「ま、出でても、どつせ狙いは、コーリとエリシアでしょ。あたしには関係ないわね」

エステルの言葉に、どうだろうなど、あくまで他人事のよつなユーリとボク、一度と会いたくないよ、と涙目になるカロル。

一方、リタは晴れやかに笑った。例え出来ても狙いはエリシアたちだと。しかもカロルまでそ、そうだよね、と便乗する始末だ。反論したくても事実だから言い返せない。

「……分かった。ユーリ、今度出でたら速攻で蒼破刃お願ひね。エステルはスターストローカ、リタはスプラッシュユード」

エリシアは仕方なく、前を歩くユーリの肩を掴んで真剣な表情で言った。どうやらエリシアの脳内では近付かれるまでに終わらせればいいという結論に達したらしい。

蒼破刃は青い衝撃波を飛ばす技だし、スターストローカも地を這う衝撃波を放つもの。スプラッシュユは大量の水を頭上に降らせる術である。そこに銃が加われば完璧ではないか。

「ど、どうした、エリイ？」

「分かった？」

ユーリが恐る恐る振り向けば、目が据わっているではないか。リタとカロルは視線をそらし、知らんぷりを決め込むらしい。エステルの方は苦笑してユーリを見ているだけだ。

「分かった？ ユーリ」

「分かった、分かったって」

（ホント勘弁してくれ。オレにはザギなんかよりエリイの方が怖えよ）

引き攣った顔で頷くユーリを尻目に、リタたちはそそくさと宿屋に入つて行く。

宿屋を訪ねた一行を待つていたのは、予想もしない再会だつた。扉を開けた先、そこにはフレンとあの少年だけではない。小船で逃げたはずのラゴウがいたのである。

「……」

「おや、どこかでお会いしましたかね？」

思わず掴みかかろうとしたリタを見て、ラゴウは白々しくも首を傾げてみせる。

彼女の腕を掴んで止めたユーリは、リタを下がらせると[冗談交じりに笑いかけた。ただし、目は笑っていない。

「船での事件がショックで、都合のいい記憶喪失か？ いい治癒術師、紹介するぜ」

「はて？ 記憶喪失も何も、あなたと会うのは、これが初めてですよ？」

ユーリは後ろにいるエステルとエリシアを指してみせる。

だがラゴウはそれでも首を傾げ、さも初めて会うかのような態度で接してくるではないか。それを聞いた瞬間、体の芯が急速に冷えていくような感じがした。

どこまでも汚い人間なのだろう。罪が露見しそうになれば知らぬ存ぜぬで通すつもりか。

ラゴウは必ずこう言つだらう。執政官の言葉と賞金首の証言、どちらが信じるに値するでしょうね、と。そうなつてしまえば答えは明白だ。向こうは執政官でこちらは犯罪者。

「治癒術なんて手間をかけなくても、衝撃を『えれば思い出すんじやない?』

馬鹿に付ける薬はないとも言つ。あくまでしらをきり通すつもりなら、締め上げたつてお釣りが来るぐらいだ。コーリやエリシアの冷たい視線に遂にフレンが口を開いた。

「執政官、あなたの罪は明白です。彼らがその一部始終を見ているのですから」

「何度も申し上げた通り、名前を語つた何者がが私を陥れようとしたのです。いやはや、迷惑な話ですよ」

責めている訳でも、詰問している訳でもない。むしろ穏やかさえ感じるくらいだ。それでも並の者であれば思わず、不正を認めてしまいそうな何かがフレンの声にはあった。

しかしその点ではラゴウは並の人間ではない。困ったように言つラゴウが一瞬だけにやり、と笑つた気がした。自分たちの証言を裏付けようにも証拠がないのだ。魔導器が壊れた以上、天候を操るという効果があつたかさえ確認出来ない。

「ウソ言つな! 魔物のエサにされた人たちを、あたしはこの目で見たのよ!」

「さあ、フレン殿、貴公はこのならず者と評議会の私とどちらを信じるのです?」

叫ぶリタの声には耳を貸さず、ラゴウは言い放つた。

暗に評議会の人間と賞金首、どちらの言い分を信じるのか言つま

でもないでしょう、と。フレンは答えない。俯き、ただ悔しそうに唇を噛み締めていた。

握った拳に力が入る。今、一番悔しい思いをしているのは他でもないフレンだ。

田撃者だつている。『ラゴウが黒である』ことは明白だ。なのに問いかけることの出来ない自分が、何より情けないのでないのか。

「フレン……」

そんな彼の思いを僅かでも理解できるコーリは、ぽつりとフレンの名を呟いた。話に黙つて耳を傾けていた金髪の少年も悲しげに目を伏せる。

いくら『黒』であろうと、証拠がない以上、フレンの権限ではラゴウを捕らえることが出来ない。

「決まりましたな。では、失礼しますよ」

黙して語ろうとはしないフレンに、ラゴウは優雅に一礼すると悠々と部屋を後にした。踵を返したラゴウの顔は見えないが、笑っているに違いない。

エリシアが去ろうとしたラゴウの背に下衆が、と呟いた。聞いたのは恐らくコーリだけだろう。

彼女の気持ちはよく分かるし、コーリだって同じだ。この少女は本当に怒った時、リタのように叫ぶことはしない。言わなければ気が済まないが、言ったところで意味はない。それを知っているから。だからコーリは何も言わずエリシアの頭にぽんぽんと手を置いた。しばらくして小さな声で『ごめんね、と返つて来る。返事をする代わりにコーリはもう一度、彼女の髪を撫でた。

「なんなのよ、あいつは！ で、こいつは何者よ！？」

ラゴウが部屋を出てから数秒後、我慢の限界に来たらしいリタが叫ぶ。

指差したのは先程からソファに座っていた少年だ。蜂蜜色の金髪に柔軟な顔立ちをしている。リタの“こいつ”発言にも気分を害した様子はない。

「ちつとは落ち着け」

「この方は……」

言いかけてフレンは少年とエステルの方を見る。少年とエステルが頷いたのを見て、フレンはエリシアたちに向き直った。

「この方は次期皇帝候補のヨーテル殿下です」

口を開いたのはフレンではなくエステルだった。紹介された少年ヨーテルはユーリたちに軽く会釈する。

先代の皇帝が崩御した後、“ある事情”から現在は空位のまま。次期皇帝候補というのはその名の通り、ヨーテルは将来皇帝になるかもしれない人物だ。

「へ？ またまたエステルは……って、あれ？」

その沈黙を壊したのはカロル。だがエステルは笑わない。ユーリもエリシアも誰一人として笑っていなかつた。

おひさし再び

「あくまで候補の一人ですよ」

「こりやかに微笑むヨーテルは、とても次期皇帝候補とは思えない。勿論身なりはいいし、エステルのように柔らかな物腰である。ただ、いきなり次期皇帝候補です、と言われて、はいそうですか、とすんなり納得出来るカロルではない。

「本当なんだ。先代皇帝の甥御にあたられるヨーテル殿下だ」

「殿下ともあらうお方が、執政官」ときに捕まる事情をオレは聞いてみたいね。……市民には聞かせられない事情つてわけか」

エステルだけでなく、フレンも同意したことから、カロルの目が更に丸くなる。

ヨーリの言葉にフレンとエステルは揃つて押し黙つた。

何故、次期皇帝候補がラゴウに捕まり、あの船にいたのか。二人とも黙つたところを見ると、どうやらその理由はヨーリが思つより複雑らしい。

「あ……それは……」

「エステルがここまできたのも関係してんだな。ま、好きにすればいいぞ。目の前で困つて連中をほつとく帝国の『ごたごた』に興味はねえ」

言いかけたエステルをヨーリが遮る。次期皇帝が何だか知らないが、それは目の前で苦しんでいる人々を差し置いてまでやらねばな

らないことなのだろうか。

沸き上がってきたのは微かな怒り。彼らが悪いわけではないのは分かるが、納得できそうもない。

そんなヨーリに、エリシアは言つべき言葉が見つからなかつた。

ヨーリ、と名前を呼ぶことしか。

ヨーリが騎士を辞めた理由。詳しく聞いた訳ではないが、腐敗しきつた“帝国”に愛想をつかしたからだろうか。

「……やつやつて帝国に背を向けて何か変わつたか？ 人々が安定した生活を送るには帝国の定めた法が必要だ」

口を開いたのはフレンだつた。確かにヨーリの言つことも一理ある。本当にくだらない事だと思うし、何も出来ない自分が悔しかつた。

ではそんな帝国に背を向けて何が出来る、何が変わつた。悲しいくらい何も変わらない。

法は彼らのような人々を許すのかもしない。それでも、法がなければ人は生きてはいけないのだ。

「けど、その法が、今はラゴウを許してんだろ」

「だから、それを変えるために、僕たちは騎士になつた。下から吠えているだけでは何も変えられないから。手柄を立て、信頼を勝ち取り、帝国を内部から是正する。そうだつたろ、ヨーリ」

ヨーリは言う。人を守るための法がラゴウを許している、と。本来、弱きものを助けるはずの法はどうなつていて。

何故、裁かれるべき者が裁かれない。しかしつレンも引き下がらない。

声を荒げるヨーリにフレンは正面から彼を見つめた。どんなに願

つても、無力なままでは何も変えられない。それを分かつてていたから自分たちは騎士になつた。

必ずのし上がつて帝国を変えてみせる。強い思いがあつたから。コーリの思いは痛いほど理解出来る。だがここで投げ出すことなんて出来ない。

全てを覚悟して選んだ道だ。たとえ、彼と道を違えることになるうとも。

「だから、出世のために、ガキが魔物の工サにされんのを黙つて見てろつてか？ 下町の連中が厳しい取立てにあつてんのを見過すのかよ！ それができねえから、オレは騎士団を辞めたんだ」

ではフレンは出世のためだと言つて、全てから田を背けるというのか。子供が魔物に殺されようとも、下町の人々が厳しい取立てに喘いでいようとも。

今苦しんでいる彼らは誰が助ける？

それとも上に行くまで待つてろとでも言つのか。だからコーリは騎士を辞めた。田の前の人々を助けられなくて何が騎士だ。

「知つてるよ。けど、やめて何か変わつたか？ 騎士団に入る前と何か変わつたのか？」

そんなコーリとは対照的に、フレンの声は静かだつた。コーリは何も答えない。それはフレンに言われるまでもなくコーリ自身が理解していたことだからだ。

変わつていたのなら、自分の無力さに嘆く事はなかつただりう。騎士団を辞めてコーリは更に思い知られた。自分の無力さに。コーリは結局、フレンの言葉に答えることなく、部屋を出る。

「コーリ……。ねえ、フレン。きっとコーリは誰よりもそれを分か

つてるよ

エリシアはエステルとフレンを一瞥した後、軽く会釈してコーリの後に続いた。それから暫く、誰も口を開かなかつた。といつより何か言える雰囲気ではなかつたからだ。

「またやつてしまつた……僕はただ、コーリに前に進んでほしいだけなのに。いつまでもくすぶつていなくてお恥ずかしいところを」

勿体無いとと思うのだ。コーリが本気を出せば、騎士としてだつて自分と同じところまで来れただろう。それほどまでにフレンはコーリを評価していたし、前に進んでもらいたいと思つてゐる。そこまで考えてフレンは苦笑した。コーリと語ると、ビリしても感情的になつてしまつ。

彼女の言つ通りだ。自分が言わなくとも、コーリは分かつてゐる。余計な言葉は彼を傷付けただけなのかもしれない。

「あなたはどうされるんですか？」

「行つてもいいのでしょうか？……コーリやエリィと旅をしてみて変わつた氣がするんです。帝国とか、世界の景色が……それとわたくし自身も……」

ヨーデルの問いにエステルは言つた。旅をしてみたいと。ザーフィアスからここまで旅をして来て、エステルの世界は百八十度変わつた。窓から外を見ているだけでは決して気付かなかつたもの。自分でも自覚した自身の変化。

「そうですか……わかりました。少年……！」

「え……ボ、ボク……！？」

そこでフレンは突然、カロルの方を向いた。言われてみれば、フレンはカロルの名前を知らないのだから当然だ。ただ、呼ばれた本人はまるで分かっていない。きょろきょろと周りを見回している。ようやっとカロルも、少年が自分を指していると理解出来たのだらう。緊張した面持ちでフレンを見上げた。

「ユーリに彼女を頼むと伝えておいてくれ」

「は、はい……！」

「いいんですか？」

フレンとカロルを見ながら、エステルは尋ねる。

それはつまり、行つてもいいということだ。本当なら、エステルはもう帝都に戻っているはずだった。フレンに命を危機を伝えたあの時に。

今まで彼らと共に旅をして来たのは、ある意味ではエステルの我が家ま。

「私がお守りしたいのですが、今は任務で余力がありません。それに、ユーリの傍なら私も安心できます」

「フレンはユーリを信頼しているんですね」

「ええ」

それが建前である」とくらべ、エステルも理解している。

やはり、何だかんだ言つても、フレンはユーリを信頼しているのだ。思わず微笑したエステルにフレンも同意する。

自分とユーリ、行く道は違おうとも、行き着く先は同じ。フレンはそう信じている。いや、そう信じたいのだろう。他でもないフレン自身が。

「話がまとつたところで、そろそろ行かない？　あいつ、見失うわよ？」

扉を開けたリタの後に、カロルやエステルも続く。早くしないとユーリを見失ってしまう。残されたフレンはユーリに言われた言葉を噛み締めるように顔を伏せた。

「つたぐ、痛いところつきやがつて。何も変わつてねえのはオレにだつてわかつてる」

部屋を出たユーリは宿屋の前にいた。この悔しさを到底表すことが出来ず、石作りの壁を殴りつける。

瞬間、鈍い痛みが走つたが無視した。フレンに言われなくとも分かっている。自分が何も変わつてないこと。騎士を辞めてもくすぶることしか出来ない不甲斐ない自分に。

「コーリは壁から手を離すと、改めて自分の右手を見た。

「魔核の手掛けかり、探すか……」

何と言われよつと、今は自分に出来る」とをするしかない。コーリはぽつと呟き、街中へと足を向けた。バルボスの姿はかなり目立つ。もしここにいるのなら、一発で分かるはずだ。コーリは手掛けかりを探して街中をぐるりと見渡した。すると見覚えのある人物が目に留まる。

適当に纏められた黒髪に、異国風な紫の装束。誰から見ても緩い雰囲気を醸し出す男は一人しかいなかつた。

「あつー、あのおつせん……」

「ん……よ、よお、久しぶりだな」

思わず駆け寄つたコーリに男 レイヴンは微妙な顔をする。それはまるで、悪戯が見付かつた子供のよつにまつの悪そつな顔だつた。

明らかに会いたくなかったと言つてこるよつなものだ。

しかしコーリも、このおつせんには色々聞かなければならぬことをある。

「挨拶の前に言つことがあるだろ」

「やつやつ、例えは私たちに謝るとか」

そんなコーリに同意する声。驚いて声の方を振り返れば、そこにはヒリシアの姿がある。

どうやら彼女、気配を消すのが上手い。コーリもレイヴンも気付

けなかつた。何たつて自然にコーリの隣にいたのだ。

「つてヒリイ。こつからいたんだよ」

「あつ、あのおつせんつて辺りか」

それ殆ど初めからじやねえか、とコーリは突つ込みたくなつた。本当はコーリが壁を殴りつけた所から、見ていたのだ。声を掛けるような雰囲気ではなかつたし、何を言つていいのかも分からぬ。それにコーリは、慰めの言葉も言い訳も望まないだらう。

「ヒリシアちゃん、もつおつせんのこと怒つてない？」

レイヴンはそう言つて、上田遣いで見つめてくる。リタやエステルがやれば可愛いが、こんなおつせんがやつても寒氣がするか、鳥肌が立つかのじやうかである。

だがヒリシアは怒る氣も失せていた。最早感心するしかない。

「怒つてない。だつてレイヴンつてそんな人間だもん。でも今度やつたら本氣で怒るよ？」

「やうやう、俺つて誤解されやすいんだよね。ヒリシアちゃんつたら優しい。わあ、おつせんの胸に飛び込んでおいで」

苦笑するヒリシアにレイヴンは両手を広げ、彼女を抱きしめようと手を伸ばす。それはあえなくコーリに阻止された。驚くなれ、一切手加減のない拳骨が振つてきた。

まったく、これ以上アホになつたらどうしてくれるのよ、青年、と言つつつレイヴンはコーリを見上げる。

「あー、はいはい。無意識で人に迷惑にかける病気は医者行つて治してもらつていい」

「じゃあエリシアちゃんに治して貰おうかなーなんて……つたあ！
青年つたら酷い！ ほんの冗談なのに……」

むしろ病院に行つても追いつ返されると想つのはエリシアだけだろうか。

だがそんな事で怯むレイヴンではない。それどころか、マイナスをプラスに変化するおっさんだ。

今度はエリシアの手を握りうとするレイヴンに、コーリは笑いながら再び、拳を振り下ろした。かなり痛そうだが、これまでのお仕置きと考えれば軽い方だ。

一人のやり取りはまるで漫才のようで、一人に気付かれないよう

に笑う。

「おっさんがあいつと冗談に聞こえねえんだよ

「やつちもさ、その口の悪さ、何とかした方がいいよ？」

「やつこと全てが冗談に聞こえるのだから不思議である。ふざけているのか本気なのか。それは結構な付き合いであるエリシアさえ分からぬ。

完全に呆れた様子のコーリに、レイヴンも負けはいなかつた。レイヴンはいつもそうだ。飄々として掴み所がない。それは裏を返せば、誰に対しても壁を作つていることと同じではないか。

ふざけた態度で取り繕い、決して本心は見せない。

「口の減らない……。あんまふらふらしつてとまた、騎士団ことつ捕まるぞ」

「騎士団も俺相手にしてるほど暇じゃないつて。それき物騒なギルドの一団が北西に移動するのも見かけたしね。騎士団はああいつのほうとけないでしょ。ってエリシアちゃん？」

ゴーリとレイヴンは、エリシアの様子がおかしいことに気付く。わざわざまで笑っていたのに、彼女にしては珍しく、心配するような感じではないか。

心配そうに顔を覗き込むレイヴンに、ふと我に返った。

「……何でもない。それより物騒つて、紅の絆傭兵团の」と。^{ブランズドアラライアンス}

「ああ？ どうかな」

慌ててレイヴンから身を離すと唯一、一人の会話で頭の隅に引っかかっていた事を尋ねた。これで話を逸らすことが出来る。尋ねたからには、いくらレイヴンと言えど、無視は出来ないはず。そして田論見通り、レイヴンの注意は自分から逸れたらしい。気付かれないので、ほつと胸を撫で下ろした。

どうしてだらつ。今まで感じたことのない何か。レイヴンはちゃんと田の前に座るのに、『ここ』にいないうな気がしたのだが。そんなこと、あるはずがないのに。

「そもそも、おっちゃんあの屋敷へ向じにいったんだ？」

「ま、ちょっとしたお仕事、^{アバティア}聖核つて奴を探してたのよ」

心配を他所に話は進んで行く。そこでエリシアは思案を中断し、レイヴンの話に耳を傾けることにする。

口が裂けても、本人に聞ける訳がない。本当は誰にも心を開いて

ないんじゃないか、なんて。

そう言えば結局、レイヴンがラゴウの屋敷にいた理由も、ザーフィアスで捕まっていた訳も聞いていなかった。帝都での一件も、その聖核^{アバティア}なるものが関わっていたのだろうか。

「聖核？ なんだそれ？」

「聞いたことないけど、魔核の亞種みたいな感じ？」

「魔核のすごい版、だつてさ。あそこにあるっぽいって聞いたんだけど見込み違いだったみたい」

魔核^{コア}と聖核^{アバティア}。何となく響きが似ているような気がする。

リタがいれば飛びつきそうな話題であるが、残念ながら彼女は今ここにはいない。

レイヴンはと言えば、首を竦めている。確かに彼が言っていることは的外れではない。ラゴウがバルボスと繋がっており、魔核を集めさせていたのなら、その聖核なるものが屋敷にあってもおかしくはないだろう。

「ふーん……聖核、ね」

「……怪しい」

軽く言つたレイヴンをエリシアは疑いの眼差しで見つめる。

怪しい、怪し過ぎる。本当にそれだけが理由なのか。そもそもドンの命、天を射る矢の仕事だとしたら、コーリはまだしも、自分に知られてまずいことはないはず。

ただ、コーリの前では、天を射る矢については言えない。レイヴンが幹部であることは一応、秘密であるからだ。隠すほどではない

が、わざわざ言つ」とでもない、と言つた方が本当か。

「あー、コーリー！ おーいーーー！」

「あんの、オヤジ……！」

エリシアが口を開きかけた瞬間、宿屋からカロルとリタが顔を出した。しかもリタの方は顔色を変えて走つて来る。

これはかなりお怒りらしい。標的は言つまでもなく、レイヴンだ。魔術をぶつ放さない辺り、まだ周囲のことを考えているのだろう。ただ、レイヴンが捕まれば、どうなるかは火を見るより明らかである。

「逃げた方がいいかねえ、これ」

「ひとり好戦的のがいるからな」

すっかり臨戦体勢に入つたリタを見て、のほほんと会話するレイヴンとコーリ。エリシアがあつ、ちょっと……と引き止めるが、それは叶わない。

二人とも達者で暮らせよお、とひらひらと手を振り、紫色の背中は街中に消えて行つた。

人混みに紛れてしまえば、見つけ出すことは難しい。おまけに逃げ足だけは一流だ。結局、レイヴンからは何一つ聞き出せなかつた。

「待て、こらー！ ぶつ飛ばす！」

「はあ……はあ……。なんで逃がしちゃうんだよー！」

鼻息荒く後を追い掛けるリタと、息も絶え絶えにコーリとエリシ

アを見上げるカロル。少年の瞳は少しだけ非難めいていた。
逃がしたと言われば心外だ。正しくは“また逃げられた”である。

「誤解されやすいタイプなんだぞ」

「誤解されやすいタイプなんだって」

思わぬ一致に二人は顔を見合させて笑った。ただ一人、隣のカロルだけが訳が分からず首を傾げている。何が誤解されやすいタイプなのだろう、と。

「え？ それ、どういう意味……？」

「そのままの意味みたいよ。血口申告によると

更に分からなくなつたのか、カロルは不思議そうな顔をしている。何と説明したものか。

本当に言った通りの意味なのだ。レイヴンはきっと誤解の塊に違いない。エリシアが肩を揺らして笑うと、ヨーリもそうだよな、と同意した。

「……逃したわ。いつか絶対捕まえてやる……」

更にカロルが混乱したといいで、リタが戻つて来つた。答えは聞かなくとも分かる。どうやら逃がしたようだ。

レイヴンは見た目通り、逃げ足が速い。いや、正しくは危険察知力が高いと言うべきだ。

悔しそうに唇を噛み締めるリタは、まだレイヴンを諦める気はないらしい。そこで話を終えたらしいエスティルが駆けて来る。

「ほつとけ。あんなおつさん、まともに相手してたら疲れるだけだぞ。んじや、早速行きますか」

「行くつて、ビルに行くの？」

「紅の絆傭兵団の後を追う。下町の魔核、返してもらわねえと。北西の方に怪しいギルドの一団が向かつたんだよ。やつらかもしれねえ」

早速行きますか、と言つたユーリの言葉を理解出来るのはエリシアしかいない。レイヴンが言つていた。北西に怪しいギルドの一団が向かつたと。

ただ、その怪しい一団が紅の絆傭兵団だという保障はない。言葉を濁していく辺りからして怪しい気もするが、今は何とも言えないといったところが本音か。

「北西つてこいつと……地震で滅んだ街くらいしかなかつた気がするけどなあ」

「亡き都市カルボクラム。そう言われてるんだっけ？」

思い出したらしいカロルに、エリシアも同意する。トルビキア大陸出身者には割と有名な話だ。亡き都市カルボクラム。大地震によって崩壊し、現在は廃墟と化しているはずである。ただ、何かを隠すには絶好の場所かもしれない。

「そんなところに何しに行つたんでしょう」

「盗んだ魔核を隠してるとか？」

盗んだ魔核を隠しているかどうかまでは分からぬ。

勿論、カルボクラムのは人っ子一人住んでいない訳で、何かを隠すにはもつてこいだからだ。しかも崩壊した街には地元の人間だって近寄らない。

もし、怪しい一団が紅の絆傭兵団であるなら、一概に否定することも出来ないのでないだろうか。

「そんな曖昧なんでいいわけ？」

「うう……だつて他に情報ないし」

呆れるようにリタが見上げて来る。そう言われると、反論出来ないのが辛いところだ。何を言つたつて今の時点では全て、推測にすぎないのだから。

ラゴウの追求が不可能な今、バルボスの方を追うしか無い。レイヴンの情報は正直な所、信憑性に欠けるが、今はそれしか手がかりがないのだ。

「だから行つて確かめんだる。何か他の方法があんなら別だけどな

「それは……分かつたわよ！ 行きやあいいんじょ」

他に情報がないくらい、リタも理解しているだろつ。

フレンに会う前にも情報を集めてみたのだが、有力な話はなかつた。リタは半ばやけくそ、半ば無理矢理といった感じで頷く。

笑いあう仲間たちを横目にエリシアは思つ。本当は皆に隠し事なんでしたくなかった。隠しておくようなことでもないのかもしねない。

でも、今更何と言えばいいのだろつ。エリシアは獅子の咆哮の首領、レオン・クレセントの一人娘。

旅を続けるようになり、そんな簡単な簡単な告白が出来なかつた。いつかは分かることなのに怖い。

分かつていいのだ。レオンの娘だと明かしてもきっと、皆の態度は変わらない。

だけど怖くて仕方がなかつた。話せば楽になれるのだろつ。否定されるのが何より恐ろしい。ずっとこのままではいられないことも分かつていい。

どうしてこんなにも『エリシア』は弱いのだろつ。銃の扱い方に魔術、少しあは強くなつたつもりでいた。なのに全然駄目。結局、臆病者に過ぎないのだ。

知られるのが嫌なら離れればいい。気楽な一人旅に戻ればいい。いくらでも方法はある。

けれど今の状態がとても心地よくて、それ以上を望んでしまう。何て都合のいい話なのか。おかしくて笑つてしまいそうだ。同時に酷い自己嫌悪に陥つてしまいそつ。

（……コーリは怒るかな？ おかしいよ、コーリは関係ないじゃない。私は）

「いや、完璧に廃墟だな」

言いつつ、コーリは辺りを見回した。カロルやエリシアから亡き都市と聞いていたが、正にその表現通りだ。もう街の機能を果たしていない。長らく人が住んでいないことを表すように、崩れた石造りの家屋が並び、石の壁には苔が生えている。

地面には地震の影響か、大小様々な亀裂が入っていた。崩落の危険はないようだが、油断は出来ない。

延々と降り続く小雨のためか、じつとりと肌に纏わり付くような嫌な空氣だ。

「エリイ？」

「……ああ、ごめん。ちょっと考え方してただけ」

訝しげなコーリの声にエリシアは我に返った。

トリム港でもそうだったが、最近こんなパターンが多い気がする。気を取り直して顔を上げた。が廃墟には紅の絆傭兵团ビーリング、人の姿さえ見当たらない。

尚も案じるような視線を向けるコーリに、平氣だと手を振つてみれば、どこか釈然としない表情でそうか、と視線を前に戻した。

(「うーん……ちょっとまづかったかな）

「こんなところに誰が来るっていうのよ」

「またいい加減な情報、掴まされたかな……」

両腕を組んだまま、不機嫌そうに辺りを見回すのはリタ。元々気乗りしなかつたこともあって、機嫌はすこぶる悪い。

しかし、ぬかるんだ地面には複数の足跡がある。恐らくは“怪しげなギルドの一団”のものだろうが、ここまで来ても、彼らが紅の絆傭兵団という証拠はなかつた。

少しは信用していたのだが、やはりレイヴンはレイヴンなのだろう。

「次に会つたらシャイニングスピアで磔はりつけにしよつ

「そこで止まれ！当地区は我ら『魔狩りの剣』により現在、完全封鎖中にある」

気持ちを切り替え、エリシアはよし、と声を上げた。

我ながら名案である。今度やつたら本気で怒るつて言つたのに、どうやらまだ分かっていなかつたらしい。

とその時、少女の声が廃墟に響いた。周囲に人の姿はない。

しかし幻聴では有り得なかつた。少女の声に真っ先に反応したのはカロルだつた。

「これは無力な部外者に被害を及ぼさないための措置だ」

つられるように視線を向ければ、崩れかけた屋根に立つ一人の少

女。

随分と若い。恐らくはカロルと同年代であろう。ややつり目がちの緑の瞳に、肩に届くくらいの艶脂色の髪を頭の上で結んでいる。動き易い黒の装束を纏い、容易に少女の細い腰を覆つ、円月輪を大きくしたような刃を背負つている。恐らくは投擲を目的としたものだろう。内側には取つ手なるものがついていた。

「ナン！」

少女の姿を認めたカロルが嬉しそうに彼女を見上げた。ナンというと本格的なカレーとセットになつていて、と言つ訳ではなく、少女の名前だろう。

随分と変わつた名前であるが、それはこの際どうでもいい。その名にぴんと来たエリシアは、エステルに耳を寄せた。

「ナンって確かカロルの思い人だつたよね、エステル」

「はい。ハルルの街でも言つてましたね。満開になつた花を一緒に見たいつて。えつと、随分気の強そうな……」

カロルには聞こえないよう、勿論小さな声だ。ぱつと見た感じ、彼女は結構な使い手だろう。格好からしても魔狩りの剣のメンバーに違いない。

確かにハルルで彼女の名を聞いた。そしてアスピオでユーリがからかつた時も、そんな儂い子ならどんなに、とぼやいていた気がする。

「完全に尻に敷かれるタイプね、ガキンちゃんは

「ま、それがカロル先生のいいところでもあるんだろ」

「……うん、 そうかも」

カロルは目の前の彼女しか眼中にないのか、エリシアたちの会話など耳に入つていらないらしい。

カロルとナンを見比べるエステルに、呆れ口調で天を仰ぐリタ。カロルは確かに怖がりだが、だからこそ彼には知識がある。何も戦う強さだけが全てではない。怖いからこそ、知ろうとする。知識は時に武器となることもあるし、それは十分立派なことだとエリシアは思う。

「よかつた、やつと追いついたよ。首領やティソンも一緒？ ボクがいなくとも大丈夫だった？」

「なれなれしく話しあげてこないで」

「冷たいな。少しほぐれただけなのに」

カロルは言うまでもなく、背後で交わされる会話には未だ気付かず。散々な言いようだが、知らぬが仮であろう。

嬉しそうに少女に話しかけるカロルとは違い、ナンが彼を見る瞳は明らかに冷たいものだった。つっけんどんな声に、カロルは驚いたようにナンを見る。

だが彼女の方は“はぐれた”の一言が気に入らなかつたらしい。更に表情を険しくすると、カロルを睨み付けた。

「……何だか雲行きが怪しい？ ナンって子、怒つてゐみたいだし

「照れ隠し、でしょうか？」

どうしたらそんな答えが出てくるのだろう。

的外れなエステルの発言に、ヒリシアは力が抜けそうになつた。普段は知らないが、照れ隠しではないと思つ。本当に怒つてゐるのではないか。

「いや、明らかに違うでしょ。ねつ、リタ」

「何であたしに聞くのよ」

振り向いた先のリタはすこぶる機嫌が悪そつた。何かまずいことを口走つたのだろうか。だつて他に聞く相手いないと思つた。

「それはリタも……むぐ」

「あんまし余計なこと言つくなよ。やつの誰かさんが怖いぜ」

伸びて来たユーリの手に遮られる。このパターンはいつかと同じではないだろうか。分かりました。分かりましたとも。口が塞がれているのでこくこくと頷くと、やつとユーリは手を離してくれた。窒息死寸前だつたんだけど。

「少しばぐれた？ よくそんなウソが言えるー 逃げ出しあくせにー！」

「逃げ出してなんていないよー！」

なおもカロルとナンの言ひ合ひは続いてゐる。カロルと出合つたとになつたハルルで何があつたのだろうか。>b>「そう言われればカロルは、ハルルの樹を蘇らせる方法を誰も信じてくれないと言つていた。

「まだ言い訳するの？」

「言ひ訳じゃない！ ちゃんとエッグベアを倒したんだよー。」

「これは一応、事実らしい。らじこと言ひのせ丁度その時、エリシアは氣絶していたからだ。」

コーリの話によると、コーリとカロルで倒したようだが、カロルの性格を考えるとナンが信じてくれないのも仕方がないのかもしれない。

それでも、ほんの少しでもカロルは成長している。初めて会った時の彼とは違う。

「それもウソね」

ナンはやはり、信じよつともしない。

間髪入れずに言葉が返つてくる。それではあまりにカロルが可哀想だ。自業自得な部分もあるにせよ、だ。

「ほ、ほんとだよ！」

「せつかく魔狩りの剣に誘つてあげたのに……今度は絶対に逃げなって言つたのはどこに誰よ！ 昔からいつもそう！ すぐ逃げ出して、どのギルドも追い出されて……」

ナンの話から推測すると、どうやらカロルは彼女に勧められて魔狩りの剣に入つたらしい。魔狩りの剣に入る前は、様々なギルドを点々として来たのだろう。

確かにカロルは物知りだし、頼りになる所もあるのだが、いかんせん勇気が足りないのだ。

「わあああああっ！ わああああっ！」

「……ふん！ もう、あんたクビよー。」

「ま、待つてよー。」

カロルが突然、大声を出した。エリシアたちに聞かれたくなかつたのだろう。残念ながらばつちり聞こえているが。

カロルに向けられる冷たい視線。それでも自分を見つめるカロルを一瞥した少女は、背後のユーリたちを見た。そしてまるで警告のように、巨大な円月輪を下のユーリらに突き付ける。

「魔狩りの剣より忠告する！ 速やかに当地区より立ち去れ！ 従わぬ場合、我々はあなた方の命を保障しない！」

「ナンー。」

叫ぶ少女は、円月輪を下ろして仕舞うと、一行に背を向けた。

カロルの呼びかけにもナンは反応しない。ただ、僅かに肩を震わせただけ。結局、彼女は一度も振り返ることもなく、廃墟の屋根を軽々と飛び越えて行く。

カロルはそんなナンを見送ることしか出来なかつた。

傷付いた表情で少女を見た後、俯いてしまつたカロルに声を掛けようとして、エステルはしかし何も言えずに心配そうに彼を見る。

「それにしてもどうして魔狩りの剣とやらがここにいるんだろうな

「さあね」

「……素直じゃないんだから」

「リタ、待つてください。忠告忘れたんですか？」

わざとらしく話題を変えたコーリーに、リタがさあね、と首を竦めてみせる。素直ではないコーリーやリタなりの気遣いだ。

思わず笑みを零すエリシアに、慌ててリタを止めるエステル。リタの足は早速街中に向いている、といつも既に街中に入っていた。

「忠告ついで、あの命は保障しないってやつ？ 命の保障が出来ないのは、どうにか居たつて一緒にじゃないの」

保障というが、あつてないよつなものだ。

あくまで例え話だが、次の瞬間には魔物に襲われて死ぬかもしれない。命の保障が出来るところなど、シルトプラステイア結界魔導器の外に出てしまえば存在しないのではないか。エリシアはそう思う。

「そうよ。それに入っちゃだめとは言つてなかつたでしょ？ あたしが、あんなガキにどうにかされるとでも？ 「冗談じゃないわ」

「ま、とにかく紅の絆傭兵団の姿も見えないし奥を調べてみよづぜ」

屁理屈とも言われかねないが、同意見だ。このまま回れ右して帰るなどという選択肢はない。魔狩りの剣も何かに関わっているとなると尚更だ。

励ますようにカロルの肩を叩くコーリーに、元気出して下さいと笑うエステル。エリシアやリタも言葉に出さないが、きっと心配してくれている。

ナンの言つ通りだ。逃げてばかり。軽い自己嫌悪に陥りながらもカロルは皆の後に続いた。

カルボクラム自体は、そう広い街ではなかつた。少なくともザーフィアスよりは狭い。入り口でナンと出くわしてから、ここまで紅の絆傭兵团に繋がる有力な手掛かりはなかつた。

いくら雨に慣れているエリシアでも、流石に気分は落ち込むばかりである。

一応警戒しながら進んではいるが、警告したはずの魔狩りの剣のメンバーさえ見かけないのだ。思わずため息をついた彼女にやれやれとユーリも同意する。

「……何だか随分と不毛な時間を過ごしている気がするのは私の勘違い？」

「あのぉっせんが言つてた怪しいギルドの一団つてのも魔狩りの剣かもな」

彼らがこんな廃墟で何をしているかは知らないが、魔狩りの剣なら怪しいギルドの集団に間違えられてもおかしくない。

カロルの話からすると皆、傭兵のような格好をしていると聞いたから尚更だ。

確かにレイヴンは紅の絆傭兵团とは断言しなかつたが、故意に教えなかつた可能性もなくはない。何を考えているか本当に分からない。

「……見て分かつたけど、トリム港でエリシアが言つた通り、盗んだ魔核を隠すには絶好の場所よ、ここ」

「……はあ、そんな事よりボク、ナンにクビだつて言われちゃつた

よ

リタは言いながら周囲を見渡した。

瓦礫で塞がれた道に廃屋。何かを隠そうと思えば、これほど都合のいい場所はない。

だが後ろを歩くカロルは、三人の会話には参加せず、一人自嘲気味な笑みを浮かべている。ナンに罵られたばかりかクビまで言い渡されたことから、相当ショックだったのだろう。カロルのテンションは最低である。

「わ、わたし、カロルを応援します！」

「ありがと、エステル。……って何を応援してくれるの？」

エステルがカロルを励まそうとするが、励まされた本人はきょんとしている。

応援してくれるのは嬉しいが、何に対しても応援してくれるのだろうか。そんな感じだろうか。エリシアも笑みを堪えながら、ナンのことだと言うと、何故か慌てている。

エステルがカロルを応援したい気持ちも分かるのだ。辛辣な言葉を浴びせてはいたが、ナンの方もカロルを嫌っている訳ではないのだろう。でなければ問答無用で攻撃しているはず。

「え！ あ、あの、その、ナンとはそんなんじゃないってば！」

「ま、忠告してくれたって事は、少しあはカロル先生を気にかけてるからだろうな」

「そ、そなのかな……つてもつ、ユーリ！！」

そんな力口ルに、ユーリは意味ありげな笑みを浮かべた後、すかさずとどめの一言を言い放つ。ユーリの策にまんまとはまつた力口ル。

一瞬照れ笑いを作り、瞬間、自分がからかわれていた事に気付いたのだった。

足を踏み出し掛けた瞬間、何者かに気づいて一行は立ち止まる。ユーリたちから見て、崩落した道を挟んだ向こう側、複数の人影があつた。一人や二人ではない。少なくとも十人以上はいるだろう。先頭に立つのは身の丈ほどもある剣を携えた男だ。

「……紅の絆傭兵団?」

「……じゃあなさそудан」

建物の陰に隠れ、様子を伺っていたユーリはエステルの言葉に首を振った。紅の絆傭兵団とは何かが違う。張り詰めた緊張感のようなものが彼らにはあつた。それは紅の絆傭兵団にはなかつたものだ。

「あれが魔狩りの剣だよ」

「……あの人、ディドン砦で見かけた人ですよ」

力口ルの指摘にエステルが、あつ、と声を上げる。

先頭に立つ男はディドン砦で立ち往生をくらつた時、騎士に文句を付けていた人物だった。

エリシアも彼を知っている。知り合いではないが、ギルドの関係者で彼を知らない者などいないはずだ。

「魔狩りの剣の首領、クリント。剣の腕は相当みたい」

実際、エリシアはクリントが戦う場面を目にしたことはない。しかし熟練した戦士は相対した者がどれほどの技量を持つのか、大体の見当を付けることが出来る。エリシアの勘は、彼が父に匹敵する技量の持ち主だと言っていた。

「ひとりでやるうつてんのか？」

ユーリの瞳が鋭く細められる。

クリントの前には、大柄な彼より更に大きい狼の魔物。人間の二倍、いや三倍の大きさはあるだろう。低い唸り声を上げる魔物を前にしてもクリントは静かだつた。

鋭い、凶悪なまでの牙を持つてすれば、人間など簡単にかみ砕かれてしまう。

睨み合つた刹那、魔物が動く。発達した前脚で地面を蹴り、クリントに襲い掛からうと顎を開けた。

しかしクリントは微動だにしない。正に魔物がクリントをかみ砕かんとしたその時、無造作に剣を一閃させる。紙のように両断された魔物の体が、盛大な音と共に地面にたたき付けられた。

「……なによ、あいつ」

「とどめの一発、か……」

呆然と呟くリタに驚き半分、感心半分と言つた感じのユーリ。とどめの一撃とはいえ、ああも簡単に大型の魔物を倒すとは並の使い手ではない。流石は魔狩りの剣の首領と言つたところか。それを見ていたカロルがどこか嬉しそうな顔をした。

「首領は熟練した剣の使い手だからね」

「相手にうまく攻撃を加えることで敵の体勢を崩していき、そのスキに術技を打ち込んだ後、相手にとどめの一発を打ち込む戦闘技術のこと、です」

「物凄く割愛すると一点突破の隙つてこと」

今、クリントが用いた戦闘技術についてエステルが説明してくれる。

エリシアも勿論、知っていた。別に剣士だけが出来る芸当ではない。剣士や戦士に限らず、熟練した使い手なら殆どの者が扱える。言葉で聞けば小難しい感じがするが、実際はもっと簡単だ。エリシアの父、レオンほどの使い手となると、その辺に徘徊しているような魔物は殆ど一太刀で倒してしまった。戦闘において相手を見抜く力は大切だ。

カロルの視線はクリントを含めた魔狩りの剣のメンバーに向けられている。その瞳はどこか淋しそうで、それでいて複雑なものだった。

「あんた、本当は戻りたいんでしょ」

「え……？ カロル、戻つてしまふんです？」

「戻らないよ……！ 魔物狩りには飽きたからね」

何気ないリタの言葉に、カロルは慌てて視線を逸らした。言い淀んだ所からして否定出来ていない。不安そうに自分を見るエスティルに、カロルは大袈裟なくらい頭を横に振る。それが強がりであることは皆が理解しているだろう。彼には彼らの事情があるらしい。

「戻らないじゃなくて。戻れないんでしょう？ クビって言われてたし」

「まあまあ、リタ。カロル、元気出して。何なら自分でギルド作っちゃえば？」

相変わらずつれないリタに、改めてクビの一言にショックを受けたらしいカロルを、エリシアは何とか慰めようとする。

カロルにはカロルの良い所があるし、魔狩りの剣は元々、カロル向きではないのかもしれない。

その点、自分でギルドを作るのは自由だ。一人でギルドを起こす人物だつているし、ギルドを作る上で特別な条件もない。

「ち、違うよ。元々、出て行くつもりだつたんだから。だから、みんなと行くよ。……ギルドを作る、か。ありがと、エリィ。考えてみるよ」

出でいくつもりなんてなかつた。それがカロルの本音だろう。しかしそれを認めないのはカロルの小さな矜持。魔狩りの剣にはもう戻れないのだろう。ならば別の道を作ればいい。

あらためてよろしくお願ひします、カロル。とにつっこりと笑うエスティルを横目に苦笑するコーリ。

エリシアはどういたしまして、とカロルの頭をぽんぽんと叩く。リタは両手を組み、無言でカロルを見つめている。ただ彼女の表情は意外に穏やかなものだった。

「それにしてもあいつら、あんな大所帯で何する気なんだ？」

「さつきの魔物が目的ならひとりで十分ですもんね」

訝しげに眉を寄せるゴーリ。そんな彼に同意するエステル。

エステルの言つ通り、あの魔物が目的ならクリント一人で事足りる。それにわざわざ廃墟で魔物を狩る必要はないのではないか。

魔狩りの剣の理念は文字通り、魔物を狩ること。彼らは魔物を絶対的な『悪』と考えているのだ。

「魔狩りの剣は魔物を狩るためだけに動く。そこに理屈は存在しない。何故なら魔物は悪だから。彼らがここにいるのも多分、魔物が関係してるんじゃないかな」

「そうだね、エリイの言つ通りだよ。でもこんな人数が集まるの、今までに一度もなかつたよ。みんな、群れたがらないし、首領たちが居るなんて相当のことなんじや……」

それは何よりも確かなこと。魔狩りの剣に属する殆どの者は、魔物に恨みを持つてゐるらしい。魔物に家族を殺された者や傷つけられた者。

依頼を受けて魔物を倒す訳ではない。勿論それもあるが、彼らは魔物が憎いから魔物を倒すのだ。

魔狩りの剣のメンバーが集まるなんて相当のことである。それも首領であるクリントにティソンやナンまでいるとなれば、ほぼ全員がこの都市に集結しているのではないだろうか。

魔狩りの剣のメンバーをじつと見つめていたリタが呟く。ますますうさんくさい、と。リタにしてみれば、魔狩りの剣が何をしようと関係ないのだろう。

「後……つけてみる？」

「いや、それも楽しそうだけど」には先に行く

怖ず怖ずと尋ねるカロルを見ながらユーリは首を横に振る。

自分たちの目的はあくまで紅の絆傭兵团であり、魔狩りの剣ではない。彼らの目的が気にならない訳ではないが、今は紅の絆傭兵团の手掛かりを手に入れなければ。

「ユーリが探してるのは紅の絆傭兵团の方ですもんね」

「ああ、あいつらと事を構える必要はないんだな」

「構えたくもないしね。触らぬ神に祟りなし」

魔狩りの剣には関わり合いになりたくない。それがエリシアの本音だ。後を追つて魔核の手掛かりが掴めるのなら別だが、そうではない。ならば触らぬ神に祟りなし、である。

もし彼らと事を構えることになれば、レオンの娘だと知れる可能性が高いだろう。臆病だと自分でも思つが、まだ少し時間が欲しい。

「世の中には関わり合いにならない方がいいものもあるってな」

「そうそう。これ以上、厄介事に巻き込まれるのは御免だから」

「おい、何でここでオレを見る」

「つて事は自覚あるんだ、ユーリ」

エリシアは言いながら視線を隣 ユーリに向ける。

あのストーカー紛いのザギに賞金首騒動、もういくらなんでも勘弁して欲しい。もとはと言えば、ユーリと脱獄した事から全てが始まったのだ。

果たして彼が不幸体質なのか、或いはエリシアか。いや、最悪の

考えは止めて置こう。ユーリに違いない。そうとしか考えられない。

「トラブルが突っ込んで来るんだろ?」

ユーリが一警した先にはエステルがいる。
しかしそれは突っ込んで来たと言うより、こっちから突っ込んで
行つたの間違いではないだろうか。

「わ、わたしですか!?」

「心配しなくともあんたたち全員よ」

ユーリとエリシア。二人の視線に気付いたエステルが首を横に降
り、慌てて否定する。

どいつもこいつもと言つた感じで指摘するリタに、三人から違う、
違うつて、違いますとの全力の突っ込みが入つたのはほぼ同時だつ
た。

僅かな明かりの下、一行は螺旋階段を下つていた。人の住まない
廃墟であるため本来なら一寸先も見渡せない闇が広がるだけ。

しかし壁には最新と思われる光^{ルクス}魔導器^{ラステイア}が使われている。

床や階段を見ても分かるが、ここだけは他の廃墟とは違う。真新
しく、しかもしっかりと補強されている。上の廃屋とは違つて後か
ら作られたものだ。

「……うさんくさいぐらいに何かありますよつて感じだな

一行がある廃屋の前で見つけたのは、何者かの足跡だつた。ぬかるんだ地面についた、まだ乾ききつてもいない複数の足跡。探ししている紅の絆傭兵团のものが、はたまた魔狩りの剣かは分からぬが、手掛かりには違ひない。

廃屋の中で見つけたのは地下へと続く螺旋階段だつた。それから初めに戻り今に至る、という訳である。

「……わざわざから息苦しくない？」

「エリイもです？ それに……」これは何でしょ？

螺旋階段の終点、そこは石作りの小部屋だつた。奥には頑丈な鉄の扉が見える。簡単に部屋の中を見回したエリシアは息苦しさを訴えた。

階段を下るにつれて増していった不快感。同意するエステルの顔色も悪い。

床や空中に漂う緑色の光。蛍のそれよりも大きく、色も違うが、咲き乱れる花のようにな床一面を覆つている。

「……これ、エアルよ。高密度のエアルは視覚化されるから」

胸に手を当て、苦しげにリタが辺りを見渡した。

クオイの森でエステルが教えてくれたことを思い出す。高密度のエアルは人体に影響を与えるのだ。

その瞬間、エステルがぺたんと床に座り込む。カロルは肩で息をしているし、平氣そうにしているリタもやはり苦しそうだ。

ヨーリだけはしつつをしているが、何の影響もない訳はないだろう。

「行き倒れになんなら、人の多い街中にじといてくれ。オレ、面倒みきれないからな」

「すみません、ユーリ」

ユーリに支えられ、何とか立ち上がるエステル。
ちなみにエリシアも当然平氣ではなかつた。足が上手く動かない。
ふらつきかけたエリシアを、伸びて来た手が支えた。ユーリである。

「大丈夫か?」

「へーき、へーき。だいじょーぶ」

「……呂律回つてないぞ」

大丈夫だと返せば、呆れたように指摘された。

クオイの森の時といい、どうもエアルに酔い易い体质らしい。支えてくれたユーリに礼を言つて離れる。何だか最近倒れてばかりなのは気のせいだろうか。

ここまで来た以上、引き返すという選択肢は初めから存在しない。鋼鉄製の扉を開いて進んだ先は、今いた場所からは考えられないくらい広々とした部屋だった。

いや、部屋というには広すぎる。空間と呼ぶべきだろうか。

見上げほどに高い天井は地上と繋がっていることを示すように、薄い光が漏れている。驚くべきはそこではない。自然とは言い難い“何か”がそこにあつた。

「水が浮いてる……」

呆然とするカロルの声につられ、エリシアも天井を仰ぐ。

力口ルが言つたように、天井に当たる部分に水が浮いていた。まるで水底を下から見ているような奇妙な感覚に襲われる。

それだけではなく、もう一つ、頭上に浮かぶものがあった。青緑の輝きを放つ巨大な魔核を包むように作られた筐体^{コンテナ}。

「あの魔導器の仕業みたいだな」

「あれ、結界魔導器……？」

魔導器でもここまで大型のものは結界魔導器しか思い当たらない。それにしても小部屋にいた時と比べ、更に息苦しいし、気分も最悪だ。床を漂うエアルも先程より濃いようである。

「……エフミドやカプワ・ノールの子に似てる」

魔導器を見上げていたリタが唸るように咳く。そんな彼女の顔色も悪く、息も既に上がっていた。

エフミドの丘で見た結界魔導器とラゴウの屋敷にあつた天候を操る魔導器。言われてみれば、全体的なシルエットが何となくだが似ている。

「壊れるのかな……？」

「魔導器が壊れたらエアル供給の機能は止まるの。こんな風には絶対ならない」

力口ルの声にリタは首を横に振る。

全てはこの魔導器が引き起こしたもの。異常なエアル量は供給が過剰に起こったことが原因だ。もしこの魔導器が壊れているのなら、エアルが視界化されるほどの密度になるはずがない。

「分からぬ……あの子、何してゐるの」

その直後、大気を貫くような猛々しい咆哮が響き渡つた。それは間違いなく魔物の雄叫び。

「な……なに……？ これ、魔物の声、ですか？」

「随分、大物みたいね……」

雄叫びが聞こえた先、エリシアは一行がいる所から一段下がつた場所を覗き込む。

緑色の光の膜に覆われたそこには強大な亀に似た魔物がいた。強大と言つても下手をすれば家一軒ほどもあるのではないだろうか。見るからに硬そうな緑色の甲羅に太い前脚。随分暴れていが、魔物の頭上に張られた薄い光の膜。あれが結界だらうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121x/>

金の満月が昇る時

2012年1月5日20時56分発行